

奇跡は二度起きる

ロシア

序章

あたしは、子供の頃から暗闇を恐れるということを知らなかった。

正しくは確かに畏怖心を喚起されはするものの、跪いて屈服するということが知らなかったと言い換えたほうがいいのかもかもしれない。部屋の明りをすべて消して窓を開け、月や星々の輝きを導き入れると、そこはちょっとした別世界で――あたしは薄暗く、水の流れのように微かに蒼い自分の部屋の中で、泳ぐように空想を心に思い描いては眠りの港に碇を降ろしていた。

自分が身を横たえているふかふかの柔らかいベッドは実は動く無人島で、あたしはひとり漂流しながらロビンソン・クルーソーのように遥か遠くの水平線を船影が掠めはしないかと恋い焦がれて待っている。ある日、一隻の大型客船が無人島の側近くを通りかかってあたしは無事救出されるのだけれど、しかしそれこそはやがては沈みゆくタイタニック号だったのだ……というようなとりとめもない空想話をいくつも頭に思い描きながら、夢の中の現実世界に橋をかけ、そこに一晩中停泊することを毎夜の習慣としていた。

あたしはある時は宝を探し求める海賊船の女船長であり、ある時は鯨やイルカの歌に豎琴の音色を調和させる人魚であり、ある時は捕鯨艦や密漁船を駆逐し、ある時は無残にも撲殺されて皮をはぎとられる運命のごまふ海豹たちを救った。

あたしの乗る船の船名はころころとよく変わり、大抵は神話の英雄やヒロインたちからその名がとられることが多かった。例えばランスロット号であり、トリスタン号であり、ジークフリート号であり、アナスタシア号であり、ミネルヴァ号であり……あたしは両親がふたりともに帰りが遅くなる夜など、居間のソファーや父と母の寝室のダブルベッドの上で空想世界へと出港したものだ。

そして物語の歯車がうまく回らないような時には親しい暗闇や沈黙や静寂を友として言葉もなく語りあい、自分の考えたのではない夢を見た。両親は帰宅すると寝たふりをしているか、もしくは本当に眠っている娘を両腕で抱き上げて子供部屋のベッドの中へと静かに運び入れてくれる。

あたしは父に抱き上げられる浮遊感と母のそっと掛け布団をかけてくれる優しさが好きだった。

ただふたりがともに勘違いをしていたことには、あたしが愛する父母を待ちわびてついには寝入ってしまったと思っていることだった。それは本当にまったくの誤解で、あたしはいつも両親が夜に出掛ける時が早く来はしないかと胸を踊らせて待っていたくらいだったのだ。もっともあたしはそんなことを微塵も素直に口に出したりはしなかったし、秘密の御伽話を誰かに打ち明けるといふこともしなかった。

あたしは周りにいる至極平均的な子供たちと変わりなく育ち、突出して目立つということのないかわりに何か問題を起こして両親を困らせるということもなく、ただ心の中に秘密だけがあった。多くの人は暗闇の支配下に置かれることを恐れ、あえて自分から近づこうとは気が狂っても思わないものだといふことはよく承知している。けれどもあたしは真っ暗な闇が慕わしく、たまらなく恋しいのだ。恐れとおののきとに心が覆われても、なおも闇を征服して自分のものとし

たくなる。暗く深き闇に映る影に恐怖と狂気を覚えれば覚えるほど、あたしは真の闇に酔いしれるように魅せられてますます離れ難くなる。そして闇そのものと同一化して初めて虚無を従えることができるようになるのだ。

果たして、あたしは自分が異常であるのかどうかよくわかっていないし、自覚すべきなのかどうかもよくわからない。それでもまさか闇の中から迎えの使者が現れて——本当にさらわれることになるとは、実際にそうってみるまで到底信じられないことではあった。

第1章

勤めていた銀行が倒産した。

銀行が倒産？ハ、ハ、ハ、そんな馬鹿なと思っていたら本当に潰れてしまった。

一末端行員としてはお上の指示を仰いで他銀行に回されるがまま、信託、不動産業務の研修を重ね、新しい銀行に奮起をもって迅速に慣れるよう努力したつもりだったのに、凄まじく反りの合わない上司のためにあたしは三か月後には退職願を提出していた。

この大不況気に何を考えているのかと問われてしまえばそれまでだったけど、あたしには銀行員に固執する理由のようなものがなかったし、大体銀行なんていうお堅い企業に就職が決まったのも数打ちゃあたるのまぐれ当たりのようなものだったのだ。

あたしは札幌にある某短大の保育科を平凡な成績で卒業している。もちろん保育士の資格も持っている。けれどもなかなか幼稚園や託児所の受け入れ先が見つからなかったので一般企業巡りを始めた。そしてどういふわけか最も筆記試験と面接を通るのが難しかろうと思われた某大手銀行に入社が決まり、その会社が他の銀行に営業譲渡するまで約三年間勤めることになった。

みよしまりこ
美好真理子という名のあたしは無職のプータローになって五か月余りが過ぎたこの時、二十四歳だった。

同じ銀行に勤めていた榎門雄二という名の恋人と呼ぶべきかどうかやや思い迷う人物とはかれこれ二年近くのつきあいになる。彼は俗にいうやり手の有能な銀行マンとかいうやつで、二十七歳という若さながら民間の信用金庫から引き抜きを受けていた。あたしは失業保険の認定のためにハローワーク（労働よ、こんにちとはと訳していいのだろうか）へ足を運んだ日に彼からプロポーズされていたけれど、率直に断っていた。でももしも彼が職にあぶれて再就職もままならないような状態にあったとしたら、事によってはひょっとしたらプラチナのダイヤモンドとかいうのを受けとっていたかもしれない。

「結婚を励みにして仕事を頑張りたい」？

正直に言ってあたしは彼のそういうところがあまり好きではなくて、自分は雄二のステイタスを高めるための一環としての恋人という気が前々からしていないでもなかった。彼はそこそこに見目が良く、知識や教養がたしなみ程度にあって人から尊敬されたり感心されたりするような職業に就いている女が好きなのだ。

あたしは身長が百六十センチ（正確には百五十八センチらしい）ある彼より三センチ（五センチ？）ほど背が高かったけれど、これで自分よりも背の低い女なら尚可といったところだろう。きっと彼は何事においても九十九パーセントまでは見事にやり遂げられるといった類の人種で、残りの一パーセントの可能性には一生気づかないタイプの人間なのかもしれない。彼は人生という名の空の風船をあくせくと一生懸命ふくらませている道化師で、最後の最後に毒針の一刺しが待ち構えているのを知らないに違いない。

その証拠に、というわけでもないのだけれど、銀行が破綻したあとも彼の上昇志向は揺らぎを見せないようであるかにあたしの瞳には映っている。彼の精神構造は鍛え上げられたボディビルダーの筋肉のようで、しかも彼は筋肉が脂肪に変わってしまわぬよう、毎日トレーニングを怠

らずに念入りに強さの綻びを補強しているようなタイプだったから。

そんなマッチョ志向の人間の強さにはとてもじゃないけどあたしみたいなか弱い凡人はついていけない。まあプロポーズを断ったとはいえ、彼とのつきあいはたわんだゴムか何かのように今も続いてはいたけれど。

「プロポーズを断ったあ！？なんでまた……」

場所はシークレストというススキノの外れにある地下のバーでのことだった。あたしは親友ふたりと飲みに来ていて、早速短大来の友人である美希のほうから非難を受ける。

「雄二さん条件いいし、顔だってそんなに悪くないし、それってやっぱり彼の社会的基盤がゆらいだからとか、そういう理由？」

「違うわよ。むしろその逆なんだってば。雄二はねえ、流行りのビジネス書を読み耽ってはいかに成功を手に入れるかしか興味のない人なの。あたしのことも同じで登攀がきつくなってきたからちょっと周りを見回してみたっていうくらいのことなのよ。傾斜が再び楽になってきたら後ろなんて振り返らずにひとりでさっさと登頂を遂げちゃうような人なんだから」

「ふうん。そのわりに二年もよく続いているねえ。あたしから見ると雄二さんも結構我慢してるんじゃないかと思うけどな。考え方がまだ子供だもんね、真理子は」

冴子ちゃんに子供、と言われると反論の余地があってもないような気がしてきてしまう。彼女は市内の病院で看護師をしているけれど、職業柄かどうなのか洞察力のとても鋭い人なのだ。冴子は今日スリットが大胆に入っている黒のチャイナ風ドレスを着ていて、いつも以上に雰囲気大人の女っぽく感じられる。

「まあ結婚するんなら主婦っていう逃げ道もあるだろうけど、真理子はこれからどうするの？結婚願望がないのはいいけど、保育士っていったって真理子の場合経験に乏しいわけでしょ？それに一般企業はどこも銀行よりランク下がるわけだし……だったら一念発起して興味のある分野に再チャレンジするとか、資格を取って手に職をつけるとか、第三の道を探すしかないわけじゃない？例えばだけどね」

「ひっどーいっ、冴子ちゃんっ。主婦は逃げ道だっていうのね！？どおおせっあたしはしゅーちゃんの汗と涙の結晶で三食昼寝付き＋夜遊びの贅沢な新婚ライフを送ってるわよっ。でも幸せだもん、いいんだもん、それで」

カンパリソーダを飲みながら頬を紅潮させている美希。久しぶりの夜遊びということで、メイクにも気合いが入っている。しかも超ミニのワンピースに白の編みタイツ。ロリータフェイスに弱い男なら、イチコロといったところだろう。

「差別するわけじゃないけど、美希と真理子はそれぞれ個性が違うし、別々の生き方ってもんがあると思うのよね。美希はホロスコープで占って相性が百二十パーセントだったのが修平と結婚したきっかけだったわけでしょ？でも真理子は夢見るリアリストだもの。真理子の場合結婚したって割にうまくいかない銀行をあっさり辞めた時みたいに見切りつけるのも早いと思うのよ。そういう女はね、いつでもひとりになる準備みたいなものをしてないと生きていけないの。誰かに頼ろうとしない可愛げのなさあたしと真理子に共通してることだからよくわかるんだけど」

「んー……よくわかんないけど、美希はのけものなのね？でも結婚って一度経験しとくとお得な

もんだとあたしは思うけどなあ。べつにホロスコープに頼らなくても美希はやっぱりしゅーちゃんと結婚してたと思うし、しゅーちゃんは優しいし、それだけじゃなくてしゅーちゃんはしゅーちゃんだからしゅーちゃんを美希は選んだんだけど」

「つまりね、そういうことよ。美希が修平のことをしゅーちゃんしゅーちゃんって言ってるみたいに真理子も雄二さんのことをゆうちゃんゆうちゃんって言ってるようなら何も問題はないってことなのよ」

「やめてよ、冴子。雄二にゆうちゃんなんて気持ち悪くて言えるわけないわよ」

「ほら、これだもん」

冴子の耳にしているプラチナのピアスがカウンターの抑えた照明にきらりと閃く。美希はなるほど、と言ってやっと納得している様子だった。

美希は愛しの修平さんを携帯電話で呼びだすと、ふたりの愛の巣であるマイホームへと一足先に帰っていった。パジェロの助手席から手を振る美希を見送ったあと、あたしと冴子は場所を変え、終電がなくなってからも飲んでいた。冴子はつきあっていた同じ病院の検査技師と別れたと言った。家出していた奥さんが子供を連れて戻ってきたという話だった。

「まあよくある話よね。患者さんをベッドで一般のレントゲン室やCTやMRIの部屋に運んでいく時もお互い素知らぬ顔をしてることに変わりがあるわけじゃないし……べつに真理子がそんなに同情めいた顔することないわよ。あたしには最初からわかってたことだったけど、それでもあえてそういう関係になっただけのことなんだから。真理子はその後雄二さんとうまくいった？」

あたしはジン・フィズを飲む手を止めると首を横に振った。冴子は三杯目になるウィスキーの水割りを飲み干した後、呆れたように溜息を洩らしている。

「真理子、それじゃ雄二さんにもし浮気されたとしても文句言えないんじゃない？真理子は雄二さんにいっぱい文句があるみたいだけど、話を聞いていると要するに性格や価値観が合わないってことでしょ？その上セックスレスっていうことはもう完璧アウトなんじゃない？どうして別れずにつきあい続けてるわけ？プロポーズの話も蹴ったのに」

カウンターの席には今、あたしと冴子以外客は誰もいない。ボックス席のほうでもジャズバンドの演奏を聴きながら静かにやってる客が多い。若いバーテンダーが背を向けてグラスを磨いているけれど、こちらに耳を傾けているような気がしてなんとなく落ち着かない。

「だって……仕様がでないじゃない。別れ話をしようとしたちょうどその日に具合悪くプロポーズされたんだもの。それに雄二はプライドの高い人だからなかなか切り出すのが難しいのよ。『別れましょう』、『はいそうですか』ってすんなり認めてくれるとは思えないし、あたしも今は地に足がついてない状態だからどっちつかずでいるほうが楽なのかもしれない。結婚する気は全然なくても緊急避難用の梯子がないと不安な感じがあるのよね。こんなんじゃ駄目だってわかってるんだけど、何をしててもどこか決め手に欠けるの。銀行時代に溜めた貯蓄が結構あるから昔興味があったアートデザインの教室なんかに通ってもみたんだけど、こんなところで呑気に落書きなんかしていいのかしらって焦燥感がかえって募っちゃったりもして。かといって就職情報誌

に目を通したところでどこもしっかりこないっていうか、ピンとこないの。保育士の面接も幾つか受けてみたけど、何故かみんな落ちるのよね。どうしてだと思う？」

「そうねえ……」と冴子は壁にかかる年代物らしいサキソフォンを眺めながら言った。「美希は短大卒業と同時に幼稚園に勤めはじめたでしょ？それもほとんど顔パス状態で面接に受かったって言ってたわよね？真理子はなんていうか、いいところのお嬢さんっていうオーラがでてるから、逆にお堅い企業の秘書に向いてるようなそんな感じがしちゃうのよ。とても子供と一緒に泥だらけになって遊びそうにない雰囲気っていうのかな」

「えーっ！？一体あたしのどこがそう見えるのよ？今日だって巻きスカートに薄手のカーディガンなんていうダサイ格好してるのに……」

「服装は関係ないわよ。それに面接に行く時はきちんとしたスーツを着てくでしょ？逆に今みたいな格好でいくか、それかトレーナーにジーンズっていう格好でいったほうがいいかもしれないわね、真理子の場合。スーツを着た瞬間から間違いなく美人秘書、重役の愛人になるの巻って感じだもの」

「嘘っ。やめてよそんなの、冗談じゃないわよ」

あたしは銀行時代のセクハラ上司の顔を思いだし、背筋に悪寒が走るのを感じた。ああ、思いだしただけでも腹の立つ。

「まあ、次からは気をつけるのね。真理子はそういうところ本当に潔癖だから、男のナニがお尻に当たったっていうだけでも大騒ぎだものね。あたしなんか毎日何十本も見てるから全然なんとも思わないけど」

「冴子ちゃんっ」

ワイングラスを磨き終えたバーテンダーが振り返り、注文もしていないのに何やらシェイカーを振り始めた。コルクのコースターの上に置かれたのは、深い霧のようなカクテル。さっぱりしていて口あたりがよく、微かにミントの香りがする。

「お客さまは看護婦さんなのですか？いや、今は看護師さんとお呼びするんですけどっけ？」

「勘がいいのね。べつにあたしはフェミニストじゃないから、看護婦と呼ばれようと看護師と呼ばれようとそんなことはどっちでも構わないけど。毎日何十本も見てるっていても、寝たきりの老人のばかりだから、しなびたきゅうりを何本も見ているようなものね。中には時々元気の良いおじいさんもいるけれど」

「それはそうでしょうね。お客さまのように美しい方がオムツを替えてくれるのであれば……老人の方のほうでもお元気になられるでしょう」

まだ二十代前半くらいのバーテンダーと冴子ちゃんが意気投合しそうなを見て、あたしは席を外すことにした。仄暗い店の片隅ではジャズバンドが楽器を片付けはじめている。そして代わりに四十代くらいの金の髪をした外国人女性がピアノの独奏をはじめた。最初に指馴らしするように和音をいくつか奏でたあと、やがて静かに演奏がはじまった。どこか眠気を誘う、湖面に波紋がゆっくりと広がっていくようなバラードだった。

あたしは化粧室からでてくると、何やらジャズの話で盛り上がっているらしい、冴子ちゃんとバーテンダーに暇を告げることにし、ジャズバー『サヴォイ』をあとにした。タクシー乗り場に並んでもよかったのだけれど、酔い覚ましもかねて歩いて帰ることにする。どうせススキノか

らアパートのある石山通りまではそう遠くない。夜道さえ怖くなければちょっとした散歩感覚といったようなところかもしれない。

夏の終わりの濃い夜空から降ってくる冷涼な空気を肺いっぱい吸いこみ、冴子の言うとおりで自分はやっぱり子供なのかもしれない、とあたりは考えていた。

何しろ、街路樹のナナカマドやポプラの樹木がさやさやと風に揺れて、夜の挨拶を歌に乗せているようだった……なんて、この歳になってもまだ真剣に考えてしまうのだから、子供というよりも幼稚と言ったほうがいいのかもわからない。

それとも子供でもなく大人でもなく女でもないと言ったほうがいだろうか？でもだからといって少女というわけでもない。あたりは世界や地球や宇宙といった観点で見れば生物学上人間であるわけなのだけれど、時々自分を異星人か何かのように感じてしまうことがある。

そしてちょうどこの時もそうで、あたりはネオンの光を避けるように、暗闇の濃いほうへ濃いほうへと海の河口に向かう一筋の川の流れるように引き寄せられていた。通り魔や痴漢にあったり、人に尾けられたりといった心配はまるでしていない。暗く濃い闇はあたしの味方、暗き影は人間の及ぼしうる限りの危害からあたしをきつと守ってくれる……あたりは街路樹よりもわずかに野生の匂いの強い樹木の重なりあう公園を通り抜け、空き地の野原の傍らを通り過ぎる時にギリギリの悲しい求愛に鳴く声を聴いた。

ふとそのギリギリと自分とに共通項があるような気がして、雄二のことを思いだしてしまう。そして不意に、今のままの宙ぶらりんな状態はもうやめよう、雄二と未練を残すことなくきちんと別れて、どんな仕事でもいいから真面目に働きはじめようってそう心が決まってしまった。

あたりは暫くの間、有刺鉄線に囲まれている野原の前に立ち、風と闇との隙間から聴こえてくるギリギリの鳴き声に耳を澄ませていた。そしてあと数百メートルほどの距離に迫っている自分のアパートへと再び足を向けることにする。夜は暗く、闇は暗く、そしてとても優しかった。夜と闇の間を滑る野の草の葉擦れの音も。

その時まさか自分を尾けてきている一台の車があるだなんて、すぐ真後ろに足音もなく忍び寄ってくる何者かの存在があるだなんて、あたりは毛ほども気づいてなかった。

アパートのすぐそばにある電話ボックスが見えてくると、あともう少しだなんて思ったのを覚えている――腕時計の時刻は二時十三分。暗闇への恐怖がいくら薄いとはいえ、ほっと安堵の息を洩らしたその瞬間の出来ごとだった。

乱暴に片腕を掴まれたかと思うと、後ろに物凄い勢いで引っ張られ、一瞬のうちに地面に押し伏せられる。

「き……」

叫び声を上げようとするのと同時に、口許に何かの布をあてがわれ、緩やかに四肢から力が脱げていくのがわかった――気が遠くなっていく。あたりは遠ざかる意識の波間で、それでも必死に抵抗していた。屈服してはならないと思っていた。身体に力が入らない分を集中力で補おうとすると、闇の輪郭の中にくっきりと発光するように意識が浮かび上がってくる……でもそれだけだった。

あたしは身体を持ち上げられるのも車内に運び入れられることも感覚としてはっきりと捉えることができていたのに、どうすることもできなかった。意志による命令では、瞼を開けることさえできなかった。その人はまるで闇そのもののように流動的に動いたかと思うと、あたしの身体から離れ、次の瞬間には車のドアの閉まる音がした。それからエンジンのキィを回す音……あたしはそれを最後に意識の闇に抵抗をきすのをやめ、溺れるように暗い沼の中へと沈んでいった。

目が覚めた時、非情に愚かしいことにあたしは自分の部屋にいるものと信じ込んで微塵も疑っていなかった。それどころか今は一体何時だろうと蛍光色の秒針を目で探しあぐねていたくらいだった。当然あるべきはずの場所に時計はなく、そのことを怪訝に思うよりも早く、あたしは異常な何かが自分の身を包み込んでいるのを察知していた。

ここにはあたしの知らない真の暗闇がひしめいていると本能的に感じたこともそうだったし、それ以前に手首が後ろ手に縛られていること、ガムテープの粘膜によって口唇が覆われてしまっていることが何よりも最も速くおぼつかない記憶を甦らせようと急いでいた。

自分の身の周りに密着するように真の闇が群がっているのを見ると、これが今現在の自分の置かれている現実なのだと到底信じることができない。脳裏の片隅を悪い予感が掠めていく度にあたしはその考えをことごとく蹴散らし、頑迷なまでに何も考えたりすまいと思考を停止させたいようにさえ思った。

まるでそうして再び眠りに堕ちたなら、すべては朝の眩しい光に包まれて鳥の囀りの声がいっもの変化ない一日のはじまりを告げ知らせてくれるだろうと信じて疑わないかのように。

次の日の朝、光は窓から斜めに差し込んで、あたしの闇になれた両の瞳の網膜を焼いた。

たまらなく眩しい光を室内に導き入れたその人は、両開きの窓の扉を全開にすると光を反射させた頬に微かな笑みを刻んでいたように思う。

白い木綿のワイシャツはとても清潔そうなイメージで、短く刈りこまれた頭髪も彼にとってもよく似合っていた――などということを思ったのはすべてあたしが後に冷静な頭に戻ってから思い起こしたことで、あたしはこの時、この男を外見とは裏腹にとっても不気味で残忍な凶悪犯として警戒することしかできなかった。

彼は窓敷居に腰掛けながら眩しい陽の光を遮るように背にして、あたしを見つめたままかなりの長い間置物のようにそこから動かなかった。男は細面で背が高く、身体をふたつに折り曲げたらぽきりと折れてしまうのではないかという危惧を他人に与えるほど細い線をしていた。

おそろしく繊細で気が弱く病弱――見るからにそんなイメージを想起させられる容貌だった。ただその白皙の面に宿る両の瞳だけが強い意志と存在感を見る者に与え、あたしは形勢的に不利な状態の中で射抜くような鋭い視線にさらされているのが息苦しくてたまらなかった（もちろん鼻孔のみで呼吸していることにもよるのだけれど）。

「美好真理子、二十四歳。札幌市内の短大を四年前に卒業、今年の三月にセクハラ上司に嫌気が差して勤めていた銀行を退職……三歳年上である恋人の榎門雄二とは二年前からのつきあいになるがペッティング以上の関係には至っていない……これで間違いない？」

事実を指摘されて、顔が燃え上がるくらい熱くなるのがわかった。あたしは手首にロープが食

いこんでもその痛みによって羞恥心を紛らわすかのように懸命に身じろぎした。

「ああ、ごめんね。これじゃあ話したくても喋れないよね」

男は組み合わせていた両手をほどくと、窓際からゆっくりと近づいてきた。そしてあたしの口唇からガムテープをそっと丁寧にはがした。

「僕ね、雄二の大学時代のお友達なんだよ。雄二は君のことをとても自慢にっていて、料理はビーフストロガノフが得意だとか胸はDカップあることだとか色々聞かないことまで話してくれてね、僕はいつも羨ましく思ってたんだ」

あたしは怒りによって一時的な呼吸困難に陥っていたので、十分に酸素を補給するまで男に何も答えられなかった。

ベッドの端に軋む音を立てながらそいつは座り、あたしが言葉を話すまでは視線を逸らすつもりはない様子で、遠慮なくこちらを見つめ返してくる。

「.....あなた、ちょっと頭がおかしいんじゃないの!? 雄二の友達ならこんなことしなくてももっと普通に紹介してもらえば良かったじゃない。どうかしてるわよ、誘拐なんて。まさかとは思うけど、雄二に馬鹿にされてその腹いせにとかいうんじゃないでしょうね!？」

男はさも面白いことを聴かせてもらったとでもいうかのようにくつつつと笑いだし、それから突然また真顔に戻るとこう言った。

「駄目だよ、普通に紹介してもらったのではね。それでは君は僕のことを好きになってくれそうもないから。異常な状態の中で芽生えた愛のほうこそこらに流通している恋愛感情なんかよりもよほど強いものだと思ってるしね」

「わからないじゃない、そんなこと。もしかしたら雄二のことなんかどうでもよくなってあなたのことを好きになる可能性だってあったかもしれないわ。だけどあたしは女の体を縛り上げて言うことを聞かせるような卑劣野郎は絶対にもう好きになったりなんかしないんだからっ。雄二はあたしが嫌だっていうことは強引に無理矢理するような人じゃなかったし、そう考えればあなたなんかよりはよっぽど男らしかったわよ」

言ってしまってから即座にしまった、と後悔した。この手のタイプの人間は常日頃からやり場のないストレスを抱えていて、それをほんの少しでもつつかれると何をしだすかわからないような気が直観的にしたからだった。見た目は一見穏健温和そのものという感じに見えても、ほんのちょっとしたことにでも手ひどい仕返しを自らの正当性を持って下すのではないかという気がしたのだ。

恐れが脳裏をよぎる。それであたしは思わず慌ててフォローしていた。あなたのこと、よく知りもしないのに卑劣野郎だなんて言う権利、あたしにはないわよね、それにあなたのような理知的なタイプの方がこんなことをするにはきっと事情があるんでしょう? 冷静になってよく考えてみて。今ならまだ間に合うわ.....ところが男は珍しい動物が一生懸命言い訳するのを面白がっているような様子で、おかしくてどうしようもないというように吹きだしたただけだった。あたしももう頭に血が昇るのを抑えきれなかった。

「大体あなた、一体どういうつもりなのよ!? 言っとくけど、雄二の自慢話なんて半分くらい誇張されてるんだからね、いちいちあいつの言うことを真に受けてたらそれこそ奴の思うつぼなん

だからっ。なんならあたし、雄二と別れてあなたとつきあってもいいわよ。ちょうど別れようと思ってたところだから、あなたがこんな馬鹿なことさえやめてくれるんなら……」

口からでまかせとはいえ、我ながらいい取引の材料かもしれないと思った。けれど男は笑うのをぴたりとやめて真偽を確かめるかのようにあたしの瞳の中を深く覗きこんでくる。

「許せない嘘だな、それは。それに君の言ってることは支離滅裂だよ。誇張された自慢話をするような男は間違っても男らしいとは言えないし、女を縛り上げるような奴は嫌いなんだろ？それじゃあ僕とまともにつきあっても君は僕のことを好きになるはずがない。なにしろ僕は病的なSMマニアだから」

「……嘘」

普通の状況でなら、男の最後の科白を冗談だと一笑して聞き流せたかもしれない。けどこの時のあたしは頭から男の言葉を信じきってしまっていて、怖さからベッドの背もたれへと身をよじらさずにはいられなかった。目の前にいる誘拐犯はとてもじゃないけど冗談なんかを言うようなタイプには見えなかったから。

「本当だよ。何年か前に一度結婚したことがあるんだけどね、女房がこれ以上は夜の生活に耐えられないと言って出ていったんだ。それでそろそろ代わりが欲しくなって君に白羽の矢を立てたってわけなんだけど。僕が君にどんなことをしたくてここへ連れてきたのか、想像できる？」

あたしはもう生意気な口を聞くのはやめにしようと思った。黙って首を横に振ると、口を引き結んで必要最低限のこと以外は決してもう何も喋るまいと固く心に決める。

「そうだね、君をまず素っ裸にしてそこの椅子へ縛りつけることにしようか」

男はベッドの脇にある白い塗料の剥げかかった古い木製の椅子を指で指し示す。

「そしてよく見えるように足を大きく広げた格好にして手も足もきつく縛り上げるんだ。それから目隠しをして……そんな恥かしい格好の君の目の前でよく焼けたいい匂いのする上等なステーキを食べる。君がごくりと生唾を飲み込んで椅子の上によだれを垂らすのをじっくりと観賞しながらね。そして食後には血のような赤いワインを飲んで、懇願する君にそれを口移しで飲ませるんだ。僕かやりたいのはそういうことだよ」

言語に絶するというのはこういうことを言うに違いない。あたしはほんの一瞬、男の言うなりになるしかない自分を想像して背筋が寒くなった。

「……変態。絶対に絶対にそんなことなんかさせないわ。もしあたしに指一本でも触ったら舌を噛み切って死んでやるからっ」

本気だった。男が何か少しでも屈辱的な行為を課したら必ず何かの形で死を選択してやると思った。

「それは困るな。君には長持ちしてほしいと僕は心から願っているからね。悪いけど念のためにまた口を封じさせてもらうよ。これから僕は仕事をしなくてはいけないから」

身をよじるというような抵抗も虚しく、男は枕元にあったガムテープを手にとると有無を言わずにそれをあたしの唇の上に張りつけた。そしてその上からキスをひとつすると監禁部屋から出ていった。

第2章

.....カチ、コチ、カチ、コチ.....。

男が先程指差した、古ぼけた椅子の上に耳障りな音を立てる小さな時計が置いてあった。

きのうの夜に目覚めた時には聴かれなかった音だから、男が朝になって持ってきたものなのだろう。今その時を刻む針は十時を過ぎたところを指している。

足や腰や腕や肩など、身体の節々が悲鳴を上げているとまでは言わないまでも、戒めを解かれて伸びをしたいとしきりに不平不満を訴えてくる。しかもきのうとは違って口唇に張られた真新しいガムテープの匂いが嫌に鼻につき、胃のあたりがむかむかと吐き気に近い感覚を重ねて訴えてもいた。水が飲みたい、と思った。喉を潤して新鮮な空気を肺いっぱいに取りこみたいとも。空気が実はこんなに有難いものだったなんて、実感として知るのは生まれて初めてだったかもしれない。

何をどうしても必ず機会を見つけて逃げだしてやる、そうあたしは心に固く誓いを立てていた。囚われの身を嘆いて諦めるのはまだ早かったし、枯れゆく花のように打ち萎れるのもまだまだ早い。逃げて捕まった時にどうなるかなんて、行動を起こす勇気を挫くようなことは微塵も計画のうちに入れないことにする。

今あたしの身の上に降りかかっていることはあたしの人生に起こってはならない、起こる予定のなかったアクシデントで、あたしは一刻も早く軌道修正を済ませていつもの普通の平凡極まりない日常へ戻らなくてはならないと焦っていた。もし命あってここから出ていけるのなら毎日が退屈の連続の平坦な日々の繰り返しでも、劇的な素晴らしい何かが空から降ってきてほしいだなんて願ったりすまいと、窓の外に広がる雲の上の青さにかけて思う。

あたしの閉じ込められている部屋はかなり老朽化が進んでいて、床も壁もその年輪を余すところなく刻んでいるように見えた。床板はフローリングなんていう上品な響きのものでなく、あちこちがたわんで艶もほとんどなかった。白い壁は薄汚れて汚く、よくこんなひどい部屋で一晩も眠りにつけていたものだと思えば驚きの念さえ抱いてしまう。その上部屋にあるものといえばあたしが今横になっている埃っぽい匂いのするダブルベッドと、それから出来損ないみたいなぼろい椅子と癩に障る小うるさい時計、がらあきの物寂しい備えつけのクローゼット、あとは外の世界に通じるひとつのドアとふたつの窓.....たったそれだけだった。

窓から見える紺青の屋根と空の青さの高さからこの部屋が二階であることがわかる。しかも時折強い風がびよおびよおとその窓から吹き荒んできては、部屋中の埃という埃を巻き上げていて換気は最悪だった。あたしはベッドから転げ落ちて窓のところまで身体をずっていき、窒息死する前に投身自殺してやろうかと思いつめなくなつたほどだった。そしてもしあの男が自分に何かしたら必ずそうしてやるつもりでもいた。さらにその上、窓はぎいぎい、床はみしみし不気味に鳴るし、がらあきのクローゼットにかかっているハンガーは落っこちてくるわで、逃亡のための計画がその度に散らされてなかなかうまくまとまらない。

あたしは怒りのままに運命への不平を並べ立てるよりも、入念かつ綿密な脱走計画を企てて、時間を一滴も無駄にせず、有効に用いて敵を出し抜こうという算段をしていた。時々腹筋を使っ

て寝返りを打ってはあの男をどうにかできないだろうかと思案に耽る。そしてこれという打開策もないままに不安ばかりが募っていき、焦りとおののきで身体が汗ばんでくると、いよいよあたしはこれからの自分の身の上で心配でたまらなくなった。

一番の心配は食事と排泄と入浴のことで、食事はまだいいとしても今すぐにでもトイレに行きたくなったらどうしたらいいというのだろう。食事の時やお手洗いの時には手首の戒めを解いてくれるだろうか？—あいつがもしこのままで、口許にスプーンを持ってくるような真似をしたら絶対に受けつけたりなんかすまいと思った—それからトイレの時はその外で待っているといった具合なのだろうか？—もし生理になったらそんなことまで報告しなくてはならないのだろうか—あたしはそんな人間の尊厳に関わる問題をひとつひとつ検討していくにつれ、目に見えない鋼鉄の鎖とその先の五トンばかりの重りが心にのしかかってくるのを感じた。そして憂鬱の沼へとなす術もなくずぶずぶと沈みこんでいってしまう……食事の時もお手洗いの時も入浴の時ですら常に監視され、囚人の如く扱われることを想像しただけで気力がみるみる萎えてきて衰弱死したくなってくる。あたしはこのままベッドの上で石のように硬くなり、粉々になったほうがまだましではないかと絶望と諦めに何もかもを引き渡したくなるほど弱気になってきていた。

しかも食事の必要のことを考えた途端にお腹が鳴り、トイレのことを想像しただけで尿意が下腹部のあたりを圧迫してくるしで、あたしは本当に舌を噛んで死ぬことにしようかと思いつめなくなった。そしてちょうどその時に白くて細いコードが枕の下から流れていることに気づいたのだった。

陽に焼けて茶ばんだ染みのある枕を頭でどけると、小型のスピーカーホンにボタンのついたものを発見する。あたしは顎でそれを押し、ビーッとブザーのような音を繰り返し三度ほど鳴らしてやった。暫くすると床のみしみしい音が近づいてきて、色褪せたチョコレート色のドアが開き、背の高い男が首を軽くもたげて入ってくる。

彼は今朝方と同じ白い洗いざらしのワイシャツにところどころ網目の垣間見えるジーンズ、それから頭には何故か麦藁帽子を被っていた。肩にかかっているタオルで額の汗を拭いながら帽子を脱ぐと、ベッドの端に腰掛けてくる。もし口唇がガムテープで覆われていなかったとしたら、あたしは自分の立場も忘れて笑いだしていたかもしれない。実際、自分の唇が自由になると同時に、こらえきれずに吹きだしてしまっただけけれど。

「そんなにおかしいかな」

あたしがベッドの上でひとしきり身をゆすって大笑いしていると、彼は麦藁帽子をとりながら気分を害した様子もなく、優しく微笑していた。

本当に奇妙なことなのだけれど、あたしはこの隣に座っている誘拐魔に束の間だけ親近感を覚えた。彼の繊細な笑みを浮かべる横顔とその口許とに吸い寄せられるように目を奪われてしまったほど。

「……ごめんなさい。決して変な意味で笑ったりしたんじゃないのよ。ただあんまり……その、似合いすぎてるんだもの。あなたのその格好が」

「ああ、これね。ちょっと庭いじりをしてたんだ。実り多い秋がすぐそこまで忍び寄ってきているから手入れを怠れなくてね」

彼は細い肩からタオルを外すと、額の汗を拭いながら言った。

「今ちょうど君に御飯を持ってこようと思ってたところなんだ。もう十二時だっていうのに遅くなって悪いことをしたよ。僕はあんまり朝早く起きるんで、君の朝御飯のことをすっかり忘れてしまっていたんだ。お腹すいたろ？」

あたしは彼には答えずに、じっとその端正な横顔を不自然なくらい見つめてしまっていた。

「?.....どうした？」

彼はあたしのほうを振り向いて、不思議そうに首を傾げている。

「あなたってすごく感じのいい喋り方をするんだなあってちょっと感心してたの。歌の特別上手な人の中に、普通に喋ってても歌を歌ってるみたいなの、そんな感じの人がいるでしょう？本当にちょうどそんな感じだなあって思って」

彼は照れたのかどうなのか、立ち上がって窓際までいくとその開け放たれた窓を無造作に閉め、口を噤んだまま部屋を出ていった。

あたしには彼がとても根っからの悪人のようには見えなかったし、ひどく人を傷つけることを恐れるタイプの人間のようにも思っていた。多分あたしをさらったのも魔が差してのことで、説得のしようによっては、あるいは情に訴えるか何かすれば、あたしを黙ってここから出してくれるのではないかという、そんな気がしていた。

あたしを監禁している男は再び戻ってくると、お盆にのせた昼食をベッドの上に置いた。そしてあたしの手と足の束縛を解いてくれたのだった。

白い御飯と豆腐のお味噌汁、それからスクランブルエッグにじゃがいものバター炒め、海草のサラダ.....メニューはその五品だった。

「これ、あなたが全部作ったの？」

彼は頷くと、椅子の上の時計をどけて背もたれを前にしてから、両腕をそこにのせるような格好で座っている。

「僕は菜食主義者だから冷蔵庫に肉類が入ってなくてね。次に街へでかける時まではそんなので我慢してほしいんだ。二三日中には外へ出る用事があるから.....どうかした？」

あたしは一旦箸を手にしたものの、御飯を食べようかどうしようかしばし迷ってしまった。もちろんお腹はピークに達するくらい空いていたのだけれど。

「べつに変な物は何も入ってないよ。なんなら毒味しようか？君が僕みたいな者の作った料理は食べたくないっていうんなら話はまた別だけど」

「違うのよ。それよりも.....お手洗いにいきたいの」

あたしがもじもじするように下を向いていると、彼は椅子から立ち上がって後についてくるようにと言った。

あたしはなんとなくおそろおそろ部屋の外の廊下に出、そのあまりに違いすぎる室内の内装に驚いてしまった。吹き抜けになっているから廊下の手摺ごしに階下の部屋が見下ろせるのだけれど、床は一点の曇りもなくワックスによって綺麗に磨き上げられているようだったし、どの壁にもミルクホワイトの壁紙が張られ、ただの白色とは微妙に違う落ち着きを見る者に与えている。オパールのような輝きを放つ豪華なシャンデリアに大理石の暖炉、階段の親柱のそばにあるアンティークな振り子時計、それから『レカミエ夫人の肖像』のレカミエ夫人が座っていたような

革張りのソファー……その他、サイドボードの上やキャビネットの中にある調度品など、随分高価で値打ちのある物ばかりが並んでいるように、あたしの目には映っていた。

「トイレはこっちだよ」

監禁部屋から扉をふたつほどいった先にあるドアを彼はロックしていた。

あたしはどこか名残惜しい目つきで下の部屋をもう一度眺めてから、黙ってトイレに入ると用を足すことにする。便座に腰かけると薔薇の芳香が微かに鼻孔を掠めて、あたしは広いトイレ内の清潔さと綺麗さにも驚いていた。鏡の前の手洗い場には小さな花瓶にリンドウの花が生けてあり、トイレのタンクの上にはネクタイを締めたペンギンとリボンをつけたペンギンが向かいあっていて……とても男の一人住まいとは思えないトイレだった。

（もしかしたら潔癖症なのかもしれないわよね。そういう人ってどこか変わってるってよく言うし……）

あたしはそんなことを思いながらパンツを上げ、それから少しおかしくなった。男はあたしに喋り方を褒められたあと、わざと暗い調子で話していて、そのことを思いだすとなんだか笑いがこみ上げてきてしまう。

声を洩らさないように噛み殺し笑いをしながら手を洗おうとすると、鏡にはひどくぼんやりとした変な顔の女が映っていた。考えてみたらメイクも何も落とさず寝入ってしまったわけで、油浮きはしてるわ、長い髪はぼさぼさだわで家族と極一部の親しい友人以外には間違っても見せられないひどい容貌をしていた。

あたしは手櫛で髪を整えてトイレットペーパーで顔全体の肌を押さえると、急いでトイレを出た――大きいほうだとはあまり思われなくなかったから。

男はトイレのすぐ目の前で待ち構えているような真似はしていなかったもので、とりあえず廊下にはいなかった。そしてその瞬間――逃げろ！と心の中で誰かが叫ぶように命じた。あたしは本能に逆らえずに、とっさに走りだしていた。今しかないという強い思いが一瞬にして胸を鷲掴みにしてしまっていた。

それにもし捕まってもあの男なら、抵抗すればどうにかなるような気がした。一気に階段を駆け降りると、心臓が躍り上がるように脈打っていて、あたしはとにかく最初に目についたドアを開けた。出口である玄関はおそらくこちらであろうという直感がそのドアを開けさせたのだけれど、その部屋は行き止まりで窓さえなかった。そして戻ろうとして振り返るといつの間にか彼がいた。

「あ……」

まったく勘が外れてしまっていた。十二畳ほどの部屋の中は小さな画廊のようになっている、白いグランドピアノがある他は、何枚かの絵画が壁に飾られているだけだった。

「さして広くもないこんな家の中で迷えるだなんて、君は天才的な方向感覚の持ち主だね。この家はもともと買い手もつかないくらいひどかったのを僕がここまで改装したんだ。だから見た目はそれなりにどうにかなったけど、人が走ったりなんだりすると家中が筒抜けになってるみたいによく響くんだよ。ほんのちょっと目を離しただけなのに君がこんな無謀なことをするなんて――そんなに僕から逃げたかったの？」

彼は唯一の出入り口を塞ぐように立ちながら、そんな愚問を投げかけた。

「逃げたいに決まってるじゃない。当たり前よ。愚にもつかないようなこと聞かないで。大体なんであたしがこんなところに閉じこめられなくちゃいけないのよ。全部間違ってるわよ、こんなの……」

あたしはどうしても急に喉が詰まってきて、涙がこみ上げるのを止められなくなってしまった。こんな女を閉じこめるしか能のない最低野郎に泣いてるところなんか見られたくもないのに。「ねえ、どうしたらここから出してくれるの？あたしをどうしたいの？もし雄二に面当てしてやりたいとかそういうことなら、いくらでも協力してあげるわ。ちょうど別れようと思ってたところなのは本当なのよ。だから……」

彼はあたしの口車になんか乗るものかというように座りこんで泣きじゃくるあたしの腕を乱暴に掴むと、無理矢理立たせようとした。あたしは必死に抵抗して彼の胸のあたりを何度も叩いたけれど、彼は子供の我が儘に飽きたかのように振り上げたあたしの両手首を掴むと、即座に後ろへ捻り上げていた。声を発する間さえ与えられなかった。

「ごめんね。僕もこういうひどいことをするのは苦手なんだけど、君が僕から二度と逃げないために必要なことだから……」

腕をへし折られるかと思うくらい強い痛みが左肘の関節を襲った。息をするのも忘れてしまうくらいの激しい痛みだった。彼はあたしの肘の関節を脱臼させてからもう一度それを元通りに戻したのだけれど、あたしは二度と腕が動かさなくなるのではないかというくらいの恐怖と苦痛を味わっていた。

それからあたしは途端に大人しくなり、無実の罪で連行される罪人のように深く頭を垂れて階段を上った。もしかしたらこれから断頭台に上っていく死を求刑された人のように、青ざめた顔をしていたかもしれない。

「自慢じゃないけど僕、これでも空手と剣道の有段者なんだ。大抵の人は僕が背ばっかり高くて弱々しい脆弱野郎みたいに思うようだけど、おかげで僕は喧嘩をして誰かに負けたということがない。みんな油断して見くびるからだろうね、最後には君のようになってとても聞き分けがよくなるんだ」

死刑執行人はあたしの手を引きながら、淡々とした抑揚のない、感情の暖かみを失くしたような声でそんなことを言った。

「じゃあ、御飯でも食べて元気をつけて、また逃げる力を蓄えたほうがいいよ。こう言ってはなんだけど、これでも僕は君になるべく誠意を尽したいと思ってる。例えば君の服を脱がせて人に見せられないようないやらしい写真を撮ったりだとか、そんなことはできればしたくないんだ」

「何が誠意よ、馬鹿っ！このド変態野郎の唐変木っ！！あんたなんか死んじゃえっ！」

あたしが渾身の力を込めて投げた枕を彼は難なく受けとめると、ベッドの上に軽く返して寄せた。

「次に何かあったら罰としてそれを行うつもりだからね。覚悟しておいたほうが懸命だよ——いいね？」

男はあたしの返答を待たずにドアを閉め、それからわざと重々しい音を立てるように鍵をかけていた。

第3章

あたしは不本意ながらもかなりの時間が経過したあと、手に御飯茶碗をとってしぶしぶながら卑劣野郎の作った料理を口許に運んでいた。もう一度逃げるチャンスを窺うには体力が第一に必要なだと、自分に一生懸命言い聞かせながら。だけど心のない者の作った食事にしては、それらは質素ながらとても美味しく、いくらまずいと思おうとしても気持ちは舌と胃の正直さには逆らえなかった。

あたしはすっかり冷めてしまった盆の上のものをすべて平らげ、飢えた食欲を満たすと、つい先ほどまで支配されていた無気力さや倦怠感を追いやることができた。

エネルギーを摂取したことによってあたしの瞳は光る空気を見つめるようになり、微かながら勇氣と希望が肌の下に宿るようになってきていた。

手足は今、自由に動かして使うことができている。その気になれば何かができるのではないかと思考が網を張ろうとすると、木枠に囲まれた透明な窓ガラスと目があった。外の世界では鳶が二羽、自由を競いあうかのように大空で何度も旋回を繰り返している。

あたしは迷うことなく、窓をなるべく音を立てぬように用心深くそっと開け、束の間の自由を強い風の中に感じていた。そして勇氣をもって屋根の上へと足の裏をのせると、パンストごしに冷たい感触が感覚の筋を上ってくる。あたしは薄汚い、ところどころがひび割れた壁にへばりつくようにして四方を見渡した――ざあっと漣のように風の音が揺れ、あたしはこの傾きかけた家のまわりが一面葦の海原になっていることを知った。見渡すかぎりの緑の海と、ところどころに点在する雑木林――周囲には見事なまでに家一軒建っていない。一体ここはどこなのだろう？札幌の郊外か、それとももっとずっと遠いところなのだろうか？石狩、当別、江別、北広島、恵庭……あたしは地図を頭の中に思い描きながら、手足に力を集中させて横へ横へと少しずつ移動していき、隣の窓枠の出っ張りに手をかける。その時、海の青さの輝きが遠くから目に飛び込んできて、あたしは呆然と立ち尽くしたようになってしまう。一瞬、葉擦れの音が本物の海の音色のように聞こえ、魂が沸き上がるように鼓舞するのを感じる。でも今は自然の音楽に聞き入っていていい時ではないし、あたしは現実を直視するために下方へちらりと目をやった。庭に植えられている松の樹や楓やナナカマド、ハンノキやナラの樹などが見える。それから大きなガラス張りの温室が光を反射して一瞬眩しい。あたしは我をとり戻すとさらにその次の窓へと足を伸ばし、開け放たれた窓から白いレースのカーテンが揺れるのを見た。あの男がいるかもしれないと思った。

あたしの手足は自分の意志に逆らうように好奇心の赴くがまま、勝手に動いていた。正体不明の男が一体今何をしているのか垣間見てやろうとして、そっとカーテンの隙間から一瞬だけ中を覗きこむ。そして敵情視察を終えると、すぐにぱっと身を翻す。数秒にして得た情報は、敵が机の上に頭を抱えこみ、ひどく思い悩んでいる様子というもので、彼は随分暗く沈みこんでいるように見受けられた。といってもあくまでほんの一瞬の間そう見えただけなので、本当のところはどうなのか、確かめるためにもう一度薄い更紗のカーテンと窓枠の間から室内の様子を探ることにする。

すると、くしゃりと紙を丸める音がして、それからドアの閉まる音が続いた――まずい、と思った。看守は囚人が大人しくしているかどうかを視察するために部屋を出たに違いない。あたしはまるで鳶職人のように身軽な動作で壁をはっていき、おそらくは来た時の二分の一くらいのタイムで元の捕囚部屋へと舞い戻ったに違いなかった。

これはあたしがあとで元の自由な身になってから、彼のひとつひとつの細かい動作に至るまでを何度も思いだすようになる過程で気づいたことなのだけれど、おそらく彼はこの時、ひどく後悔していたに違いなかった。あたしをさらって自分の領域に引き摺りこんでしまったこと、それから先程ふるってしまった暴力について、深く悔恨していたに違いない。

最もこの時のあたしの脳裏をよぎったものといえば、まったく別の考えで、あたしはごみ箱に入り損なった原稿用紙のことを頭の隅で気にかけていた。そして監視員の点呼にぎりぎり間にあったあたしは、荒い呼吸と弾む心臓の鼓動の両者を急いで整え、ベッドの上でさりげなさ自然さを無理に装おうと懸命だった。

彼は囚人に対して礼儀正しくもノックなんぞをしてからドアを開けて入室してきた。

あたしはわざと彼に背を向けるようにしてベッドの端に座り、胸によぎる疑問を口に上らせるべきかどうかを真剣に思い迷っていた。

「……良かった。全部食べてくれたんだね。君の口にあうかどうか心配だったんだけど」

彼はわざわざ嫌味たらしくあたしの正面や隣に座るということはせず、あたしとは反対側のベッドの縁に腰かけていた。

もちろんこの時のあたしには考え及びもしないことだったけど、彼はさっきのひどい仕打ちをあたしがまだ怒っているに違いないと恐れていたのだと思う。

「あなた、一体何者なの？ どうしてここにいるのがあたしじゃなくちゃいけなかったの？ あたし、雄二の友達にならさんざん紹介されたし、よくよく考えてみたら……消去法でいくとあとはもうひとりしか残っていないのよ。とても残念なことに」

ぎしり、というベッドの軋む音加減で彼があたしの後ろ姿を振り返るのが、見なくてもよくわかる。

「御飯食べながらそんなことを考えてたの？ 君はなかなか賢い人だね。ブザーの置いてある場所も僕が教えなくても見つけだしたし……まあこれは意地悪したっていうんじゃないで単に僕が言い忘れてただけだけど」

「馬鹿にしないでちゃんと答えて。あなた、佐京宗一郎さんでしょ？ もしあなたがこんな最低野郎だってわかってたら、あたし、あなたに手紙なんて絶対書かなかったのに。ファンの期待を裏切るだなんて作家として本当に最低よ。もうがっかりだわ、幻滅よ――あなたがこんな……」

考えつく限りの、一番ひどい罵りの言葉を投げつけてやりたかった。

「イカれた猥拙好きの誘拐犯だなんて？」

「それよりももっと質が悪いわ。どうしようもなくサイテーのサイテーの大嘘つき野郎よっ！」

あたしは侮蔑の言葉を強調するように、枕でベッドの上を叩きに叩いて痛めつけてやった。埃が煙のようにもうもうと透ける光の中に立ち上る。

「ひどいな。それじゃあ君は僕がどんな人間なら良かったの？ 僕の小説に出てくる『僕』のような男を期待してた？」

「もちろん実物が小説の主人公そのままの人だなんて思ってなんかいなかったけど、でも少なくとも一部分は重なるところのある人なんだろうなっていうか……小説はともかくとしても、エッセイとかって人柄の滲みでるものでしょ？あたし、あなたの小さなエッセイ記事を読むためだけに大して読みどころのない雑誌を毎月発売日に買いに走ったりしたのよ？文芸誌に小説が連載される時は連載が終わるまで必ず買ったわ。書き下ろしの新刊がでる時には本屋さんに予約して一学校や会社の退けるのが待ち遠しくて仕方なくて、一度わざわざ早退までしたことがあったくらいなのに。あたし、本を読んでも間は恋でもしてるみたいに熱心なあなたのファンだったのよ。雄二に大学時代の写真を見せてもらった時なんて嬉しくて仕様がなかったくらいなもの。それなのにどうして……」

つい先程、隣の隣の部屋を覗いた時、原稿用紙らしき紙屑を見てすぐにピンときてしまった。それならすべての辻褄は合うのではないかと。

「あの頃と今じゃあ大分変わったからわからなかったら？僕はこれでも一応覆面作家だから写真が本や雑誌に載ることもそう滅多にないし——まあ君みたいな人がいてくれるのは光栄なことだとは思うけどね。確か手紙にも君が今言ったようなことが書いてあって少しばかり感動したのを覚えてるよ。僕が小説家としてデビューした十九歳の頃からのファンで、あなたの書く小説には一度もがっかりさせられたことがありません……だったかな。それで僕が異世界と現実世界の狭間で殺してしまった主人公がもし現代に無事戻ってきたとしたらどうなったか、わざわざ百枚もの大作を送ってくれて、色々と分析的なことも書いてくれてたよね。あんまり情熱的な手紙だったから、僕にしては珍しく返事を書こうかなって思ったくらいだったよ」

あたしは一気に体温が上昇して爆発しそうなくらい恥じ入っていた。後ろを振り返ってボンクラ作家と目を合わそうだななんて死んでも思わない。

「でも君は来なかったんだよな。雄二が僕に引き合わせてくれるって言った時、どうしてすっぽかしたりしたの？まあ僕も心のどこかではほっとしたりもしてたんだけどね」

「あの時は……本当はものすごく会ってみたくてどうしようもなかったんだけど、いざとなったら急に恥かしくなって死にそうになったんだもの。それってその熱烈なファンレターのせいよ。ほとんど愛の大告白以上にすごいこといっぱい書いちゃったんだもの。それにあなたは……佐京さんはその前に一度、約束をすっぽかしてるでしょう？ホテルのレストランで待ってた時のあたしの気持ちなんて絶対わかってもらえっこないわ。指も足も震えて、入口から人が入ってくるたんびにびくっとして……締切り前で急に駄目になった時にはもうあたし、ほとんど化石みたいになってたんだから。本当なのよ、これ。とてもじゃないけどまた同じプレッシャーに耐える自信はあたしにはなかったのよ。でもどうしてなの？何もわざわざこんなことまでしなくても良かったじゃない。あたし、あなたが会いたがってるって知ったら、尻尾を振ってのこのことどこへでも尾いていったと思うわよ？それで薄情にも雄二のことなんか綺麗さっぱり忘れちゃって、あなたのいいようにされてたかもしれないじゃない」

佐京宗一郎氏は音を立ててベッドから腰を上げると、あたしの真正面にある椅子に今朝と同じ格好で座りこんだ。

「話すとき長いけど、きのうの君をさらった夜ね、僕、雄二とススキノで飲んでたんだよ。それで

偶然帰り道で君を見つけて——暗かったし、実際には写真でしか見たことのない人だったのに、いやにはっきりと君であることがわかったんだ。それでも本当に本人かどうか少し不安でね、手紙に書いてあった住所と同じ方向に歩いていくかどうか、後を尾けて確かめたっていうわけだよ。もしかしたらその前に雄二からさんざん君の話を聞かされたばかりだったから、これは運命だとか勘違いしたのかもしれないな。多少酔ってもいたからね……君、失業中だから毎日雄二に食事を作ってあげてるんだって？それで雄二がどんなに遅くなっても真っ暗な中でソファに横たわりながら待ってるって話を聞いたんだよ。まあ雄二はね、そんな君を見ててっきり襲われるのを待ってるもんだと勘違いしたみたいだけど。抱こうとしたら思いっきり拒まれたって言ったよ。それから前にぎりぎり寸前までいきかかったのに、直前になって君がやっぱり駄目だって言ったってようなこともね。河野と渡部も一緒だったんだけど、今度奴らに会った時、変な目で見られたら裸にされてると思っという方がいいかもしれないな。あいつは酔っ払うと聞かれたこと以上に色々なことを喋り倒すからね——まあそういうわけで僕は君に興味を持ったというわけだよ。何もいやらしい意味じゃなくて、真っ暗な闇の中で待っていてくれるような恋人が僕は欲しかったんだ。君をさらった理由はそれだけだよ」

あたしは精神的に丸裸にされてしまったような気がして、目の前にいる余裕顔の男を直視することができなくなってしまった。二十三年間生きてきた中でこんな屈辱は初めてだったかもしれない。

「明日、食糧や何かを買いだしに行くけど、欲しいものがあるなら考えておいてもらえるかな。君から自由を奪った以上、出来る限り不自由な思いはさせたくないからね。食べたいものとか、必要な日用品なんかがあったらあとで教えてくれ」

本物のベストセラー作家は椅子から立ち上がると、原稿の続きを書くためなのかどうなのか、監禁部屋から出ていこうとしている。

「何も——何もいらぬわ。あなたがくれようとするものなんてもう何ひとつ欲しくなんかないもの」

あたしの憧れの的だった佐京宗一郎はお盆を手にとると、何も言わずにドアを閉め、それから鍵をかけた。階段をゆっくりと降りていく音が響いてくる。この部屋以外の家の内装はもしかしたらどこもとても見栄えを良くしてあるのかもしれないが、家屋は相当に痛んでいて、壁を通して床の軋む音やトイレのあとの水が配水管を流れる音なんかははっきりとよく通るように聞きとれる。

あたしは呆然自失として、薄汚れた白い壁を眺めると、逃亡計画について念密な考えを巡らさなくてはならないと思いつつもショックから逃れることができなかった。

彼の書く本はどれも皆素晴らしい言葉に溢れていて、一行の無駄もないくらいに完璧で、彼の描き出す主人公にあたしは恋していたといってもいいくらいだったのに。

「嘘よ、こんなの……」

無意識のうちにも呟きを洩らしてしまい、あたしは自分の掠れ声に思わず失笑してしまった。

どうしてこんなことになってしまったのか、今さら悔いても始まらない。だけどなんだかもう何もかもを忘却の果ての不毛の土地に埋め立てて、その上に墓碑を築きたい思いだった。

ベッドの上に力なくうなだれると、自分の身体がしなびた老体のように感じられてくる。

――なんだか、疲れちゃった……。

あたしはもう一度目覚めた時に、まだこの部屋にいるくらいなら、瞼がもう二度と上がることがないようにと祈りながら眠りの国の入口に立っていた。

長く短い夢を見た。

あたしは森の中を泳いでいて、風が真夏に感じる冷たい水のように優しく、体全体を包み込んでいた。薄い水色のヴェールが森の樹から樹へと波打ち、あたしに心地好い波動を送ってくれている。永遠にこうしていたい、とあたしは祈る時のように神聖な気持ちで、迷路のような森の中を彷徨っていた。

あたしはとても大切な何かを探しているようなのだけれど、それを見出だせない悲しみが水の色の濃度をどんどん深めていく。やがて深海魚に似た暗黒の塊のような何かがあたりをうろつきはじめると、あたしは嫌だな、と思った。

これ以上深くて暗いところへ降りていったら、圧縮された闇に体が押し潰されてしまうのではないかという恐怖があった。あたしは自分の薄い闇の世界から離れ、他者の支配する闇の世界へと移行しようとしているのかもしれない――それは危険な試みだった。

不意に、日が陰った時のように寒くなったかと思うと、あたしはこのまま凍えて死んでしまうのではないかと不安になった。そばに誰かがいて欲しいと、切実に願い、心が焦る。

実をいうと本当は最初から誰かに見られているという感覚がつきまとっていて、あたしはそれが何なのかつきとめようと、海の深みを誘われるように泳ぎ進んできたのだった。

――あなたは誰？

喋ろうとしても泡がぶくぶくと上へ流れていくだけで、あたしは息苦しさから地上を目指して足を蹴り上げていた。そうだった、忘れていたけれど、言葉を発すると途端にこの世界では呼吸が苦しくなるのだった。

もう二度とあたしは何も喋ったりなんかすまい、永遠に幸福でいるためには沈黙が必要だということを肝に命じて、もう一度だけ月の光を浴びに地上へ舞い戻ろうと思った。

そして泳いで泳いで泳いで――あたしは目を覚ましたのだった。

夢から目覚めると、暗闇がすべてを包み込むように支配していて、あたしは物悲しい喪失感に胸を痛めていた。とても大切な何かを失ってしまったような、それは一度失ってしまうと二度と取り返せないもののような気がして、切迫した思いが心と魂をつなぐ道を塞いでいる。もしも夢の中を泳いでそれを取り戻すことができていたなら、現実の世界の出来事もすべてうまくいったのではないかという確信に似た強い気持ちがあった。

ベッドを軋らせて上体を起こすと、窓から青白い光が差し込んでいることに気づき、あたしは手を差し伸べるように窓敷居まで歩いていった。窓の外は満月だった。あたしは夢の続きを現実でも見る事が許されている者のように夢想に耽り、名前もわからない大切な何かはどこにあるのだろうと、見つけだせない苦しみに甘い疼きを覚えていた。

あたしの意識を包み込む精神というものはまだ半分夢見心地で、月の愛撫に身を委ねながら恍

惚としていた。窓の外は真の闇に覆われていて、月の偉大さを称えるように暗い樹木が葉擦れの音を揺らしては歌を歌っている。

あたしはこう見えても普段はとても現実的な女で、人前においては夢見ることが知らぬ者のようにふるまってはいる。けれど、自然の与える官能の甘い疼きのようなものをあたしはこの世で誰より愛していた。もしかしたらそのせいで人を一生本気で愛することはできないかもしれないと恐れてしまうくらいに。

そしてあたしが時を忘れて月の光の深さと闇の濃さに見惚れていると、こんこん、と木を叩く音がどこかでした。あたしはまどろみから呼び覚まされるのが嫌で何の応答も返さなかったけれど、おそらく佐京はあたしが眠っているものと思ったのだろう、床を軋ませながら次の部屋かそのまた次の部屋へ入って行って扉を閉めていた。

あの男にはもう二度と口を開いてやるまいと、固く心に誓いを立てる。あの男が佐京宗一郎本人であることがわかって何がショックだったか、今ならばはっきりと思考の整理をすることができる。

あの男の内面世界が反映されているであろう小説には、あたしが自然や暗闇に対して感じる親密さや官能の疼きといったようなものが色濃く描写されていて、あたしは自分の感覚と同じものを共有している作者に強い共感を覚えていたのだ。それだから尊敬している人間に裏切られたみたいなの、そんな恨みがましい思いと許せない思いとが募ってしまったのだろう。

月が遙か彼方、海の方角へと隠れてしまうまであたしは葉擦れと風の音色を月の光の中に聞き、それからベッドの中へ身を横たえると瞑想の続きをするかのように瞳を閉じた。全然眠くはなかったけれど、男を呼びつけて暇潰しに話をしようだなどとは死んで固くなっても思いたくないことだった。

真っ暗な闇の中で意識が現実の感覚を取り戻していくにつれ、明日、自分が一体何をすべきかが明瞭にわかってくるようになる。

男が出掛けたら窓から逃げて、何としてでも下界へ降りゆく方法を見つけだすのだ。きっと正しい者が逃げおおせるための手段と道がどこかに備えられているはずだと、刃物を念入りに研磨する時のように研ぎ澄まされた思考の中であたしはあらゆる可能性に手を伸ばす。色々な策に手を染めてはそれを捨て、また手に取っては違うものと繋ぎ合わせたり、組み合わせたもの同士を解体したり……あたしはこれまでの人生においてそれほどひどい過ちを犯してはこなかったし、きっと神様のような人が守ってくれて逃れさせてくれるに違いないと祈らずにはいられなかった。神と呼ばれる至高の存在に心からの必要を感じて祈るのは本当に久方ぶりのことで、どうか助けてくださいとあたしは泣きたい気持ちで祈り、祈り疲れてから夜明けまでの短い眠りについて――夢は見なかった。

第4章

「じゃあ僕は蛇の餌を買うために出掛けるけど、君は本当に何もいらないんだね？」

いらぬ、という意思表示のために黙って頷こうとして、あたしは胸に引っ掛かった疑問を口に上らせずにはいらぬなかつた――唾のようにだんまりを決め込むという計画は明け方に尿意を催すと同時に打ち砕かれていたので、口を開くことにあまり抵抗はなかつたのだけれど。でもやっぱり聞かぬでおいたほうがよかつたかもしれない。

「へびってあなた、あのによろによろしたへびを家の中で飼ってるんじゃないでしょうね!？」

「によろによろしない蛇を家の中で飼ったってつまらぬだろう？僕はアフリカ産のニシキへびを五匹飼ってるんだけど、みんなメスでね、人間の女なんかよりもよっぽど優美で可愛げがあるよ――まあ君ほどじゃないけどね」

背筋が総毛立つようにしてぞわりとすると、身体全体に鳥肌が伝染していく。

この家のどこかにへびが五匹もとぐろを巻いて、主人のくれる餌を待っているのかと想像しただけで気が遠くなってくる。

「まあ僕がいない間に逃げだそうだななんて曲がり間違っても考えぬことだよ。もし逃げようとした痕跡が部屋のどこかに少しでも残ってたらニシキへび専用の部屋に君を移すつもりだからね、よく覚悟の上で検討することだよ」

なんでもぬことのように淡々とした口調でそんなことを言う男の薄ら笑いを見ていると、本気でやりかぬぬというよりはむしろそれを楽しみにしているというような嗜虐的なものさえ感じられてくる。嫌悪感によって体温が二三度下がってしまいそうなくらいに。

「……あなたの可愛いメスへびたちに嫉妬されて噛み殺されたくぬから大人しくじっとしてゐるわ。あなたが仮に事故にでもあつて帰ってこなくとも一生待ち続けるつもりだから心配なんてしなくとも大丈夫よ」

科白の後半は皮肉のつもりだつたけれど、男はどこか弱々しく微笑しただけだつた。彼は愛しい蛇たちの餌を買いにいくために部屋を出ていこうとして、ドアノブに手をかけながら振り返るとこう言った。

「お土産を楽しみに待っててくれ」

そしてそんな捨て科白みたいな言葉のあとに鍵のかかる音が続いたのだつた。

蛇男が外出し、車のエンジン音が遠ざかると、あたしは早速脱走計画を実行に移すために青い空を映しだす窓を全開にした。

アフリカ産のニシキへびがどんな蛇なのかは知らなかつたけれど、野生の宝庫のアフリカ産、と聞いただけで体長が数メートルはあるであろうことが想像される。そんなニョロニョロが五匹も同じ屋根の下にいるとわかつた以上、一秒たりともじっとしているわけにはいくなかつた。

外界へと通じることが唯一可能な窓から身を乗りだすと、きのうと同じ経路でまずは隣室の窓へと手足を用心深く伸ばすことにする。この部屋はきのうと同じくカーテンがぴつたりと閉められていて、ある考えというか予想があたしの脳裏を横切っていく。おそらくこの薄暗い室内で雌

蛇たちが赤い舌をのぞかせながら腹をすかせているのではないかという気がした——その光景にぞっとすると、そのまた隣の部屋へと手と足を急がせることにする。

壁一枚だけを隔ててヘビと同居していただなんて、想像するだに悪寒の走る話だった。しかも『僕を愛してくれるのは君たちだけだよ』とかなんとかあの男が言いながら鼠やら兎やら猫やらの小動物の死骸を餌として与えているところがありありと思い浮かべられてしまい、首筋から全身にじんましんが走りそうになる——あたしが昔見たことのあるテレビのドキュメンタリー番組では、なんとかいうどでかい蛇が顎の骨を自在にはずして兎を丸飲みにしていたから。

「ああ気持ち悪い……あんな爬虫類愛好家の変態野郎とはこれ以上親睦を深めないに限るわ」

きっと小説家というのは大変な大嘘つきで、本人の人格とはまったく別のところで作品が書かれる場合もあるのだろう。

あたしはいまだにあの男が『メルヴィル家の人々』だとか『ディラン・デュカス』を書いた人間と同一人物だとは認め難かった。もし本当にそうだと言うのなら、あの野郎はとんでもないペテン師で、詐欺容疑か何かで警察に捕まり、重刑に処せられるべきという気がした。

あたしの理想の作家である佐京宗一郎の像は、自動車工場でスクラップにされた車よりも惨め極まりない形にその姿を変え、ペしゃんこにされていた。速やかにこんな異常作家の住むあばら屋からは離れ、一般に言われる『普通の人々』の雑踏に紛れて安堵したくてたまらなかった。こんな人里離れたような場所であんなサイコ野郎と生活を共にしていたら、しまいには頭がおかしくなってサイコカップル誕生なんていう三流のコントにも劣る結果が生まれかねない。

「やめてよ。絶対に嫌よ、それだけは……」

自分の近い未来の姿を想像して背筋に悪寒が走る。あたしは身震いしながらも手足に出来る限りの神経を集中させて横へ横へと蟹歩きをして壁を這っていく。

一昨日、佐京宗一郎がいた部屋まで強い風にも負けずに辿り着くと——当然ながら、遮蔽物が何もないので強風がもろに直撃してくる——じっくりとその室内を覗かせてもらうことにする。

どうやらここは変態作家の書斎のようで、資料のための本なのか何なのかは知らないけれど、壁一面に一ミリの隙間すら作ることなしにぎっしりと本が並べられている。アンティーク調の蓋付きライティングデスクの上には原稿用紙らしきものと万年筆が置いてあり、室内に他にあるものはといえば、食器棚のような五つの本棚と、ざっと見て五百冊はあるだろうかという整理整頓された本の群れ、スケジュールらしきものの書かれたカレンダー、締切日の日付と出版社名の入っている茶封筒——それから傘立てのような細長い灰色のゴミ箱がひとつあるきりだった。

(ひいふうみいよいつむうなな……あっ、あれ紫雀社からでる書き下ろしの新刊の締切日じゃないの。来月末に原稿が上がるっていうことは、出版されるのはいつなのかしら……もちろんあんな奴の書いたものなんて金輪際もう二度と買ってやったりなんかしないけど)

あたしは窓枠の外から壁に張られている茶封筒の数を数え、佐京宗一郎先生がいかに多忙な作家であるかを改めて知った。はっきり言って女をひとり誘拐している暇があったら、日付の間隔のあまり空いていない原稿をなるべく早く上げたほうがいいに違いないことは間違いない。

(あの封筒の日付なんてずばり今日じゃないの。もしかしてそのせいだったのかしら……今日出掛けたのって)

あたしはそんな余計なことまで考えてから自分には関係のないことと首を振り、さらに未知の

領域である次なる部屋へと――といってもトイレだけれど――蟹歩きの歩を進ませることにする。そしてトイレの小窓から（人が出入りするのとは不可能なくらいの小さな窓）さらに横の壁面へと角を曲がろうとした時、ポトリ、と何かが上から降ってきたのだった――何気なくその到着先の肩に目を落とすと、それはゴキブリの黒い羽根に赤い斑点模様を散らしたような気色の悪い虫で、あたしは一瞬の間のあとに我知らず叫び声を上げていた。

「きゃあああああっ！」

さらにどこからわいてきたのか、もう一匹が手の甲に具合良く乗っかってくるともう駄目だった。

「きゃあああああっ！」

あたしの右手は黄ばんだようなクリーム色の壁から手を離し、虫を振り払おうとするのと同時、体重が後ろにかかった。ふうわりと風の波に身体が乗った瞬間――落ちる！と思った。そしてなんとか手がかりを捉えようとバランスを崩しながらも必死に宙をもがいていると、あたしの両手はかろうじて雨どいに引っ掛かることを許されていた――のも束の間、下の状態を確かめることもなしに、足から地上へと落ちていく。雨どいは滑りやすかったのかどうなのか、気づいた時には手が離れていたとしか言いようがない。あたしは変態男の大切にしているであろう庭の中へと落っこちて、着地点にあった草花たちをめちゃくちゃに荒らしていた。

そして一瞬気づかなかったけれど、左の足首に鈍い痛みがあって、身体を起こそうとした途端にそれは激痛へと変わった。どうしたらいいのか皆目見当もつかない。まわりは口の聞けないダリアやデイジーやマーガレットばかりで話にもならない。

痛みを堪えてなんとか上体だけを起こし、このまませめて家の外の、佐京から逃げられうるところまで歯を食いしばってでも行けはしないだろうかと足を引き摺る覚悟で歩こうとするけど、立つことさえままならない――身体全体から熱が引いていき、左足だけに熱が集中するかのようになり、脂汗が額から流れてきたのには真剣に驚いた。

この際あの男でも仕様がなくて、帰ってきてはくれないだろうか弱気になりそうになって、慌てて頭を振る。そして絶対にそれだけは駄目だと思った瞬間に、甘い花粉の匂いがあたりに立ちこめて、あたしの意識はひどく酔っ払った時のようにぐるぐると旋回の波に揉まれ始めていた――不思議とそれはとても心地好い気の回り方で、足の痛みも吸いこまれるように一緒に巻きこまれていった。

このままどうなってしまうでもいい――あたしは石楠花の樹木の根元に倒れ、ポンポンダリアやコスモスやポピーの花を見上げながら意識を手放していた。

それから痛みによって再び意識が呼び覚まされるまで、かなりの長い時間、あたしは気を失っていたのらしかった。

頬に軽い刺激を感じて瞼をゆっくりと開けると、目の前に細面の男がいて、あたしの上体を支えるように柔らかい土の上から持ち上げていた。

「屋根から落ちたのか？まったく無茶なことを……偶然ちょうど具合のいいところに落ちたから良かったようなものの、間違っただけで変なところに着地してたら大変なことになってたよ。半身不随

にでもなって僕に一生面倒を見られたいとでも思ってたっていうんなら話は別だけだね」

笑えない冗談を言っているわりに佐京の顔は蒼白で、血の通っていない瀬戸物の白い人形のようにすらあった。

彼は壊れた雨どいにちらりと視線を送ったあと、立てるかどうかを尋ね、痛みによってあたしが彼にしがみついてしまうと、腕に力をこめてあたしの身体を抱き上げた。あたしは先程よりも足の痛みがひどくなってきていたせいで、口も聞けないような状態だったけれど、この男の細い肢体のどこにこれだけの力があるのか、驚かすにはいられなかった。

記憶を遡らせて考えてみると、あたしをさらった夜にこの男はひとりで階段を上ってあたしを運んだわけで、足が絶え間なく痛みを訴えてきているのにも関わらず、胸に安堵感のある自分にあたしは戸惑っていた。

佐京は一度としてよろけることなく、庭に面しているテラスから家の中へと入り、二階の元の軟禁場所まであたしを抱えていった。

「大丈夫か？」

ベッドの上にゆっくりと降ろされるまでの間、あたしは佐京の首にしっかりと両腕を回して、それを解いてしまうと何か物足りないような、寂しいような気がした――両手でぎゅっと掴める、確かな手応えのようなものが欲しくて仕様がなかった。そうしていないと不安が胸にこみ上げてきて、どうしてなのか切なかった。

「ちっとも大丈夫なんかじゃないわ。ゴキブリみたいな虫にはいじめられて屋根から落っこちる羽目になるわ、必死になって掴んだ雨どいには見放されるわ、足は挫いてずきずき痛みだすわで、人生最低の厄日よ。第一、北海道にゴキブリは生息していないんじゃないの？あなた知ってる？ゴキブリみたいな黒い羽根に赤い点々を散らした模様の気味の悪い虫……」

あたしは思っただけでぞわりと背筋が寒くなり、両手で自分の両肩を抱いていた。

「ああ、あの虫はよくこの家に出没するんだよ。ゴキブリの一種かどうかはわからないけど……でも北海道にもゴキブリはいるところにはいるらしいよ。札幌の地下街とか万年暖かいところには生息できる条件が整ってるっていう噂だしね。実際にお目にかかったことはないけど」

佐京は淡々とした抑揚のない声でそんな話をしながら、あたしの左足に触れ、足の腫れ具合を調べている様子だった。

「骨には異常ないと思うよ、多分ね。僕は医者じゃないけど、そのくらいのことはわかるから……湿布を貼って休んでいれば一週間か二週間くらいで治るんじゃないかな」

「いい加減なこと言わないで。本当に本気ですごく痛いよ。あたし、高校生の時に飛箱八段飛び損ねて捻挫したことがあるけど、こんなにひどくなかったもの。早く病院に連れて行って。大体あなたがこんなところにあたしを閉じこめようとするからいけないんじゃない。全部あなたのせいよ。責任とって欲しいわ」

足の痛みは歯痛の時のようにあたしの全神経を逆撫でして苛立たせていた。それですつきつい口調になってしまったけれど、元はといえばすべてこの男が元凶なのだ。それに病院へ行くことさえできれば、あたしはこの囚監所から解放されることができのだから、相手の良心に訴えかけることも大切だった。もっとも、佐京はこのくらいのことで簡単に頷くような、単純で甘い男ではなかったけれど。

「それだけはどうしても許可することができないな、申し訳ないけれど。そのかわり僕が全責任を持って看病するから仕様がなと思ってそれで我慢してほしい。今、湿布薬と包帯を持って来るからちょっと待っててくれ」

「嫌よ、そんなの。どうしてあたしがあなたなんかのために我慢しなくちゃならないの？絶対冗談じゃないわ。もしもこのまま一生足を引き摺るようなことになったら永遠に恨んでやるからっ！」

佐京はベッドの下に跪いたままの格好であたしの顔を見上げると、不意に伝線した透明のストッキングを引き裂いていた。それから左足の甲の青紫に腫れた部分に長く口接けると、鍵もかけずに部屋を出ていった。一瞬、何をされるかと身構えたけど、佐京は意味のないキスをひとつしただけだった。

彼は階下から戻ってくると、まるで生意気な態度をとったあたしにおしおきでもするかのように、飛び上がりたくなるほど冷たい湿布を貼った。それから器用な手つきでゆっくりと包帯を巻いていく――あたしは彼があんまり丁寧に白い包帯を巻いてくれるので、病院に行く必要はないような錯覚を覚えてしまうくらいだったけど、心を鬼にして礼など言うものかと固く心の扉に門を下ろしていた。

「……ねえ、ヘビの餌は買ってきたの？」

それでも彼が包帯を巻き終わった時に、気まずいような感じがして、聞かないほうがいいことをあたしは思わず聞いてしまっていた。

「ああ。ミミズを百匹ほどね、養殖場から買いつけてるんだ。ミミズも特に餌のいいのをもらってるから、丸々と太ってて蛇にはとても栄養満点だろうね」

質問を誤ってしまったと即座に後悔したけど、どうやら佐京は不慮の事故に免じて蛇たちのお部屋にあたしを引っ張りこむような罰を与えるつもりはなさそうだった。そのことにだけ、とりあえずはほっと胸を撫でおろす。

「君の足が治るまでの間、僕は多少優しくなるかもしれないけど、それはあくまでも特別措置だからね。足の怪我が治ったら何をするかわからないから、勘違いせずに用心しておいたほうがいいよ」

佐京は救急箱を手にとると、鎮静剤だという薬と水の入っているコップを置いて出ていき、そして部屋の鍵をいつもと同じ調子で重々しくゆっくりとかけていた。

あたしは二粒の白い錠剤を怪しい目つきで眺め回してから、水だけを飲んで薬を寝台とマットレスの狭い隙間へと押しこんでおくことにした。

第5章

このオンボロのあばらハウスに閉じこめられてからというもの、どうも眠ってばかりいるような気もするのだけれど、あたしの意識はそれからまた痛みの中でまどろみを知らずに眠りの国へと落ちていった。

夢の中で午後の陽射しを燦々と浴びた花々が一つ一つじや連華や金木犀、その他名前も知らない花たちが一むせかえるような甘い芳香を撒き散らして、あたしの嗅覚を喜ばせるという匂いだけのする夢を見た。

そして目覚めると残り香がベッドの上はまだ漂っているような気がしたのだけれど、それは錯覚ではなく、枕元に大輪の薔薇が一輪挿しの花瓶に生けてあったのだった。

気障っちい演出を……と半分寝ぼけた頭で思わなくもなかったけれど、ほんのりとピンク色をした薔薇の香りは鼻に優しく、精神的な癒しを与えてくれそうだった。

とはいえ、足は休むことなく痛んできており、諸悪の根源である例の男を窓敷居に発見した時はやはり恨みがましい気持ちでいっぱい、ヒーリング感覚を養うどころではなかった。

「……いつからそこにいたの？」

佐京はきのうの夜のあたしのようにぼんやりと外の世界を眺めていて、どこか虚ろな雰囲気をもたせていた。そしてあたしの声に驚いたように振り向くと、無感動な表情で口を開いたのだった。

「つい今さっきね、君に囚人服や日用品を支給しにきたんだけど、あんまり安心してぐっすり眠っているみたいだったから、起きるまで待つてようと思ったんだ。寝顔があんまり可愛らしいものだから、じっと見入ってたんだよ」

「嘘つき。そんな平気な顔して、堂々と恥かしい科白吐かないで。あなたがじっと見入っていたのは外の景色でしょ。わざわざこんな薔薇の花まで庭からちよん切ってきて、自由のない女の御機嫌でもとるつもりなの？」

彼は灰色の、怪しくなってきた空模様の窓を閉じると、あたしと向き合うようにして作り損ないみたいな椅子に腰掛けている。

「べつに僕はその気になれば君を好きなようにできるし、機嫌をとり損ねたからってどうということもないよ。だけど一応人間として最低限のことは君にしておかないと良心が痛むからね、服とか肌着とか櫛だとか、適当なものを買ってきたんだ。気にいるといいけど」

ベッドの脇に視線を移すと、某老舗デパート名の入った大きな買い物袋が三つほど並んでいて、あたしは見るだけ見てみようとして手を伸ばすことにした。

「ねえ、これ、値札は取ってあるけど、みんな高いものばかりなんじゃない？ ジルスチュアートのワンピースに、アニエスbのカーディガンとこっちはミュウミュウのブラウス……こんな着れるわけじゃないじゃない。あなた、やっぱり頭が少し足りないんじゃない？ あたしがブランド物の服に目が眩むような、安い女だとでも思ったの？」

「まさか。ただ雄二にね、真理子はブランド物以外の服に袖を通さない主義だって聞いてたんだよ。それに僕自身にはもう物欲っていうものが全然ないから、人にあげる物を買っていたほう

が楽しいんだ。そうでもしないと服にお金を費やすなんていうことはまず滅多にないからね」

佐京は今日もきのうと同じ白のシャツブラウスにジーパンという格好で、あまりお洒落に気を配るというようなタイプには確かに見受けられない。街にでかけるという時にはボタンダウンのシャツとジーパンという格好ではあったけれど、それもただ上着のシャツを取り替えただけという感じだった。

「ブランド物の服しか着ない主義なのは雄二のほうよ。あたしは無印の服だって着るし、バーゲンで買った安物の服だって着るわよ。そりゃあたまたにブランドの銘柄の入った服を着ることもあるけど、それだってほんのたまによ。あたしは高くても安くても服選びには慎重なの。あなたみたいににお金に飽かせて買ったりなんかは絶対にしないわ」

彼はもっともだというように頷きながら、どこか楽しそうに黙ってあたしの話に耳を傾けていた――椅子の背もたれに頬杖をついて。

「それに女物の下着を買うだなんて、よく恥かしげもなくできたもんだわ。ついでに言わせてもらおうとあたしの胸はDカップじゃなくてCカップよ。雄二はちょっと見栄を張りたくてひとつ上のサイズを言ったんでしょうけど、あいつがそういうインチキ野郎だっていうことはあなただって知ってたんでしょう？だから最初に雄二の言うことは全然あてにならないってあたしは言ったのに」

あたしは佐京のくれるという贈り物をいくつか手にとってから、その全部をまた手付きのビニールバッグの中へとしまいこむことにした。一週間以内に全商品を返品したほうがいいのは間違いないから。

「別れた女房がね、無類の買物好きで、僕の締切りが終わると必ずデパートを引きずり回したもんだったんだよ。それで彼女が試着なんかをしている間、僕は店員の女の子と喋って仲良くなったりなんかしてね。だからほとんどブティックの人に選んでもらったものばかりなんだけど、なんだか僕に新しい恋人ができたって勘違いされてみたいだったな」

彼は椅子の背もたれに頬杖をついて、どこか楽しそうに笑っていた。

「とにかく、こんな高価そうなものは一切いただけないわ。それに足を挫いたっていう時になんだけど、服を着替える以前にお風呂に入りたいの。体も髪も汗でべたべたするし、囚人の衛生のことを気遣うのも看守の役目でしょう？」

「まあなんにしても僕はこれから最低一週間は外に出るつもりはないからね、着たくなくても服はとりあえずそれしかないよ。お風呂に入るならお湯を張るけど、風呂場もこの部屋と一緒にまだ改装にとりかかっていないんだ。壁のタイルなんかぼろぼろ剥がれててちょっと不気味な感じだけど、それでもいいならあとで好きな時に入るといいよ」

確かに彼の言うとおりの、風呂場はかなりさびれた感じで、天井の四隅にはひび割れが生じ、薄いグリーン色の壁はあちこち剥げ落ちていた。そして一番いやらしいのがクロコダイルか蛇皮みたいな模様をした床のタイルだった。

檜のすのこが敷いてあるからいいようなものの、もしかしたらこの上で五匹ものニシキヘビが仲良く行水を……なんて考えただけで熱いお湯を浴びていても肌寒くなってきてしまう。

あたしはステンレス製のやけに深い浴槽に右足からつかると、怪我をしている左足を湯舟の外

にだしながら、思わず鼻歌なんかを歌っていた。この時には足の痛みが少し引いてきていて、腫れている甲を庇いながら身体を洗うのは少しばかり億劫ではあったけれど、全身を覆っていた汚れの薄い粘膜が綺麗に洗い流されていくような気がしてとても気持ち良かった。そしてあたしが髪を洗い終わり、さああとはバスタオルで頭や身体を拭くだけ、と思った瞬間に事件は起こった。

「きゃあああああっ！」

あたしはあたり構わずたしなみのない叫び声を上げて、裸のままお風呂場から飛びだしていた。次の瞬間に左足首が思いだしたように悲鳴を上げると同時、すっ転んでしまう――風呂場の敷居に足をつっかけた転倒してしまった。しかも脱衣場に入ってくるなりその劇的瞬間を見てしまった男は、ドアを一度閉め、それからまた数秒後にドアを開けて様子を聞いたわけなのだった。

「――どうかした？」

あたしは二枚あったバスタオルをかき集めるようにして体を覆いながら、腰の抜けたままの姿勢で助けを求めた。

「……む、虫がまた出たの……」

佐京はあたしの傍らを通り過ぎると、風呂場へ入って桶をひっくり返したりしていたけど、湯煙の中に雲隠れしてしまったらしい敵を見つけだすことはできない様子だった。

「どこにも何もいないよ」

佐京は浴槽を檜の板で閉じると、粗末なバスルームの電灯を消していた。

「それとも――僕にここへ来て欲しかった？」

彼は跪きながらあたしに手を貸してくれようとしたけど、あたしはその手を無視して彼の頬を打っていた。そして水面を叩いた時のような音が響いたあと、彼は黙って出ていき、静かにドアを閉めていた。

「本当に、本当にいたのよっ！天井からぼとって落ちてきたんだからっ。何よ、人の気も知らないでっ！」

あたしは彼に聞こえるように大声でそう怒鳴り、泣きたいような気持ちで真新しい、肌の滑りの心地好い下着を身につけていた。

壁を頼りにひょこひょこ歩いて居間までいくと、あたしの存在に気づいた彼が手を貸してくれようとしたけど、あたしは思いきりその手を振り払おうとした。そしてその拍子にバランスを崩してしまい、結局は男の手を借りなければいけなかった。

「そっちじゃなくてこっちだよ」

あたしが階段のほうへ向かおうとすると、佐京はあたしの腰を掴んでいた手に力をこめて方向を変えさせようとした。

一階は吹き抜けのホールのようにになっているから、すべての部屋のドアに通じているのらしい。彼はその中のひとつを指差して、そちらのほうへあたしを誘導したいみたいだった。

「一緒にごはんを食べようと思って待ってたんだ」

あたしは彼に何も答えずに、ただ黙って従った。いくら文句を並べ立てたところで、結局最後には彼にすべての決定権があり、無駄に反抗するのは無意味なことのように思えてきたからだった。

彼はダイニングキッチンにあたしを通すと、日曜大工で作ったらしい、光沢のある綺麗な木目のテーブルの席にあたしを座らせた。それから足を見せるようにと言った。

佐京は冷蔵庫の中から取り出した冷湿布をあたしの左足の患部に貼り、昼間と同じように馬鹿すぎるほど丁寧に、几帳面な手つきでゆっくりと包帯を巻いていた。

あたしはお風呂に入る前までは長い巻きスカートを穿いていたのだけれど、今は彼のくれた薄桃色のワンピースを着ていた。ボタンの形が上から下まで全部花模様で、さらにそのボタンの回りにも花の模様が刺繍してあるという可愛らしいワンピースだった——ただ少し気になるのは丈が膝上までしかないことで、足首を触られることに多少抵抗感がないでもなかった。それであたしはわざとぎょろぎょろして部屋中を眺め回すと、テーブルの上に片手で頬杖をつきながら室内の様子を詳細に見つめていた。

こぢんまりとしていて使い勝手の良さそうなキッチンに、淡い緑色をした食器戸棚……それから居間にある大理石の暖炉があたしの座っている椅子からは見える。暖炉の上に飾られている殺風景な荒野の風景画や、時の女神の銅像やサモワールのような形をした壺、高価そうな陶磁器の絵皿に瀬戸物の人形……キャビネットの中にも一客いくらするのかわからないようなティーカップのセットや銀器などが並んでいるようだったし、サイドボードの上にも青磁の壺や大理石の浴女や中国風の水差しなどが凝った模様の敷物の上に置かれている。それから幾何学模様をした高級そうな絨毯に白壁に施されたレリーフ塗装……などなど、あたしは見える範囲のものをぐるりと見渡し、全体にどこか懐古主義的な匂いのする部屋を懐かしむような気持ちで眺めていた。

「……なんだか、メルヴィル家の食卓に着いてるみたいなの、そんな雰囲気のあるお部屋よね」

包帯を巻き終わると、佐京は立ち上がって救急箱をテーブルの上に置いていた。

「随分懐かしいことを言ってくれるね。あの本は僕が二十三歳の時に出版したものだから、もう七年近くも前の話になるんじゃないかな。ちょうど結婚したばかりの頃で、妻と一番うまくいってる時に書いた本だよ」

そうだったんだ、とあたしは思った。

『メルヴィル家の人々』は十九世紀のイギリスの田舎町を舞台とした小説で、十二人登場する主要人物は皆変人というお話だった。ひとりひとはそれぞれ、各々が持つ変人の法則のようなものに従って生きているのだけれど、なかなかそれは他人に理解されにくく、最後にはいつも「メルヴィル家の人々がおかしいのは血筋だから」と言われて単純に片付けられてしまう。比較的マトモな主人公はそのことに幼い頃からジレンマを感じ、思春期には自殺すら企図するが、ある日「普通の人々」と世間一般に信じられている人々の秘密を握り、それを暴露する結果となるのであった……という内容的には一見ありきたりでも、不思議なおかしみとユーモアのあるストーリーに佐京氏は仕上げています。印象深いディテールや淡々とした描写の光る筆致は氏特有の文体と相まって、複雑な人物背景像をより巧みに楽しませるのに効果を上げており、読み手を一行たりとも退屈させない——というのは某文芸誌の書評からの抜粋である。

あたしは今日の前で鍋に火をかけたり、煮込んだロールキャベツを皿に盛りつけたりしている人物がああ愉快作を書き上げた尊敬すべき作家なのかどうか、まだ確かめたりしないような、複雑な気持ちだった。

彼は茶碗に栗御飯をよそい、ぼりぼりのお味噌汁と胡瓜と若布の酢もの、それから茶碗蒸しとを盆にのせると、あたしの前に配膳してくれている……こんなアットホームな食事を稀代の大作家が自らの手で作っていて良いものなのだろうか。

「これ、あなたが作ったのよね、もちろん」

彼は椅子に座るなりおもむろに食前の祈りを唱え始めていて、あたしの一抔の疑問の眩きには耳を傾けていなかった。

「天にますます我らの父よ、今日もここに夕食の糧を与え、用意してくださったことを感謝します。神が我らにこのように日用の糧を与えてくださっておりますように、貧しき人々にもお分け与えになってくださっておりますように……どうかこれを聖別して聖なるものとして、我らに与えてください。アーメン」

佐京氏は冗談ではなく心の底から真剣に祈っている様子で、あたしも慌ててテーブルの上に指を組み合わせてしまったくらいだった。そして彼が箸を手にとると、あたしも真似るようにして箸をとり、食事を始めたというわけなのだった。

「……佐京さんはクリスチャンなの？」

食事中にお喋りすることは特別礼を失した行為ではないと思ったので、暫くの沈黙のあとにあたしは思いきってそう口を開いた。

「一応ね。僕はカトリック系の教会の孤児院で育っているから、わりに敬虔なほうかもしれないな。僕の小説を読むかぎり、無神論者とか不敬虔な人物があまりに多く登場しすぎるから意外かも知れないけど」

彼は食事の間中、何故かあたしと目を合わせるといことはせずに、下を向いて黙々と口許に箸を運んでいた。まるでおかずをじっと見つめていたほうが美味しさが増すとでもいうかのよう。

あたしは彼が孤児院で育ったということは雑誌で読んで知っていたけれど、キリスト教徒だという話はこの時に初めて知った。

「でも実際に会ってみると佐京さんは……まさかこんな形で会うことになるとは夢にも思っていなかったけど……敬虔っていうか、言われてみるとなるほどって感じがするわ。なんだかとても几帳面で清潔好きで物静かな人っていう印象を受けるもの。ガスレンジもレンジフードも換気扇も全然汚れてないし、部屋全体も綺麗に整理整頓されてるし……失礼かもしれないけど、前の奥さんとはどうして別れてしまったの？佐京さんみたいな人って奥さんをととても大切にしすぎるくらい大切にしような人だし、少くく不平不満があっても黙っててくれそうっていう感じがあたしはするんだけど」

彼は食べているものが喉を通過するのを待ってから離婚理由についてこう説明した。

「そうだね。何が原因っていうこともないんだけど、まあ性の不一致っていうやつだったんじゃない」

ないかな。僕は見た目によらず病的なサディストだから、毎晩縛られながらファックされるのが苦痛になったんだと思うよ」

あたしは音を立ててお盆の上に箸を置くと「ごちそうさまっ！」と言って自分に割り当てられている部屋へ戻ろうと思った。

彼の書く小説であたしがとりわけ好きなのは、彼がファックとかそういう直接的な表現を使わずに官能的な比喩によってのみ性的な描写をしているところだったから――幻滅度がさらに増し加わってしまったのだった。

「君はセクハラを受けて会社を辞めたって聞いたけど、本当にそのままの人だね。だから小さな子供たちに囲まれて、汚れない世界で仕事がしたいんだろう？」

「ちがうわよっ！本当にあたしはただ純粋に子供が好きだし、自分が小さな頃に忘れてしまった気持ちを教えてもらえるのが好きだけよ。そりゃあ中には可愛げのないクソガキだっているけど、研修の間はとても楽しかったもの。そのどこがいけないの？奥さんに捨てられてヘビに慰めを求めるような男よりは百倍もましよ！」

あたしは振り返ると、ダイニングと居間とを隔てるカウンターの柱にしがみつくようにしながら、感情的に怒鳴りまくっていた。彼は顔色ひとつ変えることなく、あたしの食べ残したものを片付けていたけれど。

「まあ君の言うとおりだね。僕は蛇を五匹も飼っているような変態男だし、いつも君のことを考えて、どうすれば一番君が苦しむのかを妄想してるような男なんだ」

あたしは彼に再び背を向けると、なんとか自力で二十段もある階段を上りきり、捕囚部屋のドアをけたたましい音をさせて閉めてやった。

ベッドの上に突っ伏すと、一刻も早く違うやり方でなんとしてでもこの家から離れなければならないという脅迫観念にも似た激しい思いに駆られる。

この家の中の闇は慰めを与えてはくれず、夕方から降り始めた雨と一緒にあってあの男の味方をしているかのようだった。

風はガタガタと窓を揺らし、壁や床はみしみしと軋んで不安な気持ちを倍加させる助けにしかない。それでもあたしは明かりのない部屋で嗜虐趣味の男の買った趣味のいい寝間着に手探りで着替えると、脱出計画について思いを馳せながら眠ることにしようと思った。

どこかに逃げきるための、最善の道が備えられていはいらないかと模索しようとするたびに、その考え自体を否定するように嫌味なくらい窓は鳴り、今にも傾きそうな音を立てて壁は軋む。どうやら三日前に見た天気予報の台風は逸れずに北上してきたらしく、激しい雨が屋根を打ち叩く音が休むことなく頭上からも横からも響いてきていた。

――こんな家、バラバラになって解体されてしまえばいい。それからあの男が大切にしている庭も何もかも大風が目茶苦茶にして去っていくといいのに。

お風呂に入って一時的に血行が良くなったからなのかどうなのか、食事中は引いていた足の痛みがまたぶり返ってきていた。疼くような痛みが神経を引っ張ってなかなか眠ることができない。そしてあたしがずっと寝つけずに苦しんでいると、佐京が通りがかりざま、就寝の最終チェックでもするみたいに鍵をかけていったのだった。

雨は真夜中になっても眠ることなくまどろむことさえなく、容赦せずに家中を打ちつけて、夢の国から遠くあたしを引き離していた。

早く眠って何もかも忘れてしまいたい……この二日間、疲れるたびに何度そう思ったことだろう。けれども現実はどこまでもあたしに追い迫ってきて、逃避することを許さない。

このままここにいたら蛇に絞め殺されて死ぬか、サディストの餌食になって息絶えるか、そのどちらかしか選択肢は残されていないような気がする。あの男は一見温厚で柔和な容貌をしているけれど、その実何を考えているのか思考回路がさっぱり読めないし、もしかしたら本人の言うとおりひどく冷酷で残忍な顔を隠し持っているのかもしれない。話せばわかるというような理性的なタイプに見えるのは外見だけで、あたしが情に訴えるような真似をしても待っていたとばかりに踏み躪るつもりでいるのかもしれない。

あたしの思考はどんどん悪いほうへ悪いほうへと濁流の土砂のように流れていき、最後には舌を噛んで死ぬことさえ本気で考え始めていた。

もしもあの男が少しでも不埒な真似を働いたとしたら即座に噛み切ることができるようにと、歯と歯の間に舌をはさんで軽く力をこめてみる——ただ、人は舌を噛むことによって死ぬのではなく、噛み裂いた舌が口腔内で丸まって窒息死するのだという話を思いだしてしまうと、そんな空恐ろしいことをする勇氣は挫けてきてしまったのだった。

そして敬虔なキリスト教徒であるとは到底思えない佐京宗一郎氏ではないのだけれど、あたしが神さまに祈りながら夜明けが来るのを待とうと思った時のことだった——ポトリ、と身に覚えのある感触が、闇の中で肩のあたりに感じられたような気がした。雨の音なんかでは断じてない。むしろ滝のような大雨の中でさえもはっきりと聞き分けられるくらい、忘れることのできない音だった。

「きゃあああああっ！」

例の物体Xが動いた感触が間違いなくあった。あたしは足首の痛みのことまで忘れてがばりと掛け布団を蹴飛ばすと、身を起こしてベッドの上から避難していた。それから枕を手にしてそこから中をあたりかまわず乱暴に殴り続け、息が切れるまで気が狂ったようにそうしていた。もしこの部屋に照明器具なんていうものがあって突然点けられたとしたら、この時のあたしは踊っているようにさえ見えただろうかもしれない。

あたしは敵に致命的な打撃を与えられたかどうかいまひとつ確信が持てず、震える足でベッドの傍らから離れると、ドンドンと何度もドアを打ち鳴らし、佐京の名前を呼んだ。

「佐京さん！佐京さんっ！今度こそ本当に虫がでたのよっ。早く助けにきてっ！」

暫くの間そうしていたにも関わらず、ヘボ作家の佐京宗一郎はやって来なかった。もし下の寝室で眠っているのだとしたら雨や風の音で聞こえなかったのかもしれないし、もしかしたら狼少年だと思われて聞こえないふりをされたのかもしれない。あるいはまるっきりぐっすり眠りこけているか……それからあたしはブザーのことを思いだして、おそろおそろシーツの上に手を伸ばし、それをやっとの思いで鳴らしたのだった。

佐京は時間を置かずに駆けつけてくれたのだけれど、仄暗い蝋燭に映しだされる彼の顔はどこか不機嫌そうな陰影を刻んでいた。

「どうしたんだ？」

昼間とあまり変わりばえのない幽霊のような白いパジャマを着ている男は、手燭を掲げながら様子を聞いた。

「虫がでたのよっ！今度こそ本当に本当なのよ。お願いだからあたしをこの部屋にもう閉じこめないで。こんなに暗い部屋にいたら頭がどうにかなってしまいそうだから」

泣きそうな顔のあたしを彼はただ無言で部屋から連れだし、あたしの左の手を引いて階段をゆっくりと降りはじめた。

「下に僕の寝ている寝室があるから、今夜はそこで眠るといい。どうやらどこかで送電線が切れたらしくて明かりが点かないんだよ。僕は違う部屋で適当に寝ることにするから」

あたしは彼の片手に掴まりながら、階段を降りている途中で言った。

「そんなの駄目よ——真っ暗な部屋の中にいたら、またらくでもないことしかあたしは考えられないに決まってるもの。一晩くらいそばにいてくれたっていいでしょう？」

彼は呆れたように溜息を息を吐いている。

「……それ、誘ってるの？」

「違うわよ。ただ今夜だけはひとりで眠れそうもないだけ。あなたはあたしに背を向けて寝るといいわ」

「随分勝手な言い種だね。普通は何をしても構わないからそばにいてくださいって泣いて頼むのが礼儀っていうものなんじゃないか？」

「大丈夫よ。あなたはあたしに普通の関係なんて望んでいなさそうだから。そうでしょ？違うの？」

「確かに違いはしないけど……でも僕が君に間違っって手をだしたとしてもこの場合の責任は君にあると思いたいんだけどな、僕としてはね」

薄暗い階段を降りきると、彼はこっちだよ、と真っ暗なホールに浮かび上がっている白い扉を指差した。そしてあたしは佐京の腕と背中にしがみつような格好でその寝室へと入っていき、彼の体温のまだ残っているベッドの中へと身を滑らせたのだった。

「本当にいいの？僕がここにいても？」

枕元にあるナイトボードに燭台を置きながら、困惑したような顔をして彼は突っ立っていた。あたしは彼のそのたたずまいがなんとなくおかしくて、布団の中で気づかれないように笑ってから構わないと答えた。あたしと彼との間には二十センチほどの隙間があって、彼は本当にあたしに背を向けて寝入ろうとしているみたいだった。

朱色の蝋燭に照らされる室内の壁は下半分が淡いグリーンに、上半分がオフホワイトに塗られていて、なんとなくあたしをメルヘンチックな気持ちにさせた。ここはあたしがひどい暴風雨に怯えていた二階の部屋とは段違いに雨や風の音が静かで、あたしは隣で眠ろうとしている男が少しだけ憎らしくなった。雨は甘い音色を、風は優しい歌を子守歌のように響かせているといってもいいくらい、部屋の空気は穏やかだったから。

「……君は真っ暗な闇の中でも比較的平気なほうだって聞いてたけど、案外臆病なんだな。あん

な夜遅くに人通りも電燈もほとんどない道をわざわざ選んで歩いていた人とはとても思えないよ」

佐京は背中を向けたまま、どうでもいいような、半分眠たいような口調で独り言のようにそう言った。

「あのへんは毎日のように歩いている場所だから平気だけど、ここの……この家の闇はもっと本当に深いよ。敵愾心が剥きだしっていうか、ちっとも親しくしようとしてくれないの。みんなあなたの味方なのよ」

そのとおりだと、まるで呼応するかのようには嵐が二度、激しく窓を打ち叩いていく。

「君は僕のことを気味悪がってるかもしれないけど、君もちょっと変わってるね。普通の人は暗闇に親しさなんか求めようとはしないし、単なる恐怖の対象だよ。怖いとは思わないの？」

「思わないって言ったら嘘になるけど、どうして怖いと思うのかが大切なよ。自分は一体何に怯えているのか、自分の本能と対話してみることがあたしには大切な……ねえ、こんな話、今まで誰にもしてみたことなかなかったわ。馬鹿にされるのが目に見えているから。ドクターメルヴィルの言うとおり、人間どこか異常なくらいが普通なのかもしれないってあなたもそう思ってるんでしょ？」

彼は答えを逸らすように、まったく別のことに話題を転じていた。

「台風十号は時速約五十キロで北東の方角に進んでおり、明日の朝まで突風と神鳴りを伴う激しい雨が降り続く見通しだって、さっきテレビで言ってたよ」

あたしはテレビなんていう近代的な文明の利器はこの家には似つかわしくないような気がした。もちろんなかったらなかったで佐京に変人の太鼓判を間違いなく押し込みに決まっていたけど。

「テレビなんてどこにあるの？」

「ここの隣の部屋にあるから明日案内するよ。時間が勿体ないから死ぬほど暇でもない限り、たまにしか見ないんだけどね」

あたしは声を押し殺しながらも、身体を震わせて笑ってしまった。大した振動じゃないから、多分彼には伝わらなかったろうけど。

「……ねえ、やっぱりあなた、少し変わってるわ」

「君もね」

そうしてあたしたちは決して混ざり合うことのない、それぞれの夢の中へと引き裂かれるように連れ去られ、目覚めた時、彼の姿はベッドになかったのだった。

白い壁はまるでそれ自体が発光しているように、緑の壁は露の下りたばかりの青草のように輝いていて、あたしは眩しさに目が眩みそうになりながら太陽の訪れを知った。そして上体を起こして大きく伸びをすると、隣人の不在に気づいたのだった。

彼はあたしに何かするという事もなく朝陽を部屋に導き入れ、夏の最後の嵐に荒らされた畑の整備へと出かけたに違いなかった。

窓を開けるとすぐ真下の花壇に蔓薔薇の小さな白い花が咲いているのが見える。そしてひょっこりと壁を覗くと、蔦が一面に伸びていて、葉はまだ緑色だった。多分これから秋が深まるにつ

れて、壁も紅色に染まっていくのだろう。

あたしがもみくちゃんにした花壇はそれほどひどく乱れてはおらず、コスモスの花が多少横倒しになっている程度だった。雨の十二分に染み込んだ草花は真新しい空気を深呼吸して、それに変わる爽やかな香気を吐きだしているようにさえ感じられる。あたりの空気は弛緩してはおらず、どこかぴんと張りつめていて、秋の先触れを告げ知らせてくれているようでもあった。

あたしは黄金色の空気を肺いっぱい溜めこむと、生き返った思いで嬉しい溜息を吐く。そして寢室をでようとした時に、あることに気づいたのだった。

左足に痛みを感じるのをすっかり忘れていた。確かに体重をかけようとする鈍い痛みはあるのだけれど、それほど煩わしい痛みではなく、きのうの夜よりはずっと回復してきているとあって良かった。

実をいうとこの時、脳裏にひとつの計画が閃いたのだけれど、慎重に慎重をきすなら佐京に向かってほんの少しだけ心の扉を開いてもよいのではないかという気持ちが揺らめき始めていた。本当はずっとこのまま足の痛い振りをし続けて、相手が油断している隙を突いて……とそう思ったのに、その考えは何故かあたしの本当の心をあまり喜ばせはしなかった。

ダイニングからはコーヒーを落とす時の香ばしい香りと、卵を焼いた時の甘い匂いとが漂ってきていて、あたしは吸いこまれるようにふらふらとそちらへ歩いていた。

そっと中を覗きこむと、彼は新聞を読みながらコーヒーを飲んでいて、その情景を見つめるかぎり作家然としていないこともなかった。

「おはよう……ございます」

どうしてかはわからなかったけれど、あたしは丁寧語を使って挨拶してしまっていた。

寝起きの顔なんて雄二にすら見せたことなんてなかったのに、こんなパジャマ姿にすっぴんの顔で尊敬していた作家の前に立つのはどこか気恥かしい感じがする。

「おはよう」

佐京は新聞から顔を上げることもせず素っ気なく朝の挨拶を返して寄こした。

「洗面所はきのう君がすっ転んだ風呂場の目の前だから、場所はわかるだろ？」

「……はい」

あたしはどこか間抜けな返事をしてから、黙って静かにすぐ隣の洗面所兼脱衣所である部屋で顔を洗うことにした。

洗面台にお湯を溜めている間、あたしはきのうの夜の、彼の背中体温をぼんやりと思いだしていた。会話が途切れて大分時間が流れると、あたしは自分から彼の背中に身を寄せていたのだった。

実をいうとあたしは人の生肌というか、体温があまり好きなほうではなくて、恋人と手を繋ぐということすらあまりしたいと思わないような女なのだけれど、きのうの夜は珍しくとても人肌の温もりが恋しい気分になっていて、彼から体温を分けてもらっていた。

彼はあの時眠っていたのか起きていたのか、寝返りを打った拍子にあたしの背中を抱くような形で手を回してくれて、あたしはまるで安心しきって母の揺籠の中で眠る嬰兒のように心地よく深い眠りの国へと誘われていったのだった……。

自分でも心の天秤が傾きつつあることを認めていないわけではなかったけれど、まだ自覚症状

が乏しくもあり、あたしは鏡の中の自分に向かって反問していた。

『蛇を五匹も飼っているような、気色の悪い男なのよ？そんな奴にわずかばかりとはいえ好意を抱くなんてどうかしてるんじゃないの？』

『でも一一蛇を五匹も飼育するだなんて大変なことじゃない。世間には飼い続けることが困難になってそこらへんの野原に捨ててっちゃうような無責任な人もいるのよ？そんな飼い主に比べたら佐京さんなんて百倍も増しかもしれないわ一一』

あたしは馬鹿みたいに真剣に悩んでいる自分に気づくと、じゃぶじゃぶと温かいお湯で顔を洗い、あんな男の肩を持ったりなんかするものかと思った。そしてまたでもやっぱり、と思い直す。アフリカ産のニシキヘビの平均寿命が何歳なのかは知らないけれど、あの男は蛇が老骨になって牙さえ総入れ歯になったとしても、最後までよく面倒を見るのではないかという気がした。それで死んだあとは庭に埋めて、へび子の墓だのへび代の墓だのわざわざ手製の墓碑まで築いた立派な墓を立てるのだろうと、そんな気がした。

それでもこの時点にいるあたしにもし、彼に魅かれはじめているかどうかと聞いたとしたら、おそらく頭ごなしに否定したろうとは思う。だけど大分後になって考えてみると、間違いなく既にあたしは彼に魅かれはじめていたに違いなかった。

ダイニングのほうに戻ると、佐京がフライパンで焼いてくれたパンとスクランブルエッグ、それからサラダとがテーブルの上に置かれてあり、彼は変わらず新聞に目を通していているところだった。

「台風十号は徐々に勢力を弱めて、今日の正午には温帯低気圧に変わる見込み……だっせ」

彼は新聞の天気予報の欄を読み上げると、ページを捲って生活面の欄を開いている。

「大丈夫だった？あなたの育ててる濃作物だとか花壇の花とか。みんな無事だったみたい？」

「無傷とまではいかないけど、思ったよりはひどくなかったよ。きのうのうちに緊急時の対策として網をかけて保護したりしたからね、多少手入れすればどうということもないんじゃないかな」

「そう、良かったわね。今日は天気もいいし、庭仕事にも精がでるでしょ？」

彼は新聞を折り畳みながら、口許をほころばせている。

「年金暮らしの老人みたいだっせ言いたいんだろ？まあ僕は今二十九歳だけどね、二十歳の時にはもう八十歳くらいの爺さんと大して変わらなかったんじゃないかと思うよ。精神的にとっても老成していたから」

「じゃあ今は精神年齢が八十九歳くらいってこと？」

あたしはトーストの角に齧りつきながらそう聞いた。彼は冷めたコーヒーの残りを啜っている。

「そんなところかな。人生エネルギーの使い方を間違えたことに気づかずに過ごしてきてしまったから。僕は成人を果たした時に残りの六十年分の人生まで生きてしまったような、そんな気がしていたんだ」

「あなたがどこか達観しているように見えるのはそのせいなのかしら？」

佐京は何か言おうとしたけれど、それを阻むように呼び鈴の音がその時鳴った。

――ピン……ポーン。

妙に間延びした感じの鳴らし方だった。

あたしは呑気に朝食を食べている最中だったせいかな、全然チャンス！だなんて思いつきもせずに、逆にパジャマ姿で食事をしている自分が急に恥かしくなったくらいだった。

「悪いけど、二階の部屋に戻っててもらえるか？こんなところまでわざわざやって来る人間は誰か、大体見当がついているんでね」

どこか陰しい表情になった佐京に口答えをすることは何故かできなかった。彼は笑っている途中でも思いだしたように怖い顔をするのがあって、まるで楽しいことは罪悪であるかのような、そんな表情を時々浮かべることがあった。この時もそういう時にかかなり近い顔をしていて、あたしは逆らうことができなかったのだった。

あたしは無言で了承すると、きのうほどではないけれども、まだおぼつかない足取りで階段のほうへ歩き、木艶のいい手摺に掴まってそこを上った。

――ピン、ポーン。

先程よりも呼び鈴から手を離すタイミングが僅かに早い気がした。佐京はあたしを急がせると部屋に押しこめてドアを閉め、用心深くも鍵をかけることを怠らなかった。

ドアに耳をつけて澄ましてみると、彼が慌てるように階段を急いで降りる音が聞こえてなんだか少しだけおかしい気がする。

ベッドの上の乱れた布団をめぐってみても例の虫は見当たらず、ほっとしたあたしはパジャマから無地のブラウスとスカートにとりあえず着替えることにした。それからまたドアへ耳をぴったりくっつけて、階下の様子を窺うことにする。女性の笑い声が最初に響いてきた時には、あたしは自分の耳を疑わずにはいられなかった。

「佐京先生はこれまでに一度も締切りを破ったことなんてないのにどうしたんだろうってわざわざ羽田から飛行機で飛んできたんですよ。原稿は上がってますか？」

声から察するに、若い女性編集者といったところだろうか。快活な感じのする、物事をはっきりと言いそうなタイプに分類してまず間違いはないだろうと、そんな印象を受ける声色だった。

「相済みません。原稿はできあがってるんですが、つい締切りのことを忘れてしまっていて……今回はいつも以上に早く書き上がったものですから、記憶から抜け落ちてしまっていたのかもしれないですね」

この佐京宗一郎の世間一般向けの態度のようなものがあたしにはどうにも解せなかった。あたしと話す時とは声のトーンが微妙に違うし、敬語を使っているとかそういうせいではなく、彼は明らかに自分を偽っているかのような話し方をしていた。それとも作家という仮面をつけていると言ったほうがいいのかだろうか。

「先生はあまり編集部のほうへお見えにならないから、ついでとってはなんですけど、今日は次回作の構想といったことだとか、特集記事の打ち合わせも兼ねて少しお話を窺いたいですけどよろしかったですか？」

どうやらすぐ真下のホールにあるソファに腰掛けて話をする様子だった。

「もう書き下ろし用の新しい話に取り掛かってはいるんですが、特集ってことは短編か中編くらいのお話を一本書けってということですよ？」

「ええ。それからここでの先生の暮らしぶりといったものもできたら取材させていただいたらってそう思うんですけど、いかがでしょう？」

その女編集者はカナイという名前らしく、佐京の小説のことよりも家全体の間取りのことだとか、庭で栽培されているもののことだとかをしきりに知りたがっている様子だった。そして佐京が取材は受けかねる旨を伝えるたびごとに粘り強く頼むのだった。

「先生、こんな辺鄙なところに一人住まいだなんてお寂しくありません？作家の長者番付に毎年名前の載っているような先生が独り身だなんて勿体ないんじゃないかなあってあたしなんかは思うんですけど」

「いえ、もう女の人には十分懲りてるんで再婚する気はないんですよ。一度結婚してみてわかったことは自分がいかに結婚っていうシステムに向いてないかということだったし、一度得た教訓を手放して同じ轍を踏む気はないですね、僕としては」

それからカナイさんという人が離婚の理由を尋ねると、佐京は自分がSMマニアで妻が逃亡したなんていう話はしなかった。

「僕は作家になってから前の妻と結婚したわけですが、一番小説を書くのが面白くて仕様がないう時期だったんですよ。一日中同じ屋根の下にいても食事の時しか顔を合わせなかったりして、気持ちの上での擦れ違いが続いたんです。一緒にどこかへ出掛けたりしても僕はいつも上の空でいることが多かったし、家に帰ってくるなりまた書斎に閉じ籠ってばかりいて。女房はまるで幽霊と暮らしてるみたいだってそう言って出ていったんですよ。今にして思えば無理もないことだったんですけどね」

カナイさんはいやに同情的に頷いていたようだったけれど、あたしも彼女とはまた別の意味合いで妙に深く納得していた。まさか真っ昼間から幽霊をしている人間が夜には正反対になるだなんていう話は考えにくいから、長者番付第一位になったこともある作家が筋金入りのサディストだという話は限りなく信憑性を欠いているのではないかという気がした。

そして女編集者はといえば、原稿を受け取ってもなかなか玄関の方角へ向かおうとはせず、長々と居座って突っ込んだ質問を幾つかした後、佐京から<仕事>の二文字をだされてようやく重い腰を上げたわけなのだった。

「締切りの差し迫っている仕事がありますから」と言われてしまっただけでは、いかに神経のず太い編集者といえども引き上げざるをえなかったのだと思う。本当はこのへんの街――札幌や小樽の街――を佐京に案内してもらいたい様子だったけれど、彼はとても丁寧に仕事が詰まっていることを説明し、さも申し訳なさそうに断りの文句を述べていた。

あたしはそんな佐京の編集者とあたしに対するあまりの態度の違いにだんだん腹が立ってきて、わざとブザーをビービー鳴らすと、早くその女を追い返すよう催促していた。

「なんの音ですか？」

「ああ、これ？この頃濃作物を食い荒す野生の猪が頻繁に出没してるんで、庭の柵を通過すると警報で自動的に知らせるようにしたんですよ。意地汚くて困ってるんですけどね」

誰がイノシシよっ！

あたしはあんまり腹が立ったので、塗装の剥がれかかっている部屋のドアを二度ほど蹴りつけ

てやったーもちろん怪我をしているのとは別の足で。

あんな二重人格の男に好意を寄せかけていたなんて、やっぱりあたしの頭はどうかしていたに違いない。あたしは僅かに開きかけていた心の扉を瓶の蓋でも閉めるかのようにぴったりと閉じることにした。

「悪かったわね、意地汚いイノシシで」

佐京の奴が部屋のドアを開けるなりベッドの上から振り返りもしないであたしはそう冷たく言うてやった。

「仕様がなだろ、あの場合は。大体助けを求めるにしても相手が悪すぎるよ。聞いたとおり、僕は機転のよくきく男だからね、平気な顔していくらでももってもらいたい嘘がつけるんだよ。それにもしも君がドアを蹴破って出てきたとしても金井さんが相手ならどうとでも言ってごまかせただろうしね」

「……いやらしい。とんでもない大嘘つきの詐欺野郎だわ。本当はあなた、昼も夜も幽霊みたいで奥さんに愛想を尽かされたんでしょう？SMマニアだなんて聞いて呆れるわよ。あなたがあんまり仕事ばかりで構ってくれないから奥さんは買物依存症になっちゃったんじゃないの？あなたみたいな男の人と結婚する女はみんな不幸になること請け合いよ。相手の都合のことなんて全然考えてもみないんだから」

少しきつく当たり過ぎたかもしれないけれど、佐京の無表情なのか傷ついているのかよくわからない顔を見ても別に後悔したりはしなかった。それ以上にあたしのほうが深く傷ついていたし、なんだかいっぺんに何もかもが嫌になってきてしまったからだった。大好きな尊敬する作家のイメージがぶち壊しになったことも足を怪我したことも、彼が嘘ばかりをつくことも。

「あんまり美人の編集だったんで嫉妬でもした？」

「ばっ……馬鹿じゃないの？なんでそうなるのよっ！あんな見え透いた女の顔の造作なんてどうだっていいわよっ。あなた、わざわざあたしなんて誘拐しなくてもちゃんと相手してくれる女の人があるんじゃない。だったらあたしを早くここから釈放してよ。遊びでつきあうならあの程度の女で十分でしょ？札幌と小樽の観光名所でもぐるっと回って最後にホテルにでも送ってあげばこんな遠回りなことするよりもよっほど早いわよっ」

彼は後ろ前にした椅子に座って組んだ指の上に顎を乗せながら、余裕しゃくしゃくたる態度で面白そうに怒るあたしの顔を見つめていた。もちろんあたしも負けじと睨み返してやったけど。

「まあね、そういうのも悪くはないかもしれないけど、自分に気のありそうな女の子を口説いたってつまらないだけだろう？それに彼女が好きなのは作家の佐京宗一郎なんであって僕じゃないよ。僕が君と話す時よりもわりに明るい調子で喋ってるんで驚いたかもしれないけど、本当の僕はこっちの暗くて冴えないほうなんだからね」

「……それはつまりどういうこと？あたしをここへ連れてきて軟禁生活させることと何か関係があるの？」

彼は組み合わせた指の上から顔を上げて頷いている。

「もちろん大ありだよ。僕は君が僕のことを永遠に愛するようになって、心も体も僕なしじゃいられなくなるまでここから君を自由にさせようだなんて思っていないんだから」

「何言ってるのよ。ここはあなたの象牙の城かもしれないけど、あなたの好きなように創作でき

る小説の世界じゃないのよ。あたしはあなたの小説の中の登場人物でもなんでもないし、『気狂い作家無職の女性を誘拐』って見出しで新聞の三面記事を飾るのが現実よ。そうしたらあなたは小説家としての地位も名誉も信用も奈落の底まで叩き落とすことになるわ。そして何もかもを自分の手で失くすことになるのよ」

あたしがそう脅迫の文句を並べ立てても、彼は先程からの人を食ったような表情を崩すことはなかった。

「今の僕には君以外、失って怖いものなんて何ひとつないよ。だからそんなことは一向に構わないんだ。僕の書く小説は僕の人生の燃えカスみたいな、人生の残りの灰みたいなもので書いているに過ぎないから。まあいわば余りものだね。人は一度狂気を発掘してそれを系統立てるところか飼育馴らすまでになると、あとはもうどんなことにでも創作エネルギーとして応用してしまえるものだと思うよ。僕から言わせると精神病院に入院している人なんかはあまりにもマトモすぎるっていうんで普通の人に害を及ぼさないよう閉じこめられてるんじゃないかって思うくらいだね。でも本物の狂人は違うんだ。本当の狂人は完璧に狂気を制御する術を心得ているものだからね。不幸なことだけど、間違いになり損ねた人間ほど惨めはものはこの世に存在しないと僕は思うよ」

この時、あたしは彼の言っている言葉の意味を半分も理解できていなかった。本当の意味で彼の言った言葉のひとつひとつを理解できるようになるのはもっとずっと後のことだった。だからこの時のあたしは彼の言わんとするところを受け止めかねて、黙りこんでしまうしかなかった。

「ところで、そんなことよりも足の具合は大丈夫？湿布を取り換えようか」

佐京はどこか嬉しそうに部屋を出ていくと、救急箱を持って階下からまたすぐに戻ってきた。「今日着てる服もとてもよく似合ってるよ。やっぱり女の子はいいね、可愛い格好をしていると華があって。僕なんかもう一生同じ服だけを着続けて死にたい心境だけだね」

佐京はベッドの下に跪くと、青紫の腫れに触れないようにしながらゆっくりと包帯をほどき、ゆっくりと湿布薬を剥がして新しいのと換えてくれた。

「……その白のシャツブラウス、きのうのとは微妙にデザインが違うみたいだけど、毎日同じような格好ばかりして暮らしてるの？」

湿布があんまり冷たいので、あたしの左足首は反射的にびくりと一瞬震えてしまった。

「うん、そうだよ。クローゼットの中には白い喪服が百枚くらいびっしりとひしめいていて、あとは似たような形のジーパンしか引き出しの中には入ってないんだ」

「それ、本当に本当の話？」

真剣な顔で包帯を巻きながらそんなことを言うので、一瞬信じかけそうになってしまうけど、本当のような嘘のような、判断のつきかねる話だった。

「さあ、どうだろうね。どっちにしても僕は出掛ける時以外はいつもこの格好だけど、毎日きちんと取り替えてるから汚らしいと違って思われたいいいなって思っただけだよ」

「そんなこと思やしないわ。ねえ、それよりも……」

治療を終えた偽医師は救急箱を閉じると、あたしの言葉を途中で遮るように立ち上がっていた。そして軟禁部屋の外へと出ていこうとしている。

「おいで。全部の部屋を案内してあげるから」

あたしが彼の後について行って良いものなのかどうか迷っていると、佐京はドアのところで振り向いて手招きしてくれた。あたしは心のどこかでほっとしながら彼のいうとおりにし、診療室を出ると後ろ手でドアを閉めたのだった。

「二階はトイレを除くと三つ部屋があって、ひとつは僕の仕事部屋で、こっちはまだきちんと整理されてないけど、一応書庫なんだ」

どうやら彼の飼っている可愛らしいスネークたちは階下でその優美な体躯をうねらせているらしく、あたしの予想は見事に外れてしまった。その証拠に監禁部屋の隣室には百科辞典並みの分厚い本やら文藝書やら美術書やらが積み重ねられていて、足の踏み場もないくらいだった——このままここで古本屋を開けるのではないかというくらい、雑多な本が八つある本棚の上に並べられている。文庫本が先行ではじまってさ行で止まっていたり、世界文学大全集や世界詩人大全集などが下のほうに同じ系統のものとして固められてあったり、哲学の本や法律関係専用の棚があったり……かと思えば童話だけが並んだ小さな壁棚まである。

「ここにある本、全部読んだことあるの？」

疑わしい視線を向けられているように思ったのか、彼は軽く肩を竦めていた。

「退屈な分野の専門書なんかはほとんど斜め読みだけだね。百科事典を読んだりするのは暇潰しにちょうどいいんだよ」

やっぱりこの男の頭は本人の言うとおりにちょっとおかしいのかもしれない。暇潰しに百科事典や六法全書を読むような人間はあたしにとって宇宙人よりも珍しいとあって良かったから。

「すごいよね。多分あたしなんかだったら、一生のうちにこの半分も本を読まずに死ぬことになると思うわ。勉強熱心なのね」

「それは皮肉？ どうせ僕は無駄な知識を蓄える以外に大して取り柄のない男だとは思うけど」

そう言いながら彼は書庫の扉を閉めると、その隣の書斎のドアを開けていた。

「誰もそんなこと言ってないじゃない。純粹に褒めてるのよ。こんなにたくさん本を読んで色々なことを知ってるからあんなに素晴らしい本を書けるんだなって本当にそう思っただけよ。あなたが一番よく知ってるでしょう？ あたしがあなたの書く本をどのくらい愛読してるか」

「やっぱりそれも嫌味にしか僕には聞こえないな。君の手紙はとても熱心で嬉しくはあったけど」

あたしは改めて自分の書いた手紙の内容を思い返してしまい、赤面しそうになってしまった。『あたしは佐京宗一郎先生の大ファンです。先生の書かれた本はあたしの部屋の本棚に全部揃っていて……（中略）……今回の＜ディラン・デュカス＞を読んだあとは、本を抱きしめて泣きそうになってしまいました——いいえ、実際にディランが死んでしまうところで涙が止まらなくなってしまって、そのページは今は涙が落ちたあとでふやけてしまっています。小説を読んでいて泣いてしまったのは初めてのことだったので、自分でも読み終わったあとに驚いてしまいました。でもそれだけ先生の話には……』

確かそんな文面の手紙で、当時は本人に会うようなことは絶対と断っていいくらいないだろうと思っていたので、作家・佐京宗一郎を熱烈に支持する一ファンとして、こんなに人の心を揺さぶる小説を書けるのは先生だけです、みたいにほとんど初めてラブレターを書く十代の少女のよ

うな文体で手紙を綴ってしまったのだった。

「顔が赤いけど、もしかして足が痛む？」

二階の仕事部屋をちらっとだけ見せてもらったあと、階段を降りる途中で佐京は心配気にあたしの顔を覗きこんでいた。

「ううん、全然平気。調子いいみたいだから大丈夫」

下の部屋はダイニングキッチンと寝室とバスルームの他に白のグランドピアノのある宗教画の飾られた部屋、それからテレビやレコードプレイヤーなどの置かれている試聴覚室に彼のもうひとつの仕事部屋とがあった（二階の書斎にいて思うように筆が運ばない時は下の部屋に場所を変えるのだそうだ）。

あたしは視聴覚室に入ると、そのレコードの量の多さに驚いていた。赤茶色をした棚の上には何百枚あるか知れないレコードやCDが所狭しと並んでおり、床の上にも整理しきれていないCDやクラシック演奏のビデオなどが雑然と積み重ねられている。彼はきっと革張りのソファに腰掛けながら目を閉じて悦に入るようにクラシック音楽に聞き耽るのだらうと、そんな気がした——佐京氏はある堅い音楽雑誌に小さなコラムを持っていて、それを毎月欠かさず読めば彼がどれほどクラシック音楽を愛しているかが嫌でもよく理解できる。

「ねえ、全部で一体何枚レコードがあるの？」

あたしは何枚かのレコードを手にとって裏表紙を読みながらそう彼に聞いた。

『シューベルト<弦楽四重奏第14番二短調「死と乙女」>』

『シューマン<「詩人の恋」作品四八>F=ディースカウ(Br)、エッセンバッハ(p)』

『ベートーベン<ピアノ・ソナタ第二三番へ短調「熱情」作品五七>エミール・ギレリス(p)』

.....それぞれ一体どういった曲調の音楽なのか、聴けばわかるかもしれなかったけど、佐京氏のように譜面まで頭の中に起こすことはあたしには不可能だった。

「何枚あるか数え上げてみたことはないけど、大体七百枚くらいかな。同じ曲のものを僕は何枚も集めたりしているから」

あ、本当だ。同じラフマニノフでもこっちはピアノを弾いている人と指揮をとっている人とが違ふ。まああたしは彼のようにクラシックマニアではないから、両方を聴き比べてみてもどこがどう違うのかその違いを的確に指摘したりすることはまずできないと思うけど。

「クラシックばかりでつまらないだらうとは思うけど、聴きたいのがあったら好きな時に自由に聴くといいよ。ここでの退屈しのぎは退屈な本を読むことと退屈な音楽を聴くことくらいしかないからね」

「あたし、難しいことはよくわからないけど、べつにクラシックは嫌いじゃないわ。ベートーヴェンの運命とかヴィヴァルディの四季とか超有名どころしか曲名まではわからないけど.....ねえ、部屋はこれで全部よね？へびたちは一体どこで暮らしてるの？もしかして外のお庭でとか？」

長椅子に腰掛けている佐京の隣に座りながら、至極真つ当な疑問をあたしが口にすると、彼は一瞬口許を歪め、それからもうこれ以上は堪えきれないという仕種をして大笑いしだした。

「何よ？何がそんなにおかしいのよ。まさか蛇皮を剥いで殺しちゃったとかいうわけじゃないんでしょう？」

無然としてそう言い放つと、彼の笑いはさらに止まらなくなったようで、椅子の上に華奢な体を折り曲げながらお腹を押さえて喘いでいる。

「あっはっはっ……君、アフリカ産のニシキヘビの全長が大体何メートルくらいあるのか知ってる？」

「知らないわよ、そんなの」

「大体4・5メートルから7・5メートルあるっていう話だから、そんなのを五匹も家の中で飼ってるところを想像してごらんよ。今ごろこの家はとても大変なことになっているに違いないよ」

あたしはべつに自分の物を知らない無知ぶりを恥かしいとは思わなかった。それどころかソファからずり落ちるようにして大笑いしている佐京の姿を見てみると、憤るところか逆に嬉しくなってきたくらいだった。誘拐犯相手にこれはどうしたことだろうと自分でも思っていたけれど、彼があたしの一番に好きな作家である佐京宗一郎像に一かけらずつ復元しつつあることは確かみえたかった。

「ねえ、どうしてそんなふうにならざるを得ないの？あなた、やっぱりあたしが思い描いていた人になんか近いもの。身体の線が細くて心の神経も繊細で――あたし、約束するわ。ここから出ていけたとしても絶対に警察なんかに行ったりしないって。でもだからってあなたに土下座して自由にしてくれなんて頼む気もないのよ。賭けてもいいけど、絶対にあなたはここからあたしを出すわ。それもあなた自身の意志でね」

彼は革張りのソファに腰掛け直しながら、意地の悪い光を湛えた瞳の奥にあたしの眼差しを映している。

「いやに自信たっぷりな口調だね。もしも今すぐここで僕が君をレイプしたとしても君は絶対に警察へ訴えでない？もしそうだっていうのなら好きにさせてもらうけどね」

彼はソファの背もたれに肘をつきながら、少しだけあたしのほうへにじり寄るように身体を近寄せる。あたしはその分を後退さったりなんかせずに、そのままの姿勢で毅然として言った。

「あなたは絶対に――そんなことなんかしないわ。きのうの夜だって優しく抱きしめて添い寝してくれただけよ。正直いうともしあのままあなたが何かしたとしても黙って受け入れてたかもしれないわ。朝になって目が覚めた時、隣にあなたがなくてなんだか寂しい気持ちになったくらいなもの。これは本当よ」

科白の後半部を告白するのはかなり勇気がいったけど、言わないわけにはいかなかった。おそろしいことにあたしは少くなら――例えばキスくらいなら――されても構わないくらいに彼に対して心を許しはじめていた。

「じゃあ君は僕に手をだされなくて本当はがっかりしたってこと？」

「ちがうわよっ。そうじゃなくて、変なことしないのは当たり前なんだけど、ただ少しだけ嬉しかったの。あなたが思ったたとおりの人で」

彼はあたしの矛盾した言葉に首を傾げている。

「よくわからないな。でもとにかく僕はここから君を無傷で出すつもりはないんだ。むしろ君は

自らの意志でここに留まることになるんじゃないかな。僕の命を賭けてもいいけど」

あたしが彼に向かって反駁しかけた時、電話のコールが鳴り響いた。

ーール、ルルルルルルルル.....。

彼の目が左右に二度動いてーーリビングの電話台のほうとあたしのほうにーー彼が一瞬のうちに何を思い巡らしたのか、あたしには手に取るようにわかってしまった。

そして彼は仕様がなかったような足取りで床に散らばるCDなんかを踏まないようにしながら部屋を出ていき、電話台の前で二十分ばかりも退屈極まりない話を繰り返していたのだった。

相手はさっきのカナイとかいう編集者で、「仕事が一段落着いたら気晴らしに一杯」というようなことをしきりに誘われているようだった。

あたしは彼が申し訳なさそうな声で何度も断りの科白を並べるのを居間のレカミエ夫人の長椅子で苛々しながら聞いていた。

「あなた、電話のコールが鳴った瞬間、あたしが逃げるかもしれない可能性を頭の隅で計算してたでしょう？」

受話器を元の位置に戻すと、彼は後ろを振り返り、無表情なまま言った。

「べつに逃げたって構やしないよ。追いかけて捕まえるつもりなんてのも全然ない。君がこの家から出て、百メートルばかりも走って戻らなかったら、賭けは君の勝ちだよ。そしたら僕は君にあてつけるように海の果ての断崖から落ちて死ぬだけだから」

「本気なの？」

あたしは半ば真剣に、彼の目を睨みつけるようにして聞いた。

「まさか。冗談だよ。でも少なくとも君を殺すつもりはないから安心するといい。僕はこれでも一応信心厚いキリスト教の信者だからね、カインのように第六誡の戒めを破るつもりはないんだ」

「汝、隣人を殺めることなかれていうやつ？でも自分を殺すことだって結局は同じことよ。あなたには小説を書くことで得た地位も財産も名声もあるじゃない。さっきみたいにあなたのことを尊敬しててわざわざ電話までしてくれる美人の女の人だっているわ。こんなことまでして一体何が不満なの？」

あたしと向かい合わせになっている安楽椅子に腰掛けると、彼は深い溜息を着きながら言った。

「そんなことよりもーーどうして逃げようとしなかった？僕はさっき君に背を向けて話をしていたし、どっちに正面玄関があって裏口があるのか、ひとつひとつ家の間取りを説明したばかりだっていうのに。朝だって逃げだそうと思えば可能性としてできないことはなかつたらう？」

「それは.....だって、逃げたところを捕えられでもしたら今度こそ何をされるかわからないって思ったからよ。罰として蛇つぼの中に押し込められるだとか、ぞっとするようなことを考えてしまったのだもの。あなたみたいに日頃から冷静沈着そのもので、物静かそうな人のほうが逆ギレしたら危ないんじゃないかって恐れたのよ。あたしのことよりもさっきの質問に答えてもらってないわ。それになんだかあなたの話を聞いてると、あたしに逃げてもらいたかったみたいな言

い種じゃない」

本当はもう彼に対して恐れなど抱いてはいなかった。彼はあたしがもし台所から出刃包丁か果物ナイフでも持ちだしてきて、それを自分自身の喉に突き立てたとしたら、きっと一切阻害することなしに黙って出ていかせてくれるに違いなかったから。むしろ逆にあたしが「あなたに死んでほしい」と言って凶器を差しだしたとしたら、彼は本当に喉を裂いて死んでしまうのではないかという気さえした。

「まあ君には十分笑わせてもらったし、貴重な裸体も拝見させてもらえたことだしね、もう僕のほうの気は済んだよ。短い間だったけど楽しかった。あんなふうに心の底から笑えたのは何十年かぶりって感じがしたな。君は見栄と欲という名のゴミにたかっている蠅みたいな恋人のところにでも戻るといいよ。それで僕が君にどんなことを言ったりしたりしたか、詳しく教えてあげるといい。僕は本当に仕事があるから二階の部屋に引き籠もるけど、電話は好きに使っていいから。警察でも救急車でもタクシー会社でも呼びたいもののところへかけるといい」

彼は最後まであたしの出した質問に答えることを拒み、その背中にどんな言葉を投げつけても振り返ろうとはしてくれなかった。

「――馬鹿っ！意気地なしっ、卑怯者っ！」

そんな罵りの言葉でさえも彼の心には届かず、まるであたしの全存在さえも締めだすかのようには彼は強い調子で書斎のドアをバタンと閉めていた。

あたしは考えた揚句に110番にも119番にもどこぞのタクシー会社にも電話をかけたりなんかせず、ただ自分の実家の留守番電話に暫く旅行に出かけることを伝えていた。

美希や冴子の家にも一応連絡しようかとも思ったけど、専業主婦の美希とは長電話になってしまいそうだったし――旅行へ行くだなんて言ったらお土産を頼まれることは間違いなかったし――冴子ちゃんは多分病院に勤務中の時間帯だから携帯は切られていることだろう。

実家に電話した時、十五回コールして留守伝に切り替わったので、実は内心とてもほっとしていた。母が電話口に出たとしたら新しい就職先のことだとか、雄二さんとはどうなっているのだとか、果てには見合い話まで持ちだされるのは必至だったから。

母は隣近所及び親戚一同の世話焼きお婆的存在で、これまでに五組の縁談をまとめたことがあるのをとても自慢にしているような人だった。しかも五組とも夫婦円満らしく、よく家へ遊びにきては「これも小夜子さんが引き合わせてくれたお陰」だとかなんとか煽てられるものだから、すっかり仲人婆あとして天下でも極めたかのように鼻息も荒く娘にあてこすりを言うのだった。

「あたしが引き合わせてまとめたカップルは皆うまくいってるのに、なんで実の娘だけはいつまでも嫁のもらい手が見つからないのかしらねえ。雄二さんも悪い人ではないけど、銀行も破綻して現在の金融状況では……云々かんぬん……あんたにはもっといい人紹介してあげるからもっと広い世界に目を向けなさい」

そしてあたしがいくら結婚なんて狭くて深い落とし穴くらいに小さい世界だと反論しようとしても頑として聞き入れようとはしてくれない。屁理屈ほど聞いていて時間を無駄にするものはないいつも一笑に付されて終わってしまう。

どうして女たちの間ではこれほどまでに結婚至上主義がもてはやされるのか、あたしには完全に理解することができない。でもそれはあたしが本当の恋というのをまだ知らないからだという

ことも心のどこかでは認めてもいる。

雄二との恋愛は至極マニュアルどおりで、何度かデートして映画見て食事をして映画館の中ではお約束ごとのように初めて手をつないで……そういう関係だった。でもあたしは本当は手を握るのがとても嫌で仕様がなかった。手を握られていると思考が相手のほうに流れていってしまいそうで、とても嫌だった。それから身体のどこか一部を触れあわせることも。つきあい始めて三回目のデートで初めてキスされた時、彼はあたしが初めてであることを知ってとても満足そうだった。あたしは舌を入れられることもそんな彼も気持ちが悪いだけで、なかなかそれ以上には発展しなかったのだけれど、だらだらとつきあって別れを切りだせないうちにプロポーズされてしまったのだった。

彼は定期預金の通帳だとか、自分の加入している郵便局の保険のことだとか、裁判官をしている父の資産のことだとかをよく話し、釣針に魚がかかるのを待っていたようだったけれど、あたしはそんな貧弱な餌には引っ掛からなかった。

つきあい始めたきっかけというのは些細なことで、雄二が言ったジョークの寒さに誰もが震える中、あたしだけが笑ってみせたというような、そんなことだったと思う（本当はみんなの白けた反応がおかしかったのだけれど）。それから<ちょっといい感じ>になって話をして親しくなってっていうよくあるパターンの踏み後にあたしは自分の足の裏を重ねていった。でも結局のところ彼の出世欲や見栄というものの硬度の高さに気づくまで、あたしはかなりの時間を費やしたというそれだけのことだったのかもしれない。

確かに雄二は見栄っぱりではあったけれど、二年近くもつきあっていたのはあたし自身の見栄のためでもある。あたしは今二十三歳で、婚期を逃すことを恐れていたし、しかも勤めていた会社まで倒産したとあっては拠り所になるものが何ひとつとして残されていなかった。もちろん今も宙ぶらりんの状態であることに変わりはないのだけれど――あたしは恐ろしいことに、肌の下で恋愛感情の脈打つ音、その息遣いのようなものを微かながらも確かに聞いていた。耳しいのように耳を閉ざしたとしたら、気づかないふりをして一気に走り抜けてしまったとしたら忘れ去られてしまいそうなくらいに小さな声ではあったけれど、間違いなくそれはあたしの本当の名前を呼んでいた――魂の呼び声に応答しようとしていた。

たった三日……いくら恋に時間は関係ないとはいえ、あまりにも早いスピードについていく自信があたしにはなかった。それなのに強い風に押されて落ちるしかないと感じてもいて、あたしは理性の声が抑制するのも構わずに一番高い塔の天辺から舞い降りようとしていた――地上の、受け止めてくれる人の元へと。

第7章

あたしは固くなってしまったトーストと冷たくなったスクランブルエッグを食べ、それから冷めたコーヒーを飲んで一心地着くと、自分がとても手持ち無沙汰な状態にあることに改めて気づいた。

ここはあたしの住んでいたアパートの地区と違って自動車の行き交う音がときたまさえも聞かれないし、都市特有の騒音なんていうものとも当然ながら無縁で、本当に本物のたえなる静寂だけがあたりを漂流しているだけだった。時折、冷蔵庫の鳴る音だけが湖面に石を投げた時に生じる波紋のように音の存在をあたしの耳に伝えるくらいだったろうか。

実をいうとあたしはあまり料理の得意な女ではないのだけれど、彼に差し入れ程度に何か作ってあげようかなと思わないこともなかった。でも彼は菜食主義者なわけで、冷蔵庫を開けてみても何を作ったらいいのか、良いレシピが思い浮かばなかった。

あたしがコーヒーを啜りながら女神像に抱かれている時計に目をやると、ちょうど正午になる手前のところで、午後からの時間を有意義に過ごすにはどうしたらいいのかと少しだけ困惑してしまう。結局は視聴覚室で彼の大切なレコードたちを漁ってはかけ、かけては漁りを繰り返し、クラシック音楽を飽きるまで堪能したあと、三時くらいからは庭の探索をすることに夢中になっていた。

彼の愛する庭はとても美しく、家の敷地のおよそ二倍はあっただろうか。テラスから見て右側には金木犀やニシキギの樹木が並び、それが玄関のほうにまで続いている。中央にはガーデンライトに導かれた黒土の道が固められてあり、緩やかにカーブしながら奥の菜園へと誘ってくれる。菜園で栽培されているものはじゃがいもや人参、大根、玉葱、エンドウマメなどで、他に林檎やブルーベリーの樹木などもあった。ガラス張りの温室には茄子やきゅうりやトマト、かぼちゃなどが栽培されていて、他にも菊の花や蘭の花、それから名前はわからないけれどちょっと珍しい感じのする花がたくさん並んでいた。その中であたしに唯一わかったのは時計草と呼ばれる花だけだったろうか。

菜園側から枕木に導かれて温室に入り、反対側から出てくると、今度は素焼きの煉瓦道がテラス側と、それからあたしがもみくちゃんにした花壇のほうへと続いている。台風になぎ倒された花たちは皆、挫折から立ち直った者のようにぴんと背筋を伸ばしていたし、白や深紅色やピンク色の花卉が土の上に乱れている様は、どこか幻想的にさえ感じられた。

あたしは勝手口の手前にある物置と薪を蓄えておくための小屋のそばまでいき、切株のそばにあった斧を目にして一瞬どきりとした。多分きのうまでのあたしなら、この切れ味の鋭そうな重い斧を目にした瞬間に、殺される、とさえ思ったかもしれない。けれども事実は小説よりも奇なりと言うべきか、残虐であるはずの誘拐犯はひとつひとつの木材に話しかけながら薪割りをしそうなタイプの男だった。

そして家の周りをぐるりと一周してからテラスへ戻ろうとして、あたしはふとあることに気づいた。多分花壇に植えられているダリアやグラジオラス、薔薇やケイトウやマリーゴールド、ポピーの花などは佐京が花屋で購入した苗か球根、あるいは種なのだろうけれど、いくらか少し

野生の花たちも混ざっているように思えた。例えば釣船草やリンドウやアザミ、ひとりむすめの花などがそれで、花壇には雑草はほとんど見られないものの、彼は野生の花に関しては生えるがままに放っておいているようだった。

あたしは庭を一周して全部で七体の小人の人形を見つけていたけれど、その中にはきのこの上に乗っかっている小人がいたり葉っぱを傘の代わりにしている小人がいたり、なんだかどれも可愛らしかった。そしてテラスのガーデンチェアに再び戻ってくると、我知らず思わず溜息が洩れてしまう。

テラスに張りだしたパーゴラに絡まる蔦植物やその下にあるピンク色をしたニチニチソウのハンキング、それからアンティークな雰囲気のある白いガーデンテーブルと揃いの椅子、その上に置かれているタイムやセイジなどのハーブの寄せ植え……菜園へと続く黒い道の両脇を飾るのは黄緑や真緑や暗緑色、あるいはそれらに斑の入った緑で、美しい緑のコントラストがとても目に優しい。その他コンテナに植えられたサルビアやベゴニアやゼラニウム、キンレンカの花などなど……あたしは美しく整えられている庭を観察すればするほど、佐京宗一郎という男がわからなくなっていくような気がして、ガーデンテーブルに頬杖をついてもう一度深い溜息を着いた。

彼は一体何が不満だというのだろうか。作家としての地位、荣誉、財産……その上自分の自由のできる土地や家屋があり、ガーデニングなんていう趣味まである。ただ、あまりにもすべてが整いすぎていることに、どこか異常めいたものを感じないわけでもなかった。いや、彼と同じくらい熱心なガーデナーを札幌市内、あるいは小樽市内、さらに言うなら恵庭市内に見つけることはそれほど難しいことではないと思う。でも普通の人々がガーデニングをする場合、あるひとつの虚栄というか、純粋な見栄のようなものを時々感じることもあるのだけれど、佐京にはそれがないような気がした。普通だったらこれだけ庭を綺麗に整えていたら、どうしても人に見せたくなるだろう。野菜の収穫物だって、いい出来のものが実ったら人にあげてさりげなく自慢したくなるだろうし、花や野菜を育てるコツについてもそれとなく話したくなるのが普通ではないだろうか。

(……もしかして、あたしをここへ連れてきたのはそのため?)

その時、ざあっとどこかから風が流れてきて、優しくあたしのことを包みこんだ。草や樹や花がそよいで、まるであたしの考えを肯定するかのように囁きかける。彼のことをわかって欲しい、と。実をいうと、草花から話しかけられるのは今日これが二度目だった。先程あたしが屋根から落ちた場所に立った時も、踏み潰してしまった花に心の中であやまっていると「いいえ、どういたしまして」という声が聴こえた。でもあたしはそれはただの幻聴というか、自分が花に話しかけてさらに花の役を自分自身が演じているものだとばかり思っていた。でも今度のは間違いなく違った。＜彼ら（あるいは彼女たち）＞は佐京のことを愛している。そのことを人間の言葉としてではなく、心を通して直接魂に語りかけられてしまうと――あたしは何故かたまらなくなって、テラスから家の中へと急いで戻っていた。

レカミエ夫人の長椅子に突っ伏し、おそらくは原稿の執筆の真っ最中であろう佐京のことを考える。書斎からは物音ひとつ聞こえてはこなかったけれど、もしも毎日がこんな調子であったとしたら、奥さんが別れたのも無理はなかったような気がする。彼は半ば夢の世界の住人であり、現実的な愛情に対する飢えといったものも両手で抱えてあまりある夢によって補えてしまう感じ

の人だから、必要最小限の食物さえ現実の世界で供給してしまえばあとは向こうの世界に籠りきりでも全然平気なのかもしれない。

あたしは突然お腹が空いていることに気づいたけれど、冷蔵庫の中の物にはあえて手をつけようとは思わなかった。彼に意地汚い猪女だと思われなくなかったので、空腹を紛らわすためにどこの国の言葉かもわからないオペラでも聴いて我慢しようと思った。そして落ち着かなげに部屋の中をうろうろしたりソファに座ったりを繰り返しているうちにソファの下に引きだしが付いているのに気づき、その中に整理整頓してしまいこまれてあるビデオを発見した。『禁じられた遊び』、『さよなら子供たち』、『こわれゆく女』、『血と砂』、『黒水仙』、『バーディ』、『ディア・ハンター』……数あるビデオの中からどれを観ようかと迷っていると『恋愛小説家』と書かれたラベルに目が止まり、早速デッキの奥へと差し込むことにする。とても面白くて笑えて、ジャック・ニコルソンとヘレン・ハントがアカデミー賞の主演男優賞と女優賞をダブル受賞したのが大きく頷ける映画だなんて思った。それから犬のバーデンの名演技もあたしの心を明るくしてくれた。久し振りにとても心の暖まるいい映画を観た満腹感がしみじみと余韻として身体の隅々に残る、そんな映画だった。

「ごめんね、お腹すいただろ？」

メルビルとキャロルがパン屋さんに駆け込むところで、突然戸口のほうから声が降ってくる。

「ねえ、愛ってなんだと思う？」

あたしは膝を抱えた姿勢のまま、彼のほうを振り返らずにやぶからぼうな質問をした。

「ああ、恋愛小説家を見てたの？僕だったら——そうだな。『愛とは永遠に抜けだせない迷宮のようなもの』って書くと思うね。もちろんこれは僕がメルビルだったらの話で、本当に原稿を目の前にしたらそんな陳腐な言い回しは使わないだろうけど」

「ふうん。でもあなたの小説の中の恋人たちはとても素敵なカップルばかりだと思うわ。意外な人物同士がくっついたり、ものすごく擦れ違いを重ねて苦労をしたあとに最後の最後に恋人同士がハッピーエンドになったり。それか一ミリとか一秒くらいのずれで悲劇的な恋愛話に仕上がっていたりとかして、この人はきっとたくさん色々な恋愛を経験してきたんだろうなあって読みながらよくそう思ったわ」

エンディングのスタッフロールが流れている途中で、あたしはビデオを止めた。リモコンの巻き戻しのボタンを押すことにする。

「僕は全然恋愛経験豊富なんかじゃないよ。前の妻と知り合う前までずっと童貞だったし、十代の頃にはね、一生童貞でいますってキリストの磔刑像の前で祈ったりしていたものだったよ。それで使徒パウロのように神様の僕として福音を述べ伝える伝道師になりたいって思ってたんだ。でも施設をでると神の道から逸れてしまって結局小説家なんていうしがない職業に就いたというわけなんだけどね」

「奥さんとはどこでどんなふうにして知り合ったの？」

聞きたくて仕様のない気持ちをあたしは喉の奥のところで止めることができなかった。

「前の奥さんはカトリックの幼稚園で保母をしていて、そこが僕のいた孤児院のすぐそばだったんだよ。施設をでて三年ぶりに一度だけ戻ったことがあるんだけど、その時にちょっとしたこと

がきっかけで知り合ったんだ。それからつきあい始めて半年もしないうちに結婚したってわけなんだけど」

本当のところを白状するなら、あたしはもっと突っこんだ質問を色々と彼に浴びせかけたかったのだけれど、いかにも知りたくて仕様がないう感じの芸能レポーターのようになってしまいそうで、聞くことがなんとなくためらわれてしまった。

奥さんは美人だった？

スタイルは良かった？

性格の優しい人だった？

料理は上手だった？

——今でも忘れられない？

……もしかしてまだ愛している？

聞きたいことは順番待ちしてるみたいに次から次へと思いつかぶのに、唇が凍りついたみたいに動かなかった。

彼に愛されるような女はどんな人なんだろう？

そう想像しようとしただけで気分が落ちこんでしまう。きっと彼には盲目的なくらい恋愛に夢中になっていたことがあって、両手では包みこめなくらいに奥さんのことを愛してたんだろうなってそう思っただけで息が苦しくなった。

——雄二が当てつけるみたいに他の女と話していても、嫉妬なんてしたことは一度もなかったのに。

「ビデオ、巻き戻し終わったみたいだよ。ごはん作ってあげるからキッチンのほうへおいで」

彼は飼い猫に用でも言いつけるみたいにそう言い、あたしはどこかつんととり澄ました顔で主人のあとについていった。

「ねえ、なんだか悪いわ。あたしだけとんかつを食べるのなんて」

彼が夕食を作るのを手伝おうとしたのだけれど、結局最後にはあたしがいかに料理の不得手な女であるかが露見する結果に終わってしまっていた。雄二はビーフストロガノフがあたしの得意料理であると言ったらしいけど、それは多分ハヤシライスの間違いで、あたしは自分の好きなハヤシライスだけを唯一まともに作れる女だったのだ。

「君、ひとり暮らしして長いんだろ？ 一体いつも何を食べて生活してるのか不思議で仕様がないな」

二十四歳にもなる女が今だに料理音痴であることを咎め立てるような口調というのではなくて、彼は柔らかい口調で面白いことでも聞くみたいにそう言った。

「半年くらい前まで一緒に同居してた女の子がすごく料理上手だったの。それでほとんどその娘が食事を作ってくれて、あたしは掃除と洗濯とごみ捨てるの係だったのよ。それに美希が……友達に結婚してしまってからキャベツの繊維切りの楽々できる機械だとか、色々便利な調理器具を通販で買い揃えてしまったから、おかげで包丁捌きがちっとも上達していないのよ」

「じゃあ雄二に毎日ご飯を作ってたっていうのは？」

「毎日じゃないわ。ほんの時々よ。雄二は味つけや何かにこうるさいし、グルメを気どってるから通ぶって色々文句を言ってくるのがすごく嫌なの。人がせっかく作ってあげてるんだから黙

って食えって言いたくなってくるわ」

木のボールに山盛りになっている野菜を食べながら、彼はとても優しげな笑みを瞳の中に湛えていた。彼は口許で表面的な笑いを浮かべるのが苦手なかわりに、目元で笑うのがとても印象深い人だった。

「ねえ、やっぱり明日からはあたしもあなたと同じ物を食べるわ。あなたってただでさえ小食みだから、見てるとなんだか胃のあたりが締めつけられてくるの。男のあなたが草食性の兎か何かで、女のあたしのほうが雑食性の熊か猪みたいだわ」

「べつに気にすることはないよ。僕は自分の主義を誰かに押しつけようだなんて全然思っていないし、それに一週間分の献立をきのう頭の中で組み立てたばかりなんだから。明日は秋刀魚の塩焼き、その次はいかの生姜焼きといった具合にね。だから君が食べてくれないと、夜中にいかとさんまの霊に出会うことになるよ」

彼が真面目くさった顔をしてあまりにも至極当然のこのようにそう言うので、あたしは箸を置いて口許を押えてしまった――駄目だ、うまく笑いをかみ殺すことができない。

「それはもしかして勿体ないお化けの一種か何か？」

「そうとも言うね。だから君は……」

あたしは彼の持つ箸の間からミニトマトを器用な箸使いで素早く奪うと、それを自分の口の中へと放りこんだ。

「そのキミキミっていうのやめて。なんだか辞めた会社の上司と喋ってるみたいだわ。マリコってちゃんと名前を読んで。何日の間かはわからないけど、同じ家の中で暮らすのよ、あたしたち」

「じゃあ真理子、今の渡り箸はしてはいけない箸の使い方だよ。死んだ人の骨を拾う時に同じことをするんだろう？」

注意されているのに、彼の照れたような言い方があたしはおかしくて仕様がなかった。

「ごめんなさい。以後気をつけます」

もしかしたら母親にさえ同じことを言われたら腹を立てたかもしれなかったけど、あたしは彼の言うことだけはこの後もずっと不思議なくらい素直に受け入れることができていた。

「……ごめん。違うんだ。君が……真理子があやまる必要なんかないし、真理子が僕の言うことに耳を傾ける必要も本当は全然ないんだよ。昼間も聞いたことだけど、どうして逃げようとしなかった？僕の気の変わらないうちに早く出ていってくれないと、僕は本当に君に何をしだすかわからない人間なんだ。きっと夕方にはいないものと思ってたけど、真理子はゆうゆうとビデオなんか観てるんだものな。僕のことを怖くないのか？」

彼は箸を置くとテーブルの上に手を組んで、思慮深い眼差しをあたしに向けている。

「本当はほんの少し怖いわ。選択をあやまったかもしれないとも思うけど……でもあなたはあたしがこの家から一步でも外へ出た途端に、二度とあたしと会うつもりがないのでしょうか？きっと街中で偶然ばったり出会ったとしても、絶対知らない顔をするに決まってる。そう思ったらまだここでこうしてあなたとお話がしたいって思ったの。もちろんあなたが――宗一郎さんが出ていけっていうのなら、仰せのとおりにはしようとは思ってますけど」

彼はあたしの言葉を聞くと、組んでいた指をほどいて、空になったボールの木目に目を落としていた――どこか疲れたような表情で。

「きっと後悔するよ。ああ、あの時逃げていればって思ってからじゃ遅すぎるって少し考えればわかるだろ？僕は物静かな外見と内側で考えていることがまるきりうらはらな人間なんだ。そうやって相手を油断させておいて、君が安心しきってる時にどんなひどいことをしでかすか、自分でもわからないくらいなんだよ。もちろん君がそばにいてくれるのは嬉しいけど、でも……」

彼は言葉を濁らせていたけれど、あたしを有頂天にさせるのに十分な科白を最後に言ってくれていた。

「その言葉だけで十分よ。本当にいいのよ？宗一郎さんはあたしに何をしてもいいし、あたしはあなたに何を強要されても仕様がなないの。賭けに勝ったのは宗一郎さんなんだから」

お互いの立場が逆転しつつあることが、あたしには手に取るようにわかっていった。だって彼はまったく気づいてなかったから――あたしが彼を好きになりはじめていることに。

宗一郎さんはあたしがじっと見つめ返すと、たじろいだように席を立てて食卓の上を片付け始めている。

「いいわよ、食事の片付けくらいあたしがするわ。宗一郎さんは黙ってコーヒーでも飲んでて」

あたしが無理矢理彼を椅子に座らせると、彼はしぶしぶといった態度でコーヒーカップに手を伸ばしていた。

「じゃあお言葉に甘えてまかせてもいいかな？僕は原稿の続きを書くために書斎へ戻るけど、君は先に寝ていてくれていいから」

「わかったわ」

テーブルの上の食器を重ねながらそう返事をする、宗一郎さんはコーヒーカップを片手に考えこむような表情をして階段を上がっていった。

第8章

その夜、あたしは宗一郎さんのベッドの中で何度も寝返りを打ちながら、彼の来るのを待っていた。本当のところを正確にいうとすると、宗一郎さんが階段を降りてこちらへと近づいてくる足音が聞こえたとしたら、眠りこんでいるふりをしようと思っていた。けれども彼は丑三つ時になっても寢室のドアを開けるということはなく、あたしは何度目か知れない溜息を洩らしていた。

この家はペンキを塗り直したり、壁紙を張り替えたり、ひびを目立たないように埋め立てたりなどしてかなり無理な若作りをしているものの、その老体に刻まれた家屋本来の機能といったものの衰えは隠しきれていない。床はみしみし不気味なくらいしなるし、階段をまったくの無音で降りきることなど至難の技といってよかった。

あたしは時々どきりとするような家屋の風にあたわむ音を聞きながら、雄二に抱かれようとした夜のことをなかなか寝つかれない頭で思い返そうとしていた。

キスされたり、胸に触れられたりしても、肉体である自分をもうひとりの精神的な化身である自分が天井から見下ろしている感覚が拭えなくて、何も感じることができずにいたのを覚えている。ほんの少し我慢すれば何もかも終わるはずと、堅く緊張した体の中で必死に思いこもうとしていた。こうなることに同意したのは、何よりあの見栄っぱりの王者である雄二がどうしてもと頼みこむのを断れなかったし、自分のつきあい方がどこか間違っているようにも前から感じられていたからだ。ただあたしにはセックスが巷で騒がれているほど気持ちのいいものとはどうしても思えなくて、最後の最後には雄二の体を押し退けて突き飛ばしてしまったのだった。雄二はとてつもなく気分を害してしまったようで、幾つかのひどい罵りの言葉を吐いたあと、裸のまま部屋から出ていき、ものすごい音で寢室のドアを閉めていた。そして次の日には平謝りに謝られたわけなのだけれど、あたしは心の中で彼と過ごした一年半あまりの時間を惜しむような気持ちへとそれからだんだん傾いていった。もちろんふたりで共有した楽しいことも確かにたくさんあったけど、それは物質的に、と頭に冠せなければいけないことがあまりにも多すぎた。何でも一流の、とか話題の、とか会員制の、といった名のつくところが雄二は好きで、とにかく新しもの好きのその性格には、あたしみたいなのほほんとした鈍い女はついていくのがなかなか大変なのだった。彼は多分そういった金銭的なことの偉大さがわかる女の子に最初から狙いを定めて矢を射かければ良かったのだ。高価な物を差しだしてもらうかわりに彼の巧みな弁舌の腰を決して折ることをしないような、そんな心優しき女性に的を絞ってしてくれたら良かったのに。

雄二は確かに弁舌に長けて話題も豊富で、話を聞いていて飽きるということのない人だったけれど、自分の言い間違いを正されたりすると、途端に不機嫌になったりするようなところがあった。

「真理子に何がわかるんだよ」

『わからないから聞いたんだってば』

あたしは自分の言いたい言葉を飲みこんでいることに気づくのに、大分時間をかけてしまった

。雄二はあたしと違って四年制の大学を卒業しているし、部屋の立派な本棚には難解そうな細かい文字の本がたくさん並べられているしで、あたしは最初のうち雄二の言うことはみな疑う余地なく正しいのだと信じこんでいた。雄二の知識が出来の悪い金属にメッキを過剰なくらい塗ったくったものであるのを見破るのにあたしは一年近くもかかってしまっていた――要するにあたしもそれだけ頭の悪い、馬鹿な女だったということなのだろう。それに別れ話を切りだそうと思って呼びだした時にプロポーズされたというのも間の悪い話だった……。

あたしが何十回目か知れない寝返りを打ちつつ、これ以上は何も考えたくない気持ちに闇の中で沈みこんでいると、上から扉の閉まる、軋んだ音が響いてきた。あたしはなるべくベッドの際へとにじりよるようにし、肩まで布団を引っ張り上げて、だらしなく布団の上に上げていた足を引っこめた。そしてとても行儀良く宗一郎さんのくるのを待ち設けることにする。

彼が階段を一段降りるごとにあたしの心臓はだんだんと高鳴り、平静を保ちながら目を閉じようとするのはあまりに不自然で精神力のいる行為だった。けれども彼の足音は幽霊のように寝室の前を通りすぎると、裏口のほうへ続いていき、あたしの心をどこか落胆させる結果に終わってしまったのだった。

外の空気が導き入れられてから閉まるドアの音というのは老朽化の進んだ家屋によく響くものだから、彼が気分転換か何かのために外界と接触を持ちにいったことは間違えようもなかった。

あたしは燭台を手につくと、海へと至る道筋の見える二階の部屋へいき、そして彼の白い姿を眼下に認めた。月明りの中、彼は光源になるものを何ひとつ持たずに歩いているようだった。

あたしは何故か彼がもう二度と戻ってこないのではないかという不安に駆られて、書斎から飛びだそうとしていたけれど、机の上にある、彼の現在執筆中であろう原稿に目と足が止まってしまった。机の上のそれに手を伸ばしかけるけど、慌てて我をとり戻す。そして急いで部屋をでると、階下の寝室のベッドの中へと身を沈めることにしたのだった。

作家である佐京宗一郎氏の一ファンとしては非常に次回作の気になるところではあったけれど、それを盗み見ることは道徳的なファンのしていいことでは決してないような気がした。

その後、あたしは耳を澄ませて宗一郎さんの帰りを待ち侘びているうちに瞼を開けていられなくなり、気怠い眠りの奥へと引き摺られるように落ちこんでいったのだった。

次の日の日曜日、あたしが目覚めたのは太陽がちょうど中天に達しようかという時刻だった。

あたしはベッドの左端に身を寄せて眠ったはずだったのに、起きた時には中央に堂々と片足を広げて、布団に抱きつくような格好をしていた。

網膜に受けた光が意識と直結して五体の目覚めを誘うと、あたしは大きく伸びをしてから隣の空いたスペースのことを思った――彼はきのう、もしかしてあのまま戻らなかったのではないかと。

半分ほどけかかっている足の包帯を全部ほどくと、なるべく左足に体重をかけないようにしてキッチンへと向かう。そこに彼の飲み差しのコーヒーカップがあって少しだけほっとした。きっと書斎か庭のどちらかにいるだろうと察することができたから。

二階へ上がる前に眩しい陽射しの照りつけるテラスへとゆっくり歩いていき、そこで彼の名を呼ぶことにする。

「――宗一郎さん？」

返事が返ってきたのは期待した方角からではなく、全然別のほうから数瞬の間があったの
ことだった。

「こっちだよ。二階の君の部屋にいるんだけど、今手が離せない状態だから真理子がこっちに
来てくれると有難いんだけど」

どこかくぐもった感じのする、大きな声が呼ばれる先へと階段を上っていく途中、微かにシ
ンナーの匂いが鼻孔をかすめた。宗一郎さんはこの家の中でまったく手の加えられていない部屋
の壁にペンキを塗っていたのだった。窓は全開に開けられてはいたけれど、シンナーの気の遠く
なるような匂いを完全には追いつききれず、長居していると宿酔いに似た頭痛みを起こし
てしまいそうだった。

「何してるの？」

彼はあたしが部屋に入っていても我関せずといった様子で、刷毛をペンキのバケツにつけ
ては、目の前の壁にそれを塗りつけている。

「見てのとおり、ペンキ塗りだよ。今日はドアから見て左側の壁を全部塗り、来週には正面の窓
のある壁を塗り、さ来週には右面を、ささ来週にはドアのある壁を塗ったくる予定なんだ。気の
長い話ではあるけど、一度に全部やろうとするとあちこちにむらのある仕上がりになってしま
いそうだしね。それにペンキ塗りのために僕の体が空くのは日曜日だけだから」

宗一郎さんは相変わらず壁を睨みつけるようにしながら刷毛を動かし、あたしのほうをちらと
も見ようとせずに作業を続けている。あたしはベッドの上に弾むようにして腰掛けた。

「日曜日は原稿を書かずにペンキを塗る日っていうことに宗一郎さんの中では決まってるの？」

彼はいかにも変質者がしていそうな、異様に大きなガーゼマスクを片方の耳から外している。
「ペンキ塗りに限らないけど、僕は日曜日には仕事をせずに手を休めることにしているんだ。そ
れで本職以外のことに勤しむってわけなんだよ。日曜日は安息日だから、本当は教会へでもいっ
て祈ったり賛美したりすべきなんだろうけど、もう教会を離れて何年にもなるからね、かわりに
賛美歌の曲をピアノで弾いたり聖書を朗読したりして過ごすっていうわけなんだ。まあ非常に独
善的だとは自分でも思うんだけど、年収のうちの十分の一はそういうキリスト教系の団体か慈善
団体に寄付することにもしてるんだ。本当は毎週日曜日には買いだしに行くのが常なんだけど、
ついこの間色々買いこんだばかりだし、どうしようかと思って。あの日、原稿をだす用事があ
って街へでたはずなのに、真理子の身の回りの物を買うのがあんまり楽しくてすっかり忘れて
しまってたんだ。帰ってきてから気づいたけど、なんだかもうどうでもいいことのような気がし
てきちゃってね……」

あたしが彼の言葉に相槌も打たずに黙っているのを不審に思ったのか、宗一郎さんはやっとあ
たしの存在のあるほうを振り返ってくれた。あたしはただ彼のとりとめのないお喋りを静かに聞
いていたくて、口を挟まなかったただけなのだけれど。

「もっといっぱいお話して。宗一郎さんはいつもあたしに聞かれたから話すっていう感じだから
、宗一郎さんのほうから色々話をしてくれるとあたしは嬉しいの」

「僕の話なんか聞いたってつまんないし、傾聴に値しないと思うけどな。それよりも朝ご飯まだ

だろ？僕も今ちょうどお昼にしようと思ってたところだから、きりのいいとこでやめて下へいくよ。だからそれまでに服を着替えててくれたほうが僕としては有難いんだけど」

「うん、そうする」

あたしが彼の言葉のとおりにしようと思ってベッドから立ち上がると、宗一郎さんはもう一度振り返って言った。

「足、大分良くなったみたいだね」

「ええ、お陰さまで大分良くなったわ。最初はこのまま一生痛みが引かないんじゃないかっていうくらい痛かったのに、今じゃ全然なもの」

パジャマのスカートの裾を上げて見せようとする、彼はまたペンキの中に刷毛を突っこんで黙ったまま腕を動かしている。

宗一郎さんは藍色のバンダナを頭に巻いていたのだけど、見ようによっては海賊に見えないこともないのがあたしにはなんだかおかしかった。

「宗一郎さんて変な人。きのうまではなんでもないような平気な顔して人の足に触ってたくせに、どうして今日は顔を背けるの？」

「べつに……どうってこともないけど、真理子はちょっと無邪気すぎるんじゃないか？本当は年齢を詐称してるんじゃないかって疑いたくなってくるよ」

彼が溜息を着いているのが何故なのか、あたしにはよくわからなかった。

「宗一郎さんこそ童顔のくせに、そんな人にそんなこと言われたくないわ」

彼があたしに構ってくれる様子がないので、あたしは階段を降りていき、寝室にあるクローゼットの中から薄紫色のワンピースを取りだしてそれを着た――二階からこっちに衣服を全部移してあったので。それから洗顔して髪をきちんと梳かすことにする。

ダイニングキッチンのほうへいくと、宗一郎さんは台所で手を洗っているところで、あたしは何故か白いブラウスを着たその背中から目を離すことができなかった。どうしてか突然そこから視線を逸らすことができなくなって、あたしはカウンターテーブルの柱に寄りかかりながら彼の広い背中をじっと見つめていた。

「どうかした？」

暫くの後に、彼は蛇口をひねりながら振り返りもせず、無言の問いかけにそう疑問符を返して寄こす。

「ううん、なんでもないの。宗一郎さんって意外に……よく見てみると格好いいんだなあって感心してたの。考えてみたら背なんて馬鹿みたいに高いし、色白でちょっと理知的な顔立ちっていうか、理系によく似てるような雰囲気タイプよね。あたし、最初は――第一印象はってことだけど――随分青白くて幽霊みたいな気味の悪い人だなあって思ったはずなのに、どうしてそんなふうになったのか、今はよくわからないの。黙ってても女の人が放っとかないって顔してるわ、宗一郎さんは」

真顔であたしがそう言い切った途端に、彼は咳きこむように笑いだし、最後にはキッチンのマットに膝をついてまで笑いたいのを堪える仕種をしていた。

「げほっ……人が喉つまりを起こして死にそんなことをよく平気で言ってるのけられるね、君も。黙ってても女が寄ってくるっていうのは雄二みたいな奴のことを言うんだよ。顔良し、学歴良し

、家柄良し、あいつはなんでも三拍子揃ってる奴だからね。僕は雄二より二十センチばかり背が高いかもしれないけど、女の子は誰でもあいつのほうに靡いていったものだったよ。僕は雄二と違って女の子の人が退屈しない話の仕方っていうのを知らないし、自分の小世界のことですら忙しいから、きっと一緒にいてもつまらないんじゃないかな。雄二はとても生産的な性格をしてるけど、僕の物の考え方は非生産的なことがほとんどだからね、普通の人とは多分どこかでつきあいきれない奴だって愛想をつかすことになるんだと思うな」

宗一郎さんは笑いの虫をお腹のあたりで必死に堪えるようにしながら、薄緑色の木製のドアを開け、その奥にある冷蔵庫から卵と野菜を取りだしている。

「宗一郎さんはちっともつまらなくなんかないわ。雄二のは外見と上っぱりだけの知性でしかないんだから。雄二みたいな人は一生のうちに何十冊本を読んだところで本当の意味で賢くなんかなれっこないのよ。あたし、雄二の小難しい宇宙論だとかを色々聞いたあとに自分も少しだけ頭が良くなったような感じがしたものだったけど、あんなのとんでもないペテンだって気づくの一年近くもかかっちゃってほんとに馬鹿みたいだったわ。それに本当の知性とユーモアのある人にしか面白い小説は書けないものだってあたしは思うもの。あたし、宗一郎さんと今一緒にこうしていても楽しいし、でもそれはあなたが小説家だっていうこととは別の次元での話だっていうことも宗一郎さんにはわかってるでしょう？あなたは一冊の本から学べる限りのことを学べるっていうそういうちょっと稀有な人だと思うわ」

宗一郎さんは卵をボイルするために鍋に火を点けると、あたしと向かい合わせになるようにして椅子に座った。

「まあなんで雄二が身長差のある僕みたいな奴とつきあってるのかということ、僕が物を書いて人に認められてるような人間だからに他ならないわけだけど……真理子は自分の言っている意味が本当にわかってる？つまりそれは雄二から僕に乗り換えたいっていうそういう意味に僕には聞こえるんだけど。いいのかな、そう受けとめても？」

テーブルの上に細い指を組み合わせている彼を正面から見返して、あたしは火が点いたように顔が赤くなる自分を知った。あたしは宗一郎さんが言ったようなことを意識して言ったわけでは全然なくて、ただ会話の流れに自然に織り混ぜるように言ってみただけだったけれど、改めて問いつ返されてみるとまったくもって彼の言うとおりであったから。

「僕は普段からあまり自意識過剰な奴ではないんだけど、君が……真理子がここに残ってくれて、本当に嬉しいんだ。もちろん真理子が出ていきたくなくなったら僕は快く応じるつもりでいるし、引き止めたりなんかも絶対しないけど……でも僕にはよくわからないんだよ。真理子が何の理由があってここにこうしていてくれるのか。こんな古ぼけた、滅多に人も通りかからないような場所に閉じこもっていて真理子は本当に楽しいのかどうなのか」

宗一郎さんは見るからに自信なく俯いていて、自信のある裏返しとしての確認を求めたいのではないようだった。

「宗一郎さんって本当に変な人ね。あたしにはあなたが謙遜してるのか、本当に自信がなくてそんなことを言うのか、どっちなのかよくわからないわ。ただひとつだけ約束するとしたら、あたしはこの先ずっと宗一郎さんにだけは嘘をついたりなんかしないって誓うわね。あたし、宗一郎

さんのこと好きよ——わざわざ言葉にして言われなくても本当はわかってるんでしょう？宗一郎さん、本当はあなたわかってたのよ。あたしがあなたに宛てたファンレターを読んで、それから雄二からあたしの話を聞いてわかってたんだわ。『僕の小説の大ファンだっていうこの娘は実際に会ったら僕のことを絶対に好きになる』ってそう確信してたんでしょう？違うの？」

確信的な誘拐犯はどこか罰の悪い顔をして、長い指の爪先を子供のようにいじっている。思いに沈むように半ば伏せられている顔をあたしは逸らさずに見つめて、彼がこちらを見返すのを待っていた。彼は長い間黙りこくってから席を立ち、茹でられた卵を鍋からボールの中へと移している。

そして苦しそうな溜息を洩らしたあとで、独り言を呟くように言った。

「本当に僕はこんなことになるだなんて予想だにしていなかったんだよ。君をさらったのは本当に不慮の事故というか、酒も入っていたから行き当たりばったりの行動を思いつきの起こしてしまったんだ。まさか君がこんな——」

「だって宗一郎さん予言めいたこと言ったじゃない。あたしはあなたが出ていけって言うようになっても懇願してここにいさせてくれって頼むようになるって。どうして今更そんなこと言うの？あたしがここにいるのが迷惑ならはっきりそう言って。それとも面倒くさくなってきたの？あたしがいると毎日の生活のリズムとかペースが乱れるし——もしそうならあたしは宗一郎さんが『頼むから自分のそばにいてくれ』って泣いて縋りつくようになるまで絶対にこの家の中から動いたりなんかしないんだから」

「あちっ」

まだ熱い茹で卵の皮を剥こうとして、宗一郎さんは反射的に指を引っこめている。

「大丈夫？」

「真理子に変なこと言うからだよ。じゃあ僕が真理子にお願いだからそばにいてくれって頼みさえすれば君は出ていけるのか？もしそうなら僕は何百回でも泣いて頭を下げるよ」

「……底意地の悪い人ね。あたし、ここに置いてもらえる限りはなんでも宗一郎さんの言うこと聞くわ。だけどそれだけは駄目よ。あたし、もっと宗一郎さんのことが知りたいのだから」

彼はもう全然照れてなどいなかった。むしろあたしの好意を如実に悟ってしまうと、主導権は元の鞘に収まったといったほうがよかったかもしれない。

「可愛い人だね、真理子は。でも本当に本当の僕を知ったらいくら君でもきつとがっかりするんじゃないかな。僕はあんまり君が雄二から聞いたとおりの人なんでびっくりしてるんだけどね。あいつの話はなんでも話七分に聞いとかないとあとで馬鹿を見るから——まあこれは僕も人のことを言える筋合いじゃないけど。せいぜい違ってたのは胸の大きさのことと料理のレパートリーのことくらいだもんな」

「あ……あのね、試しにDカップのブラ着けてみたんだけど、そんなに悪くないみたいなの。確かにちょーっと余らないこともないんだけど、アンダーのサイズが同じだからあんまり支障はないっていうか……」

卵の皮剥きを手伝いながら、あたしがうつむき加減にそう言うと「それは良かった」と彼は微笑っていた。もちろん薄紫色のワンピースに隠れてその下は見透かせるわけではないのだけれど、あたしは彼が何もかもをわかっているような気がしてほんの少し居心地の悪い感じがした

。

「お昼はサンドイッチ？」

「うん、そうだよ。これ頼んでもいい？」

宗一郎さんは皮を剥いた卵を押し潰すようにと、かき混ぜる棒とマヨネーズとをあたしに手渡す。そして冷蔵庫の中から食パンをとりだしてきて、ミミの部分パン切り包丁で切り落としていた。あたしは彼の切ったパンの上に出来上がったエッグをどんどんのせて次々とサンドしていくことにする。宗一郎さんはその間、コーンスローのサラダに彼特製のドレッシングをかけて、それから林檎の皮をうさぎの形に剥いていた。

宗一郎さんの作った和風のドレッシングをかけたサラダはいくらでも胃袋に入ってしまうくらい美味しく、あたしはエッグサンドを頬張りながらそのレシピを教えてもらっていたのだけれど、彼はボールの中の余った卵にパンのミミを浸して食べていて、あたしはなんとなく、なんとなくなんだけど、変な感じがした。

「ねえ、こっちの白いパンのほうも食べて？ミミの部分が勿体なくて食べてあげなきゃ可哀相だっていうんなら、あたしも残りのを一緒に食べるから。じゃないとなんだか悪いわ」

宗一郎さんがもぐもぐとパンのミミを食べているのを見ていると、どことなく野兎が草を反芻するようにしているところが連想されてなんだか微笑ましい……というかそれを通り越して胃のあたりがきゅんとするものを感じる。

「もしかして宗一郎さんって兎年？」

あてずっぽうにそう聞いてみただけだったのに、宗一郎さんは黒い瞳を丸くしていた。

「どうしてわかった？」

「んーと、なんとなくそう思っただけなんだけど……」

「ああ、でもちょっと考えてみたらわかる話だよな。僕は今二十九歳で、真理子は僕より五つ年下だから……真理子は犬年？」

「残念ながらハズレよ。遅生まれだから猪年なの。あなたの言うとおりに猪突猛進で意地汚い性格してるのよ。今も宗一郎さんにミミばかり齧らせて自分は白くて綺麗なところだけ食べてるし」

あたしはぱくりと四角いサンドイッチの角を頬張って言った。

「べつに気にすることないよ。真理子の言うとおりに僕は多分普通の人よりも味覚がちょっとずれてるっていうか、変わってるんだよ。肉料理よりも野菜料理のほうが食べていて美味しいって思うし、パンもね、白いところよりもミミのところのほうが好きなんだ。だから真理子が気に病むようなことなんか全然ないんだよ」

「そう？本当にそうなのならいいんだけど……ねえ、考えてみたらあたし、宗一郎さんの血液型も誕生日も知らないわ。教えてくれる？」

食べ終わった食器を重ね合わせながらあたしはそう聞いた。

「真理子の誕生日は二月十四日のバレンタインデーで、血液型はB型だったっけ？」

「どうして知ってるの？もしかして雄二から聞いた？」

「うん。ついでに真理子のスリーサイズも知ってるよ。上から85、58、85だったかな」

宗一郎さんはマグカップの中に目を注ぎながらコーヒーを啜っている。

「……あたしの話はどうでもいいわ。それより宗一郎さんの誕生日は？」

「八月三十一日だよ。血液型はO型で身長は183センチ。体重は真理子が教えてくれたら教えてもいいよ」

「男の人と女とでは体重の持つ意味合いが違うでしょう？でも宗一郎さんは背のわりに結構痩せてるから……うーんと、大体七十五キロくらいとか？」

「そんなに太ってないよ。真理子は……そうだな。五十キロくらい？」

「……もうほんの二キロほど太ってるわ。宗一郎さんて嫌な人」

あたしは綺麗に食べ終わった食器を全部キッチンに下げて、桶の中にお湯を張るとそれを洗って片付けることにする。

「午後からはどうやって過ごすの？またペンキ塗りの続き？それとも畑仕事？」

スポンジに洗剤をつけながら宗一郎さんのほうを振り返ると、彼はペーパーラックの中から新聞を取りだしているところだった。

「真理子は何がしたい？……っていってもこの家にいてできることなんてたかが知れてるけどね。ビデオを観るか、君の興味のないジャンルの音楽を聴くか、本を読むか……家の中に籠ってばかりいて窒息しそうなら、少し庭にでて日向ぼっこするとか、僕には退屈でつまらないことしか思い浮かばないけど」

「宗一郎さんの興味の対象のことを知りたいわ。例えばクラシックなら特に誰のどの曲が好きだとか、そういうことを知りたいの。クラシックって退屈で眠たくなる曲も確かにあるけど、その間宗一郎さんが隣で喋ってくれてさえいたら、起きていられると思うから」

食器やボールを洗って桶の中の水を捨てると、あたしは布巾で手を拭いた。宗一郎さんは新聞を四つに折り畳んで、テーブルの上に置いている。

「真理子はポップミュージックとかだと誰が好きなんだっけ？」

「エンヤとかケイト・ブッシュが好きなんだけど……知ってる？」

宗一郎さんが椅子から立ち上がったので、あたしはまだ軽くびっこを引きながら彼のあとについて視聴覚室のほうへと歩いていくことにする。

「エンヤは何度かCDを聴いたことがあるけど、ケイト・ブッシュはデビュー曲の〈嵐ヶ丘〉くらいしか知らないな。女性ヴォーカルのソプラノ系が好きなの？」

宗一郎さんはあたしの手をとってそう聴いた。

「うん。例えば嵐ヶ丘だとね、ケイトが『ヒースクリフ』ってサビのところで呼びかけてるのを聴くと、もうぞっとするくらい鳥肌が立っちゃうの。そうだわ、旧約聖書中にソロモンの雅歌っていう書があるんでしょ？それをモチーフに『Song of Solomon』っていう曲をケイトが歌ってるんだけど、宗一郎さんに聴かせたいわ。すごくすごく大好きな曲なの」

「ソロモンの雅歌か」

そう呟くと、彼は突然その詩の暗唱を始めた。

「我が愛する者、あなたはなんと美しいことよ。あなたの瞳は鳩のようにつぶらで愛らしい。あなたの唇はまるで紅の糸。あなたの口もまた可愛らしく、あなたの頬はざくろの片割れのよう。あなたの乳房は百合の花の間で揺れる手折られることなき花のようで、あなたには何の汚れもない。私の花嫁よ、あなたは私の心を奪った。あなたのただ一度の眼差しと、あなたの首飾りの

ただひとつの宝石で、私の心を奪ってしまった。私の花嫁よ、あなたの愛はなんと美しいことか。あなたの愛は葡萄酒よりもはるかにまさり、あなたの香油の香りはすべての香料にもまさっている。花嫁よ、あなたの唇は蜂蜜をしたたらせ、あなたの舌の裏には蜜と乳がある。私の花嫁は閉じられた庭、閉じられた源、封じられた泉。北風よ、起きよ。南風よ、吹け。そうして私の庭に吹き、その香りを漂わせておくれ。私の愛する方が庭に入り、その最上の実を食べることができるようになる……確か雅歌の四章だったかな。ところどころ飛ばしてあるけど」

あたしはソファーに座ってずっと宗一郎さんの横顔を見つめていたけれど、彼は記憶の引きだしを開けることに夢中で、あたしのほうなど見向きもせずに暗唱していた。

「すごいわ。全部覚えてるの？」

あたしはすっかり感嘆してしまった。

「全部じゃないよ。ところどころ適当に端折ってあるんだ。昔はね、詩篇百五十篇全部暗唱しようとして一生懸命覚えたもんだったけど、今じゃ全然さっぱりだな。ソロモンの箴言も雅歌もあちこち思いだせないしね。まあそれはそうと、エンヤとケイト・ブッシュならオペラとかも結構いけるんじゃないかと思うんだけど」

宗一郎さんは立ち上がると、レコードを何枚か棚から取りだしてきてその一枚をプレイヤーの上に乗せた。レコードの針が微かなノイズをあたりの空気に散らばせる。

「ビゼーのカルメン。多分どこかで聴いたことのある曲だと思うけど。有名な話だしね」

「あたしね、オペラじゃないんだけど、一度だけ雄二とクラシックのコンサートに行ったことがあるの。指揮をしてる人とピアノを弾いてる人がとても有名な人みたいだったんだけど、舌をかみそうなくらい長ったらしい名前だったから今はもう覚えてないわ。それでね、雄二が隣でいちいちうんちく垂れるもんだからあたしは途中でうんざりしちゃって売店で買ったポテトチップスをめりめり言わせながら食べてやったの。そしたら前からも後ろからも『しーっ』てまるで野良犬でも追い払うような目つきでみんな口許に手を当てててね……おかしかったわ。誰も彼もわかったような顔してとり澄ましてるけど、この中で一体何人の人がオーケストラ演奏の神髓っていうものを理解してるんだらうって思ったし、あたしなんかからしたら指揮者がアル中みたいにあんまり棒を振るんで時々おかしくて仕様がないくらいだったの。だけど今はちょっとだけ後悔してるわ。あのホールに集まった人のうちの何十人かは宗一郎さんみたいにきちんと聴ける耳を持ってる人たちだったのよね。今思い返してみると恥かしいことしちゃったと思うわ」

宗一郎さんはまるで微笑ましい話を聞いた時のように、優しく目元をほころばせている。

「そうだね。この種の音楽は単純に聞くっていうことは誰にでもできるけど、本当の意味で聴くっていうことをできない人もいるのかもしれないなとは思うよ。僕のいた孤児院ではクラシックや宗教歌以外の音楽を聴くことは禁止されていたし、賛美歌を弾くためにピアノを習わされたりもしたからね、自然とクラシックな傾向に向かわざるを得なかったっていう僕の場合はそれだけだけど。じゃなかったらビートルズにはまり始めたりするのももっと早かったんじゃないかなって思うよ。嫌な言い方になるけど、そのせいかなんかどうなのか、ポップミュージックの七割か八割くらいは僕にとってどうでもいい音楽でもあるしね」

おそらくあたしは雄二あたりが彼と同じ科白を吐いたとしたら、間違いなく腹を立てたに違い

なかった。雄二の頭にはどこかクラシック音楽＝聞いている人間皆高尚というような図式があって、あたしはそんな彼に嘘の匂いをどことなく感じていたのだった。特に雄二の場合は魂の耳で聴いているというよりは肉の耳で聞いているに過ぎないような、そんなうさん臭さがあったから。

「宗一郎さんの言い方はちっとも嫌味なんかじゃないわ。もちろんあたしはクラシックを理解できるような頭も耳も持ち合わせてはいないけど、今聴いてるこの曲もなんていうかすごく……素敵な曲だっていうことはわかるのよ。ただ言葉にして説明しろって言われると、言葉になんてできないとしか言えないの。そんなありきたりの表現で形容することしかできないのよね、あたしの場合。だから雄二にも馬鹿にされたんだろうなとは思うんだけど……ねえ、宗一郎さんがもしあたしをオペラに連れてってくれるっていうんなら、絶対にあたし、隣で盲導犬みたいにじっとして大人しくするって約束するわ。だから……」

「ああ、それなら今度連れていってあげるよ」

宗一郎さんは微笑しながらそう受け合ってくれたけど、彼の中に本当にその気があったのかどうか、夢の時間を回想するしかない立場のあたしからはもうわからないことだった。彼のいなくなったあとの夢の家のすべての物は御主人の帰還を何十年でも静かに待つ気構えでいるかのようで、それはあたしにしても同じことだった……時間の振子は彼とオペラに行くことを約束した日の夕方に戻るけれど、あたしは音楽室兼小さな画廊でもある部屋で白のグランドピアノを弾いていた。本当のところを言うとべつにピアノを弾きたい気分だったわけでもなんでもなくて、無理矢理弾かされていたというのに限りなく近い。あたしは宗一郎さんのピアノを聴いてみたいと何遍もしきりに頼んだのに駄目で、調律のためという理由によって結局最後には自分で弾くことになってしまった。

「宗一郎さんの好きなショパンとかラフマニノフとか本格的なのは弾けないけど、幼稚園でよく弾いたアニメの曲とかなら今も弾けないこともないわ」

「それでいいよ」

あたしはアンパンマンのマーチと宮崎駿アニメの曲を何曲かかろうじて弾ききり、何度もミスタッチを繰り返したにも関わらず、宗一郎さんから盛大な拍手をもらっていた。

彼とふたりで過ごす時間の流れるのはあまりに早くて、川の早瀬を流れる水のように日々は過ぎていった。

「心を鬼にして仕事をしないとね」

宗一郎さんがそう言って書斎に籠ってしまう間があたしには一番つらく、あたしはできるだけ彼に気に入られる時間の過ごし方をしようといつも心掛けていたものだった。少し難しめの本に挑戦してみたり、クラシックやオペラを聴きながらその解釈について書かれた解説書を読んでみたり……そして得たい知識があってもそれをどの本によって調べたらよいかわからないような時には、書斎のドアをノックして彼に聞いたりもした。大抵の場合、そうするのが一番早かった。

あたしは彼の起床時刻である朝の五時に目覚まし時計をセットし——宗一郎さんは目覚まし時計なんてなくても毎朝その時間帯に自然と体が起きてしまうようだった——彼の庭仕事を僅かながら手伝い、それから朝御飯を作ったりした。包丁に馴れない最初のうち、かなり材料を無駄にしてしまったけど、彼は何かをうるさく言うような人ではなかった。

二度目に宗一郎さんが買いだしに行くという時、あたしはどうしてもこの家の中から出ていこ

うとは思えなくて誘いを断ったけれど、宗一郎さんもどこかほっとしたような顔をしていた。外の空気に触れたいと思う時には庭へでれば済むことだったし、あたしは不思議とさほど不自由を感じるようなこともなく、街の喧騒と隔絶されていることに喜びさえ覚えているくらいだった。

あたしは宗一郎さんが買だしにいく度に肉や魚を買ってこないよう嚴重に言い渡し――彼はあたしが無理をしているに違いないと思っているみたいだったから――菜食主義者のための調理の本を読んで新しいレパートリーを増やしていった。

宗一郎さんは意外にも甘党であることが早い段階で発覚していたので、あたしはブルーベリーを庭で摘みとってはそれでパイを焼いたり、林檎のクリームケーキの上に刻んだハーブをのせてみたり、色々な焼き菓子を作ってみてはそのことを口実に彼の仕事場へと侵入を果たしていた。

「ねえ、今度の新しいお話はどんな内容のストーリーなの？」

「まだ内緒だよ。出来上がったらいの一番に真理子に見せるから、もう少し待ってて」

コーヒーや紅茶を宗一郎さんの部屋に持っていく時には、大体二言三言しか喋らないようにあたしは気をつけていた。彼の集中力の妨げになってはいけないと思ったし、最低限の気遣いというものを心得ている女なのだと思われたかったから。

宗一郎さんは一階と二階とに一部屋ずつ小説を書く場を割り当てていたけれど、ストーリーの展開が行き詰まったり、どうしても筆の進み具合が困難な時には、原稿を持って下に降りてきてみたり、また上に上ってみたりを繰り返しているようだった。そして彼の不在の間、あたしが何をしているかという、もっぱら読書と音楽鑑賞に時間を費すことが多く、その他には掃除をしたり昼寝をしたり庭へでて夕涼みを試してみたりといったところだったろうか。

毎日が気ままで自由自適で、あたしはただ宗一郎さんを中心に物事のすべてを考え、彼の目に喜ばれることや、彼の口にあう食事のことなどを想像するのが楽しくて仕様がなかった。一日が二十四時間では短すぎるくらいだった。あたしは読書の合間にしょっちゅう甘い溜息を着いては彼のことに思いを集中し、「ドアさえ開ければすぐそこに宗一郎さんが！」とそう考えただけで暖炉の前の床を転げ回りたくなるくらい幸せだった。

宗一郎さんは安息日である日曜日だけでなく、土曜日もあたしと一緒にいてくれるようにしてくれて、あたしは平日はいつも指折り数えて週末を待っていた。

あまりにも早い落下速度であたしは恋に落ち、次の朝が早いにも関わらず、夜は毎日のように寝つくことができなかった。宗一郎さんは夜遅くまで仕事をしていることが多かったし、また疲れて早く眠るといような時でも上と下とで別々に就寝することになんの異存もない様子だった。

彼はあたしが名前と呼んで欲しいと言いだすまであたしのことを真理子とは呼ばず、あたしが彼の手や腕に自分のを絡めたりすることはあっても、彼からは殆ど何かの拍子にさえそういうことをしてくれなかった。あたしの顔がすぐそばにあってお互いの目があったような時でも彼は故意に視線を逸らしてキスひとつしてくれない。だから一週間ほどで足が完治してしまった時、あたしは宗一郎さんが肌に触れてくれなくなるのがとても残念で仕様がなかった。

あたしは幾度か宗一郎さんのほうからあたしの身体のどこかに触れてくれるようにと試みたことがあるけれど、彼はいつもさりげなく逃げてしまっていた。

そして二階の元監禁部屋には一週間に一面ずつ白ペンキが塗られていき、最後に仕上げとしてところどころに花の絵を描きこむことになったのだけれど、あたしたちはその頃にはもうお互いをなくてはならない存在として意識しあっていたと思う――少なくともあたしは彼のいないこの部屋で眠りながら今もそう信じている。

部屋の中には海のような青緑色の絨毯が敷かれ、ベッドカバーや調度品なども真新しいものに取り替えられていた。そしてあたしが初めてこの家へ来た時とはまったくの様変わりを果たしてしまった内装に感心していると、宗一郎さんは一階の寝室からこちらへ枕を移すようあたしに言い渡したのだった。

「確かにレースのカーテンや細々とした雑貨なんかですごく部屋の中は可愛らしくなったし、昔のオンボロな面影は微塵も感じられないけど――でもあたし、とてもじゃないけどここにひとりである勇氣は持てないわ。宗一郎さんが一緒にいてくれるのでなければ絶対に駄目よ。だってあの得体の知れない変な虫がいつまた出没するとも限らないじゃない？これまでもキッチンと居間と視聴覚室とで遭遇を果たしてるし、それにこの部屋が一番出現率の高いような気があたしはするの。寝ている間にあんな気味の悪い虫と添い寝しなくちゃならないだなんてぞっとするわよ。お願いだからそれだけはやめて。じゃなかったら宗一郎さんが一緒にいてくれるんでなきゃ絶対に駄目よ」

あのゴキブリに赤い斑点模様を散らばしたような虫に挨拶されるたび、あたしは宗一郎さんが仕事をしていようと何をしていようと真っ先に大声で呼びつけ、撃退するよう奨励していた。けれども宗一郎さんはといえば、なんでもない顔をして素手でその虫を捕まえ、わざわざ裏口から遠く離れた場所にまで捨てにいくのらしかった――まあそれは窓から虫を逃がそうとする彼にもっと遠くへ捨て置くようあたしが懇願したからなのだけれど。

「虫が出てきたら真夜中だろうと何時だろうとブザーを鳴らして僕を呼ぶといいよ。今まで真理子が下の寝室で鉢合わせしていないっていうだけで、あの部屋にもあの虫は出没するんだから。それにせっかくここまで綺麗にしたんだし、使わないと勿体ないよ」

スプリングを取り換えて、あまり軋む音のしなくなったベッドに彼は腰掛けると、思案に耽るかのように両手の指を組んでいる。あたしもその隣に座ることにした。

「虫が出てから宗一郎さんと呼んだのじゃ遅いのよ。その前からいつどこに奴が潜んでいるかって始終びくびくしてなくちゃいけないのが嫌でたまらないの。だけど宗一郎さんがそばにいてくれるのなら話は別よ。安心して寝息を立てて眠れるわ」

宗一郎さんの横顔をじっと見上げながらあたしはそう言った。彼が顔の向きを変えてあたしを振り返った時に瞳が会うよう、そのままじっと見つめ続けることにする。

宗一郎さんは大きな嘆息をひとつ洩らしてから、

「そっちのほうがもっと問題だよ。真理子が僕といて安心なのは、僕に男とか性とかそういうものを感じないからだろ？僕は鬼のように自制心の強いほうだとは思うけど、女の人と同じ寝床を分ちあっていて何もしないでいられるほどではないんだよ」

宗一郎さんはあたしからの視線を振りほどくように窓の外へと顔を背けていたけど、あたしはなおも彼の横顔に視線を注いで言った。

「あたしは宗一郎さんのこときちんと男の人だと思ってるし、四六時中意識してるわ。宗一郎さ

んの瞳の中にあたしの姿がよりよく映るように、宗一郎さんがあたしを必要としてくれるように、宗一郎さんが書斎に籠りきりの時さえ、とり憑かれたみたいに考えてるの。どんなことをしたら宗一郎さんは喜んでくれるのか、そのヒントが宗一郎さんのこれまでに読んだ本の中に隠されていないかどうかを毎日丹念に調べてるのよ。それに宗一郎さんが特に好きだっていう曲を聴いてると、あなたの存在をとて身近に感じるわ。だからあなたがずっと仕事ばかりをしていてもちっとも寂しくなんかないの。でも宗一郎さんは賭けに勝ったのに、その景品はいらないってそう言ってるのよね」

「いらんだなんて言ってないよ。ただ今のような生活がいつまでも続くとは僕にはどうしても思えないんだ。真理子はいつかどこかでこんな陰気な場所に嫌気が差して去っていくだろうし、僕にはそれを止める権限はない。僕は真理子にいつまでも自由でいてほしいんだよ」

彼の意見にあたしは納得できなかった。

「そんなの変よ。矛盾してるわ。宗一郎さん小説の中で書いてたじゃない。『人間に真の意味での自由はない』って。いつも人間は何かの事物によって束縛され、何によって束縛されるかを場合によっては選ぶ自由が与えられているくらいのもなんだって。それならあたしは宗一郎さんに一生束縛されることを望むわ。宗一郎さんによって閉じこめられていることが今のあたしにとって一番の幸福なのよ。毎朝目が覚めるたびに眩暈がしそうなくらいの幸福感が胸を締めつけるのを感じるくらいなもの。もし宗一郎さんがここからあたしを追いだしたいっていうんならはっきりそう言えばいいのよ。宗一郎さんは無責任だわ。自分からあたしをここへ連れてきたくせに最後の最後で拒もうだなんて虫がよすぎるわよ。宗一郎さんがあたしにしようとしてることはあたしをレイプして殺害すること以上にある意味では悪いことよ」

あたしは宗一郎さんの胸中のことなどまるで察することもなく感情的になってそう捲し立てていた。彼は微笑しながらあたしの言い分を黙って聞き、ひとつひとつの要点に的を絞って優しく教え諭すように反論する。

「真理子が朝起きた時に眩暈を覚えるのはきっと低血圧症気味だからなんじゃないかな。それに僕は真理子が真理子の自由意志によって出ていく時を待っているんであって、真理子を自分から追い出すようなつもりは毛頭ないんだ。真理子がここにいてくれてとても助かってるし、真理子が一日でも長く留まってくれるよう毎日祈ってるくらいだよ。僕は真理子のことを、とても深く愛しているから」

とても大切な言葉をあまりに当たり前のことのようにさらりと言ってのけてしまわれ、あたしはその科白の持つ意味の重大さに遅れをとってしまっていた。それでも彼の指がまとめ髪をほどいた時に、キスされるかもしれないとは思った。だけど彼はほどいた髪を優しく手櫛で何度も梳いてくれただけで、あたしが期待しているようなことは他に何もしてくれなかった。

宗一郎さんはあたしが彼の肩にもたれかかろうとする直前に立ち上がり、「そろそろお茶にしよう」なんていう素っ気ない言葉であたしの心を傷つけたあと、いつものゆったりとした足取りで下へ降りて行ってしまった。

僅かに開いている窓から微風が入りこんできて、あたしに何故なのだろうと問いかけてくる。――どうして宗一郎さんは愛していると言いながら、キスひとつしてくれないのだろう……。

あたしは窓敷居の周囲に塗られたペンキの跡を見て少しだけ衰しくなってしまった。宗一郎さんがペイントした壁はどこも均一にムラなく美しく仕上げられているのに対して、あたしが手伝った箇所は一目でそれとわかるくらい雑な出来栄えだった。一生懸命出来るだけ丁寧に塗ったつもりだったのに仕上がりはいまひとつで『味があっていい感じだよ』なんていう宗一郎さんの言葉も今にしてみればあまりにも信憑性を欠いた責任のない言葉のようにしか思われぬ。

宗一郎さんはペンキ塗りひとつするにも、他の何かをするにもとてもゆっくりとマイペースに事を運ぶ傾向にあり、それでいてとてもいい加減かつ大雑把な完璧主義者だった。

『自分の価値観の物差しがどうでもいいと判断したことにはとことんいい加減で、反対にとっても大切だと思うことにはどこまでも完璧主義を貫きとおすから、感情と感情の両極の幅が極端に広すぎるのかもしれないな、僕はね』

あたしは宗一郎さんがペンキを塗りながらそう言っていたことを思いだして、ではあたしに対してはどうなのだろうと思った。

いてもいなくてもどうでもいい存在の者にわざわざ愛しているだなんて嘘をつく必要がある？それともあまりにも存在が重すぎて荷が勝ちすぎることなの？

あたしは時の経過とともにだんだんと冷たくなってきた秋風に少しだけ身震いすると、窓を閉めることにした。それから深く突き詰めて物事を考えようとする思考の扉も閉じて、まだ暖かい西日の差し込んでいる階下の部屋へと降りることにした。

あたしは宗一郎さんに嫌われるのが恐ろしかったので、それ以後決して彼を誘うようなことを口にしたり、態度に見せたりすることはやめにしようと心に誓いを立てていた。

あたしはこれまでに一人の人としか正式なおつきあいというものをしたことがないので、男性心理に詳しいわけでもなんでもないのだけれど、性的なことに関しては一般に男の人のほうが抑制のきかないものだという話をよく耳にしてはいた。だからもし宗一郎さんにそういう気持ちの起こった時、何か一言それらしい声をかけてくれさえしたら、いつでも心と体のすべてを委ねるのに、とそう真剣に考えていた。

そしてあたしがこの家へと強制的な招待を受けてから一月と三週間ほどが過ぎた頃、あたしは自分でとり決めた誓約を何度となく破りそうになっては、一生懸命思い留まるように自分の心をなだめなくてはならなかった。

宗一郎さんと心の通じあっていることを確認できるようなことがあるたびに――それは一日に多い時だと十度も二十度もあったから――あたしは心臓の鼓動の脈打つ音を懸命に叱りつけ、欲望と隣合わせの強い感情を無理な形で抑えこまなくてはならなかった。

具体的にはっきりいうと、セックスをしたいとかいうことではなくて、ただ指を絡ませあったり、ほんの数分間でいいから胸を重ねて抱きあったり、そういうことがしてみたくてたまらなかった。

あたしは誰に対してでも、生まれてからこれまでの間に自分から口接けてみたいだなんて一度として思ったことはないのに、宗一郎さんだけは別だった。けれども彼は何かの必要でも生じない限り、指一本どころか髪の毛一房にすら触れてはくれず、あたしはとうとう業をにやして自分から彼の指に触れたり、肩にもたれかかったり、一番大胆な時には首に両手を回したりするようになった。

一度、書斎にコーヒーを持っていった時にどうしても宗一郎さんを抱きしめたい発作を起こしてしまい、机の前に座っている彼の背中から胸に腕を回すと、暫くの後に優しく振り解かれてしまったことがある。

「仕事があるから」

そう言われてしまうと、あたしは黙って部屋をでる以外にない。

あたしはまだきちんと言葉にして言ったことがあるわけではなかったけれど、宗一郎さんのことをとても愛しているし、彼もそうであるはずだということが間違いなく優しい眼差しや小さな表情や事細かな態度にまではっきりと現れているのに、宗一郎さんは精神的な愛情だけで満足しているように思われた。そしてよくよく考えてみると、雄二とつきあっている時のあたしこそが今の宗一郎さんのようではなかったかと思ひ至るのだった。あたしは雄二と手を繋ぐこともキスをひとつすることも出来得る限り避け通そうとしてきたのだから。

べつに手を繋いだり唇をあわせたりする行為そのものに嫌悪感をかきたてられるというわけではなかったけれど、自分でもおかしいと思うことには、体の一部が相手と触れあっていると、自分の中の思考がすべてその人に伝わってしまうのではないかという漠とした恐怖があたしの中に

はあるのだった。特に雄二に対しては、あたしが心の底から彼を好きでないということがわかってしまうのではないかという恐れや怯えが根底のほうに根を張っていたのだと思う。

あたしは雄二のことを心のどこかではいつも侮り、軽くあしらってしまうようなところがあったから、自分でも思った以上に彼のことを傷つけていたのではないかと、今頃になって初めて気づかされ始めていた。因果応報というべきかどうかはわからないけれど、少なからず不誠実な気持ちで雄二とつきあってきたことへの報いを今になって受けているのかもしれない、あたしはそう思った。

あたしと宗一郎さんとの間には共通の知友が雄二しかいないこともあり、雄二のことが時々話題に上ることがあるのだけれど、あたしは雄二のことをあまり良い人としてではなく、わざと彼の悪いところばかりを印象づけるよう話してしまうことが多かった。

「雄二ってね、モーツァルトとかバッハを聴きながらアロマの香を焚くのが好きなのよ。ヒーリング効果が高くなるって言ってね。ちょっと変わってるでしょう？」

確かモーツァルトの交響曲第四十番をふたりで聴いている時に、あたしは笑いながらそう言った。

「いや、僕と雄二はそういう変なところではすごく気が合うんだよ。バッハのトッカータとフーガを聴きながらラベンダーの香りの充滿している部屋でセックスしようって誘われなかった？」

あたしは宗一郎さんの意地の悪さに一瞬慄然としながらも、次の瞬間にはおかしくてどうしようもなくなってしまった。思わず大声で笑い転げてしまったくらい。

「それって絶対変！よ、宗一郎さん。試しにやってみてもいいけど、最初のテラリーっていうので抱腹絶倒して終わると思うわ。全然違う意味で盛り上がっちゃうのよ」

あたしがソファから転げ落ちんばかりにして笑うのを見て、宗一郎さんもあたしに負けなくらいの大声で笑いだす。宗一郎さんは小説家という職業の宿命によってか、想像力のとても旺盛な人だったから、なおさら笑いを収めるのが難しいみたいだった。

「何よ、自分から言いだしたくせに……」

宗一郎さんの脇をあたしは肘で小突く。

「でも先に雄二の話を持ちだしてきたのは真理子のほうだよ。よし、じゃあ次はバッハを聴こう」

宗一郎さんがかけたのは<トッカータとフーガ>ではなく、<主よ、人の望みの喜びよ>だった。多分これ以上笑うことを防ぐための選曲だったのは間違いない。

宗一郎さんは曲の解釈や、バッハが生前どんな人物で、どのような生涯を送ったのかを優しく丁寧に、それでいて決して尊大にならない口調で講釈してくれた。そして最後に「まあどうでもいいことだけど」とか「関係ないことだけど」という前置きをしてから「僕はこう思う」という意見のつけ足しをするのが彼のいつもの締め括り文句なのだった。

あたしは好きなことについて語る宗一郎さんの声も話し方も表情も何もかもが好きで、その感情が時に煽情的な曲の調子によって高められてしまうと、いてもたってもいられないような気持ちよくなったものだった。

「宗一郎さんってどう考えても謙遜家よね。でもそうやって色々教えてくれる人が隣にいてくれると、クラシックも小難しく堅苦しいだけじゃないんだなっていうことがわかってきて、宗一

郎さんのいない間も勉強しようっていう気になるわ」

「僕のはみんな本の受け売りをそのまま喋ってるだけだよ。二階の書庫にあるクラシック音楽について書かれた本を読めば、誰でもある程度は理解が利くようになると思うしね」

次の日、宗一郎さんが仕事の締切りに終われている間、あたしはその隣の部屋で本を読み漁るうちに改めて彼の読書量というものに敬服してしまっていた。

ニーチェにキルケゴールにフロイト、サルトル、デカルト、パスカル、スピノザ……西洋思想を理解するために必要な哲学者たちの錚々たる著作物が立派なオーク材の書棚には整理して並べられている。あたしは偉大なる音楽家たちの生涯について書かれた本や、クラシック音楽についての入門書を探し求めにきたはずだったのに、いつのまにか宗一郎さんの知識や知性の源を探りあてるため、色々な本に無差別的に手を伸ばし始めていた。そして両の瞳の表面が乾ききっていくら目をしばたたかせても潤わないようになるまで、そこに座って本を読み耽っていた。

「僕のいた孤児院では宗教書とか哲学書とか、歯を立てたら折れそうな感じのする分厚い辞典以外は持ち込みを禁じられていたからね。だから毎日のように図書館へ行くことだけが唯一の楽しみっていう暗い奴だったんだよ。べつにそれは環境のせいであって僕自身が賢かったわけでも偉かったわけでもなんでもないことなんだけど……まあそういうせいで読書好きが高じて自分でも小説なんかを書き始めてしまったっていうわけなんだけどね」

宗一郎さんが多読家なのをあたしが賛嘆すると、彼は本を読むのは呼吸するのと同じくらい自然なことだというようにそう言った。

「僕はこれまでに小説を二十二冊と、あちらこちらの雑誌に掲載したエッセイなんかをまとめたものを十冊ほど出版してるけど、もし僕が書いたものが風化して後の世の人々の記憶に留まらなかったとしても、それは全然不思議なことじゃないって僕はそう思ってるよ。僕の書いてることは何百年も昔から言われてることと同じだし、それを違う物語に置き換えてるっていうだけのことなんだ」

あたしは宗一郎さんのこの意見には同意しかねるものがあったので、即座に反対の意を述べていた。

「宗一郎さんは謙遜してそんなことを言うのかもしれないけど、かえって嫌味よ、そういうのは。出版した本がすべてベストセラーなんていう異常作家の口にしていい科白じゃないわ。宗一郎さんの小説は古典の名作のように永遠の魂が刻み込まれていて、尚かつそれが新しい時代の要素を含んだ言語として著されているから多くの人が魅きつけられるわけでしょう？ 誓って言ってもいいけど、宗一郎さんの本を愛読している人は全員、あなたの本を踏み絵みたいにして踏んでみるって言われても絶対にできないと思うわ。あたしだって佐京宗一郎の本に足を向けて寝ろって言われたら、きっと一睡もできずに夜を明かしてしまうに違いないもの。本当のことよ、これは」

宗一郎さんは「ありがとう」と言って微笑っていたけれど、それは流石に大袈裟なのでは、という疑いを捨てきれないような、どこか自信のない顔をしていた。

書棚の目立たない片隅に並べられている宗一郎さんの著作を一冊手にとると、あたしは久しぶりにその本を読んでみることにする。彼がこれまでに上梓した本の中で、この<サバイバーズ・

リスト>という小説はあたしにとって一番読み難い本だった。『リアリティに対するひとつの挑戦であり、また自分に対する試みでもあった』と彼自身もあとがきに付記しているように、この本には血と殺戮と虐待の匂いが染みついている。

『僕はなるべく本の中であつても殺人を犯したりしたくはないし、セックスシーンも過剰ないきすぎた描写によって描きたいとは全然思わない。けれども今作に限り、リアリティの追求という僕にとっての主題によってハードにならざるを得なかったのは、一度は書いておかなくてはならないという使命感に突き動かされてのことである……』

本の中には集団レイプを受けて殺されずに生き残るといふ女性が最初にふたりでてくるのだけれど、ひとは事件後に妊娠したことを苦痛に自殺している。そしてもうひとは死線を越えて戻って来はするものの、人生の天秤が生ではなく、常に死に傾いているという状態だった……それから他にアルコール依存症で自殺すること以外考えられない男だとか、オーヴァードーズで二度も死にかけている少女だとか、夢の中で人を殺したにも関わらず、それを現実のことと思ひ違えている少年だとか、そういった人間が何人も集まって最終的には精神科のグループセッションに参加するという内容だった。

『この本は多くの健全なる精神の持ち主には理解され難いであろう。むしろ人間の持つ心の闇の暗い陰の中を今現在彷徨っている人間にこそ、癒しとなり、またその一助となるのではあるまいか、と私は思っていた。しかし、これだけ氏の本の売れゆき具合が好調なのを見ると、健全な精神の持ち主が日本という名の地表を覆う人間のうち、一体何人いるのだろうかという気にさえ私はなってくる』

これは彼の書評を書いた評論家の言葉なのだけれど、どうやらあたしは数少ない健全な精神を宿す側の人間らしかった。彼の他の本は二度三度と何度も繰返し読み返しているのに対して、<サバイバーズ・リスト>だけはどうしてももう一度開いてみようという気にはなれなかったから。けれども今、手にとってぱらぱらと斜め読みしていくうちに、デボラとレベッカというふたりの女性が猥切行為を強要されるというシーンのところで、あたしは一旦は本を閉じながらも、もう一度同じページを開いて読み始めてしまっていた。

そこに出てくる数人の覆面をした男たちは、修道女である彼女たちの神聖な衣服を精液で汚し——そしてこの体液によって最後には犯人が割りだされるのだけれど——神の御名を冒瀆しながら、自分たち独自の宗教儀式にのっとして性的な暴力を彼女たちに加えていく。彼らはイエス・キリストは他の惑星からきたエイリアンであると主張する新興宗教の信者であり、自分たちは神の女である修道女と交わることによってさらに靈的に高められると信じているのだった。

あたしは血も凍るような狂信者たちの宴に、本を持つ指が微かに震えるのを止めることができなかった。炎の影の踊る魔法陣の中で裸にされ<選ばれし者>によって凌辱されたのは、修道女である彼女たちだけではなく、まだ汚れを知らない小さな子供たちもだった（そしてこの時殺されずに生き残った<去勢>された男の子が、最後にレベッカの魂を救うことになる）。子供たちは皆スラムの出身で、生活に困った親たちが——ある時は借金返済のため、またある時は新しいヤク欲しさのために——その宗教団体に人身御供として<売る>のである。狂信者たちはまだ汚れていない無垢な魂の子供と交わることによってまた靈的に高められると信じており、レイプされた男の子たちの男根は彼らの信じる<宇宙の神>への捧げ物となり、女の子たちのヴァギナ

は皆外科的に閉じられることになっていた。

あたしはこの箇所を初めて読んだ時、果たして人間がここまで間違っただけを盲目的に信仰できるものだろうかと思ひ、またあまりにつらくて読み飛ばしてしまおうかとさえ思ったくらいなのだけれど、今は世界にこうした明らかにおかしい信仰を持った人が意外に多くいることを知っている。つい先日もヨーロッパで暗躍する怪しげな宗教の女教祖が逮捕されたばかりだったし、日本でも処女懐胎したという第二のキリストと呼ばれる教祖率いる宗教団体がほとんど毎日のようにワイドショーを賑わせていた。

そしてあたしが「シスターレベッカ、僕は今生きていることをとても神さまに感謝しているし、あの時死んだ僕と同じくらいの子供たちのためにも生きなきゃいけないと思うんだ」とハリーが最後のほうで告白するシーンを探していると——そのシーンを読むことによってあたしもレベッカと同じく、血みどろの悪夢から目を覚ましたと思ったから——宗一郎さんが資料のための本を取りに部屋の中へ入ってきたのだった。

「サバイバーズリスト？真理子は僕の書いた本の中では唯一嫌いな小説だって言ってなかったっけ？」

あたしは本を閉じると、それを元の場所へとしまいこみ、違う本を探すふりをしながら言った。

「べつに嫌いだななんて言ってないわ。ただ次の本からは小説の作風が変わってしまうんじゃないかって不安に思ったのよ。宗一郎さんは他殺死体のでてくる話だけはできるだけ書きたくないって雑誌のインタビューで言ってたのに、この本だけは終始一貫して殺人シーンがリアルに描かれてるんだもの。だから次の〈ディラン・デュカス〉を読んだ時、あたしは本当にとってもほっとしたのよ」

あたしは妙にむきになってそう力説していた。彼は床の上に積まれている本を選び分けると、目当ての本を探しだしてそれを手にとっている。

「多分これもインタビューか何かで読んで知ってるかもしれないけど、僕はミステリー小説っていうやつが嫌いな体質でね。あまりにもあっけなく簡単に人が死んでしまう場合が多いだろ？まあそれが現実と言われてしまえばそれまでかもしれないけど、あんまりその手の小説やドラマが多いのにうんざりして、僕なりの書き方で〈人を殺す〉ことにしてみようと思ったんだ。それにマークっていう十七歳の少年の場合は、あまりにもリアルな血みどろの夢を見ているのであって、現実の世界で誰かを殺したっていうわけじゃないよ。彼はすでに死んでしまったあの世の憎むべき母親を何度となく殺害しているわけだけど、それもやがては病院のグループセッションを通して母親を許すようになっていくんだから、極限状態での許しと救いはあるかっていう話だよ。まあ僕にとっても書きたくて書いた話ではなくて、どうしても書かなければならないっていう話だったから、書いて結構きつくはあったけどね」

「ねえ、今はどんな内容の話を書いているの？」

「まだ秘密だよ。もう少ししたら完結するから、そしたら一番に真理子が読んで感想を聞かせてくれるっていう約束だろ？だからこれからまた続きを書くのに専念することにするよ」

彼が資料にするために持ちだしていった本はキルケゴールの〈死に至る病〉とパスカルの〈

パンセ>という哲学書だった。

もしかしたらあたしはこの時気づくべきだったのかもしれない。宗一郎さんはオーヴァードーズで死にかかったことがあるわけでも、精神病院で亡くなったという実のお母さんのことを憎み倒しているわけでもなかったけれど、間違いなく彼の心の傷みが源となってそこから文章が川のように流れ海にまで至っているということに。

確かに薄々は過去に何かの背負いきれないほどの重い荷を抱えこんで生きてきた人なのだろうとは、彼の小説を読んで実際に本人に会う前から感じていたことではあった。けれどもあたしは自分自身の幸福にすっかり夢中になっていて――宗一郎さんの一番間近にいて、彼の存在を最上の喜びとする幸福に眩惑されてしまっていて――彼にとっても自分がそうであることを半ば確信し、宗一郎さん自身にとっては何が真の喜びとなり、どのようなことが真の苦痛となりえるのか、しっかりと見据えることを怠ってしまっていたのだと思う。

ずっとあとになって彼と暮らした日々のことを思い返してみるにつけ、この時のあたしは宗一郎さんと自分のこと、あるいは自分自身のことしか視野に入りきれてなくて、誰よりも一番大切な宗一郎さん自身のことを我が身を無くしてまで考えるということをしていたかどうか、全然自信がない。

宗一郎さんは小説を書くことを抜きにしたとしたら――それでも時々あたしの我が儘のために仕事を中断させてしまっただけだけれど――いつでも自分のことを顧みたりすることはせずに、あたし自身のことばかりを第一に考えてくれて、彼の愛情はほとんど無私の愛といってもいいくらいに透明度が高くて純粋だった。彼の存在は今も痛いくらいにあたしの心を蝕んで、永遠に残るくらいの傷跡を魂の奥深く、その魂核に至るまで、肉を抉った時のような形をその跡として残している。宗一郎さんがもしもう一度戻ってきて、あたしの体中に癒しの刻印を刻みつけてくれるのなら、あたしは砂漠すら豊潤の地へと変えられるに違いないのに。七つの海でも満たされないくらいの喜びで大洪水すら起こせてしまえるに違いないってそう思うのに……。

あたしはこのごろ、宗一郎さんの過去の面影や彼との思い出に縋って生きていることが、彼への真の愛情に起因するものなのか、それともあたしの単なる独り善がり過ぎないのか、見分けることができなくなってしまっている。

あたしの心の中で生き続けることすら宗一郎さんにとっては耐え難い苦痛であるとしたら、彼を解放して楽にしてあげるべきなのかもしれないのに、あたしは自分の身勝手な愛情のほうを彼自身の苦痛よりも優先させてしまっているのかもしれない。

今のあたしにはただ祈ることと待つことの他には何ひとつ許されてはいない。

神さま、どうかあたしから宗一郎さんへの思慕を取り去らないでください。

あたしにとって宗一郎さんが必要であるように、彼にとってもあたしがなくてはならない存在でありますように。

神さまがもしあたしから宗一郎さんを奪うというのなら、その時はあたしの魂も一緒に地から取り去ってくださいますように。

あたしは人の間にあっては、ただ宗一郎さんひとりだけを永遠に愛したいのです。

だからどうかあたしの心が彼への思いから一瞬でも離れることのないように見張っていてくだ

さい。

あたしが宗一郎さんを通して神さまを恋慕うように、どうか神さまがあたしの祈りを通して宗一郎さんに最も良いと思われることをなさってくださいっておりますように。

どうか永遠の国か夢の家で宗一郎さんとともにもう一度暮らせる時が一日でも早く訪れますように。

どうかその時が一刻も遅れることなく、神さまの中で最も早い時期になりますように。

――あたしは日夜祈って宗一郎さんの帰ってくるのを待ちわびている。

そしてそれからまた僅かばかりの時が流れ、夏の終わりは秋と重なりあう時を過ぎ、短い秋が冬へとその身を渡す頃合が近づいてきた。ひたひたという秋の去りゆく足音が、微弱ながらも聞きとれそうな気のするある夕方、宗一郎さんとあたしは庭に面したテラスでえんどう豆の皮剥きをしていた。

今年の秋は例年よりも暖かで、九月は夏の熱気の尾を引いたように熱い日の続くことが多かった。そして末頃になってようやく澄んだ冷たい空気が朝と夕に張りつめるようになってくると、十月はすぐにやってきた。まるで葡萄の実が豊かに熟すようにすべての自然物は円熟味を増し、魂の燃焼を思わせる落葉樹の紅が鮮やかに庭を彩りはじめる。

テラスの上にも朽ち葉色をした丸まった葉や、赤く燃え尽きた蔦の葉などが散りばめられていたけれど、あたしと宗一郎さんはあえて拾うということもなしに、白塗りのテーブルの前に向かいあって座っていた。秋の静寂の中でただひたすら沈黙を守ってえんどう豆の皮を無心に剥いてはふたつの編み籠の中へと選り分けていく。この日最後の太陽の光が、庭の空気の中に黄金色の粒子を撒き散らし、やがて赤銅色へと光の色彩を変えてゆくと、あたしは犯し難い聖域に足を踏み入れでもするかのように、宗一郎さんに声をかけていた。もしかしたらほとんど陶醉しきって独り言を呟いていたといっても良かったかもしれない。

「あたし、今とっても幸せだわ。ねえ、そうじゃない？それとも宗一郎さんが経済的に支えてくれているから、金銭的な心配のないことによるのかしら？でももしとっても貧乏であったとしても、やっぱり宗一郎さんとこうして秋の中にいるだけで幸せだったに違いないと思うのよ？怖いくらい幸福な病いって名づけてもいいけど、宗一郎さんはきっとあたしと違って健康そのもののなのよね」

微かに皮肉をこめて、太陽の黄金色をした吐息の中にそう言葉を染みこませる。まるで瞑想中の修験者のような面持ちで半ば瞳を伏せていた宗一郎さんが、自分の手元から目を上げる。

残光によって麦の落ち穂の色のように彼は日焼けしていて、瞳の中には琥珀色をした感情が揺れていた――あたしは今も宗一郎さんのこのすべてが調和したかのような表情を忘れることができない。

「僕はずっと病気だよ。多分生まれた時から患ってるんだろうね。真理子が幸せだっていうのはきっと君が楽道家だからに他ならないからなんじゃないかな。僕はいつもドアを開けたら君がいないんじゃないかって始終怯えてばかりいるよ。それに真理子は炊事も洗濯も何もかもよくやってくれてるから、僕のほうで給金を支払わなくちゃと思ってたくらいだからね、べつに経済的なことで真理子が負い目を感じる必要はまったくないよ。僕は仕事に専念できて助かってる」

宗一郎さんはどこか夢から覚めたばかりというような顔つきをしていた。そして心地好い夢の中から揺り起こされた者がそうであるように、不機嫌の種を隠し持っているような、そんな雰囲気滲ませていた。

「そんな他人行儀な言い方はやめて。第一宗一郎さん、あたしがいなかったらいなかったで全然構わないっていうような言い方してるわ。あたしが出ていっても追いかけてもしないくせにそんな

ふうに言うのはずるいわよ。もしかしてお金さえ払っておけばあたしに対して責任がなくなるとでも思ってるんじゃないでしょうね？宗一郎さんは怖いよ、あたしに責任を受け持たなくちゃいけないことが。だからいつまでたっても抱こうともしてくれないんだわ」

肩を怒らせるくらいにして力をこめてそう言うと、宗一郎さんは軽く肩を竦めている。

「真理子は手紙に書いてたよね、『自分にはあなたのように物を書く才能はないから、この頃では日々の生活に追われて小説を書くこともやめてしまいました』……って」

「ええ、書いたわ。それで？」

苛々しながらあたしは彼の次の言葉を待つ。

「真理子の書いた文章を読むかぎり、才能がないことはないって僕は思ったよ。だけど一緒に暮らしてみて、君に何が足りないのかがわかった気はするな。君は暗闇は怖くないけど幽霊は怖いというし、草花は好きだけど虫がいることを思うと土いじりは怖くてできないっていう。その相関関係の矛盾をもし真理子が乗り越えることができれば、いい小説なんていくらでも書けるようになるんじゃないかって僕は思うよ」

宗一郎さんの言いたいことが何なのか、あたしにはうまく把握できなかった。けれどもきっと深い意図のあることと思って黙って聞いていた。

「……つまりどういうこと？あたしが物事の表面しか見られない、薄っぺらな人間だっていうことが言いたいのか？だから宗一郎さんのことも表層的な部分しかわかってなくて、本当の宗一郎さんは全然別なところにいるにも関わらず、あたしが全然直視しようとしていないって言うのね？もしそうだっていうのなら、あたしにだって言い分はあるわ。宗一郎さんはあたしの知らない色々なことを教えてくれたけど、一番大切なことだけは決して教えてくれようとしないのよ。だけどあたしはずっと待ってたわ。できるだけ宗一郎さんの気に入るような女になりたいと思ったし、宗一郎さんははずけはずけ物を言うような女は嫌いでしょ？だから……」

「ちょっと待って」

宗一郎さんは珍しくあたしの言葉を遮っていた。

「僕はとても真理子のことを気に入っているし、真理子の歯切れのいい物言いもとても好きだよ。僕は優柔不断なくせに頑固っていう性格だからね、真理子という自分に足りない物がなんであるのかがはっきりとわかるよ。ただ僕の言いたいのはそういうことじゃなくて、真理子が今のような生活をしていて申し分なく幸せだと言うのなら、多分君はここから出ていったほうがいいってことなんだ。これから冬が来たらきっと気分が滅入ってどうしようもなくなると思うからね。ここの冬は少し離れたところの住宅街よりも冷え込みが厳しいし、今から大分薪は割っておいたとはいえ、それがなくなるのもあつという間なんだ。大雪が降って動けなくなるっていうことも過去に何度かあったしね……」

豆の皮をすべてむき終わると、宗一郎さんは籠を両手でとり上げて、寂しい最後の残光が輝く暖かな室内へと入ろうとしている。

「宗一郎さんの言いたいことがあたしには全然さっぱりわからないわ」

「そんなミニスカートを穿いてる人にはわからないだろうね。ほら、そろそろ中に入らないと風邪を引くよ。昼間はとても暖かだったけど、陽の沈んだ途端に冷えこんでくるからね。今日の晩御飯は久し振りに僕が作るから」

夕陽は赤紫から鮮やかな紫色のヴェールを空にかけて、西のずっと向こうへと沈みこんでしまっていた。ラベンダーを思わせる空の色彩はやがてどんどん薄くなると藍色へと変わってゆき、そして最後には漆黒の闇の中に秋の星座がきらびやかな光彩を放つことになるのだろう。

あたしは宗一郎さんの煮えきらない態度に苛立ちと悔しさを感じながらも、庭に大輪の華をいくつも咲かせている葉牡丹に別れを告げることにした。そして彼の言うとおりに居間の中へ入ると、テラスに通じる大きな窓をぴたりと閉めることにした。

部屋の中にはお昼に焼いたパンの芳香が残り香のようにまだ漂っていて、あたしにはやはりこれが幸福の匂いのようにしか感じられない。けれども宗一郎さんにとってはただのパンの焼けたいい匂いでしかないのかもしれないと思うと、哀しい気持ちが胸に覆い被さってくる。

その日の夜の食事は宗一郎さんの作った特製野菜シチューで、中には夕方に摘みとったばかりのえんどう豆が入っていた。もちろん他に人参や玉葱なども入っていたけれど。

あたしは一口食べて「美味しい」と言おうとして、次の瞬間には口を噤んでしまっていた。喉から声を押しだそうとすると、なんだか死んだようなか細い声しかでてこないような気がしたからだった。

それで黙々と静かにスプーンを唇に運んでいると、宗一郎さんがどこか怪訝そうな声音で尋ねてくる。

「どうしたの？元気ないね」

むっとしたあたしは口を尖らせて不満をぶつけた。

「そりゃあ元気も食欲もなくなるわよ。大好きな人の住んでいる家から遠回しに立ち退きを命じられたりなんかしたら。しかも大家自らが大賛成なんですものね。宗一郎さん、たったの一度だけど、あたしのことを愛してるって言ったわ。だけどそれと同じ口で次には出ていったほうが君のためだとかなんとか言いだすのだもの。普通は納得できなくて当たり前でしょう？」

スプーンを置くと、あたしは宗一郎さんを睨み据えて、彼の次の言葉を苛々しながら待った。「そうだね。でも僕は真理子と違って普通じゃないから、君のわかるようには話せないんだよ。僕は真理子のことをとても好きだけど、でも君自身の意思でこの家から去って行ってもらいたいとも同時に思ってるんだよ。そうじゃないと本当に僕は真理子に何をするかわからないから」

宗一郎さんはあたしの眼差しに耐えきれないように瞳を逸らすと、パンをちぎってスープの中に浸している。

「まさか首を絞めて殺すなんていうんじゃないでしょう？宗一郎さんはゴキブリみたいな害虫一匹殺さずにわざわざ遠くまで捨てにいくような人よ。あなたにあたしは絶対殺せっこないわーだけどあなたがあんまり残酷なことをあたしに要求するようなら、この家の中で首でも吊って死んだほうがまだましかもしれないわね。あたし、とても不安なのよ。宗一郎さんがそんなことを言うのは心の底ではあたしを疎ましく思ってて、嫌いだからなんじゃないかって時々眠れなくなるくらい考えこんでしまうの。宗一郎さんは優しいから、ただ黙ってあたしの出ていくのを待ってるんじゃないかって……」

迂闊にも涙腺が緩んできてしまって、あたしはとても慌てた。席を立ててティッシュの置いてあるカウンターのところまでいくと、急いで涙を拭くことにする。なんだか自分が手練手管で男

を落とそうとする卑しい女みたいに思えてきて、彼に軽蔑されるのではないかと怖くなった。

「僕は本当にそんなつもりじゃなくて、ただ真理子をできるだけ傷つけないんだよ。君のような人を僕みたいな人間と関わり合わせてしまったことを、本当に申し訳なく思ってる。だけど僕は嫌ってもいない人間に嫌いだとは言えないし、好きでもない人間に好きだと言えるほど器用なわけじゃないんだ。だから真理子に……ここでの生活に飽きてからではなく、飽きる前に出てってもらいたいんだよ。これでもわからない？僕の言っている言葉の意味が？」

宗一郎さんはあたしの涙に狼狽して、心底困り果てたような表情で頭をかいている。

あたしはそんな様子の彼を見て、宗一郎さんのあたしに対する好意を再確認すると、少しだけほっとした。

「全然わからないわ。もし本当にあたしのことが好きなのだったら今すぐそれを証明して」

「どうやって？」

あたしは宗一郎さんの座っている椅子のそばまでいくと、彼の足と足の間に片膝を立てて言った。

「キスして」

そして宗一郎さんの首に手を回そうとすると、彼は顔を背けて拒むようにあたしの手を解こうとする。

「……駄目だよ。できない」

「どうして？」

「だって、キスをしたら今度は君の体に触りたくなくて、最後にはいきつくところまでいってしまうことになるんだ。そしたらきっと真理子は次の朝にはとても後悔することになると思うよ」

「そんなことどうしてわかるの？宗一郎さんはいつだって理屈や理論ばかりで、一番大切な感情を無視するのね。いいわ、もうわかったわ。宗一郎さんはきっと口だけで、あたしのことなんかちっとも好きでもなんでもないので。でも嫌いだっていうとあたしが傷つくから言いだせないだけなのよね、今ごろになってようやくわかったわ」

あたしは宗一郎さんから体を離すと、大股で寝室まで歩いてゆき、ばしん、という大きな音を立ててドアを閉めてやった。年老いた家屋には少し乱暴すぎる動作だったかもしれないけど、あたしは怒ってる時まで彼のように物言わぬ物に対して優しくなんかできない。

あたしはベッドの上に体を投げだすと、声を押し殺しもせずに泣きはじめた――堪える理由なんてもうどこにもなかったから。でも本当のところをいうと、宗一郎さんがあたしの泣き声を聞きつけて慰めにきてくれるのではないかと心のどこかで期待していたかもしれない。だけど彼はあたしのそばにやってきてはくれなくて、あたしは枕に顔を押しつけると、ひとしきり泣き続けた。こんなぼろい家からは頼まれなくても出て行ってやる、そう心の中で呪詛の言葉でも吐くかのように叫びながら。

宗一郎さんのことがたまらなく憎らしかった。あたしはこんなにこんなにこんなに好きだって告白してるのに、態度でもはっきりそう示してるのに、宗一郎さんはどうして頼りにならない言葉しか与えてくれはしないのだろう。

あたしは枕を何度も殴りつけていじめたあと、ベッドの上で足をばたつかせて、さっきの自分がとってしまった軽はずみな行動を後悔していた。もしアルコール濃度の高いお酒を一口でも唇

の中に含んだとしたら、嫌でも火が吹けそうなくらい胸の中が恥辱感で燃え立っていた。

火山の噴火でも鎮めるかのようにあたしは感情の昂ぶりを抑えこむと、改めて自分がどのくらい宗一郎さんのことを愛しているか、思い知らされていた。そうすると火照った感情が悲しみへと静かに冷されていき、あたしはまた泣きたい気持ちへと絡めとられてしまう。

恨みがましい思いで先程の宗一郎さんの科白を一言一言思いだし、なんとか縫れる藁はないかと、あたしは彼の言葉を心の中で何度も反芻した。そしてある考えがあたしの心を深く捕まえたのだった。

『……ここでの生活に飽きてからではなく、飽きる前に出ていってもらいたいんだ』

――もしかして彼はあたしのためを思えばこそ、それが最良の方法だと言ったのではないだろうか？そのほうが長い目で見たとするなら、あたしのために益となると思って……。

一度、自分の都合のいいように彼の言葉を解釈してしまうと、それがもっとも正しいというようにしか思えなくなってくる。それにもしここを明日にでも出ていくとしても、それなら尚のこと、はっきりさせたいと思うことがあった。

宗一郎さんはあたしが泣いているのも構うことなしに二階へ上がってしまっていたから、あたしは心の内側で立てた計略を実行に移すべきかどうか、思い迷っていた。

もしここから出ていくように宗一郎さんが無言で催促し続けるようなら、やはりあたしは家賃を滞納している自分のアパートへと戻らざるを得ないのかもしれない。だけどそれではきっとあたしの心は後悔と未練をいつまでもこの家に残していくことになるに違いなかった。どうして最後だけでも彼に抱いてもらわなかったのだろう、と。

それにもしかしたら彼が抱いてくれさえしたら、ここに滞まってもいいと言ってくれるかもしれないという微かな期待も心のどこかにはあった。ただ自分が以前に雄二のことを最後の最後で拒んでしまったように、宗一郎さんもあたしの最後の勇気を拒否するのではないかという恐れが心の周りをうろつき回って離れないのだった。

そして決断しかねて迷っているうちに、泣いたせいで重くなった頭がさらに重みを増して、あたしは知らないうちに眠りこんでしまっていた。

天井の白い蛍光灯の周りをばたばたと飛び回る何がしかの音が聞こえたかと思うと、あたしはそれが蛾の羽音であることを目覚めて知った。ぼんやりとした眼で枕許の時計を見遣り、それから一気に頭の隅々までが冴え渡ってくるのを感じる。

――0 : 07。

逆夜這いをかけるにはもう少し夜が更けてからのほうがいいのかどうか、よくわかりはしなかったけれど、あたしはとりあえず口許のよだれを拭くと、皺になってしまったアイボリーのワンピースをきちんとした。それから空気のあまりに冷たいのに気づくと、ほんのわずかばかり開いていた窓をぴたりと閉め、蛾が何度も体当たりを試みている照明の光を見上げる。

一体どうやって照明器具の中へと入りこんだのか、気でも狂ったみたいにはたばたと蛾は跳ね回り、出口を探しているようだった。

逃がしてあげるにはプラスチックの蓋を外すしかなかったけれど、それは少しばかり面倒で、あたしは宗一郎さんと呼ぼうかなって一瞬思った。でも彼は原稿に集中しているところを中断されようと、快い眠りを妨害されようと、文句ひとつ言わずに蛾を空に返してあげるに違いなかったから、あたしは自分でどうにかしようと考え直すことにした。

ベッドの上に爪先立ちになると、プラスチックのカバーを外して、その中で狂喜乱舞しているあまり美しい模様でない蛾を窓の向こうへと飛ばしてあげることにする。

樹木の葉や枝の連なりが闇の濃度を一層濃くしていて、窓の外へ身を乗りだすと、大いなる真の闇へと呑み込まれてしまいそうだった。

耳を澄ますと、しーんとした、研ぎ澄まされた静寂の音が聞こえてきそうで、あたしは暫くの間、魅入られた者のように暗黒の情景を見つめていた――風はなく、ただ肌を柔らかく刺すかのような冷たい微粒子が空気の中に瀰漫している気がした。

そして突然、あたしは目の前で手を打ち鳴らされでもしたかのようにはっとしたあと、照明の覆いを元のおりにはめこんで、それを消した。

服を脱いでスリッパ一枚の格好になると、裸足で真っ暗な闇の中をなんの手がかりもなしに歩いていく。闇の中に家具の影がぼんやり落ちていて、それを頼りに階段の手摺のところまでいくと、彼の寝室までそっと上がっていくことにする。

書斎のドアの僅かな隙間から光が洩れ出でていて、宗一郎さんはまだ小説の続きを書いているに違いないとあたしは思った。

なるべく軋らせないようにしながらドアを開け、そしてこっそりと閉める。

下の寝室よりもこちらの部屋のほうが僅かに月の光の入りが良いように感じられた。目を凝らすと、どこに何が置いてあるか、シーツや掛け布団の波打った皺までがよくわかる。

あたしは掛け布団を捲りあげると、猫が主人のベッドの上で丸まるようにして彼のくるのをじっと待っていた。

夢も見ないような世界で深い休息をぐっすりとしたばかりだったから、もう一生眠らなくても生きていけそうなくらい目が冴え渡るのを感じる。

枕には宗一郎さんの髪の匂いが染みこんでいて、あたしは胸の間が疼くのを感じた。スリッパを脱ぐと、それを床の上に放り捨てることにする。

宗一郎さんが毎晩眠っているベッドの中にこうして身をうずめているだけでもとても幸せだった。だからもし彼がこのまま徹夜で仕事をし続けてやってこなかったとしても、今のままで十分のような気がした。

けれどもあたしがそう思っていると、書斎の電灯の消される音がして、ドアを閉める音がそれに続き、床の上を渡るみしりという音が一步一步近づいてきた。

心臓が途端に重くなったように鈍く脈打って、あたしは自分のしていることが間違っているのではないかと今更ながらに自問自答した。

宗一郎さんは部屋の中へ入ってくると、何も気づいていないかの様子でベッドの中にもぐりこんでくる。そして次の瞬間にはとても驚いたように身を起こして、寝台の脇にある小さなライトに手を伸ばしていた。

「……びっくりするだろう、こんなところにいきなり人がいたら。どうした？もし眠れないんだったら台所に……」

仄かな明かりの中であたしが裸であることに気づくと、言葉を失ったみたいに宗一郎さんはベッドから出ていこうとしている。

「どこに行くの？」

「今日から僕は下の部屋で寝ることにするよ。君はここでも全然平気で眠れるみたいだから」

ベッドの下に足を降ろして背中を向けようとする彼のパジャマの裾を引っ張ると、あたしはなんとか宗一郎さんを引き留めようとした。

「どこにもいかないで。あたし、宗一郎さんが出ていけっていうんなら、明日にでも出ていくわ。でも最後まで一緒に眠ってくれてもいいじゃない。もし宗一郎さんがあたしに何も感じないっていうのなら諦めるけど、そうじゃないなら……お願いよ。明日の朝になったら黙って出ていくから、抱いてほしいの」

彼の背中に抱きつきながら哀願すると、宗一郎さんはあたしの指を手にとって、やっと振り向いてくれた。

「僕は裸の女の人が横にいて熟睡できるほど異常じゃないんだよ。その気になるよりもならないほうがずっと難しいし、本来なら君はここにいないはずの人だ。誘拐っていうのが法律上どのくらい重い罪に当たるか、真理子にだってわかるだろう？それなのにこの上君を抱いてしまったとしたら、僕は多分とでもとりかえしのつかないことを真理子にしてしまうと思う。一時的にはよくても、きっと君は……」

「宗一郎さんのそういう生真面目で理屈っぽくて、なんでも理論で片づけようとするところ、とても好きよ。だけど今くらいいいじゃない。それに宗一郎さんのしたことはちっとも罪なことなんかじゃないわ。ずっと待ってたのよ、あたし。宗一郎さんが迎えにきてくれるのを。だから……もう何も言わないで。あなたはとてもあたしのためになることをしたの。あなたはあたしにどんなことをしてもいいのよ」

あたしは宗一郎さんの手をとると、乳房と乳房の間に押しあてて、彼を離さないようにした。

「ちょっと待って、真理子。本当に君は……」

本当はあたしのほうが初めてなのに、宗一郎さんのほうがずっとうろたえていて、なんだか可笑しかった。それでも彼の首に手を回してあたしから唇を合わせると、宗一郎さんもやっと応えてくれたのが嬉しかった。

あたしは彼の舌を拒むことなく受け入れ、彼の体の輪郭をなぞる指も、手のひらの体温も、肌の上を滑る唇も、すべて忘れないように心の留め金にひとつことつかけておこうと思った。

宗一郎さんは何をするにもゆっくりと時間をかけて丁寧にする人だったけど、あたしを抱いた時もそうで、彼はあたしが不快な思いをすることのないよう優しくしてくれているみたいだった。

細長い指で乳房を包みこみ、下腹部を撫で上げ、自分でもあまり触れたことのない繊毛の中に指を這わせられると、あたしはどう反応したらいいのかわからなかった。

「あ……」

彼が両の脚を持ち上げて広げようとした時、開けてはいけない扉の前に自分が立たされているような気がした。自分でも見たことのない身体の部位を見られなくてはいけないのかと思うと、ためらいが胸をつたっていく。

「恥かしい？」

心の中を見透かされたように宗一郎さんにそう言われると、余計に恥辱感が増して、生暖かい液体が内腿を満たしていくのがわかる。

「恥かしいけど、でも……」

喘ぐように答えようとする、彼は太腿の裏側を舌でなぞって、あたしの言葉の続きを待っていた。

「でも？」

あとはもう嬌声しか洩れてこなかった。彼はあたし自身でさえ微かにしか触れたことのないところへ何かを探しあてるように何度も舌を入れて愛撫し、何かを確かめるように指でそこを大きく広げたりしていた。

あたしは堰を切って止まらなくなった水の流れに翻弄されて、終わりのこない波の間で瞳に涙を滲ませて待っていた――彼が自分の中に入ってきてくれるのを。

「いい？入るよ」

彼はあたしの前髪を撫で上げると、そう耳元に囁いた。あたしは肉体を征服される喜びに芯まで浸されながら、時々理性を手放してしまいそうになるのが怖かった。そして次の瞬間、それまでの愛撫のすべてを全身から剥ぎとるかのような痛みが、体の芯を貫き通した。我慢できないくらいの激しい苦痛に体が悲鳴を上げていても、宗一郎さんは手を緩めてはくれない。一番奥の深いところまで突き上げられたかと思うと、暫くの後に波が引き、最初は緩慢だったその動きがやがて早くなっていく。あたしの体はその激しさについてゆけずに置き去りになっていたけれど、彼の荒い吐息を耳元やうなじに感じるたびに満足感に打ち震えていた――半ば、意識を手放しそうにさえなりながら。

宗一郎さんと離れてしまうくらいなら、このまま死んだほうがずっといい……。

ぼんやりした頭のどこかであたしはそう考えていた。そして熱く濡れた体から宗一郎さんの性

のすべてが痕跡を残して去ってしまうと、まだ呼吸の激しい彼の体にあたしは肌を寄り添わせた。

「ごめん、我慢できなくて……痛かっただろう？」

あたしは首を振った。暗がりの中でも髪の毛や頬の感触で、彼にそれが伝わっているだろうと思った。

「本当はわかってたんだ、薄い闇のベールを裂いて、真理子が痛いって表情をしたことも、息を詰めるように堪えていたことも。だけど僕は……」

宗一郎さんの唇に指で触れて、あたしは彼の口を封じることにする。

「いいの。あたし、宗一郎さんにずっとこうされたかったの。あなたのために痛い思いをしてみたかった。宗一郎さん、あたしが初めてだから必要以上に優しくしてくれたんでしょ？あたし、こんなに大切に……優しくされたこと、生まれて初めてだったもの。宗一郎さんがあたしのことだけを考えて、指先に力を集中させてくれるのがはっきりわかったの。あたしが少しでも気持ち良く感じるようにってまじないでもかけるみたいにして、自分の欲求を一步退かせてくれるのがよくわかったの。それなのにあたしは宗一郎さんに今までよくしてもらってばかりで何もしてあげられてないって哀しくなったくらいなのよ」

彼の左の腕に唇を寄せていると、宗一郎さんの右の腕が腰に回されて、もうそれだけで痛みの奥深くに眠る官能が疼くのを感じてしまう。

「真理子の裸を見れて、それから触れることができただけでも僕は十分なくらいだったのに、一番大切なものまでもらえて僕のほうが真理子よりずっと良くしてもらってるんだと思うよ。それに真理子の胸に顔をうずめた時、雄二のことが一瞬頭の片隅をよぎったんだ。あいつも同じようにしたことがあるのかと思ったら、そのあとを全部消して自分だけのものにしたいって思った。

『濡れていたくせに、いざやろうとすると蹴っ飛ばされた』って言ってたのを思いだして、嫉妬したんだよ」

あたしは顔が紅潮するのがわかったけれど、薄い紗のような闇の帳に阻まれて、彼にはわからないだろうと思った。だからあまり恥かしくはなかった。

「ねえ、雄二の話はやめて。宗一郎さんに雄二の話をされるとどうしてもあたしは宗一郎さんの奥さんだった人のことを想像してしまうもの。こんなふうに毎晩優しく抱かれていた人が他にいたのかと思うと、気のおかしくなる一步手前までいっちゃうわ」

「真理子がそんなことを考える必要はないよ。前の妻とはお勤めみたいにセックスしてるが多かったんだ。今頃こんなことを言うなんて卑怯かもしれないけど、僕の精子では女性が妊娠するのはとても難しいらしくて、それが原因で別れたみたいなものだったんだよ。彼女は君と同じで保母をしてたからね、『子供ができないってわかってたら、あなたとなんか結婚したりしなかった』ってそう言って出てかれたんだ。真理子も結婚したら子供が欲しいだろう？でも僕が相手じゃ駄目なんだ。僕は神とか運命とかいうやつに見放されているからね、全部を話してからその上で真理子が体を許してくれたとしても、きっといずれは離れてかれてしまうだろうって怖かったんだ」

宗一郎さんの右の手が微かに震えていて、寒いのもかもしれないとあたしは思った。肩口まで布団を引っ張りあげると、彼の体にもっと密接するように、乳房を押しあてて足を絡ませることに

する。

「絶対に何があってもあたしは宗一郎さんのそばを離れたりなんかしないわ。子供のことなら心配しなくたっていいのよ。もしも赤ん坊を十人生めたとしても、宗一郎さんがいてくれなければ全然意味のないことなんだから。宗一郎さんの神さまのキリスト・イエスに誓って言ってもいいわ。一生涯、宗一郎さんのことだけを愛しますって」

「駄目だよ、軽はずみに御名を唱えて誓願を立てたりしては。神は真実をかけて誓願を立てた者を試みられるからね。場合によっては祝福ではなく呪いを身に招くことになるよ、僕みたいに」

呪いだなんて随分大袈裟な表現のような気がしたけど、宗一郎さんはとても真面目に真剣な口調でそう言った。あたしはこの家へ来てから時々暇つぶしに聖書を斜め読みしたりしていたけど、隅から隅まで精読したというわけではなかったの、彼が具体的にどういったことを指しているのか、この時はまだあまりよくわかっていなかった。

「よく結婚する時に教会とかで新郎と新婦が神父さんの前で誓いあうじゃない？『汝は健やかなる時も病める時も……』って。あれも軽はずみなことなの？」

宗一郎さんはあたしの腰から手を離すと、真っ直ぐに天井を仰ぎ見るように、その手を頭の下へと持っていつている。

「違うよ、僕が言ってるのはそういうことではなくて……なんていうのかな、もっと個人的なことなんだ。僕はカトリック系の教会の孤児院にいて、将来は伝道師になりたいと思ってた。それで神に目覚めてからは毎日こう祈ってたものだったよ——『ひとりでも多くの人に福音を宣べ伝えるために、僕を使徒のひとりに加えてください』ってね。それから中学校に入る前にはこう思ってたかな。『僕は一生結婚なんてせずに、貞節を守って偉大なる使徒パウロのように神さまだけに仕えます』とかなんとかね。どちらの誓願も今見てのとおりなわけだけど、僕は自分から神を裏切ったわけじゃないと今でも思ってるよ。僕はずっと信じてたのに、向こうが裏切ってきたんだ」

特定の神に信仰を持っていないあたしには、神学的なことはまるでわからない。それでも神さまは宇宙の果てとか世界の果てとかそういうところにいるのかもしれないって考えてみたりしたことはある。宗一郎さんとこうして体温を分けあっていることにも運命の導きのようなものを感じるし、あたしにしてみれば彼こそが地上で一番神に近い人だった。

あたしはその時々によって無神論者になったり運命論者になったりする、実に気まぐれでいい加減な人間だったのだ——この夜までは。

「祈っても聞いてもらえなかったってということ？」

「いや、それ以前の問題だよ。神の野郎は——僕は今は信仰をある程度回復してはいるけど、キリスト教の神を一度捨てた時にはしょっちゅうそう呼んでたんだ。あのどうしようもない低能のろくでなしは旧約聖書のヨブにしてやったのと同じことを僕にまでやりやがったってね。背中に重い石をどんどん乗っけて、どこまでその人間が耐えられるかを試そうとするような、一種の拷問みたいなものだな。僕が膝をついて一步も動けなくなるまで神とかいう奴はやめようとしなかった。何度も死のうと思って、でもぎりぎりのところで思いとどまって——そういうのを二百回も三百回も繰り返して生き残ったことが果たしていいことだったのかどうか、僕には今もよくわ

からないよ」

宗一郎さんは闇の中のもっとも濃い一点を見つめるようにそう話していたけれど、あたしはなんだかとっても哀しくなってしまった。

『死なずに生きのびて、真理子と巡り会えてよかった』

そんな答えを心のどこかで期待していたのに、宗一郎さんはまだ壁を一枚隔ててあたしの入りこめない世界に籠城しているような、そんな感じがした——こんなに近くに、吐息も鼓動もはっきりと感じられるくらい、ぴったりと寄り添っているのに。

「……どうしてそんなこと言うの？あたし、今まで生きてきた人生の中で今が一番幸せなのに、宗一郎さんはあたしでは孤独を癒すことができないの？不幸せなままなの？」

宗一郎さんはまた横向きになると、あたしの髪の毛を梳かしたり撫でたりしながら優しく言った。

「そんなことは全然ないよ。真理子は本来なら僕とこうしていいような人ではないから、本当は怖いんだ。君に捨てられるのがね」

「どうしてそんな……そんなこと思うの？宗一郎さんはいつだって優しく、怖いのはあたしのほうなのに。ねえ、何があったの？あたし、宗一郎さんの小説を読むたびにいつも思ったわ。きっとこの人は息が詰まりそうなくらい苦しい思いや、どうしようもない怒りや喪失感を極限まで知ってしまった人なんだろうなって……手紙にも同じことを書いていたかしら？」

はっきりと記憶してはいなかったけれど、大体同義的なことをファンレターに宛てて書いた覚えがあった。

「そうだね。真理子の手紙を読んで僕が感じたことは、きっとこの人は何も知らない人なんだろうなってことだったよ。ある意味では羨しいくらいにね。それで雄二から君の話を聞いて、はっきりと確信したんだ。汚れのない純粋無垢な人間が限りなく数が少ないにしても、世の中にはまだ生き残り続けてるものなんだなって。べつに僕の苦しみや怒りや喪失感なんて大したものじゃないよ。大分前にも言っただろ？狂気のひとつを発掘して、それを系統化することに成功した人間は、あとはもういくらでも他のことにそれを応用してしまえるものなんだって」

「宗一郎さん、汚れがなくて純粋無垢なのはあなたのほうでしょう？忘れたの？あたしのほうからあなたを誘ったのよ。もしかしたら創世記のエバがアダムに罪を犯すようそそのかしたのと同じことをしたのかもしれないわ。でもあたしはこうも思うのよ。アダムは誘惑されるのをずっと待ってたの。『エバが一言善悪の知識の実を食べようと誘ってくれさえしたら、自分も禁を犯す勇気が持てるのに』ってアダムが心密かにそう思ってることをエバは感じてたのよ。だから蛇の誘惑に負けてしまったの。宗一郎さんはずるいわよ。あたしが百回くらいどんなに宗一郎さんのことを愛してるか、力説しないと一番欲しいものをくれないのだから。何かの拍子に宗一郎さんと手が触れあうたびに、あたしがどんなことを想像してたかわかる？人に言えないようないやらしいこといっぱい考えたわ。だから宗一郎さんの言うようにちっとも汚れがないわけでも純粋無垢なわけでもなんでもないの。あたしがただの女だっていうことは宗一郎さんが一番よくわかってるでしょう？お願いだからそんなふうに神聖視したりしないで」

宗一郎さんの胸の上が微かに震えていて、彼が声をださずに笑っていることがわかる。

「真理子は本当に可愛いね。真理子のそういうところが純粋で無邪気だって僕は言ってるんだよ

。確かに人間は原罪の性質から逃れられないようにはできているけどね。ちょっと話は飛躍するかもしれないけど、クローン人間の实用化とか、ああいう倫理的にみて絶対にやってはいけないようなことを人間は全部やるようになるだろうと僕は思うんだよ。神の領域に人間が踏みこむことを神はよしとされないけど、人間は神から禁止されていることを必ず全部やってしまうようにできてるんだ。『この世の中に聖い者はひとりもない』っていう聖書の言葉どうりだよ。限りなく義人や聖人に近い人はいても、本当に本物の義なる人、聖なる人っていうのはこの世に存在できないものなんだと僕は思う。唯一過去にそういう人がいたとすれば、キリスト・イエスただ御一人っていうことなんだろうけどね、キリスト教的には。……ごめん、なんだかつまらない話をしちゃったな。ずっと抱きたくて仕方なかった人がすぐ隣にいるのに、宗教的な話をするだなんて抜けてるよな。もっとこうロマンティックな気の利いた話をするといいのかな、こういう時って」

あたしは照れていそうな彼に、そっと笑みを零した。

「いいのよ、なんにも言わなくても。ただ宗一郎さんが自分のことを話してくれたら、それだけであたしは嬉しいもの。でもそうね、例えば子供の頃はどんなだったかとか、そういう話をしてくれるともっと嬉しいかもしれない、あたしとしては。宗一郎さんってあたしから聞かないと、なかなか自分のことを話してくれないでしょう？自分で気がついてる？」

「ああ。自覚はしてるつもりだけど、人に話して面白いようなことが自分自身の中に見つけだせないっていうか、話してもつまらないだけのような気がしてね。退屈なだけだよ、きっと」

「なんでもいいのよ。あたしは宗一郎さんの声を聴くのがとても好きなの。一晩中聴いても全然飽きたりなんかしないと思うわ」

彼は溜息をひとつ着くと、明らかに気の進まないような調子ではあったけれど、身の上話を始めてくれた。

「僕が七つで弟が六つの時、母親が刑務所に入るっていうんで、僕らはふたりして施設に預けられることになったんだ。僕たちはふたりとも何故自分たちが母親と離ればなれにならなくてはいけないのか、理由を全然知らされずにわけもわからないまま孤児院で生活することになった。父親は最初からいなかったし、僕らにとって母親は女神にも等しい存在だったといってもよかったかもしれないな——たとえ殺人者であったとしてもね」

あたしが宗一郎さんの胸の上に手をのせたまま、身じろぎひとつせずに話を聴いていると、彼は不意にあたしの手をとって言った——

「怖い？」

いいえ、とあたしは否定した。

弟がいることも、お母さんのことも何も知りはずなかつたけれど、怖くはなかつた。宗一郎さんはもしかしたらこの時、自分の中に流れる殺人者の血が怖くはないかと聞いたのかもしれない。でもあたしの心の中にあつたのは、皮膚から皮膚へと流れる彼の生暖かい体温と、優しさとぬくもりと……ただそれだけだった。

宗一郎さんは胸の上であたしの手を握りしめたまま、話を続けた。

「母が人を殺して刑務所に収容されていたっていうことを知ったのは、僕が中学校に上がってか

ら間もなくの頃だったかな。それまではずっと僕と弟のために母は遠く離れたところで頑張っているとか何とか、上澄みの綺麗な理由を聞かされていたわけだけど、わざわざご丁寧に教えてくれた爺いが出てね、その人は施設の中でも一番尊敬されてるような素晴らしい人格の持ち主だったわけなんだけど、僕から言わせれば偽善者中の偽善者といってもいい人だったな。僕はその話を聞かされた時、その人にこう頼んだんだ——『弟にだけは本当のことを知らせないでください』って。母はね、一審判決の直後に精神を病んでしまって、精神病院内で自殺してるんだ。だから弟がもう少し成長して大人になった時に、精神病ではなく、他の違う何かの病いで亡くなったってことにしてもらえないだろうかって頼んだんだ。ところがその代わりになってそいつは言うんだよ。もう六十代も半ばっていう年齢のわりに全然元気なんだな、あっちのほうが。揚句の果てに『神はソドムやゴモラを滅ぼすべきではなかった』って言うんだから、笑える話だよ。要するに僕は——その日からそいつの男娼みみたいなものに成り下がったんだ。僕がもし拒めば、代わりに弟に同じことをすると言うし、抵抗はできても逃げることは許されなかった。僕は自分を助けてくれなかったキリスト教の神を激しく憎むようになって、次第に信仰の道から逸れるようになってしまったんだ。僕がそいつに犯されるのは決まってキリストの磔刑像のある、奥の部屋でのことだったからね——あんな偶像のようなものには何の力もないって嫌というほど思い知らされた。だから僕は半分カトリックで半分はプロテスタントなのかもしれない、今はね。仏教の仏典やイスラム教のコーランを読んだりして、他の異教の神々のことを調べたりもしたけど、どの教えもキリスト教の教えより一段劣るものとしか僕には思えなかったから……確かに仏陀の教えはとても素晴らしいと思うし、どの宗教にも共通する要素っていうのは結構たくさんあるものなんだけどね。だけど僕にはキリスト教以外の神はすべて否定しきれる要素を多分に含んでいるのに対して、イエス・キリストの存在を完全に否定することだけはどうしてもできなかったんだ。ただどう信じるか、その姿勢が問題なんだよ。信仰を全うするためにはね」

あたしには、キリスト教のことも信仰の問題のことも何一つわからない。ただ、宗一郎さんを傷つけた人のことを許せないって思った。こんなに優しく、心が広くて、醜い虫の一匹も殺せない人に、どうして神さまっていう人はそんなに重い荷物を負わせるのだろうって胸が苦しくなった。

あたしは宗一郎さんをぎゅっと強く抱きしめると、祈るような気持ちで彼の腕に鼻や頬をすり寄せていた。そうすることで、どんなにあたしが宗一郎さんのことをかけがえがないって思っているか、どれほど強く愛しているかが伝わればいいって思った。

「僕は十二年間施設にいたけど、最初の六年は天国で、残りの六年は地獄だったな。聖書の中に、神は人が耐えきれないほどの試練はお与えにならないっていうような箇所があるけど、そんなのは嘘っぱちだと思うようになってからがつらかった。僕はそれまで、自分が孤児院にいらってそんなことを不幸だとは一度も思ったことがなかったけど——僕には弟がいたし、他にも親がアルコール中毒だとか、暴力をふるうとかっていうんで施設に入ってる子供たちもいたからね。本当に本物の天涯孤独っていう子もいたのを思えば、僕なんか弟がいるだけでも幸せだってその頃は思ってたよ。だけど一度耐えられないような目に遭遇してしまうと、何もかもが不幸なように思えてきてしまうんだよな。母親が人殺しで、その血が自分の中に流れているってことも、

弟が里親に引きとられて自分だけが施設に残らなくてはいけなくなったことも、何もかもがとてつもない重圧のように感じられてくるんだ。弟を引きとってくれた夫婦は母の遠縁に当たる人なんだけど、本当は僕と弟とふたり一緒に引きとってくれるはずだったのに、修道院の長老が後ろから手を回したらしくてね——『兄のほうは素行に問題があるから、今暫くの間矯正が必要である』とかなんとか言ったらしいんだ。弟は僕と一緒にじゃなきゃ絶対に嫌だって別れる時にさんざん泣いたりごねたりして、説得するのがすごく大変だったよ。そのせいかどうか、僕の中で弟の精神年齢はその時から止まってる感じなんだけど、今じゃ弟のほうが僕より背が高く、体格もがっちりしてるからふたり並んでると法頭のりあきのほうが兄貴みたいなんだ」

宗一郎さんは兄弟の思い出に耽っているみたいで、少しだけ笑っていた。

「宗一郎さんの弟さんってどんな人なの？」

「そうだな。僕より五センチくらい背が高く、横幅もあるから、僕みたいに貧弱な感じじゃ全然ないんだ。多分弟のほうが見た目も格好いいんじゃないかと思うけど……今は医者になってね、親の病院を継ぐつもりでいるらしいよ。お互い忙しいから年に数えるくらいしか会えてないんだけど、クリスマスには毎年必ずカードを送りあったりとかはしてるんだ」

「あたしはひとりっ子だから、兄弟ってなんだか羨しい感じがするわ。でもあたしがもし……もしもずっとここでこうして宗一郎さんと暮らしたとしたら、あたしにとっても弟っていうことになるのよね？宗一郎さんの弟さんは」

結婚、の二文字は流石に重すぎて、言い出すことができなかった。だけど宗一郎さんは優しくあたしの頭を抱いて、額に口付けてくれた。

「結婚しよう、真理子」

一瞬、彼がどんな言葉を話してるのか、理解することができなかった。

——ケッコンシヨウ、マリコ。

意味のわからないカナ文字がばらばらになって浮遊していて、日本語に再び訳す作業に手間どってしまう。

「それとももう嫌になった？僕みたいな者と一緒にいるのは？」

「まさかそんな——そんなことあるわけないわ。じゃあ明日の朝になっても出ていかなくていいのね？ずっとここにこうして宗一郎さんのそばにいてもいいの？」

あたしは半分起き上がった体勢になると、縋りつくように宗一郎さんの体をかき抱いた。それから宗一郎さんがそうしてくれたみたいに、彼の首筋や胸に何度もキスした。

「いいよ、真理子。無理しなくて。それにくすぐったいから」

宗一郎さんは声にして笑ってしまわないようにと、左の手のひらで口許を押えている。そして右手でナイトランプを点けると、体勢を裏返しにしたのだった。

淡い明かりの色のせいで、宗一郎さんの顔や体の輪郭が闇の中にはっきりと浮かび上がってくる。宗一郎さんにとってあたしもそうなのに違いがないと思うと、羞恥心の火が体の芯に灯って、それが体の表面の皮膚にまで敏感に現れてくるような気がした。

「消しては駄目？」

「駄目だよ。真理子の体を全部きちんと見ておきたいんだ。真理子が一番見られたくないって思

っているところも、一番感じるところも全部」

視線を下に向けると、宗一郎さんがどんなふうに愛撫してくれているのかがはっきりと見えて、あたしは目を閉じることしかできなかった。

何も感じていないふりをしたくても、彼の指先がほんの少し動くだけで、体内が熱に冒されていくのがわかる。あたし自身よりも宗一郎さんのほうがあたしの体のことを深く知っているような気がして、変な気持ちになる。

宗一郎さんは足の爪先からふくらはぎ、太腿、背中の筋に至るまで、何かのしるしを求めるかのように執拗なくらい愛撫を繰り返していて、あたしが耐えられなくなって懇願しても聞き入れてはもらえなかった。

あたしは彼の体しか確かなものは何もない世界に放りだされて、そこで精神と肉体との強固な結び目を官能によってほどかれていた――自分は今もうこの人なしでは一呼吸する間も生きてはいられないだろうと、すべての感覚が訴えてくる。

「……あたし、きっと必ず、いい奥さんになるわ」

彼の首に手を回して耳元でそう途切れ途切りに言うと、宗一郎さんはただ頷いていた。

「絶対に、宗一郎さんだけに尽くして、毎日、宗一郎さんのことだけを第一に考えて……年をとっても幸福に、暮らすの」

あたしは宗一郎さんに黙らせられるまで、どんなに彼を愛しているかをうわ言のように繰り返していた。それから一生彼以外の誰をも愛さないことを誓ったりもした。ただ、この時はあまりに夢中で気づかなかったけれど、彼はあたしにどんな言葉をも返してはくれなかったのだった。

宗一郎さんに抱かれたあと、体中のすべての毛穴から毒気を抜かれてしまったように、あたしは彼の体にしなだれかかっていた。その腕の中でまどろんで、柔らかな意識の波の上をこのまま目覚めずに彷徨っていたって思った。

やがて朝焼けが家や庭を縁どって映える頃、宗一郎さんとふたりでその中に佇んでいるだろうことを考えただけで、これ以上もない至福感が体を貫いて胸を突き抜けていく。真新しい幸福の中に身を置き、確かな幸福の基盤がひとつひとつ形造られていくことに思いを馳せるのはこの上もない歓びだった。

宗一郎さんにすべてを委ねて任せておけば、なんらかの大きな揺るがしがふたりを襲ったとしても耐えられるに違いなかったし、すべては安息のうちに保たれていくだろうという確たる自信があたしの内にはあった。時の流れゆくままに深いところを流れる愛情が平安を育てて、互いの間を行き来していくのに違いない、とそう思っていた。そして日々は守られていくのだろうと。

永遠を手に入れた――あたしはそう思いながら両手の隙間から零れ落ちる幸せの白い砂を掬っては落とし、掬っては落として、飽きることなく夢の中で繰り返していた。恐れることも疑うことも知らない子供のように、愛する人の傍らですべてが約束されていることを信じきっていた。

本当はこの時、永遠の半分を手に入れたのに過ぎなかったのに。そしてもう半分は宗一郎さんがあたしの手の届かないところへ持っていこうとしていたのに。

眩い光に手を引かれるようにして目が覚めると、ひんやりとした空気が肩の肌やシーツの外を覆っていた。あたしは無意識のうちにも温もりを求めて、すぐ隣にいるはずの人に手を差し伸ばしていた――そこにはあたしの欲しいもの全部を凝縮したかのような存在が横たわっていて、意識が目覚めるのを待っているに違いなかったから。それなのに、伸ばされた指先がシーツの上を滑って確かめたのは、愛しい人の不在とその冷たいぬくもりだけだった。

あたしは霧の中で舟を漕ぐのをやめて、はっきりと瞼を開けることにする。そして上体を起こすと、自分の体を掛け布団と一緒に抱きしめた。

夜の中で宗一郎さんの力強い腕がどんなだったか、細長い指がどんなふうに肌の上を滑っていたか、唇のあとが肌の上に焼きついたように浮かび上がってくるのを感じると、裸身が熱くなった。消せない刻印のように体全体に刻まれたそれが、生々しく鮮やかに、一気に甦ってくる。

昨夜宗一郎さんにされたことを考えると、熱情が胸の谷間を焦がして下へ下へと流れていくのを感じる――水が破れて堰き止められない流れとなってしまったみたいに。

いつから自分はこんなに変わってしまったのか、よくわからないままに床の上の冷たいスリッパを身に着け、なくてはならない人の姿を求めて階下へと降りることにする。

体はいつもの朝以上に重力の締めつけを感じて重く、心地好い解放のあとの幸福な疲労感が軀を覆っていた。体中がきしみの声を上げて女としての歓びを口ずさみ、新しく生まれ変わったことを祝福している。

あたしはそっと足音を忍ばせて下の寝室へいくと、ニットのカーディガンを上羽織り、下に膝丈のスカートを履いた。そして宗一郎さんを驚かすために、また忍び足でキッチンのダイニングへと歩いていくことにする。けれどもそこにはあたしの探し求める人の姿はなく、しんとした澄んだ静寂しか聞こえてはこない。冷蔵庫のサーモスタットの入る音くらいしか空気を振動させる音らしい音が存在しない。

どこがどうというわけではないのだけれど、あたしはなんとなく変だなって思った。いつもなら飲みかけのコーヒーの入ったカップと新聞とが仲良く並んでいるのに、卓上には調味セットしか置かれていなかった。コーヒーメーカーも豆の香ばしい良い匂いを漂わせてはおらず、あたしは今度は庭の中に宗一郎さんの姿を見出だすべく、居間からテラスへと移ることにした。

本当は彼が必ずといってもいいくらい飲み残しているコーヒーに口をつけるのが毎朝の密かな楽しみだったのに――あたしは朝の始まりを告げる日課を奪われたことをとても残念に思った。

宗一郎さんは寝坊をしてしまったから、それですぐに庭仕事にとりかかったのかもしれない。「宗一郎さん？」

あたしはテラスの白樫から彼の名前を愛情をこめて呼び、返事が返ってくるのを数瞬待った――けれども返ってきたのは赤く色づいたナナカマドにとまる雀の囀りくらいなもので、あたしはサンダルを突っかけるとテラスの階段を降り、庭のすべてを見渡すことにした。

「――宗一郎さん？いるんでしょう？」

木の影か何かに隠れていて、彼の姿がてっきり見えないのだとばかり思っていた。

「宗一郎さん！」

もう一度強い調子で大きく呼ばわってみても、彼からの返答はなかった。

雀たちが朝の歓談や身繕いをやめ、驚いたように飛び去っていく。

あたしはガラス張りの温室の中にも、菜園にも、薪割場にも彼の姿がないのを見ると、急いで家の中へと戻り、室内の階段を駆け上った。書斎のドアをノックして、ほとんど返事を待つこともなしに扉を開ける。そしてその不在が確定してしまうと、いよいよあたしの頭は混乱し、焦りはじめていた。

大股で部屋の中を意味もなく歩きまわり、彼のいない理由を色々な可能性の中から考えてみる――どこかに隠れていてあたしを驚かそうとしているとか、そんなことではないような気が、直観的にしていた。

あたしはとりあえず家中のすべての部屋を見てからまた考えようと思い、書斎をでようとした時、机上有るいくつかの茶封筒に目が留まった。

いくつかはその分厚さや表に書き込まれた出版社名から原稿であることがわかったけれど、ひとつだけ薄っぺらな封筒があるのにあたしの意識は引きつけられていた。

中を開けてみると、習字の墨で厳かに遺言状と書かれた長方形に折り畳まれている和紙と判の押された婚姻届け、それから一通の手紙が出てきた。

――最終的にこうなってしまうことを許して欲しい。

真理子をさらった夜、僕は自分でも自身が何をしようとしているのかまるでわかっていないような状態で、次の日には何故こんなことをしてしまえたのかと、自分で自分が恐ろしいくらいだった。君を僕自身の抱える混乱や狂気に巻きこむつもりなんてなかったのに、最後の最後にとる僕の行動は真理子をもっとも深く傷つけることになるのかもしれない。

僕が死にとり憑かれていたのは何年も前からのことで、ずっと死ぬことばかりが頭の底に張りついて離れない時期が続いていた……それなのに、真理子の存在を示すその生命力は僕に死の力を忘れさせてくれた。

神さまが僕の人生の最後に真理子のような人を与えてくれたことを本当に心から感謝している……だからきのうのことは一夜限りのことと思って忘れて欲しい。

真理子には僕の我が儘のために迷惑を被らせてしまうことになるかもしれないけど、あとのことは弁護士と相談してうまく対処してほしいと思う。

心からの愛を込めて――

佐京 宗一郎

あたしは手紙のすべてを読み終わると、震える足を勇気づけてなんとか走りだそうとした。

お風呂場や他のまだ見ていない部屋を調べて、彼が首を吊ったりなんかしていやしないかと、恐ろしい気持ちでドアを開けては、ほとんど半狂乱になって家中を走りまわった。

――この時のあたしの気持ちが、宗一郎さんにわかるだろうか？

遺書の二文字を見た時、息が止まりそうになったあたしがどんなだったか、だからといって茫然自失としてもいられない者の気持ちが彼にわかってたまるものかと、あたしは今でもそう思う

。 心臓の音はかき乱され、呼吸は切れ切れになり、無意識のうちにも涙が滂沱とあふれてくる――早く安心したいと、ほとんど強迫的といってもいいくらいあたしの心は泣きながら願っていた

。 まだ彼は実際には死んでおらず、なんとか息のあるところをどんな形にせよ発見して、生きる望みを繋ぎたいと、そう思っていた。

あたしはこの家へやってきてから初めて玄関の扉を自分で開け、それから庭を囲っている垣根を回ってガレージの扉を両手に力をこめて一息に持ち上げた。そしてそこを開けっ放しにしたまま、波の見えるだろう方角へと走り出したのだった。

車があるということは、そう遠くへは行っていないはずだった。

もう間に合わないかもしれないと思うと、宗一郎さんが青い海と白い波頭の間さらわれて消えていってしまいそうな気がして、視界がまたどんどんぼやけてきてしまう。

どうしてこんなことになっているのか、考える余裕さえどこにもなくて、息がどれだけ苦しくなろうと、足がよろけて転んでしまおうと、ただひたすら走り続けて海岸線の見えるところまで辿り着くしかなかった。

途中、宗一郎さんの家と同じようにぽつんと孤立した家の脇を通りかかったけれど、庭先の老夫婦に声をかけようという気さえ起きなかった。

『背の高い人がここを通りかかりませんでしたか？』

そんな単純な問いかけすら思い浮かべられないくらい、あたしは頭の中を真っ白にして、ただひたすらに海の青さだけを目指していた。その家からもう数十メートルもいったところに紺碧の海は迫ってきていたし、波の音のはっきりと聞きとれる距離にまで早く近づきたいと、あたしはそれだけしか思い浮かべることができなかった。

砂浜にようやく辿り着くと、ひときわ高い崖壁に、海鳥たちが何十羽と群れをなして巣を作っているのが前方に迫ってくる。

「宗一郎さあん！」

はっきりと、懸崖の上に彼の姿を見出だしたわけではなかった。けれどもあたしは砂まみれになりながら、足が時々もつれそうになりながらも波打ち際に沿って走り、崖のすぐ麓にまでくる頃には、飛びかうカモメの白い羽の中に、宗一郎さんのブラウスの白さを見出していた。

間にあつたと、潮風に髪をもみくちやにされながら、半ば安堵して、半ば緊張の抜けきらないまま、岩でできた天然の階段を早足に上りつめ、ほとんど倒れこみそうな形で宗一郎さんの立っているその崖の縁へと近づいていく。

「よく、ここが――」

「わかるわ、そんなことくらいちゃんと。宗一郎さんがどこへ行っても、あたしにはきちんとわかるの。だから早く家へ帰って話し合ひましょう。こんなに朝の早い時間からあなたがどんなにひどいことをしてるか、家に戻りさえすれば、きっとわかるに違いないもの。さあ早くこっちへきて。じゃないとあたし、凍えて死んでしまいそうだわ」

宗一郎さんはいつからここにこうして立っていたのか、蒼白な顔をして、白い息を吐いている

。

「僕が死ぬのは何も真理子のせいじゃなく、ただ僕自身のせいなんだ。だから……」

「いいのよ、宗一郎さんは絶対に死んだりなんかしないから。それともあたしでは駄目なの？あたしでは満足できないってことなの？もしそうなのならはつきりそうだと言って。綺麗ごとで片付けてしまおうとする前に、本当のことを話してほしいの。とにかくお願いよ、早くこっちに、あたしのほうへ向かってきて」

あたしが手を差し伸ばしても、彼は首を振るだけだった。

「ごめん、真理子。本当に僕はもう駄目なんだ」

「大丈夫よ。あたしがいるわ。あたし、なんでも宗一郎さんの言うとおりにするし、あなたのすることはどんなことでも大人しく受け入れるわ。右を向けて言われたら右を向いてるし、左を向けて言われたら左を向いて、黙ってろって言われたらそのとおりに黙るわ。だからねえ、早く手をとってこっちに……」

あたしが一歩踏みだすと、宗一郎さんも半歩ほど後ろへ退がり、自殺する意志があらうとなかろうと、立っているだけでも危険な、ぎりぎりの崖の先端のところまで後退さっていた。

相手を刺激することなく、もっとも効果的な言葉を口にするべきだとは、頭のどこか片隅のほうでわかってはいた。彼の心が生きるほうへと天秤を傾けられるような言葉を……。

(愛してる、宗一郎さん)

一瞬にして思い浮かんだ言葉を唇で示そうとしたちょうどその時、強い横殴りの風が切り岸の上を襲ってきた。そして宗一郎さんはまるでその風を合図とするかのように、ふわりと後ろへ吸いこまれていってしまった——その直前に彼の唇が動いたのははっきりとわかったけれど、風の音であたしには何も聞こえはしなかった。

「……宗一郎さん！！」

一秒と間を置かずに駆けだして、崖下を覗きこんで見ても、彼の姿はどこにも見当たらなかった。彼を飲み込んだはずの波は穏やかでまるで風にさらわれでもしたみたいに、なんの痕跡も眼下には見出せない。そのせいかどうか、あたしには宗一郎さんが死んだのだとは、どうしても思えなかったのだ。

確かにこの時、奇声を発して、海鳥の泣き声にも負けぬほどの大声で何ごとかを口走った覚えはある。けれどもそうしたあとにあたしはすぐ、彼は絶対に生きているという強い確信を捨てきれずに、その場をあとにしていた。

そんな力が一体身内のどこに残されていたのか、あたしは見えない力に突き動かされるかのように、元来た道を引き返していた。そしてひた走りにひた走り、先程の老夫婦を見かけた庭の塀ごしにこう叫んだ。

「助けてください！人が海から落ちたんですっ！」

海カラ落ちタ、というのは正しい言葉遣いではなかったけれど、あたしは庭と自分を隔てている塀の格子をへし折らんばかりに掴んで間違いなくそう叫んだような覚えがある——とても自分の声とは思えないような、ひどく上ずった声で。

庭にはびこっている雑草を余念なく引き抜いていたらしい白髪のお夫婦は、すぐに木柵の門を開いてあたしを家の中へと迎え入れてくれた。

おじいさんは119番に電話をかけ、場所や何かを説明するのにあたしから必要なことを聞きだすと、それを相手に的確に伝えてくれたみたいだった。

「すぐにこちらへ向かってくれるそうだ」

おじいさんは電話を切ると、しっかりしなさい、と言ってあたしの肩を励ますように叩いてくれた。それから外套掛けのところのコートと帽子を取ってきて、身支度を整えている。

「わし達が崖のところまで行ったとしても、なんにもなりはしないかもしれないが、それでも万にひとつの望みがあるかもしれない。一緒にいくかね？それともここにばあさんと残って連絡を待つことにするかね？」

行きます、とあたしは即座に答え、うまく力の入らない体を無理矢理気力で起こそうとした。奥さんがあたしに「今日は風が冷たくて寒いから」と言って、毛糸で編んだカーディガンを貸してくれた。ほんの少しだけ樟腦の匂いがして、懐かしい古い思い出が一瞬だけ胸をよぎったような気がした。

雲ひとつない水色の秋空の下を、おじいさんとあたしは一言も言葉を交わさないままにただ黙々と歩いていた。そして崖のすぐそばまで来た時に、不意におじいさんのほうが立ち止まったのだった。

「見てごらんなさい」

おじいさんはあたしの着ている薄茶のカーディガンをどこか乱暴に引っ張ると、崖の側面を指差していた。

あたしははっきりおじいさんが海鳥の巣を指しているものだとばかり思っていたけれど、よく目を凝らして見ると、海に面した崖の中央あたりから、樹の枝が張りだしているのがわかった。あたしはその樹木がもっとよく見えるようにと、海の中へ膝丈ほどまで浸り、はっきりと人が引っ掛かっているらしいのを確かめたのだった……！

冷たい海の中で足の感覚が麻痺してしまっても、あたしは立ち尽くしたままの格好で、涙を殺して泣いた。おじいさんが引き戻そうとしてくれなかったら、いつまででもそうしていたかもしれない。

助かった、と思うのはまだ早かったかもしれないけれど、希望が胸に差すのを止めることはできなかった。

「あなたが彼の妻なのなら、祈りなさい。夫婦は二心を持つのではなく、ひとつなのだから。そのひとつの祈りを神は必ず聞いてくださる」

崖の麓のところまでくると、海水に濡れて冷たくなったあたしの手をおじいさんはがっちりと組み合わせながらそう言った。

あとになってすべての事がある程度落ち着いてから知ったことなのだけれど、このおじいさんは教会の牧師を隠退なさったばかりの方で、現役の頃はキリスト伝道界にその人ありと言われたほどの、大変に高名な方なのらしかった。

「神よ、十字架にかかられたイエス・キリストよ、その血潮にかけて彼の命を救い給え」

あたしはおじいさんの言う言葉をそのまま繰り返して、岩場に頭をこすりつけて、ただひたすら祈った。

イエス・キリストが宗一郎さんの神であるというのなら、彼を黄泉の手から救いだしてほしいとそれだけを一途に願った——でも祈っている途中で心の中に文句を言う声があったのも確かだった。

どうして宗一郎さんをこんな目に遭わせるのか、あなたは本当に神なのかと心の内で疑いもし、また罵ったりもした。宗一郎さんを助けてくれなければあなたなんて神さまじゃないと挑発したり、助けてくれなければ一生恨んでやると、恐れることなしに神という存在に対して脅しつけたりもした。

救急車やパトカーが到着して、救助の人たちが宗一郎さんの体を引き上げている間、あたしはただひたすら一心に祈り続けていた。そして血まみれになっている宗一郎さんの体が樹上から取り降ろされて救急車に運び入れられると、あたしは救助隊員のひとりに促されて、その中に乗車したのだった。

牧師のおじいさんは警察の人に話を聞かれているようだったけれど、どんなことを話していたのかまではわからなかったし、そんなことを心に留める余裕もなかった。

血も凍る思いというのは、きつとこういうことをいうに違いなかった。樹木の枝に引き裂かれて、彼の血が真っ赤に赤く綿のブラウスに染みこんでいるのを見ると、気を失いそうになった。

「大丈夫だ、生きている！」

という声を聞いた時、あたしは祈っていた頭を上げると、また堰を切ったように涙が溢れてくるのを止められなかった。そして救急車の中でもまだ泣きじゃくっていたのだった。

救命隊員の人たちが宗一郎さんの衣服を鋏で裂き、応急処置をしたり酸素マスクを口許に当てたりしている間、あたしは神さまに感謝の言葉を何度となく呟き、それから彼が無事助かりますようにとそれしか言葉を知らない者のように繰り返した祈っていた。

救急車は市内の総合病院の玄関口に乗りつけ、宗一郎さんは担架からストレッチャーに移されると、そのまま手術室へと運ばれることになった。

救急救命士のひとりが患者の状態を慌ただしく申し送りすると、宗一郎さんは医師と看護師の手に委ねられることになり、手術室のランプが赤く灯っている前で、あたしはただ呆然と立ち尽くしていた。エレベーターの中で「奥さんですか？」と看護師に早口で尋ねられたけれど、あたしはただめそめそと涙を零し、子供のようにうんうんと頷くことしかできなかった。

ビニール張りの長椅子に腰掛けてからも、あたしはひとしきり泣いて、気分が落ち着いてくるまでに大分時間がかかった——とはいっても、時間の感覚が麻痺していて、なんだか時の刻みこみのない空間にひとりきりで閉じこめられてしまったかのような、奇妙な錯覚が抜けきらなかった。そしてだんだんと五感が冷静さをとり戻してくると、濡れたスカートの裾のことなんか少しだけ気になったけれど、そんなことは些細な、どうでもいいことだった。溜息を着くという気にさえなれなかった。何もかもが憂鬱で物憂げなのに、不安と緊張の糸が四方八方から伸びてきて、首や腕や足に絡みついて離れることなく五体を締めつけている。

あたしは思いだしたように再び祈り始めていた。

あたしの持っているものはすべて取り上げてくれて構わないかわりに、宗一郎さんの命を助けてくださいとそう祈った。

究極的、局地的な状態に置かれた場合、自分がいかに無力で力のない存在であることを認めて、これからは毎日お祈りを欠かすということを絶対にしないことを天地を形造られた方に固く約束した。毎日必ず欠かさずに宗一郎さんを助けてくださったことを感謝するのを忘れません、とも。

その時、人間同士が小指と小指で約束を確かめるのにも似た、何者かとの強い繋がりを感じて、あたしは閉じていた瞼を上げた。

宗一郎さんと初めて繋がった時にも似た感触だった。

もはや自分の心も体も魂も自分だけのものではなく、捧げられるべき、また与えられるべき存在であることが一番深いところに刻みこまれて、永遠に消えない印のようなものが押された気がした――精神と肉体とを結ぶその境目、魂の入口のところに。

ただ、ひとつだけあとになって後悔したことは、神さまでも他のどのような存在でもいいから彼を助けてくださいと祈ってしまったことだった。自分が唯一無二であられる主なる神に、イエス・キリストと契約を交わしたのか、それともまったく違う混合的な霊的存在と約束をしてしまったのか、感覚的な識別がはっきりとはつけられなくなってしまったから。

けれども瞳を閉じて祈っている間、視界は当然暗かったのに、突然白い光が開けてきた時、祈りが聞かれたような気がして心が安らかになったのを今でも覚えている。外は晴れ渡っていたけれど、手術室の前の廊下には近くに窓というものがなく、薄暗い壁が陰気な影を落としているばかりだった――それにも関わらず、何故そのような不可視の光が角膜に飛びこんできたのか、あたしにはわからない。

鉛色をした時の砂がすべて落ちる頃、手術室から出てきた医師は白衣の下に術着を隠すようにしながら手術の経過を簡潔に説明してくれた。

「佐京さんの奥さんですね？」

あたしはこの時も「はい」とただ素直に頷いた。

「手足の打撲や切り傷は出血のわりにそう大したものではないのですが、頭を強く打っていて、挫傷しています。止血はしましたが、今後身体の機能に障害がでる可能性があると思います。あるいは意識が戻った時に多少混濁していたり、または……意識障害の起きる可能性があります。つまり……非常にこの場では申し上げにくいことなのですが、最悪の場合、植物人間のようになってしまう可能性があるということも、覚悟しておいていただきたいと思います。もちろん術後の経過を看てみなければなんとも言えませんが……」

そのあと、この若年の医師が何を話したのか、あたしの鼓膜は聞きとれていなかった。突然耳鳴りがして、医師が口を動かしているのをただ馬鹿のようにぼんやりと眺めていた。まさか自分に聞きたくない言葉を抜き去るという特技があるとは、この時まで知りもしないことだった。

「……そうですか、わかりました」

医師の唇の動きが止まると、あたしはなんとかやっとそれだけを言うことができた。そしてまるで自動人形か何かのように再び椅子に座り、お尻がそこに固定されてしまったみたいに、微動だにすることができなかった。

看護師さんが手術室の自動扉から出てくると、宗一郎さんを乗せたベッドが運ばれていくとこ

ろだった。

「ICUに移りますから」

先に出てきた看護婦がきつい眼差しで短くそう言った。

「まだ軽い処置が残ってますから、終わってから呼びますね」

あたしが一緒についていこうとすると、ベッドの後ろのほうを押していた看護婦が同情を込めた表情で優しく言った。そしてICUに通じる扉は閉じられてしまったのだった。

宗一郎さんの髪の毛は綺麗に刈り上げられていて、患部には厚手のガーゼが当てられていた。顔は雪花石膏のように白く、触れたら冷たい感触が伝わってきそうなくらい、血の色が失せていた。

あたしは脱力感に打ちのめされて、あのベッドに横たわっているのが自分だったらどんなに良かったらと思うはずにはいられなかった。

その後、看護師はなかなか呼びにきてはくれなくて、ひとりきりでいるのはひどく心細いことのように感じられていた。自分には宗一郎さんしかいないことを嫌というほど思い知らされて、生きる意欲のようなものが見る影もなく損なわれていく。それでも悪い方向へと物事を押し流そうとする勢力にはかろうじて打ち勝ってはいた。

宗一郎さんが入院している間、離ればなれでいなくてはならないかと思っただけでもつらいのに、その上彼の身の上になにか良くないことが起こった場合に備えるだなんて、どうあってもできない相談でしかなかった。

——どうしてせめて一言、一緒に逝こうと持ちかけてくれなかったの。

もちろんすぐには頷けはしなかったろうとは思う。だけど相談してくれさえしたら、きっと何かが変わっていたに違いないのに。

宗一郎さんがいなければ、生きていくことにどんな付加価値をつけることも、その意味を探求することも、日常に関わる生活の何もかもが虚無へと通じてしまうに違いなかったから。

「帰ってきて……早く目を覚まして」

呻くように呟いていると、「こちらへどうぞ」と先程の看護婦のひとりがICUへと案内してくれた。

あたしはスリッパを履き替え、白衣を着用し、ナイトキャップのような水色の帽子を被ると、最後にマスクをした。それから両手をスプレー式の消毒液にこすりあわせるようにしてから、ようやく宗一郎さんと面会することが許されたのだった。

ところが面会時間は短く限られていて、あたしは宗一郎さんの手指を握ったかと思うと、今度はすぐに医師と面談室で先程よりも詳しい説明を順を追って聞かなくてはならなかった。脳のCTを撮影したところ、左脳の一部から出血があり、止血はしたものの腫れは残っているとのことだった。つまり腫れが引かないと、どのような障害が今後でてくるかはわからないということらしい。

あたしが医師との面談を終えると、^{みぶ}美武という女刑事が待ち構えたようにナースステーションの奥の待合室にいて、事情の取り調べを受けることになった。そしてあたしは自分が行方不明になっており、警察に捜索願いが出されていることを知らされたのだった。

当然ながら事の成りゆきを聞こうとする刑事に、あたしは真実の片鱗を垣間見せるような話しがしなかった。事実を多少歪曲して説き明かし、自分が佐京宗一郎とかなり以前から恋仲にあったことなど、嘘や偽証を織り混ぜながら語ったのだった。

自分は大分以前から佐京と心を通わせていたのだが、当時のあたしは彼の友人とつきあっていたため、関係を周囲の誰にも気取らせないようにしていただとか、それでも佐京の強引さに負けて、二か月ほど前から一緒に暮らし始めたのだ――などなど、良心の許すかぎりの嘘を、紛れもない真実であるかのように装って、あたしの滑らかな舌は頭が命令を下すよりも早く動いていた。

「それにしてもしかし――」

涙ながらに語るあたしに対して、不審な点を拭いきれないとでもいうように、美武刑事は疑問を投げかけてくる。

「両親や友人に連絡することくらいできたはずでしょう？確かに旅行にでかけるとは実家の留守電に言伝していったようですが、一月以上も部屋を空けるだなんてアパートの大家さんも聞かされてないんですよ？あなたは聞くところによると、近所ではとても愛想のいい、真面目なお嬢さんだというふうにお話を伺ってます。そのあなたが家賃を滞納したり、そういう社会人の責任感を欠いた行動をとるのは考えにくいと思って御両親やお友達みんながどれだけ心配したか、あなたはそれをどう考えて……」

あたしは三十がらみの女刑事の科白を遮ると、こう言い返した。

「ただ夢中だったんです、あたしたち。それまでは人目を気にして憚ったり、会いたいのを我慢したりしていたのに、あそこでなら――人里離れたような場所でなら、誰のことを気にする必要もなくって……時間が流れるのも忘れ去ってしまうくらい毎日が幸福で仕方ありませんでした。だから今回のことは本当に事故なんです。彼には夢遊病のような、夜中に抜けだす癖があって、あたしは心配して探し回ったりすることが前から時々あったんです。今朝も岬のところで彼の姿を見つけて、あたしは『帰りましょう』って言ったのに、なんだか彼は夢うつつのようなぼんやりした状態で……そのまま突然なんの前触れもなく海を背に後ろから落ちていってしまったんです。あたし、心臓が破裂しそうなくらい今も苦しくて、もうどうしたらいいか……」

あの、宗一郎さんが倒れるように落ちていった瞬間のことが、たった今目の前で起きていることのように、あたしには思い起こされる。

あの時彼は「愛している」と言ったのか、それとも「ありがとう」と言ったのか、それはわからなかったけれど、胸が絞られるくらいにぎゅっと掴まれて、涙がまた零れ落ちてくる。

美武刑事は慰めるようにあたしの背中をさすり、それ以上は何も聞こうとはしなかった。そして「後日また伺うことになると思います」と言い残して、病棟の待合室から出ていったのだった。

あたしはその夜、待合室のカーペットの上で、看護師さんが貸してくれた毛布や布団にくるまって眠った。

できるだけ宗一郎さんのそばにいないと、彼があたしの手の中に戻ってきてはくれないような気がして、怖くて震えがきそうなくらいだった。

あたしは堅いカーペットの上で眠りに落ちる間にも、毛布の下で手を組んで祈っていた――明

日こそ、宗一郎さんが目を覚ましてあたしの名前を呼んでくれますように、と。

次の日の朝早くに、両親が見舞いではなく、あたしを連れ戻しに病院へやってきた。

何が大変といって母を宥めすかして帰らせようとするのほど、骨の折れることはなかった。

「どれだけ周囲の人に迷惑と心配をかけたか」に始まって、あたしが事情を説明する合間にもなんだかんだと小言を挟み、そして最後には「二股をかけて男とつきあうような、そんな娘に育てた覚えはない」と人目も憚らずにあたしの左の頬を打ち据えたのだった。

あたしはそれ以上何も言えずに黙っていた。斜め向かいの席に座っている人がじっとこちらのほうを見ていたけれど、恥かしいと感じるような余裕はあたしにはなかったし、母もおそらくは同じだったろうと思う。それから暫く沈黙が続いたあとに、お父さんが助け舟をだしてくれた。

「まずは真理子が無事で何よりだったよ。今度のことはなんて言ったらいいのかわからないけど、真理子が彼の望んでいると思うとおりにするのが一番いいんじゃないかな。父さんも若かった頃に一度、死んでしまおうと思って——もちろん、佐京君の場合は事故だったんだろうけど——服毒自殺を図ったことがあったけど、今は生き残ることができて良かったって本当にそう思うよ。そのあとも何度か『ああ、やっぱりあの時死んでいたら……』ってつらいことのあるたびに考えたもんだったけど、半分死にかかりながらもね、それでもやっぱり生きてるほうがいいもんだって父さんは思うよ。彼の小説を一冊だけ前に読んだことがあったけど、魂の懊悩の深い人なんだろうなっていうことが感じられたし、その、なんていうのかな……真理子と彼の間のことを父さんは何も知らないわけだけど、多分今度のことは真理子のせいではなくて、彼自身の問題だったんじゃないかな。決着を着けるためにはこうする以外にないくらい彼は追いつめられて、それでも真理子には知られたくなかったんだろう。さっき、一分の隙間もないくらい幸福だったって真理子が母さんに言い返したみたいに、本当にそうだったのなら、きっと宗一郎君はそのままにしておきたかったんだよ。うまく言えないけど、つまり……そういうことだったんじゃないかって父さんはそんな気がするな」

母さんは父さんが若い頃に死のうとしたことがあるだなんて、初めて聞かされたのかもしれない。口も聞けないくらい驚いたような様子で、父さんの横顔を見入っている。

父は大学で哲学の教鞭をとっている人なのだけれど、家ではそういう蘊蓄を垂れたことのない人で——母があまり哲学的な人ではないこともあって——もともと寡黙な性格をしているし、娘のあたしにとって普段は空気よりも軽いような存在でしかなかった。

あたしはこの時、何故か突然、父の言葉によって重い何かが背中からのしかかってくるような感じがして、言葉を失っていた。

それまでは宗一郎さんがこれから目を覚まして、怪我の病状が回復に向かって、また元のように暮らせる時が一日でも早く訪れるようにと、そう望んでばかりいた。でも宗一郎さんがもし深い懊悩のために一時的な錯乱を起こしたのではなく、あたしとのことが引き金になって、長い間引きずってきた問題に決着を着けようとしたのだとしたら——ある意味、今回のことはあたしの存在が引き起こしてしまったことなのではないだろうか？

精神の縦糸と横糸とが、複雑な模様を脳裏に張り巡らし、その抽象的な模様の意味をあたしに

解き明かすよう、求めてくる。

母はあたしにも父にも何も意見しようとはせずに、珍しく落ちこんだような表情で、心労が一気に押し寄せてきたかのような、気落ちした顔をしている。あたしはそんな様子の母を見ると、初めて心配をかけてしまったことを申し訳ないように感じた。

「余計なことを言ってしまったかもしれないけど、父さんの言ったことが的外れでも佐京君にはきっと間違いなく真理子が必要だと思うから、一緒にいてあげるのが一番いいだろうし……彼が生きる意欲をかきたてられるためにもね」

最後にそう言い残して、父は母を連れて帰っていった。

母さんにとってあたしはまだ子供でも、父さんにとってはもうひとりの歴とした大人なのだと、そんな気がした。

来た時には、気の進まない父さんを母さんが無理矢理引っ張ってきたような印象を受けたのに、帰る時には父さんが黙って母さんを従わせていた。

あたしはエレベーターのところまでふたりを見送って、そこでふたりにお礼とお詫びの言葉を言ったけれど、お母さんはやっぱり何も言葉を発したりしなかった。そしてあたしが待合室へと再び戻ってくると――ICUへはまだ入れないということだったので――丸いサングラスをかけた胡散臭そうな男がまだ斜め向かいの椅子に座っていた。その人はあたしと母とが言い争っているところへきて、ふたつある長椅子の片方へ腰掛けたのだった。

待合室のすぐ脇にある自動販売機で缶コーヒーを買い、長い足をまるで見せびらかしでもするかのように組んでいる。

彼は待合室のテレビにリモコンでスイッチを入れると、ニュースを見ていた。

『昨日の早朝に、崖から転落したと見られる作家の佐京宗一郎さんは……』

テレビの画面には、凪いでいる海と、何十羽もの海鳥たちが巣を作っている崖の側面とが映しだされている。あたしは反射的に男からリモコンを奪いとると、スイッチを切って画面を消してしまった。

「彼もなかなかいい小説を書く奴だったのに、こうなっちゃお終いだよなあ。それとも再起したあとに、今回のことをネタにして新しい小説を書いて大儲けするとか、計画的に策を練ってるのかもしれないけどな」

あたしは顔から血の気が引くのを感じた。この男は先程の両親とあたしの会話をほとんど聞いていたし、何かの深い意味を込めての発言としか思えなかった。

「……もしかして、雑誌の編集記者の方か何かですか？」

だとしたら、さっきの会話を聞かれたのは非常に都合の悪いことのような気がした。

「編集ねえ？まあそういうことにしておいてもいいけど、俺は宗一郎の昔からの知りあいだよ。それであんたは一体宗一郎のなんなわけ？さっきの話だと恋人みたいな口振りだったけど、本当はあんたが宗一郎を殺したんじゃないのか？あいつには昔から自殺願望のようなものがあったから、死んでくれって頼まれると断れないようなところがあってね。何しろ自殺でも保険金の下りるらしい保険に何年も前から積立金を支払ってるような奴だから、一度でも寝たことのある女に泣いて頼まれてもすれば、否とは言えないさ。馬鹿みたいに貞操観念と倫理観の強い奴だってことはあんただって知ってたか？そこにつけこんでどうやってたぶらかしたのか、早く聞かせ

てもらいたいね」

それからその男はおもむろにあたしの髪のを引っ張ると、白状するよう促したのだった。

「ほら、早く言えよ」

そいつの物言いは暴力的な雰囲気を含んでいて、有無を言わせないくらい絶対的だった。それでもあたしはかろうじて反抗的な目つきで睨み返すと、こう反論してやった——怒りが強い動力源になっていた。

「あたしは宗一郎さんの保険金のことなんて何も知らないし、あなたが誰であろうと、あたしと宗一郎さんのことに口出しされたくないわ。あたしたちは本当に——本当にとても愛しあっていて、短い間だったけど、とても幸福で……宗一郎さんがどうしてこんなことをしたのか、あたしのほうこそ聞かせてほしいくらいよ」

「あたしたち？愛しあって？やめろよ、気持ち悪い。宗一郎はあんたに騙されたんだ、そうに決まってる。前に結婚した時も俺になんの相談もなく勝手に決めて、それで失敗してるんだからな。俺は前の時には一目見て直感したね、この女と宗一郎は絶対うまくいきっこないって。あの女だって結局は多額の慰謝料欲しさに離婚してんだからな。あんただってそうなんだろ？宗一郎の目がこのまま覚めなかったとしたら——あるいは意識が戻っても身体に障害が残ったりしたら、あっさり宗一郎を捨てて他の男に乗り換えるに決まってる。何しろ二股かけてんだもん、あんたは。俺のかわりにあんたの母親が殴ってくれてすっとしたよ。じゃなかったらあんた、今ごろ俺に何されてたかわかんないぜ？」

男は引っ張っていたあたしの髪のを離すと、椅子に深く座り直して、また足を組んでいる。

「……なんにも知らないくせに——あたしと宗一郎さんのこと、なんにも知らないくせに……」

不覚にも涙腺が緩んできてしまって、自分でもどうしたら良いのかわからなかった。悔しいって思った。こんなどっかの馬の骨みたいな初対面の男に泣かされるだなんて、我慢ならないことのように思えた。だけど男の態度があまりに威圧的で怖くて、もっと言い返してやりたいのに喉が震えて声にできなかったのだ。

「あんた、こんなことくらいで泣いたりなんかしてるけど、本当は相当な淫売なんだろ？宗一郎ともうひとりの男とを天秤にかけて、より条件のいいほうを選ぼうっていうんだからしっかりしてるよ。とにかく、宗一郎が目を覚ましてあんたの名前を曲がり間違っただとしても会わせたりなんかしないからな。あいつは死んでも直らないようなお人好しだからあんたに泣き落とされて承知するかもしれないけど、結婚とかなんとかするって言いだしたら何があっても絶対に邪魔してやる。いいか、覚えとけよ」

男がまた身を乗りだしてきたので、あたしは反射的に体を横にずらしていた。

「あなたなんか一体何がわかるっていうのよ。それにどうして宗一郎さんと結婚するのにあなたから許可をもらわなくちゃいけないの？宗一郎さんはおとついの夜、初めてのあとでちゃんとプロポーズしてくれたわ。『結婚しよう』ってそう言ってくれて、すごく優しかったのに……婚姻届けまで前もって用意してくれて、書斎の机の上にそれを見つけた時のあたしの気持ちなんて、あなたになんかわかるわけないんだから。あたし、あなたがどんなに邪魔をしても明日に

でもその書類をだしてくるわよ。第一あなたには邪魔する権利なんてないし、邪魔される覚えもこっちにはないんだから」

あたしが無理矢理泣きやむようにしながら、とっかえつつかえ聞きとりにくい言葉で言い終えると、その男は半ば呆れたように眉をひそめて溜息を着いている。

「お嬢さん、簡単に結婚だなんて言ってくれるけど、正気なのか？宗一郎はあんたと寝ようと寝まいとその前から死ぬことに決めてたに違いないんだよ。結婚しようだなんて口先でなら誰にでもなんとだって言えるに決まってるんだから……それとももしかしたらそいつが嫌で死にたくなったのかもな。あんたがあんまり淫乱で手に負えない女だっていうことに絶望して……」

あたしは奴が手にしていた缶コーヒーを横から奪うと、それをそいつの頭の上から盛大にぶっかけてやった。そして最後にびしゃりと顔面にも黒い液体を浴びせてやるのを忘れなかった。

カン！とわざと高い音をさせながらテーブルの上に缶を置くと、男はサングラスを外していた。何も言わずに黙って濡れた顔や頭をティッシュで拭っている。

似ている、ってそうすぐに思った。

どこがどうとはうまく説明できないけれど、それでもやっぱり目元や顔の輪郭なんかが宗一郎さんにそっくりだって思った。

「悪いな、大友。待たせちゃっ……て……」

その時、宗一郎さんの手術をした執刀医が待合室にやってきて、床の上やビニールの椅子の上にコーヒーが飛び散っているのを見るなりぎょっとした顔をした。

「どうしたんだ？奥さん、もしかしてこいつが何か無礼なことを言ったっていうんで、頭にきたとかそういうことなら、僕のほうからよく言って聞かせときますけど……」

小柄で年若な医師は、苦笑いしている口許を手のひらで覆い隠すようにしながら、彼のことをそう弁護した。

「なんでもないよ、筒井。それにこの女は兄貴の女房でもワイフでもなんでもなくて、婚約の約束をしたって勝手にひとりで言い張ってるだけなんだから。そのうち保険金や医療費のことなんかで診断書を書いてくれるよう要請しにくるだろうけど、騙されないように気をつけてくれ」

「あなたこそさっきから変な言いがかりばかりつけてこないでよ！そんなにお金のことに拘るんだったら、あなたが何もかも全部調べて宗一郎さんの財産管理でもなんでもすればいいじゃないっ！あたしは宗一郎さんが無事に戻ってくれさえしたら、ただそれだけで……」

宗一郎さんの弟らしい大友とかいう野郎はサングラスをジャケットの胸ポケットにしまうと、あたしの科白なんかまるきり無視してナースステーションのほうへと歩いていく。筒井先生は何も悪くないのに気遣わしげに会釈してから、半分あいつに引っ張られるみたいにして医務室へと消えていった。

こんなにひどい侮辱を受けたのは生まれて初めてだってそう思った。あいつが言った科白の全部が次々に反芻されてきて、そのひとつひとつの言葉も気に入らなければ、言い方にも態度にも腹が立ってくる。

そしてあたしは、自分には誰ひとりとして頼れる者も味方もいないことに、今頃になって初めて気づいたのだった。

もし——もしもこのまま宗一郎さんの意識が戻らなかったとしたら、あたしはどうなってしま

うんだろう……。

突然、悪寒にでも襲われたかのように体が震えて、身が竦んだ。

絶対にあの人があたしを置いてなんていくはずがない、その確信が初めて揺らいでしまった。

自信が音を立てずに静かに崩壊していき、一度そうなるともう、止めようがなかった。

真っ暗な、深淵の底のもっとも闇の濃いところまで、一度落ちたら二度とは戻ってこれないだろう深みの入口へと吸いこまれるように落ちていく――物質的な闇ではなく、精神的な、底辺なんてどこにもない本当の真の闇……途中で手がかりなんていうものも何もなく、一度落ち始めたらきりのない、深く濃い闇の中、それまで信じていた確かなものをあたしは手放そうとしていた。

ベッドの上で目を覚ました時、前後の記憶の縫い目があまりにもちくはぐで、あたしは自分の家のベッドにいるものとばかり、信じこんでいた。

「――宗一郎さん？」

すぐそばに彼の気配を感じたような気がして、あたしは彼の名を呼びかけていた。そしてその姿をはっきりと視覚に捉えたくて上体を起こそうとした時、今自分がどこにいるのかをはっきりと知覚した――ベッドの脇のパイプ椅子に座っているのが宗一郎さんではないということも。

「あんた、床の上にぶっ倒れてたんだぜ？掃除のおばさんが見つけて知らせてくれたとはいえ、それまで誰も気づかないだもんな。朝の一番くそ忙しい時間帯とはいえ、ナースステーションからあんなに近くて誰も気づかないだなんてどうかしてる話だよ。まあそれだけ手が回らないってことなのかもしれないけどな」

あたしは彼が何を言いたいのかよくわからなかったの、ぼんやりとしたまま黙りこんでいた。

「鈍い女だな、あんたも。待合室のところで堂々と這いつくばって倒れてんのに、寝てるもんだと思われてあんたは無視されてたんだよ。誰かひとりくらい声をかける人間がいてもよさそうなもんなのに、職員の質が垣間見えるようだよな。兄貴の容体がもう少し落ち着いたらうちの病院に移すつもりでいるけど、俺はあんたと宗一郎をもう二度と会わせるつもりはないから、あんたは両親のところにでも雄二とかいう奴のところにもさっさと荷物をまとめて帰るんだね。手切れ金ならいくらでも支払ってやるから」

なんだかもう彼の憎まれ口とまともにやりあう気さえしなくなっていた。

医者にしては破綻的な発言が目立つ、人格的に疑問を持たざるを得ない、甚だ憎たらしい奴ではあるけれど、本当に宗一郎さんの弟だというのなら、彼の病院に転院したほうが今いる病院にいるよりもより手厚い看護を受けることができるのだろう。それに面会謝絶だとかなんとか言われたとしても、毎日病院に通い詰めていれば、やがて向こうが根負けしてあたしに悪意や悪い魂胆の何もないことをわかってもらえるだろうし、反対するつもりも手切れ金をもらうつもりもなかった。

「おい、あんた大丈夫か？自分の名前と生年月日とここがどこかきちんと言えるか？」

あたしがあんまり朦朧とした様子で俯いていたせいか、彼はあたしの前に何度か手を振り翳し

ながらそう聞いた。

「あたしにはあんたなんていう代名詞じゃなくて美好真理子っていう立派な固有名詞があるし、婚姻届けを市役所にだしてきたら佐京真理子に名字が変わるの。それからあたしの誕生日はバレンタインデーでここは英語でいうとホスピタルとかいう場所よ」

自分でも不思議と自分の言葉に余裕があるのを感じた。もしかしたら相手のペースに無理についていかずに自分の言葉で話しさえすれば、気持ちをより確かな形で伝えられるかもしれない。

「生憎だけど、あんたは一生ミヨシとかいう名字のまんまだぜ。宗一郎が初めての相手で何を舞い上がってるのかは知らないけど、兄貴は結婚なんていう制度に向いてそうでまるきり不向きな人間なんだからな。そうまでして宗一郎を苦しめたいっていうんなら話はまた別だけど……って何笑ってんだよ」

あたしは何故か笑わずにはいられなかった。最初はなんて尊大で嫌味な奴なんだろうって思ったけど、基本的な意味では彼とあたしの意見は一致しているのだ。

「お兄さんのこと、法顕くんは大好きなのよね。あたしと一緒にだわ」

「ノリアキくん？やめろよ、気持ち悪い。幼稚園児じゃあるまいし……まさかあんた、保母とかっていうんじゃないだろうな。知ってるか？宗一郎の前の女房が保母やってたっていうの。世間じゃ保母なんていうと気立てが優しくて子供好きな女ってイメージが定着してるみたいだけど、そうと限ったもんでもないよな。看護婦と同じで結構性格のきついのだっているし、ただ園児やその親の前では見せないっていう場合だってあるんだからな」

それからあたしは保育士の資格は持っているけど、保育士として正式に就職したことはないこと、銀行が破綻して失業中だったところを宗一郎さんに誘拐されたことなどを包み隠さずに全部話して聞かせた。刑事には真実に嘘を織り混ぜて事情を説明したことも。彼にはなるべく嘘をつかずにありのままの事実を述べたほうが賢明のような気がしたからだった。

あたしがベッドの上で話をしている間、彼は意地の悪い意見を差し控えて黙ったまま耳を傾けてくれていた。作り話にしてはあまりにも細部まで出来上がりすぎているので、疑いの余地はおそらくあるまいと流石の彼も判断を下したのかもしれない。

そしてあたしと宗一郎さんの弟君との間にある誤解やわだかまりといったものは少しずつ氷解していったのだった。

一か月後、宗一郎さんは意識の戻らないまま、法顕くんの養父にあたる人が病院長をしている札幌郊外の脳神経外科病院へと転院することになった――植物状態であると診断を下されてはいたけれど、あたしは希望を一ミリグラムも捨てたりなんかしていなかった。

宗一郎さんは必ずあたしの元に戻ってきてくれるという揺るぎようのない確信があたしの内には満ちていて、可能性が限りなく零に近くても諦める気力などどこからも沸いてこなかった。

幸い、病棟内でももっとも立派な特別室に入れてもらうことが出来（普通は一月十二万円くらいかかるらしい）、しかも医療費は全額免除されることになっていた――もちろん事務的な処理としてはあたしが毎月の入院費用を支払ったということになってはいる。そうしないと医療保険のお金が下りなくなってしまうから。つまり、入院費用を一切払うということなしに保険金だけは貰っているということになる。

「真理子は精神的にも肉体的にもこれからどのくらい大変で、日増しに追いつめられていくのがどれほどつらいことか、実感としてまだあまり認識できてないんだろ。いいか、まだ一か月しか経ってないんだぞ？もしかしたら十年後も二十年後もこのままかもしれないのに、あんたにそれが耐えられるのか？言っとくけどな、回復の見込みなんか億にひとつもないどころか、まず奇跡でも起きない限り一生涯ぬまでベッドの上に縛りつけられていることになる。いっそのこと息の根でも止めてやったほうが兄貴のためにはよっぽどいいかもしれないだよ」

宗一郎さんに意識の回復がまったく見られないまま一か月が過ぎた時、法顕くんはあたしにそう言った。転院する手続きのために、待合室で待っている時のことだった。

「じゃあどうしたらいいっていうの？法顕くんだって職業柄、これまでもこういうことは何度も経験してきたんでしょ？御家族の方にはなんて言って知らせて、納得してもらうの？」

最悪の事態をどんなに覚悟しようとしても、宗一郎さんの命が取り去られてしまうだなんて想像することさえできなかった。明日こそ、またその次の明日こそは……そうやって希望がゆくべき道を知らせる道標のように光っては消え、消えては光っていく。きりのないことかもしれないとわかってはいても、どうしても他の分かれ道を選ぶということがあたしにはできなかった。

「宗一郎の遺書の中にドナーカードが入ってただろ？心臓、肝臓、腎臓、膵臓、肺に角膜……ほとんどの臓器が書きこまれてあったよな？もしこれで宗一郎が脳死だっていうんなら、俺はすべての臓器を摘出することに家族として同意書にサインするよ。それが兄貴の遺志だからな。だけど植物状態っていうのはまだ僅かに――百億分の一くらいは――希望がないこともないんだよ。実際十何年も寝たきりでいて、突然なんの前触れもなく患者が目を覚ましたっていう例も報告されているからな。ただ俺は真理子に兄貴の犠牲になるような真似だけはしてもらいたくないってそう言いたかったんだ。もちろん宗一郎だって同じことを思ってるに決まってる。だからあとのことは俺と病院にまかせて、真理子は自分のことをもっとよく考えろよ」

「今は自分のことなんて考えてられる時じゃないわ。あたしには自分自身のことなんかよりも宗一郎さんのことのほうがとても大切なの。それにおとつ、きちんと宗一郎さんの妻になってきたわ。だからこれからは真理子じゃなくてきちんとお姉さんって呼んでね。嫌なら姉貴でもなん

でも好きなように構わないけど」

あたしのこの科白を聞いた時の彼の怒りようといったら並ではなかった。火を点けたばかりの煙草を苛立たしげに揉み消したかと思うと、掴みかからんばかりに身を乗りだしてきて、銀縁の丸いサングラスの奥からあたしの瞳を睨み据えてくる。

「な、何よ？」

「何よじゃねえだろ。あんた、自分がしてることの意味をきちんと理解して行動してんのか？短大卒業して四年も銀行で働いてたっていうんなら、多少なりとも世間さまの荒波ってもんを経験してきてるんだらうが。どうしてそういう大切なことを自分ひとりで勝手に決めてしまえるかねえ。どうせ俺だけじゃなく、てめえんとこの両親にもなんの相談もしてねえんだろ？」

彼は喫煙所のテーブルの上にあった雑誌を意味もなく叩きつけながらそう凄んできた。その日、彼は黒ずくめの格好――黒のジャケットにブラックジーンズ――だったので、職業＝医者というよりは職業＝サラリーマン金融のヤクザな回し者という雰囲気がいっつもよりさらに強かった。まさか診察室でもこの調子だとはとても思えないけど、あたしは彼にだけは何かがあっても見てもらいたくないような気がしていた。

「……だって――だって、どうせ反対されるに決まってるんだもの。あたし、本当に駄目なのよ。宗一郎さんと少しでも強く結びついていないと。毎日その結び目が緩くなるたんびにぎゅっと固く結び合わせておくの。心の距離も体の距離もいつも意識的に宗一郎さんに近づけてないと不安で気を失いそうになるから……だから目に見える形での絆がどうしても欲しかったのよ」

彼は怒気を静めるためにまた煙草を吸い始め、その煙を思いきりあたしの顔のほうへ吹きかけてきた――お陰であたしは噎せ返って数瞬呼吸困難に陥った。。

「ま、離婚したくなったら俺に言えよ。兄貴のかわりに署名して印鑑くらい押してやるから。宗一郎の奴は目が覚めた時びっくりするだろうな、いつの間にか自分の知らないうちにバツがもうひとつ増えてることになるんだからな」

彼は最初のうち、何か事ある度ごとにちくちくとあたしの心をくさすことばかり言ったけど、それでも彼とあたしの間の利害はあらゆる意味で一致してはいた。彼は宗一郎さんに死んでもらいたくないし、あたしは宗一郎さんに生きていて欲しかったのだから――その瞳の中に光が宿るようになる時まで、それからあともずっと……。

父や母に結婚の報告をするために実家へ挨拶しにいくと、家の中は嵐か何かを通り過ぎでもしたかのようなになった。

母が抑えようのない怒りのためにテーブルの上にある皿や箸立てや調味料などを引っくり返さんばかりにして手にとり、それをあたしに投げつけてきたからだった。

母はあたしに説明する隙というものを与えてくれず、父は複雑そうな顔をするばかりだったけれど、あたしは物を投げつけられなければならないほど自分が悪いことをしたようには決して思えなかった。

結局この日は予想していたとおりに話し合いにならなかったのだから、あたしは玄関の郵便受けのところに手紙を挟めておいたのだった。

母はそれから時々病院へ足を運んでくれるようになったけど、看護師さんを使ってあたしを待

合室へ呼びつけるだけで、宗一郎さんには決して会おうとはしてくれなかった。

父はあたしの心に〈良い〉と映ることだけを宗一郎さんにしてあげるようにと言った。

母と父と一緒に病院へ見舞いにやってくるというようなことはなく、いつもふたり別々に顔を見せていたけれど、「たまには家に帰ってきなさい」と両親は口裏を合わせてでもいるかのよう
に帰り際に決まって必ずそう言った。

雄二とはあれからずっと会っていない——もちろんあたしが彼の話の噂に伝え聞いている
ように、彼もあたしが今どうしているかを知っているに違いなかったけど、おそらくはもう二度
とお互いの意志によっては会うこともないだろうと思う。雄二もなかなか大変らしく、新た
に入社した信用金庫では契約の取れない状態が三か月以上も続いているのらしかった。でもあた
しはあまり同情の念を彼に寄せたいとは思わない——前に住んでいたアパートを引き払おうとし
た時、留守番電話に雄二からのメッセージが一杯になっていたせいだった。中には音を変えて
いるものまであったけど、あたしにはそれが雄二の声であることがよくわかっていて、彼の言
分のすべてを要約すると、つまりはあたしのせいで彼の人生のすべてが狂ったということになる
らしい。あたしは荷物をすべてトラックに移し終えると、留守電のテープを消去してそれだけを
部屋の中に残していくことにした——その電話は入居以前から部屋に備え付けのものだったので
。

病院に一時間半もかけて通うよりも札幌市内に越して来てそこから通ったほうがいいのでは
ないかと法顕くんには勧められていたけれど——自分がマンションを買ってそれを譲ってもいいと
いうのだから金持ち坊々の金銭感覚はおそろしい——やはりあたしは宗一郎さんの匂いのする家
や庭から離れることができなかった。

あの古くて、窓を開けると枯れ草の漣が寄せてくる家の中に帰りさえすれば、彼の気配は家の
至るところどこにでもあったからだった。家の空気を満たす光の中や夜の闇の中、家具と家具と
の隙間に、庭に吹く風の中にも……きっと宗一郎さんの体は遠く離れた病院の上にあっても魂は
この家の中にあって、あたしのひとつひとつの行動や些細な動作をも見守ってくれているに違
いないとあたしは信じて疑っていなかったから。

家の中とその庭にいる時、あたしは宗一郎さんの存在を一番強く感じる事ができていたし、
その感覚は街の中にも移動中の車の中にもいつも彼と共にあるという感覚だった。

あたしは一度も宗一郎さんと街中を歩いたりしたことなどなかったというのに、あたしはいつ
どこにいても彼から見られていると常に感じていた。食料品売場で手に籠を持って買物をして
いる時も、楽器店でクラシックのCDを選んでる時も——家にあるのはそのほとんどがレコード
であったため、病室で聴くため用にCDを買う必要があった——いつも彼はあたしの傍らにいて
くれた。

そしてあたしは宗一郎さんの存在を感じている間中、彼から見られていると感じれば感じる
ほど、子宮の入口が疼いて足の間が濡れるのを抑えることができないのだった。

「肉体的な関係がなくても日常の生活の中で十分にオルガズムを得ることはできるものだよ」

宗一郎さんは以前に一度、そう言っていたことがあった。

あたしが勇気をだして、何故一緒に暮らしているのに指先ひとつ触れようともしてくれないの

かと初めて彼を非難した時のことだった。

「真理子は男が怖い？」

あたしは素直に頷いていた。もし彼以外の人に同じ質問をされたとしたら、決して認めようとはしなかったと思うけど、本当のところはやっぱり怖かったし、宗一郎さんには嘘をついても見抜かれるに決まっていたから。

「でも僕に対しては積極的になれるくらい恐怖心が薄らぐのは多分、真理子に僕が男だっていう自覚が足りないからだと思うよ。僕が雄二みたいに寸前のところでも『嫌だ』って言いさえすればやめてくれるってそう思ってるだろう？」

宗一郎さんはいやらしいような話をしていても、不思議と神聖なことでも話すかのように淡々と喋るような人だった。

「雄二はやめてって言ってもやめてくれようとしてくれなかったわ。だから……本当にそうしようと思ったんじゃないくて、咄嗟に雄二の体を蹴っ飛ばして押し退けてたの」

「おそらくは僕も同じような運命を辿ることになるんじゃないかな。それか真理子が嫌がっても無理矢理自分の好きなようにしてしまって、後日拉致監禁と強姦の罪で告訴されるかのどちらかだね」

宗一郎さんは時々わざと意地の悪いことを言った——あたしにそんなことは絶対にできるわけがないのを知っていながら、言葉で屈服させようとしてくるのだ。

「あたし、絶対に宗一郎さんのこと拒んだりしないわ。逆に宗一郎さんのほうこそぎりぎりのところであたしを締めだそうとしてるでしょう？だから受け入れられたいってそう思ったの」

宗一郎さんは人の心の機微のようなものをわかりすぎるくらい見透かせる人だったから、あたしがどんな気持ちでここまで言ったか、あたしの表情や瞳の色を読みとってよくわかっていたと思う。

それで彼は「日常生活でも得られるオルガズムについて」何かわかったらあたしに手出ししてもいいというようなことを言ったのだった。

あたしにはこの時、ただうまくはぐらかされただけのようにしか感じられなかった。宗一郎さんはまるで子供にでもするようにあたしの頭を撫でて書斎に戻ってしまっていたし——パイナップルパイがあんまりうまく焼けたので、仕事中のところを引っ張りだしたのだった——あたしには宗一郎さんの言葉の意味が全然わからなかった。

オルガズムというのが性的な興奮の高まりや自我忘却といったようなことを指すのは漠然と知ってはいたけれど、それが実際にどういうことなのかは想像もできないことだった。

宗一郎さんに抱かれた時に体が痙攣するように震えて、そのことをいうのかなって今は思うのだけど、日常生活でといわれたら、いつも宗一郎さんの視線がどこかから見つめているのを感じることもかもしれないってそんな気がする。

一度、宗一郎さんが法頭くんのいる病院に転院してから間もない時に、駅の南口でナンパされそうになったことがあった。

相手から特別悪い印象や嫌な感じを受けたというわけではなかったけれど、ただ少し強引でしつこいところのある人だった。それで無理に手を引っ張っていかれそうになった時に、携帯が鳴った——病院からだった。

宗一郎さんの容体に少しでも異変が起きたら必ず連絡してほしいと法顕くんには言ってあったので、あたしはすぐに病院へ戻ることにした。

宗一郎さんは何度も痙攣を繰り返していたらしく、あたしはベッドの傍らに跪くなり、彼の手指を握ってそれを自分のとこすりあわせた。法顕くんの話によるとそれでも今は大分落ち着いたが、体温が低く悪寒がするようなので電気毛布をかけることにしたということだった。

あたしはすぐに自分のせいだと思った。

「……ごめんなさい。ついていくつもりなんて本当に全然なかったのよ。宗一郎さんだってそのことはよくわかっているでしょう？」

あたしは取り乱していたので、部屋に看護師さんと法顕くんがいるのも構わずに、ベッドの下に膝を着いたままそう口走ってしまった。そして看護師さんが点滴をチェックしてでていったあと、法顕くんになんのことだと聞かれたのだった。あたしが仕様がなくナンパされたという話をする、法顕くんは呆れたような顔をして肩のあたりをカルテで叩いている。

「あのさ真理子、変な意味で言うんじゃないけど、心療内科か精神科で一度カウンセリングを受けてみる気ないか？真理子が兄貴の看病に熱心なのはわかるけど、もう少し自分のことも考えろよ。宗一郎の家からここまで一時間半、往復で毎日三時間、病院にいる時間は大体九時から五時までの八時間、しかも食事は宗一郎の悪い影響を受けて野菜と果物しか食べないときてる。あんたそのうちみるみる痩せて鉛筆みたいになるんじゃないか？顔色もあんまり良くないし、貧血でも起こしてぶっ倒れたらどうするんだよ」

法顕くんの言い方はぶっきらぼうではあったけれど、心配してくれているのはよくわかっていた。でももし精神科医のカウンセリングが必要だとしても、病院に通うだけ無駄だろうという気がした。もちろんあたしが宗一郎さんからできるだけ解放されたいと願っているのなら話は別だけれど、むしろもっときつく縛りつけられたいとあたしは彼に願ってやまないからだった。もしかしたら逆にあたしのほうこそが宗一郎さんの身を無理矢理地上に縛りつけているといったほうがいいのかもかもしれない。宗一郎さんは本当はあたしから解放されたいと意識の奥底では願っているかもしれないのだから――けれど毎日のようにあたしは彼の細い指を握りしめながら独り言のようにこう話しかけていた。

「駄目よ、絶対に死なせたりなんかしないわ。今はもう苦しくなんてないでしょう？もしまた死のうとしたりなんかしたら、その時はあたしも一緒に逝くわ。もう二度と置いていったりしないで……ね、宗一郎さん？」

そしてそれから二日後に、法顕くんの予言が的中するかのようにあたしは病院のトイレで倒れてしまっていた。

手を洗っていると突然眩暈がして、急にあたりが暗転した。

倒れたということは意識の闇のどこかでわかってはいたけど、前後不覚に陥っていてどうやったら体がいうことをきくのか、まったくわからなくなっていた。

その時ちょうどトイレに入ってきた入院患者の女性が呼びだしのベルを鳴らして看護師さんをお呼びしてくれたらしく、あたしの意識はそれからすぐに戻った――多分時間的には五分くらいのものであったと思うけれど、あたしには随分長いこと眠っていたように感じられていた。

ナースステーションのところで看護婦さんに点滴を打ってもらおうと、あたしは宗一郎さんのいる病室へと戻り、彼の静脈内に注入されているのと同じ薬液が一雫一雫自分の中にも溶け込んでいくのを嬉しい思いで眺めていた。

その時突然、ノックもなしに扉が開いて、法顕くんが室内に入ってきた。彼はいつもノックなしで突然中に入ってくるので、時々あたしは宗一郎さんとの会話を聞かれてしまったかもしれないと、どきりとするこゝろがあった。

彼は人が貧血で倒れたというのに、それみたことかと言わんばかりの勝ち誇った顔をしてこう言った。

「真理子、何か言いたいことは？」

点滴の管を指で跳ねつけながら、法顕くんはパイプ椅子に座るあたしのこゝろを見下ろしてくる。

「……倒れた時、『どうしてこんなに突然真っ暗になっちゃったんだろう』って思ったの。それで宗一郎さんも今こんなに暗いところにいるのかなって思ったらなんだかすごく哀しくなっちゃって……」

法顕くんはあたしの返答にとても不満足な様子だった。わざわざ目を上げて彼のほうを見なくても、無言の重圧のようなものを嫌というほど空気に感じとることができる。

「あんた、それで『宗一郎さんの中に流れている点滴と同じものが今自分の中にも流れているんだわ』とかなんとかくだらないことを思ってんじゃないだろうな？」

そのとおりだったので、あたしはびっくりして彼のこゝろを見上げた。

「どうしてわかったの？」

「あんた馬鹿か？」

彼は顔をしかめながら溜息を着いている。

「やっぱり精神科か心療内科にカウンセリングにいけよ。友達のひとりにいい精神科医がいるから紹介してやる。それか今日の晩あたりにでもレバ肉とニラの炒め物でも食うか、どっちかにしろ」

あたしはどっちも嫌だ、と答えたけれど、法顕くんは次の週に、その友達が精神科医をしているという病院にわざわざ予約まで入れてくれたのだった。そして病院の場所を書いた紙片をあたしに押しつけて寄こした。

「無理して入れてもらったんだから、絶対にいけよ」

彼は最後にそう強く念を押した。

法顕くんとその多忙な精神科医の先生には申し訳ないと感じながらも、あたしは指定された日時にその病院へは行かなかった。また怒鳴られるに決まっていたけど、どうして宗一郎さんのことばかり考えるのがいけないことなのか、あたしには全然わからなかった――新婚の妻が夫のそばにできるだけいようとするのにいけない理由がどこかにあるだろうか？

それにその精神科医の先生がどれほど優秀で、人格的に信頼のおける人であったとしても、あたしが宗一郎さんにさらわれた時のことを話したり、そのあとどんなふうになんか彼を愛するようになっていったか、ひとつひとつ説明するのは難しいことだったし、あたしにとってひどく苦痛を伴うことでもあった。できるなら、誰にも話すことなくあたしの胸だけに秘めておきたいことだっ

たから……。

そしてそのカウンセリングに行かなかった日、病院の玄関ホールのところにある自販機でジュースを買おうとしていると、法顕くんが可愛らしい女の人と笑いながら歩いているのを目撃してしまった。

綺麗な黒髪を三つ編みにして結い上げているその女性は、藤で編んだ揺り籠を大切そうに抱えながら、法顕くんとエスカレーターを降りてくるところだった。年齢は大体あたしと同じくらいか、もしかしたらあたしよりも若いくらいかもしれなかった。

なんの話をしているのかまではわからなかったけれど、法顕くんはあたしと話をしている時よりも数段楽しそうな表情をしているように思えた——あたしは彼に不機嫌な顔をさせるか、怒らせるか、そのどちらかしかさせたことがなかったから。

グレープフルーツジュースを二本買ってエレベーターのほうへ向かおうとすると、ちょうどふたりもこちらへ向かってくるところだった。

法顕くんは籠の中の赤ん坊をあやそうとしているというよりは、逆にいじめようとしているみたいだった。

「あ、ひどい。人の子供に向かってなんてことするのよ」

法顕くんが赤ん坊の頬を憎らしげに引っ張ると、お母さんであるその女性は笑いながら籠を彼から遠ざけようとする。

「今から俺が世の中の厳しさってもんを親切にも教えてやっとうとしたんだろうが」

玄関に通じる自動扉の前でふたりは少しの間立ち話をしていた——次の診察日についてや、自分の名前を言ってもらえば検査の順番を早めてもらえることなど。

「そのうちまた遊びにきてね」

「いや、まだ当分の間はいいいよ。当てつけられるだけだからな。喧嘩してる時ならいつでも見物にいくけどね」

話の感じからいって、友達なのかなって思った。実は彼はとんでもない二重人格の持ち主で、医者である時の顔とあたしに見せる顔とでは大違いなのだった。

他のドクターや看護婦さん、それから彼の義父である院長先生と病室に入ってくる時には、
(そういえばこの人医者なんだっけ)

ってあたしに思いださせてしまうくらい神妙な顔をしているし、あたしにさえ敬語で話しかけてくるくらいなのに、普段の時には嫌味か皮肉か警告か文句しか言ってこないという非の打ちどころのない素晴らしい人格者なのだ。

おそらくは診察室や手術室にいる時もあの調子なんだろうなって安易に想像できてしまう。とてもじゃないけど、初対面の人間を脅しつけて髪の毛を引っ張ってくるような人物と同じには見えないに違いない。

「何座り聞きしてんだよ」

あたしは玄関前のロビーにある休憩所でソファに腰掛けながら、ふたりの様子をそれとなく見聞きしてしまっていた。彼もあたしの隣に腰掛けてくる。

「あんた、なんでジュースを二本も買ってるわけ？『一本は宗一郎さんの』とか言ったらどうな

るかわかってんだろうな」

あたしは仕様がなくて一本を無言で法顕くんにあげることにした。病室で飲み物をひとりで飲んだりするとなんとなく気が引けるので、二本買うことが習慣になってしまっていたけれど、そんなのはただの独り善がりの自己満足に過ぎないって自分でもよくわかっている。そしてそのわかっていることを改めて指摘されてとやこう言われたくなかったので、あたしは黙ったままでいた。

「真理子、どうして今日カウンセリングにいかなかった？」

彼は喉が乾いていたのか、缶を開けると、勢いよくそれを飲み干している。

「だって……いっても仕様がなくて。多分宗一郎さんとあたしのことは誰に話してもわかってもらえないだろうし、あたしたちふたりだけの問題なのよ。母さんも友達もあたしが間違った人生の選択をしてるようなことを遠回しに言うけど、あたしの幸福は宗一郎さんと一緒にいることなの。それ以外のことはもう本当にどうだっていいのよ」

彼は西日の傾いている窓の外を眺めながら、缶ジュースを片手に疲れたような溜息を洩らしている。

「『宗一郎さんとあたしのことはふたりだけの問題……か。あんた、兄貴と一緒にいるのが一番の幸せみたいと言うけど、本当はそうは思っていないだろ？自分くらい不幸な人間は世の中に数えるくらいしかいないに違いないってそんなふうには受けとめてるんじゃないのか？もしそうなら兄貴の看病なんて今すぐやめろ。宗一郎の顔の上に枕でもなんでも当てがって、その息の根を止めちまえ。死亡診断書にはうまく書いといてやるよ。心肺機能不全とでもなんとでもな。そしたら保険金が五千万くらいあんたのところに転がりこんでくるんだろ？」

「……どうしていつもそんなふうには意地悪なことばかり言うの？あたし、できるだけ一生懸命やってるわ。朝早く起きて彼がしてたみたいに庭の手入れをして、それからひとり寂しくごはんを食べてここへ来るのよ？毎朝、起きてからすぐに彼のために祈ってもいるわ。『早く宗一郎さんが良くなって目を覚ましてくれますように』って。ここへくる途中、車の中ではクラシックしか聴かないの。宗一郎さんの好きな――……」

もう決して彼のためにも自分のためにも泣くことだけはやめにしようってそう誓いを立て直したばかりだったのに、目頭が急に熱くなって止められなくなってしまった。

「俺はあんまり無理はするなって言ってるんだよ。いくら宗一郎がそうしてたからって何も真理子まで朝早くに庭の手入れをする必要はないだろう？それに真理子が毎日毎日清拭の手伝いをしなくたって看護師がきちんとやってくれるんだからまかせとけばいいんだよ。手抜きしそうで心配だっていうんなら横で見張っとけばいいだけのことなんだから。それにジュースを二本も買わなくても兄貴の目の前で堂々と飲めばいいだろ。まさかベッドの上で宗一郎が自分も飲みたいなんて思うわけないんだから。それと車の中ではラジオでもなんでも、真理子が自分で聴きたいと思ったものを聴くこと。いいか？」

法顕くんはいつもよりも棘のない、優しい口調で言ってくれたので、彼の主張していることはとても正しいような気がした。それでもあたしにはどうしても素直に頷くということができなくて、泣きじゃくりながら彼の言った言葉のひとつひとつに反駁していた。

「だって、庭なんて少し放っておいたら何もかもみんな枯れちゃいそうで、そんなの絶対嫌なん

だもの。宗一郎さんが帰ってきたら花の咲いてるところを見てもらいたいんだもの。それに、あたし……本当はものすごく嫌な女なのよ。たとえ看護師さんが丁寧に宗一郎さんの体を拭いてくれても、宗一郎さんの体に他の女の人が触るのがどうしても嫌でたまらないの。もちろん自分ひとりじゃできないから看護師さんに手伝ってもらってるけど、でももし宗一郎さんの背がもっと低くて自分ひとりでできるんだったら、体位交換も病衣を取り替えるのも、全部あたしがひとりでやりたいくらいなの。それからジュースだって飲みたいに決まってるじゃない。いつもあんなまずい流動食しか食べさせてもらえないじゃ宗一郎さんがあんまり可哀相だわ。それにクラシックを聴くのは単にあたしも好きだからよ。馬鹿みたいだって笑われてもいいけど、宗一郎さんも一緒に聴いてくれてるってそんな気がするの。だから……」

あたしはだんだん自分の言っていることの意味がわからなくなってきてしまった。ただ唇だけが勝手に動いて喋っている、そんな感じだった。

「ああもう、わかったって。だからいい加減泣きやめ。通りかかる奴に俺か泣かせてるって思われるだろうが」

言いながら、法顕くんが白衣の裾であたしの顔を無造作に拭いてくる——なんとなく微かに消毒液の匂いがした。

「でももうひとつだけ、きついこと言ってもいいか？」

ティッシュで鼻をかみながら、あたしはうんと言って頷いた。

「さっきの赤ん坊を連れてた女の人だけどな、真理子に紹介しようとした精神科医の奥さんなんだ。学生の時に知りあって大恋愛して結婚したわけなんだけど、去年身籠った子供が脳に損傷のある子でね。お腹の中にいる時から奇形児の生まれる可能性を告げられてて、墜胎するかどうか、旦那と一緒に相当悩んだらしい。奥さんのほうはなんでも自分でしょいこみたがる性格してるから『悪いのは全部自分だ』って思いこんで、一時期ノイローゼ気味になってたって言ってたしな。まああそこの夫婦は旦那が嫌味なくらい出来てるから最後に奥さんを説得して出産に至ったわけだけど……その前に初めて妊娠した子供は十月十日お腹の中にいて死産してるし、もう子供を産むのが怖いっていうか、妊娠するのが怖いって奥さんは言っててさ。でも精神科医の友達としてはやっぱりもうひとりかふたり、子供が欲しいらしくてね——ここまでの話で俺が何を言いたいかわかる？」

法顕くんが最初にきつい、と前置きするくらいだから、一体何を言われることだろうと覚悟していたのに、あたしには彼が何を結論づけたいのかがよくわからなかった。それで首を横に振った。

「つまりさ、人生なんて不平等なのが当たり前なんだから、そんなことに愚痴を言ったところで今さらどうにもならないだろ。俺はさっきの女の人のが大学の頃にすごく好きで、表面上は大して好きでもないって顔しながら本当はいつまでも好きでいるのをやめられなかったんだ。多分、精神科医なんかになったそいつが馬鹿みたいなお人好しでなかったら、横から掠めとるくらいのことは絶対にやってたと思う——彼女の旦那に収まった奴よりも俺のほうに先に出会ってたとしたら、恋人になってたのは俺だったに違いないって強引な理論からね。だけど俺は自分の子供に障害の兆しがあるってわかった時点で多分、すぐに墜ろしたほうがいいって言うに

決まってると思うんだよな。仕事柄、何人もそういう子供を看てきてるからね……だからさ、俺も真理子も宗一郎も似たようなところがあるって言いたかったんだ。結局はないものねだりなんだよ。真理子は兄貴があんな馬鹿なことさえしなけりゃあ今頃ふたりで永遠の幸福を誓ってみたいに思ってたろ？でも宗一郎のことをよく知ってる第三者の俺から客観的に言わせてもらうと、遅かれ早かれ今のようなことにはなってたと思うんだよ。宗一郎はあんまり強い奴だから、自分が強いことに飽き飽きして弱くなりたくなかったんだ。俺の言ってる意味を理解しろとは言わないけど、宗一郎が死のうとしたのは、つまりはそういう理由でだよ。贅沢な悩みのために高尚な死を選択したわけだ。俺は低俗で愚昧な人間だけど、兄貴の考えていることはよくわかる。手に入れたかったものを実際に全部揃えてしまうと——そこには結局何もないのと同じことになるんだ」

あたしは法顕くんの話を聞きながら、宗一郎さんの書いた小説の断片を思いだしていた。

——完璧な美しさほど醜いものはない。

——知恵の全てを修めた賢人ほど愚かな者はいない。

——あり余って腐った財産ほど邪魔となり、人生の枷となるものはない。

彼が遺稿として残そうとした短編小説連作集の中のひとつ、『完璧であるなかれ』という話だった（『被害妄想狂』というタイトルで一冊の本としてまとめられ、近く出版される運びになっている）。

この話は、自分は欠陥人間なのではないかと苦悩する主人公が、完璧さを求めて修行の旅にでるのだが、結局最後には『完璧な人間は欠陥のある人間よりもなお悪い』という悟りの境地に至って幕の閉じられる、コメディタッチで描かれたストーリーだった。

「……今日の夜、空いてるか？」

彼はジュースの缶をゴミ箱に捨てながら、おもむろにそう聞いた。あたしも彼も随分長く沈黙してしまっただけのことだった。

窓の外の冬の太陽は沈みきり、空には濃い紫色の雲だけが煙のようにたなびいている。

「空いてるに決まってるよな。どうせ家に帰ったってひとり寂しく飯食って寝るだけなんだろ？ジュースのお礼に晩飯奢ってやるよ。ベジタリアンになってからろくに外食もしてないみたいだからさ」

「でも早く家に帰らないと宗一郎さんが——」

待っているから。

そう答えそうになって、慌てて口を噤んだ。

宗一郎さんの身体は病院にあっても、魂は家であたしの戻るのを待ちわびているだなんて言ったら、また何を反論されるかわからない。そしてそれ以上にぐさりと目に見えない何かが胸に深く突き刺さっていた。

（なんだろう、これ）

隣にいる法顕くんの横顔を見上げて、彼は傷ついたような顔なんてしていない——なのに、彼が深く傷ついていることが、あたしには何故かわかっていた。

まるで切れ味の鈍いナイフが心臓に突き刺さりでもしているかのように。

「仕事、もう終わったの？あたしはもう少し宗一郎さんとお話してから帰ろうと思ってたんだけど、遅くなるんだったらそれまで待ってるわ」

あんまり長く間を持たせて、彼を余計に傷つけてはいけないような気がした。もしかしたら単なるあたしの思い過ごしだったかもしれないけど——法顕くんのほうは言葉ひとつであたしが二度と立ち上がれそうもないくらいの傷を負わせることができるだろうけど、あたしが何をどんなふうにしたところで、彼に掠り傷ひとつつけられそうもないのは精神的な力関係からいってあまりに明白すぎる事だったから。

「あんたさ、もしかして『宗一郎さん以外の異性とお食事についてもいいかしら？』とかなんとか、兄貴に断りを入れるつもりじゃないだろうな」

「当たり前じゃない、そんなの。それにあたしは自分の弟と食事に行くんだから、親睦を深めににかけてきますって宗一郎さんには報告するのよ」

「やれやれ。それじゃあ俺は常に精神的な書類を兄貴に提出して、いちいち許可の判子をもらわなきゃ駄目ってことか」

法顕くんは呆れたように白衣の肩を竦めながらそう言った。

法顕くんは仕事を早めに切り上げると宣言していたとおり、それから小一時間もしないうちに病室へあたしのことを迎えにきた。

「じゃあな、兄貴。真理子とってはいけないところへいつてくるから、とめたくなったら邪魔しろよ」

まるで秘密の隠しごとでも囁くかのように、宗一郎さんの耳元で法顕くんは声をひそめている。もちろん宗一郎さんにはなんの反応もなく、ただ安らかに眠っているだけだ。もし鼻に流動食を胃に流すためのチューブがなかったとしたら——あるいは心拍数などを示すモニターが身体に繋ってなかったとしたら——とても病人とは思えないくらい、彼の顔は穏やかだった。

「宗一郎さん、本当に食事をするだけだから、こんなヤブドクターの言うことに聞く耳なんか持っちゃ駄目よ。なるべく早く家には帰ることにするから」

「誰が藪医者なんだよ。冗談の通じない女だな。宗一郎も嫁によく言っといたほうがいいぞ、弟は素晴らしい名医で、手術のある前日には女と寝ないことを信条にしてるような、立派な医者だって」

「それ、本当なの？」

彼の性格からいって信じ難い発言だったので、あたしは笑った。

「親父がうるさいんだよ。術日の前の夜には女とやるな、大酒もくらうなってね。一度、宿酔いのまんま術場に入ったら案の定つまみだされたってこともあったからな、これでも一応注意してんだよ」

なんだか本当の親子みたいな会話だなあって思った。

回診に回ってくる時には、赤の他人どころか真っ赤な他人みたいに院長先生と話してるけど、それでも他の職員の手前もあってそういうふうにしてるっていうのが、なんとなく空気に滲みで

ていたりするのだ。

院長先生は見た目は厳格そのものっていう、医師の威厳と気品を兼ね合わせた雰囲気の人だったけれど、一言言葉を話しだすなりとても優しい話し方をする人だった。

「よし、じゃあ行くか」

法顕くんは宗一郎さんの足のあたりを軽く叩いて別れの挨拶をし、あたしは彼の右の頬に口接けると、また明日の朝くることを告げた。

「あんた、帰り際に毎日あんなことやってんのか？」

彼はまるで信じられないものでも見たというような、呆れた顔をしている。

「そうよ。悪い？」

ほんの僅かな羞恥心から上目遣いに彼を睨むと、いやべつに悪くはないけど、と法顕くんは笑っていた。

本当はキスしたあとに愛してるって呪文のように三度唱えるのが毎日の習慣だったけれど、流石に法顕くんのいる前では恥かしくてそこまではできなかった。

病院の駐車場にでると、法顕くんは車の鍵を寄越せ、とあたしに催促した。

「帰りはどうするの？」

車のキィを彼に手渡しながらあたしはそう聞いた――空気が冷たく、吐く息も白い。

「俺の車は病院に置いてく。今日は宗一郎の家に泊まって、明日の朝また真理子と一緒にでることにするよ」

彼は車の中に乗り込みながら言ったので、科白の途中から声がかくぐもっていた。それでよく聞きとることのできなかったあたしは、助手席のシートに座ってシートベルトを締めてから、聞き直したのだった。

「車はここに置いてくって、明日は非番じゃないんでしょう？それとももう一度病院に戻ってきてから別々に帰るってこと？」

「あんた、まさか聞こえないふりしてんじゃないよな？俺は今日、宗一郎の家に泊まるって言ったんだよ」

エンジンがかかると同時に流れだしたマーラーの曲を止めて、彼はサイドブレーキを下ろしている。

「明日はどうするの？」

あまりにも車の発進の仕方が乱暴だったので、あたしは一瞬前のめりになってダッシュボードに頭をぶつけそうになった。

「だから明日は真理子と一緒に出勤するってさっき言っただろ。二回も同じことを言わせんなよ」

「そんなの困るわよ。あの家はあたしと宗一郎さんの――」

曲がり角のところをかなり強引にハンドルをきられてしまい、身体が大きく窓側に傾いた。

「ちょっと、もう少し静かに運転できないの!？」

「あたしと宗一郎さんの夢の城、か？あのオンボロなあばら屋が」

「.....失礼ね。あばら屋なんかじゃないわよ。あたしも最初はそう思ったけど、今は理想のお家なの。冬場は片道二時間くらい病院までかかることになるかもしれないけど、あの家の中にはまだ宗一郎さんの残り香のようなものが残ってるのよ。だから他の人に入りこまれて、その匂いを変えられたり消されたりして欲しくないの」

法顕くんはふいに黙りこんだかと思うと、突然アクセルを踏みこんで、街中の車の混み入った地域に差しかかるまで一言も口を聞かなかった。

気まずい雰囲気のを和らげるために、あたしがCDのPlayボタンを押すと、すかさず法顕くんはラジオのスイッチを入れて切れ替えようとしてくる。そしてあたしがもう一度クラシックの名盤を聴こうとすると、彼はまたラジオの周波数を合わせようとしてくる.....まるでイタチごっこでもするみたいにあたしたちはむきになって同じことを何度も繰り返していた。

お陰で中心街にある飲食店が軒を連ねるあたりに車がさしかかった頃、あたしと法顕くんは妙に興奮しきっていた。

「ここだ。降りろ」

「言われなくても降りるわよ」

何軒かのお店が共同で使用している駐車場は混み合っていて、あたしの大嫌いな縦列駐車をするしかないようなところしか空いてはいなかった。ところが憎らしいことに奴は一発でそこへ車を乗り入れ、乱暴にドアを閉めたかと思うと、鍵をかけてそれを投げてよこしたのだった。しかもほとんど強引にあたしの腕を引いて、焼き肉の匂いの充満している食堂へと連れ込んだ。

あたしは席に着いてから暫くの間、一言も口を聞こうとはしなかった。もしかしたら本当は彼も焼き肉以外の食べ物のあるレストランかどこかへ連れていってくれるつもりでいたのかもしれない。けれどもあたしの態度に腹を据えかねて、急遽予定を変更することにしたのかもしれない。

「何をいつまでも怒ってんだよ。もしかして生理期間中か？」

あたしはカウンターの下の、嫌味なくらい長いその足を靴の踵で思いきり踏みつけてやった。

「……いってえな。ウェイトレスのお姉さんがさっきからお待ちかねだろ？ さっさと注文済ませちまえよ」

「あたしが食べれるようなものなんて何もないんだもの。あなたがひとりで食べたらいんじゃない？」

「あっそ」

法頭の奴はビールをジョッキで頼み、それから上カルビだの牛タンだのホルモンだのを勝手に注文していた。

あたしは横を向いて水を飲みながら、お腹の鳴るのを懸命に堪えなくてはならず、澄まし顔をしながらも実のところはひとりで腹筋を鍛えていなくてはならなかった。

「本当は食いたいのに痩せ我慢してんだろ？ 無理しないで一口だけでもいいから食っちまえよ。そしたら楽になるぜ。なんなら宗一郎が菜食主義者になった理由を教えてやってもいいけどな」

彼は鉄板の上で肉をじゅうじゅういわせて焼き上げながら、味噌だれにそれをつけて美味しそうに味わっている。

あたしは精肉とつけあわせになってきたピーマンやもやしや玉葱、かぼちゃなどを焼いて食べることにし、先ほどのウェイトレスにウーロン茶を注文した。

「それで宗一郎さんはどうして菜食主義者になったの？」

「まあ幼児体験ってやつだな。俺たちのいた孤児院では鶏や豚や牛なんかの家畜小屋があって、基本的には自給自足で賄わなくてはならないってことになってたんだ。孤児院っていても修道院の一部みたいなものだったから、ブラザーやシスターがそれぞれ別れて農作物の栽培や収穫に当たっていたというわけだ。子供たちは鶏小屋の掃除だとか豚小屋の清掃だとかをやらされて、水や餌を与えたり、世話をするのが決まりだったんだな。まあ当然のことながら豚は食卓の上を飾るため、ドナドナの調べにのって屠殺場へと運ばれていく……ある日、ベッキーっていう名前の、宗一郎が名づけ親だったピンクの豚の番がやってきた。そしてその日がたまたま豚をかっさばいて、どんなふうな過程を経て自分の喉元にまで豚肉が運ばれてくるのか、子供たちの見学する日だったわけだ。俺と宗一郎が孤児院にきてまだ間もない頃、初めてそいつを見せられたんだな。俺は当時六つだったけど、意外に平気だったよ。多分俺がプルートって名前をつけた豚が

同じように腹を裂かれてるのを見ても泣いたりなんかは絶対しなかったと思う——宗一郎も涙を零しそうになってたとかってわけじゃないけど、もう顔面真っ青で失神寸前っていう顔をしてたよ。ついきのうまでハンバーグ大好きとか言ってた自分の無神経さ加減が突然許せなくなったんだろうな、夕飯にでてきたソーセージには決して手をつけようとしなかった。でもその豚肉のソーセージはベッキーのなんかじゃないんだよ。ベッキーの肉は無駄なく殺ぎ落とされて、食料庫で一晩かけて寝かせられることになってたんだから。孤児院ってところはどこもそうなのかは知らないけど、飯を残すことにかけてはうるさくてね、宗一郎も全部食べ終わるまでは食堂から出させてもらえなかった。もちろんシスターも宗一郎の気持ちはよくわかってるから、『それはベッキーじゃないのよ』とか言って諭そうとするんだけど、てんで駄目なんだ。もうひとり牛乳を飲むのが苦手なデブがいて、そいつも居残ってたんだけど、その日はそいつのほうが早かったな。シスターもデブが頑張ってる牛乳を飲んだ手前、宗一郎だけ特別扱いするってわけにいかなかったんだろう、どう含んで言い聞かせたのか、最後には二本のソーセージを宗一郎に食べさせることに成功したんだ。ところがサル山のボス争いをいつもしてるようなガキ大将が近づいてきて、宗一郎にこう言ったんだよ。『ベッキーの腸詰めはうまかったか？』って。途端に宗一郎はトイレへ駆け込んで、胃の中のもんを全部吐きだしちまった。ついでに俺はその猿と喧嘩になって反省室にぶちこまれたってわけだ——今思い返してみても、なかなか綺麗な兄弟愛だよな」

法顕くんの話を聞きながら、あたしは店内の座敷やカウンターの席にいる、他の客の様子をそれとなく見回していた。

ホルモンっていうのは ^{はらわた}腸 で、牛タンは牛の舌で、カルビはバラ肉で……なんて、そんなことをあまり深く考えずに誰もが焼いた肉を美味しそうに口許まで持っていつている、そんな気がした。

あたしはいつだったか、小さな頃にケンタッキーの製造過程をTVで見たことがあるのを思い出していた。鳥たちは情け容赦のない機械に次々と宙吊りにされていき、そして羽をもがれていった……ちょうどクリスマスシーズンの近い時のことで、あたしはその年、両親に『もう二度とケンタッキーは食べない』と宣言したにも関わらず、結局イブの日にはお腹がいっぱいに膨れるまで食べてしまっていた。鶏が羽をもがれているシーンなんて思いだしもしなかったし、すっかりその記憶を忘れ去ってしまっていたのだ。でも普通はそんなものだし、それでいいのだと思う。ただ、宗一郎さんは忘れられなかったのじゃないだろうか。いつまでもベッキーの内臓や腸やお腹に詰まっている色々な器官のことを。

どうしよう……なんだか悲しくなってきた。

その時、カウンターの内側にいた店主らしきおじさんが、野菜だけをあたしの目の前に置いてくれた。「サービスです」と、無愛想にそれだけしか言わなかったけど、焼き肉の専門店にきてつけあわせの野菜しか食べないとは何事か、と訝られているに違いなかった。

「よく焼き肉をふたりに食ってる男女は肉体関係があるっていうけど、あれって実は本当なのかもしれないよな。今日は真理子をここへ連れてきて、無理にでも肉を食べさせてさ、そうとは限らないってことを証明しようと思ってたわけなんだけど、あんた本当に野菜しか食わないんだも

んな」

法顕くんはビールのジョッキを三杯あけて、鉄板の上の焼き肉もあらかた食べ終わっていた。あたしは彼の靴の上を踏みつけると、大股で店をでていき、早足で店の裏手にある駐車場へと歩いていくことにした。彼ならべつにタクシーか何かで帰ればいいってそう思った。

焼き肉を一口も食べていないのに、髪や服だけが焼け肉くさくなっているだなんて、考えれば考えるほど馬鹿馬鹿しい話だった。

「おい、待てよ。あんな程度の話ならべつに怒るほどのことじゃないだろ？軽く受け流すかなんかすりゃいいんだから。そんなんだからこの不況時にセクハラされたくらいで簡単に会社を辞めたりなんかできんだよ。本当に堅いよな、あんたは」

彼ともう口なんか聞きたくなかった。

彼の鼻先で車のドアを閉め、速やかに立ち去るつもりでいたのに、駐車スペースではない場所に車を止めている馬鹿が後ろにいて、かなりうまくハンドルをきらないと出られそうになかった。それでエンジンをかけようとした指を止めていると、彼がフロントガラスを叩いた。

「出してやろうか？」

あたしは店の人に後ろの車のプレートナンバーを言ってどかせてもらうつもりでいた。けれども彼はあたしと入れかわりに運転席に座ると、軽く何度かハンドルをきって難無くその難所から脱出し、あたしの目の前で助手席側のドアを開けたのだった。

Shit、という言葉はきつとこういう時に使うべき英単語なのに違いないと、屈辱感を覚えながらあたしは思っていた。

「真理子はある程度運転がうまいほうじゃないよな。病院の駐車場でも隅っこのほうにとめてんのしか見たことないもんな」

彼はせせら笑うようにそう言い、革のコートのポケットからセブンスターをとりだしている。

「うるさいわね、この酔っ払い。医者が飲酒運転なんてしていいと思ってるの？」

「いちいち気にすんなよ、そんなこと」

彼は運転しながら煙草に火を点けて一服し、灰皿に灰を落としている。

車内に音楽は何も流れていなかった。

真っ暗な黒い海の漣やうねりの音は車の中にまでは届いてこない。

あたしは白いガードレールのずっと向こう側から海が呼んでいるような気がして、じっと闇の中をかきわけて入っていき、見惚れるように窓の外を見入っていた。正しくは、魅入られていた、といったほうがいいかもしれない。

細く鋭い新月の光が、車と一定の距離を保っていつまでもあとを追いかけてくる。

「なんだよ、まだ怒ってんのか？」

沈黙が長く続いてしまったために、誤解を招いてしまったかもしれないけれど、あたしのお腹の虫はとっくに収まっていた。ただ心だけが浜辺へと下っていき、打ち寄せる波のことを思っていただけだった。

「……べつにもう怒ってなんかいないわ。ちょっと疲れてぼんやりしてただけ」

あたしは言いながら、車窓の外のぼんやりとした暗さとはっきりとした真っ黒な闇の濃さとの

堺を眺めていた。

「まあそりゃ疲れるよな。真理子は病室にいる時でもほとんど黙って座ってるってことがないんだから。朝はまず宗一郎の体を清拭して、あとは二時間か三時間置きに体位交換、手足の爪が伸びていれば切り、手浴をしたり足浴をしたり、耳そうじをしたり……至れり尽くせりで兄貴もさぞ喜んでることだろうよ。自分はいい妻を持ったとかなんとか言ってな」

褒めているにしては、ひどく陰のある、嫌味な言い方だった。

「それでそういうことをやってる間はラジカセで兄貴の好きなクラシックをかけ、一段落ついたら今度は聖書やら兄貴の好きな作家の本やらを朗読しはじめる……確かに音は外に洩れてはいないけど、あんたのかがいしい看護ぶりは職員の間でちょっと有名くらいなんだよな。まあこれから先も長続きすればの話だと俺は思うけど」

法顕くんの最後の科白にはカチンとくるものがあったので、あたしは反撃することにした。

「もちろんこれから先もずーっと宗一郎さんが目を覚ましてくれるまで続くわよ。それにあたしは人に見せるためにやってるわけじゃないもの。自分で勝手にそうしたくてやってるだけだから、宗一郎さんの願いどおりにしてるとは一度も思ったことなんかないわ。だって本当は――彼はあたしになんて何もして欲しくないってわかってるもの。もしかしたらいい加減にしてくれって心の底ではうんざりしてるのかもしれないわ。『僕がどんなに苦しいか、君にはわかりもしないくせに』って責めてるかもしれない。けどあたしは毎日宗一郎さんにこう言うの。『お願いだから戻ってきて』って。宗一郎さんが助かったことには必ず意味があるんだからって。あんなに高い崖から落ちたのに、途中の樹に引っかかって助かるだなんて、奇跡以外の何ものでもないもの。だからこそあたしは信じていられるのよ、きっと神さまがもう一度奇跡を起こしてくださいって。あたしが毎日きちんとできるだけのことをして、慎しく生活してさえいたら、きっと――」

ぐん、と突然車のスピードが上がった。ほぼ一直線の道路のところであったとはいえ、アクセルをあまりに踏み込みすぎている。多分九十キロかそれ以上はゆうに軽く出ているに違いなかった。

「ちょっと、やめて！」

あたしは叫んで言った。

「怖いからやめてったら！もしここであたしとあなたが死んだりしたら、誰が宗一郎さんのあのことを看るのよっ」

「俺とあんたがここで仮に死んだとしても、兄貴のことは親父が面倒みてくれるさ。なにしろ俺だけしか施設から引きとれなかったことに今でも罪悪感を抱いてるからな。それよりもあんた、キリスト教にかぶれてきてるだろ？そばに住んでる牧師とかいうジジイの悪い影響か？」

S字のカーブに差しかった時にいくらかスピードは落ちていたけれど、タイヤにかなりの負担をかける、無理な曲がり方だった。悲鳴のような音が心臓に響いてきて、車がクラッシュするシーンが一瞬脳裏をよぎっていく。

「宗一郎さんが助かったのは牧師さんのおかげでもあるのよ。断崖の中腹から伸びている樹に引っかかっていた宗一郎さんを一番最初に発見したのも牧師さんだし、あたしに祈りなさいって手

？一生兄貴の面倒だけみて老いさらばえる覚悟を決めるには早すぎる年齢だよ。もちろん弟としてはすごく感謝してはいるけど、俺は真理子に幸福になってもらいたいんだよ。最初に会った時には、どうせまたろくでもない女に引っかかって死に際まで追いつめられたんだって思ったけど、あんたは違うんだもんな。俺も時々思うよ、交通事故にでも遭って肋骨かどっか折ってさ、三日くらい真理子に看病されたいって。林檎が食いたいっていったら皮むいてくれて、西瓜が食いたいっていったら真冬でも探して買ってきてくれるだろ、あんたなら。他にも肩と足をマッサージしろとか、あれしろこれしろって命令してもある程度のことならなんでもやってくれそうもんな、真理子は」

「ほんとに変なこと言わないで。あたしは相手が宗一郎さんだから優しくできるし、なんでもしてあげようって思うだけなんだから。それに認めるのに随分時間がかかったけど、あたしはすごく恵まれてるほうなのよ。入院費用の心配なんてしなくていいし、保険金もただもらいできる上に、膨れあがった預金通帳まで戸棚にしまってあるし……もちろん必要最低限使ったりなんかしないけど。きちんと家計簿もつけてるのよ。宗一郎さんが帰ってきた時に不審に思ったりなんかしないようにって。でも本当にいいの？宗一郎さんの財産的なものは全部法顕くんに預けて、必要に応じてあたしはその度ごとに貰ったほうがいいんじゃないかって最初は思ってたんだけど……法顕くん宛ての遺書には何か書いてなかった？」

前にも一度、同じことを聞いたことがあった。法顕くんに彼宛ての遺書を手渡した時に、良かったらあとでどんなことが書いてあったのか教えてほしいと頼んだのだ——もしも封筒に固く封がされてなかったとしたら、勝手に読んでしまっていたかもしれない。

法顕くんにはその時「あんたには関係ない」と冷たく言い放たれて終わってしまっていたけれど。

「べつに、財産管理についてのことは何も書かれてなかったな。俺は特別金に困ってるわけじゃないし、目の色を変えて財産を横からぶんどるようなタイプでもないってことが宗一郎にはわかってたからだと思うけど。でも金くらい自由に使って好きなもん買えばいいんじゃないのか？わざわざ口座の名義も真理子のに変えてあったんだからさ。なんならあり金全部持ってドロンしちゃってもいいんだぜ？」

「そんなことできるわけないでしょう。それに、お金で買える幸せなんていくらあってもあたしにはもう意味がなくなっちゃったもの。どんなに高いブランド品の服や鞆や靴を買ったとしても、宗一郎さんが『似合うよ』とか『可愛い』って言ってくれるんでなきゃ全然無意味よ。食べ物のごともそれと同じなの。仮にとっても美味しい霜降り的高级松坂和牛を食べたとしても、その肉と宗一郎さんは全然無関係なんだもの。でも野菜だけの食事を摂ってるよね、宗一郎さんのことを思いだすのよ。あたしが彼に合わせて菜食主義になるって言った時『べつに無理にあわせなくていいんだよ』って言ってくれたこととか……宗一郎さんは自分の主義を誰かに押しつけるつもりはないから、あたしが目の前でとんかつ食べてようとひれかつ食べてようとどっちでも構わないんだってそう言うのよね。だけどあたしは彼に少しでも近づきたかったの。野菜しか食べないってどういう感じのことか、実際にやってみないとわからないでしょう？そうやって彼の一部でもいいから理解して同じ気持ちになりたかったっていうか……」

一時間半のドライブも終わりに近づき、もう少しで家に辿り着くというところだった。もう電灯もまばらで、百メートルくらい間隔をあけてしか、電柱に明かりが灯っているのが見えてこない。

時々一時間半の道程を長く感じることもあるけれど、今日は話をする人が隣にいたせいか、比較的時間がいつもよりも短く感じられていた。

「あんたさ、ここにくるまでにソウイチローソウイチローって何回言ってるか自分で数えてる？病院をでる前からすでに百回ばかりも言ってるよな。俺はあんたと宗一郎のこと以外で会話をしちゃいけないわけなのか？他の話をしようとする、決まって真理子は怒りだすしな」

「……ごめんなさい」

あたしは素直にあやまっていた。

「でも法頭くんはあたしにとって宗一郎さんの話のできる、唯一の人なのよ。他の人は友達ですらあんまりよくは聞いてくれないの。でも考えてみたら本当にそうよね。ただののろけ話を聞かされて面白いって人はいないものね。今度から気をつけるようにするわ」

「いや、俺はべつに……」

あたしはドアを開けて車から降りると、ガレージの扉を両手で持ち上げようとした一—のだけれど、このガレージを開けるにはちょっとしたコツが必要なのだった。

年季の入っている錆びついた扉なので、なかなか気難し屋なのだ。力まかせにではなく、多手前に引くような形で……とかそんなことをやってたら、いきなり勢いよく扉が上がってしまった。

あたしの隣で法頭くんがなんなく扉の把手を持ち上げてくれたのだった。

「先に家の中に入ってるよ。寒いから」

「うん。ありがと」

シャッターを掴んで冷たくなった手を白い吐息で暖めながら、真っ暗な玄関へと回り、靴の中から手探りで鍵を見つける一—ドアを開けると家の中も真っ暗闇だったけれど、どこに何があるか大体わかってるし、慣れているからどうということもない。

「ただいま、宗一郎さん」

言いながら、居間の明かりを点ける。そして火を点すためにあたしが暖炉に近づくと、法頭くんが部屋の中へと上がってくるところだった。

「俺さ、今真理子がすげえ不憫なんだけど」

「そう？」

彼が何を言いたいのがよくわかっていたので、あたしはすぐにいくつかの薪を暖炉の中に放りこみ、そして火を落とした。

「今はまだ十一月の末とはいえ、こんなに寒いんだぜ？これから気温はどんどん落ちこむ一方だっなのに、いいのかよ、こんな生活してて。冬の間だけでも向こうから病院に通うとかすれば？一、二月になったら火を点けて部屋が暖まる前に凍死しちゃうぞ、あんた」

法頭くんはソファに座ると、大きく首を振って身震いした。革のコートの襟と襟とを合わせるようにしている。

そんな様子を見て、あたしは寝室にあるクローゼットの中から広幅のショールを一枚持つ

てくることにした。そしてそれを背中からかけてあげることにする。

「サンキュ」

タータンチェックのショールにがっちりくるまるようにしている法顕くんを見ていると、見た目によらず意外と寒がりなのかなっていう気がした。

あたしは暖炉の中を火かき棒でかき混ぜると、もう一度薪をくべて炎の燃えを良くするようにした。それからキッチンに入ってコーヒーを落とす用意をすることにする。

「今コーヒーできるから、もう少し待ってて。の……」

ほんの五分ほど目を離しただけだったのに、彼はソファの背もたれに頭を預けて眠りこんでしまっていた。

肌が寒さを感じていると、神経が冴え渡ってしまうものだけど、法顕くんは余程疲れていたのか、心地好さそうに寝息を立てている。

普段の言葉遣いが荒っぽいせいか、あたしは彼に医者らしさというか、医師に対する特有の尊敬の念といったものをあまり感じないのだけれど、今さらながら大変なんだろうなって思った。確か今日の昼すぎくらいに救急車が二台裏玄関に停まっていた、どうやら急患らしかったのを思いだしてもいた。

それなのにわざわざ食事に誘ってくれたのは、そこまでして焼き肉が食べたかったというよりも、あたしのことを本当に心配してくれてのことだったのだと思う。その上一時間半も運転するという時間外労働まで課させてしまって、申し訳なかったかもしれない。

あたしは彼が眠っている間に、下の階のベッドを整えて、宗一郎さんのパジャマをその上にだしておいた。丈は少しばかり短いかもしれないけど、多分サイズはそれほど窮屈ではないだろうと思う。

あとは二階のベッドへ行っていつものとおりにあたしは眠ればいだけだった。

もしかしたら何かあるかもしれないだなんて、考えてもいない。

ここは宗一郎さんの家だし、彼は弟で仕事帰りに遊びにきている、ただそれだけだったから。けれど、居間に戻って法顕くんの寝顔を見た時に、どきりとしてしまった。

普段はあの毒舌ぶりもあるせいか、宗一郎さんの兄弟だなんてとても思えないのだけれど、寝顔だけはベッドの上で眠っている宗一郎さんとそっくりだった――一瞬、彼が戻ってきてくれたのではないかと錯覚してしまうほどに。

あたしは法顕くんを起こさずに、暫く暖炉の前に座って聖書を読むことにした。ベッドの中に入る前に聖書を読むことが毎日の習慣になっていたから。

部屋も大分暖まってきていて、法顕くんが風邪をひく心配は多分ないだろうとは思ったけれど、あたしは自分が肩から掛けていたショールをもう一枚、彼の上に掛けておいた。

確か明日は法顕くんが午前の診察室に入る曜日だったような覚えがあるから、大切なお医者さんに大事があっては大変と思ったからだった。

あたしは紅茶を入れると、それを飲みながら聖書のレビ記を読み始めることにする。

新約のほうは先に読み終えていたので、今度は旧約のほうを読み始めていたというわけなのだけれど、あとになって旧約聖書を全部読み終えた時に、旧約聖書中もっともつまらなかったのは

レビ記だったなって正直なところ、あたしはそう思った。

もちろん神さまが神の人モーセに幕屋を作りなさいとお命じになって、幕屋の長さは何メートル、高さ何メートル、幅は何メートルと事細かく指示されたというのは素晴らしいことだとは思う。もし人が人生の幕屋を立てる時に、同じように神さまから命令があり、今日はああするとい、こうするといいて教えてくれたとしたら、もしかしたらすごく楽なのかもしれないとも。

朝目が覚めたら、二度寝返りを打って一度欠伸をして両手を上げて伸びをする……それからあなたは二十七歩かけて洗面台まで到着し、鏡を見ながら顔を洗う。そしてこう思う。今日も一日が始まった、神さまありがとう……なんてね。まあこれは流石に極端な例え話ではあるけれど、人間に自由意思が与えられているのは何故かといえば、そういうことなんじゃないかなってあたしは思ったりなんかする。

神さまは人間の人生のある時期においてこう選択を迫る――神の道をとるか、それとも自分自身の道をとるのか、と。そしてその両方、と答えることはほとんどの場合許されていないような気がする。

神はこうも言う。どちらの道をとるもあなたの自由だ、と。ただ自分自身の利益の道を神の道よりも優先させた場合、私はあなたが悔い改めるまであなたを忘れるだろうと、そう言うのだ。

キリスト教における自由思想というのはつまりはそういうことなのではないだろうか、あたしは思う。

人間の自由において神を信じるのでなければ、それでは神はただの人形使いと化してしまうことになるから。

半ば脅迫、といえるかもしれないけれど、それだからこそ神は絶対的な権威者であるという証にもなりえるのではないだろうか……なんていうことにあたしが思索の網を広げていると、突然横から聖書を覗きこむ影があった。

「ふうん、レビ記ね。ストーリー展開的にいって旧約聖書中もっとも退屈な章だよな」

法顕くんは二枚のショールも革のコートもソファの上に置いて、暖炉の前のラグのところに腰を落ち着かせていた。

「読んだことあるの？」

「一応一通りはね。俺は兄貴ほど熱心ではないにしろ、聖書が偉大な書物だってことは認めるよ。だからといって毎週欠かさず日曜礼拝に参加しようだとか、しょっちゅう神に感謝しようだとか、間違ってもそんなことは思いもしないけど。カトリック系の孤児院で育ったなんていっても、信仰に関しては結構いいかげんであやふやなところだったからな、俺と宗一郎のいたところは。確かに朝早くに起きて聖体を拝めだとか、寝る前には必ず膝を折って祈るようにだとか、そんなことは指図されるんだけど、何しろ子供だからね。ほとんどの奴が言われたからそのとおりにしてるってくらいのもので、イエスの似姿になるようにとかなんとか言われても、さっぱりぴんとこないんだな。何故イエスの似姿にならなきゃいけないのか説明されなきゃわかんないし、修道長の説教なんて聞いたもんじゃなかったよ。子供にとってはただ忍耐を学んでだけの場所さ。だけど宗一郎はひとりだけ別で、あいつは鋭く反応したんだな。俺が思うに<神>とか<宗教>って事柄には、霊的に敏感な奴と鈍い奴とがいるんじゃないかって思うよ。さしずめ宗一

郎は前者で、熱心が崇って修道会長の説教に口出しするくらいだった。聖書のどこの箇所を引用してだったかは忘れたけど、『神さまはそんなに心の狭い方ではあられないと思います』とかなんとか言ったんだよ。わかったようなしたり顔して黙って聞いてりゃよかったのに、宗一郎は礼拝所からつまみだされて、半日反省室にぶちこまれることになったんだ。当然その日の夕食は抜きでね……なあ、煙草吸ってもいいか？真理子が宗一郎の匂いがどうたらっていうんならやめてもいいけど」

彼は煙草を唇の端にくわえて火を点けようとしたところで、思いだしたようにそう聞いた。「もちろんいいわよ。あたしが言ったのは肉体的な意味での匂いじゃなくて、精神的な意味での匂いのことだもの。待ってて、今台所から灰皿持ってくるから。あと、コーヒー飲む？」

彼はああ、と答えて、暖炉の脇にあったマッチを擦ると、それで煙草に火を点けていた。あたしはキッチンの戸棚に灰皿があるのを大分前に発見していて、宗一郎さんは煙草を吸わない人なのに、と怪訝に思ったりしていたのだけれど、多分法頭くんや他に来客の人があった時のために用意してあったんだろうなってやっと今察しがついた。

「砂糖は入れなくていいのよね？」

宗一郎さんの好きなパディントンのマグカップにコーヒーを注いで、あたしはそれを法頭くんに手渡した。それから黒一色の灰皿も一緒に。

「ねえ、法頭くんとこの病院って綺麗な看護師さんが多いわよね。もしかして顔やスタイルで選んでたりなんかするの？」

まさか、と煙草の灰を暖炉の中に零しながら彼は笑った。「看護師なんて来る者拒まず、去る者も追うっていうくらい病院にとっては貴重な存在なんだぜ？ スチュワーデスじゃあるまいし、より好みなんていう贅沢な真似はしてられないよ。何をやぶからぼうに聞くかと思えば、あんたあれだろ？ 俺に看護師とつきあったことはあるのかって聞きたいんだろ？」

彼があたしのほうに意味ありげな視線を投げつけてくる。「気になる？」
「……だって、宗一郎さんとののろけ話は聞きたくないってさっき言ってたじゃない？ だから他のことっていうとあんまり思い浮かばなくて……」

「ああ、そういうことですか」
彼は何故か敬語になって、瞳に宿らせている表情を変えた——ような気がした。「うちの病院の職員とそういう関係になったことはないよ。他の病院の看護師とならつきあったことはあるけど。他に質問は？」

「じゃあ……えーと、今日病院にきてた女の人、あの人以外にすごく好きな人はそれからできた？」

難しい質問だな、と彼は首を捻っている。「正しくはね、彼女に会うずっと前から好きな人はいたんだよ。ただその娘とは将来結婚して一生守っていきたいと思っても、どうしてもそういうわけにはいかないってわかってたから、諦めたんだ。その諦めるきっかけをくれたのが今日病院にきてた女の人で、本人はまったく気づいて

ないけど、彼女は何もしていないのにある意味で俺を救ってくれたんだ。気の狂いそうなくらいの気持ちがシーソーゲームみたいに、由架から彼女に傾いて行って、危ういところでバランスを保つことができたんだ。要するに心の中では二股かけてたってことだな。ある時は由架のことが好きで、またある時は友達の彼女のことが死にたくなるくらい好きだったよ。まあ彼女の幸福を考えればね、俺みたいのとは深く関わりあいになるべきじゃないってことはよくわかってたんだけど、その人のことを考えてないと気持ちが由架に流れていくし、血の繋がらない妹への思いを断ち切るためには、その人のことをずっと強く思う必要があった。そしてずっと強く思えば思うほど苦しみも増していくのに、変な話、それが嬉しくもあったりしてね。俺はおそろしく利己的な人間で、しかも飽きっぽいところがあるから、ひとりの人間を五年以上も忘れられずに思ってたっていうのは我ながらすごい快挙だと今でも彼女に会うたびに思うよ。まあ会うたびにね、夫と別れたら俺のところにくるようになって冗談で言うんだけど、それは絶対っていてもいいくらいない話だろうなあ」

彼はコーヒーを一口啜ると、何故かとても幸福そうな溜息を洩らしていた。

宗一郎さんとひとつ違いだから、今二十八歳だろうか。あたしとは多分四つ違いということになる。考えてみたら結婚しても全然おかしい年齢じゃないし、彼が病院を継ぐのなら、そろそろ縁談話を山と積まれて見合いしろ見合いしろとしつこく連呼されているのじゃないだろうか。一般的に、女も男も三十歳くらいまでに結婚するのがベターだという風潮が今も世間には吹いているようなところがどうしてもあるし。

「その妹さんとはどうして結婚できないの？血が繋がってなくてお互い好きあっているなら、何も問題はないんじゃない？」

彼は先程とはまったく正反対の溜息を着いている。

「本当に鈍いよな、真理子は。よく考えてみたら条件的にいつ絶対無理だっていうことがわかるはずだよ。俺が大友の家に引きとられたのは十三歳の時で、ちょうど思春期の盛りとかいう頃だったからね。もし、もしもだけど一々に由架と俺が互いを好きあっていて、今か今よりも前かに結婚式を挙げようとしたとしようか。そしたら大友家の親類縁者はこぞってなんて言うと思う？いや、口にだすださない、言葉として直接的には言わないにしても、心の中でどういうことを想像すると思う？俺が大友の家の敷居を跨いだ時、由架は八つだった――一体ふたりはいつ性交渉に踏み切ったのかとか、そういう猥雑なことを想像されるに決まってる。連中は揃いも揃って腐った腑抜け野郎ばかりだからな。ましてや由架は聾啞者だから耳が聞こえないし、特に親しい人間以外の前では喋ったりすることもないからね、もしかしたらそのことをいいことに実は由架の小さな頃から口ではいえないような猥雑行為を強要していたのかもしれない、なんてことまで奴らには連想されるわけさ。そして何食わぬ顔をして大友家の財産をあの人殺しの息子がひとり占めにしようとしてるって親父とおふくろ抜き親族会議で協議されるわけだよ」

人殺し、と聞いてどきりとした――彼はいつそのことを知ったのだろうか？法顕くんはそのことを知られないそのために宗一郎さんはいわれもない虐待を受けていたのに。

「……いつ、知ったの？お母さんのこと」

法顕くんは暖炉の炎に向かって軽く肩を竦めている。

「大友の家に引きとられてからすぐさ。わざわざご丁寧に教えてくれる奴が親類には何人もい

てね。そうやって俺が形だけは本家の長男でも、親戚中では実質的にもっとも格下の者であることを示そうとするわけさ。俺が真っ先に考えたのは兄貴のことだったよ。兄貴にとっておふくろは聖母マリアのごとき存在だったからね、絶対に兄貴にだけは何かあっても知られるわけにはいかないって思ったんだ。でも手続きのことやなんかでごたついでるうちに、親戚中がまたうるさく言い立て始めたんだよな、『人殺しの子供なんてひとりでもたくさんなのに、ふたりも引きとるだなんて狂気の沙汰だ』とかなんとかね。まあ複雑なこみ入った事情があるわけなんだけど、俺はある意味で兄貴は大友の家にこなくてよかったのかもしれないって思うんだ。確かに離ればなれになってる間、俺もつらかったし兄貴もつらかっただろうなって思うけど、多分俺よりは兄貴のほうが施設にいても自由だったんじゃないかなって思わないこともないしね。それに兄貴は十九歳で小説家になったんだぜ？それまでにあった色々なつらいこととか孤独のせめぎあいだとかがあって、兄貴はすごくいい小説を書いたんだ。そして世の中に認められた。俺はといえば、兄貴が文壇で脚光を浴びた時、何をしてたと思う？毎日予備校に通って猛受験勉強に勤しむ日々だよ。俺の一浪が決定した時の親戚中の嘲りとプレッシャーは凄まじいもんだったな。そういうことを思いだすたびにね、俺は兄貴のことを考えた。このままこの家を抜けだして、兄貴とふたりきりで暮らせたらどんなにいいだろうって——もちろんそんなことはできもしないし、許されもしないことだったから、勉強の合間の楽しい現実逃避ってだけではあったんだけどね」

法顕くんはお母さんと離れて、何故孤児院に入れられていたのか、その理由を知っていた。でも宗一郎さんがそのために施設内で虐待を受けていたということは知らないんだ。

「どうした？急に黙りこくって。宗一郎の遺書には、真理子には何もかも話してあるって書いてあったから、俺も全部ぶちまけて喋っちまおうと思ったんだけどな。俺は普段はこんなにべらべらものを喋る男じゃないんだぜ？でも真理子とは最初の出会いがまずかったせいか、なんでも話せちまえるんだ。由架のことも友達の彼女のことも、これまで誰にも話したことなんかなかったのに、相手が真理子だと——多分、初めて会った時から体当たりでぶつかったからそのせいなんだろうな。今は真理子の前にいる時が一番自分らしくいられるような、そんな感じなんだ」

彼はぎりぎりのところまで吸った煙草を灰皿の上で揉み消すと、不意にあたしのほうをじっと見つめていた。

あたしは彼になんて言ったらいいのかわからなかった。

ふたりとも、どちらの境遇のほうの方がよりつらかったのかなんて、不幸比べをしたところで今更何も変わらないし、そもそも測れる秤というものがこの世には存在しない。それに天秤にかけてみたところで、法顕くんの受けた傷や宗一郎さんの癒されない痛みを和らげるなんていうことができるわけじゃない。

彼は慰めの言葉を好まない人だから、あたしには何をどう言ったら自分の感じている感情を真っ直ぐに伝えられるのかわからなかった。

「……遺書には、なんて書いてあったの？」

あたしはやっとのことでそれだけを言った。でも彼のほうには違う言葉を欲していたような気配があって、あたしはありきたりでもいいから、何か同情を寄せる言葉のほうを選んだほうがよかったのかもしれない。

炎の照り返しを受けた紅い眼差しで、彼はあたしのほうを見つめてくる。

「お願い、教えて。どうしても知りたいの。あたしには言えないようなことでも弟のあなたになら、宗一郎さんは本当のことを全部告白して、それで――それで……きっと心残りなく海へいってしまったんじゃないかって……そんな気がして……」

心の中に波が打ち寄せてくる。

心の際にまで波がだんだん激しく打ち寄せてきて、その深淵へとなだれこみ、すべてを飲みこもうとしてくる。そしてばらばらになって解体されて、どことも知れない浜辺へと流されてしまいうようになる。

「教えてやってもいいけど、その代わり只でとはいかないな」

彼はあたしが身を引くよりも早く、あたしの左手を引き寄せていた。

「じっとしてろ」

してられるわけがない。あたしは彼の腕の中から逃れようと、必死にもがいていた。

「宗一郎は俺に真理子のことをよろしく頼むってそう遺書に書いて寄こしたんだよ。兄貴のあとを追ったりなんかしないようにって。だから俺にはこうする権利がある」

駄目だと思った。

押し倒されたらいくら抵抗してもきっと力を封じ込められる。

ここで負けたらもう終わりかもしれない。

「――宗一郎さんっ……！」

名前を呼ぶと、彼が部屋のどこかから見ているような気がした。病院のベッドの上で眠っている宗一郎さんの姿が脳裏をよぎっていく。

「俺のことを兄貴だと思え。ずっと宗一郎の名前を呼んでて構わないから。俺と宗一郎は小さな頃から離れるまでの間ずっと運命共同体だったんだ。俺のものは宗一郎のもの、宗一郎のものは俺のものだった」

重い体躯が真上にのしかかってくると、コーヒーと煙草、それから微かに衣服から焼き肉の匂いがしたような気がした。

「勝手なことばかり……っ！あたしはものじゃなくて、生身の人間なのよ？明日、どんな顔して宗一郎さんに会いにいったらいいのかわからなくなるからやめてっ……もしあなたがこれ以上ひどいことをするなら、あたしも海に身を投げて死んでやるっ！」

セーターをまくり上げていた手が一瞬止まった。けれどもそれは本当に一瞬で、次の瞬間にはブラジャーのホックを外されていた。スカートの中のパンツを一気にずりおろされて、足を開かれる。

あたしは両の瞳を堅く閉ざしたまま、宗一郎さんのことを念じるように思っていた。

つかまえられている胸が痛い……宗一郎さんはもっと優しくかった。あたしがほんのわずかにでも痛みを感じないように、優しく包んでくれた。こんなに大切に触れてくれる人にはもう二度と巡り会えないだろうって抱かれながらそう思った――涙があふれてとまらなくなってくる。

「泣いてるのか？」

強い手が顎を掴むと、唇が頬に触れた。それからキスされそうになる前に、あたしは顔を背けていた。

その時、突然彼の体があたしから離れて、重力の圧迫が消えた。

目を開けて起き上がると、彼は一匹の虫と格闘を繰り広げているところだった——背中に赤い斑点のある害虫と。

法顕くんは火ばさみでその虫を捕まえると、暖炉の火の中へと放りこんでいた。

あたしはその僅かな間にたくしあげられたセーターを下ろし、スカートを膝下まで下げて、パンツをセーターのお腹のあたりに咄嗟に隠していた。そして何事もなかったかのように階段を上って二階へいこうとしたけど——足が震えて立てなかった。

「続きをやる、わけにはいかないよな」

あたしは彼がそのまま黙って何も言わずに立ち去ってくれることを強く願っていた。視線が突き刺さるように痛くて、顔を上へ向けることさえできない。

「大丈夫だよ、もう何もしないから。とりあえず今日のところは、だけど。隙があったらまた狙うつもりだから、これからは用心しといたほうがいい——じゃあおやすみ」

彼があたしの傍らを通り過ぎて寝室へ行ってしまったあとも、あたしは暫く暖炉の前で呆然としていた。

つい今しがた、自分自身の身に起きたことが体験としてうまくのみこめず、現実を信じることができなくなっていた。

(あたし、ここで何をしていたのだろう……?)

思考のまとまらないまま、なんとなく立ち上がり、バスルームまでぼんやりと歩いていくことにする。そして服を脱ぐと、シャワーを浴びて、ボディシャンプーをよく染みこませたスポンジで体をよくこすことにする——鳥肌が立つくらいバスルームは寒くて、あたしは体を震わせながら自身の体の汚れを洗い流していた。そして寝室のベッドの中へと入る前に手を組み合わせて祈ろうとしたのだけれど、どんなに強く祈ったところで、それは自分自身の虚しい呟きにすぎないような気がして、雑念に中断されてしまうのだった。

いつもなら、祈ろうとして瞳を閉じると、宗一郎さんがすぐそばにまできてくれているような感覚がある。それなのに今日はなんの訪れも気配もまるきり感じられなかった。

あたしは心の中で何度もあやまり、降りてきてほしいと彼に懇願しながら、深い眠りの縁へと導かれていった……。

朝の訪れを感じて目が覚めると、心地好い冷氣——というよりも靈氣——が部屋全体を満たしていて、一日の始まりを祝福してくれているかのようだった。

あたしはカーテンを開けて、窓越しに空の青さを仰ぎ見、それから屋根の上とその下の地の上へと目を落とすと、霜の降りているのを見た。樹氷がとても美しく自然界を彩り、葦の海に点在する樹木に冬の装いをさせている。そして今日から暦が師走の十二月であることを思いだし、それからきのうの夜のこともついでのように思いだしてしまうと、心が途端に暗澹たる思いで塞がれてしまった。

本当にほんの一瞬前まで完全に忘れ去っていたのに、記憶が不吉な予兆を告げる影のようにきのう起きたことを今日という朝を迎えたあたしに教えていた。

あたしは身支度を整えて階下へと降り、暖炉に薪をくべると、その上に焚きつけた燃料を落とすことにする。それからキッチンで御飯を炊き、お味噌汁を作り、フライパンの上で目玉焼きを焼き……あとは冷蔵庫の中からほうれん草の胡麻和えやサラダや納豆なんかを取りだして、食卓の上に並べた。

法顕くんには物足りないかもしれないけれど、食べさせてもらえるだけ有難いと思ってもらうしかない。まさか自分だけさっさと朝食を済ませて、彼にはお昼まで絶食させるというわけにもいかないだろうから。

きのうの夜は何事も起こらなかったような素知らぬ顔をして法顕くんは食卓に着くに違いないから、あたしも忘れきったような顔をしていればいい、ただそれだけのことなのだと、あたしは気持ちを整理して割り切ろうとした。それなのに、キッチンの床の隅を這うゴキブリ似の虫を発見してしまい、あたしは忘れたふりをするのが罪なことのように感じずにはいられなかった。

「……ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさいっ！」

スリッパの後ろで何度も何度も繰り返し虫の羽を叩く。庭仕事を始めてからというもの、蜘蛛やみみずくらの昆虫にならかなりうまく対応できるようになったとはいえ、この名前もわからない害虫にだけは未だに手こずらされていた。

結局赤い斑点を背負ったゴッキー（あたしが勝手に命名した仇名）はほうほうの体で食器戸棚の裏手のほうへと逃げていき、あたしはまたしてもゴッキー殺害に失敗してしまった。

一匹の虫にも五分の魂……そう思って宗一郎さんのように手づかみにしてどこか遠くへ逃がしてあげるのが一番いいのかもしれないけれど、あたしには直接指で触れるだなんて想像することもできない。それでいつもスリッパや箒や、そんなもので叩き殺そうとするのだけれど、なかなか相手もしぶといから致命傷を与えるのが難しかったりするのだ。

まったく、ゴッキーが出没した時には生きた心地がしやしない。そしてふと気づくと、なりふり構わず全精力を費やして敵と対峙し、引き分けて終わってしまうのが常なのだった。

「何をあやまってんだよ？」

スリッパを片手に握りしめ、髪を振り乱しているあたしの背後にいつの間にか法顕くんが立っていた。

「きのうの虫を追っ払ってたの」

法顕くんはふうん、と答えて食卓の椅子に座り、外のポストから取ってきたらしい新聞を広げていた。

「俺はまたてっきりきのうのことを宗一郎にあやまりでもしてんのかと思ったぜ。それにあんた、恩を仇で返すような真似してていいのかよ？あのゴキブリみたいな虫のお陰で助かったくせに」

「いいも悪いも仕様がなないじゃない。きのうはきのう、今日は今日よ。その話はもう二度としないです」

あたしはぴしゃりと言ってやったつもりだったのに、彼は新聞から顔を上げると、意味ありげな、意地悪そうな笑みを口の端に刻んでいた――あたしが何を言ったところで、言葉の上では彼のほうが常に一枚上手なのだ。

「きのう、ベッドの中で眠ってたらさ、宗一郎が夢枕に立ってこう言ったんだよ。『もう二度とあんなことはするな。真理子は自分のものだから』って。それで俺は言い返してやったんだ、『自分から捨てておきながら、それは虫のよすぎる話なんじゃないか』ってね。宗一郎はそれきり黙って消えちゃったけど」

「……それ、本当なの？」

法顕くんの前に豆腐のお味噌汁を置きながら、指が震えるのを止められなかった。やっぱり宗一郎さんはあたしのそばにいつもいてくれて、見守ってくれているんじゃないかってそんな確信が心に生まれて。

「嘘に決まってるだろ。引っかけやすいな、真理子は。せいぜい宗一郎の留守中に変な男に騙されないようにしろよ？特に俺みたいなのにさ」

あたしは彼の目の前に御飯をよそった茶碗を乱暴に置くと、零れてしまったお味噌汁のあとを拭きもしないで食事の席に着くことにした。むっつりと黙りこんだまま、もう一言も話してなんかやるものかと思う。

彼はあたしに対して謝意を態度で示すつもりもなければ、きちんと言葉で謝罪する気持ちもさらさらないみたいだった。

悪びれない口調でさらに続けてこう言ったのがそのいい証拠だったかもしれない。

「可愛いよな、真理子は。その調子だときのこと宗一郎が助けてくれたんだとかなんとか思ってんだらう？宗一郎と真理子がここでどんなふうに住らしてたのか、大体は想像がつくよ。『見てごらん、真理子。今日もとってもいい天気だよ』、『ええそうね、宗一郎さん。とってもいいお天気』……とかなんとか、そんな調子だろ？まったくありありと目に浮かぶようだよな。定年後の老夫婦が交わす会話みたいなもんだ」

「何よ、そのどこがいけないわけ？いつもいつも四六時中意地悪なことばかり言う人とする会話なんかよりずっと健康的じゃない。あなたと話をしているとあたしは血圧が上がりっぱなしになって、血管が切れそうになるもの。これからはもう宗一郎さんとあたしの間のことに二度と口出ししないで。あなたがいくら宗一郎さんの弟だからって考えてみたらそんな権利はどこにもないんだから」

彼は不機嫌そうにお味噌汁を音を立てながら啜っている。

「権利ならあるさ。宗一郎は死んだあと、真理子のことをよろしく頼むと書きおいていったんだからな。もしも俺が真理子のことを好きになって、真理子にもその気があるようなら罪の意識を感じることなく一緒になって欲しいとまで書いてあったんだぜ？最初はそんなことはありえないって思ったけど、兄貴は先を読んでたんだよ。わざわざ聖書からの引用文まで書いてあったくらいだからな。申命記の二十五章の第五節だ。あとで読んでみろよ」

あたしはぶすっとしたままの顔で、それ以上は何も言葉を返すことができなかった。法顕くんには何かひとつのことを指摘して言い募ると、それを十倍にも増して返されるのは日常的ですらあったから、反駁したいことはいくつもあったけど、あえてやめにしておこうと思った。彼を言い負かしたり説き伏せたりすることなど、もしかしたらあたしには一生かかってもできないことかもしれない。

法顕くんは美味しいとも不味いとも言わずにひたすら黙々と食べ続け、ご飯茶碗が空になるとそれをあたしに差しだしてきた――それで仕様がなくてあたしは席を立つと、御飯をよそってあげることにする。

あたしは彼よりも先に食事を終えたので、食器を片付けると、さっき法顕くんが言った聖書の箇所を探して読んでみようと思った。申命記はレビ記の次の次の章なので、まだ読んではいないところだった。

『兄弟と一緒に住んでいて、そのうちのひとりが死に、彼に子がない場合、死んだ者の妻は、家族以外のよそ者に嫁いではならない。その夫の兄弟がその女のところに入り、これを娶って妻とし、夫の兄弟としての義務を果たさなければならない』

目が文章の全部を追うよりも早くに、あたしは聖書を閉じていた。自分でも気づかないうちに涙が零れていて、頬を伝うその感触がなんなのか、一瞬わからないくらいだった。

もちろん宗一郎さんはまだ生きているし、これは遥かな昔、紀元前は旧約時代の婚姻についての規定ではある。けれども問題はそういうことではなくて、宗一郎さん自身がそれを望んでいる、ということだった。

もしも彼があたしのことを最初から愛してなんていなくて、ただ慈悲深い心から抱いてくれたのだとしたら、あたしはもうどうなってもいいような気がした。ただどうしてもそれだけとは思えないから、意識が混沌としてきて、思考の蔦が心を締めつけるように絡まってくる。

彼に間違いなく完璧に愛されている、そう思ったのは一瞬の錯覚だった？

彼が愛していると言ったのも、結婚しようと言ったのも、ただの気まぐれからだった？

初めての夜、あたしは彼を失望させてしまった？……でもそれならどうしてあんなに優しくしてくれたの？

他人よりは自分の弟に――だなんて、どちらにしても彼はあたしを愛してはいなかったんだ。嫉妬も何も感じないほどに、少しも愛してくれてなんかいなかったんだ。

それに引き換え、あたしは宗一郎さんの体に他の女の人の手が触れるだけで、それだけのことで嫉妬してしまう自分が嫌でたまらないのに。

流し台から水の流れる音が聞こえると、あたしは暖炉の前から急いで立ち上がっていた。洗面台のところまでいき、泣いていたことを気づかれまいとして、手早く顔を洗うことにする。

「宗一郎の髭剃りあるか？」

タオルで顔を拭いていると、ドアを開けた法顕くんの姿が鏡に映っていた。

あたしは左の手でタオルを押さえ、右の手で髭剃りの置いてある棚を指差した。それから目元のあたりをもう一度ゆっくりとこすってから顔を上げる――よし、これでもう大丈夫。

あたしは法顕くんに洗面台を譲ると、洗い物をするべくキッチンへと足を向けることにした。

「歯ブラシとタオルも、新しいの置いてあるから」

ああ、と彼はシェービングクリームの缶を振りながら返事をしていた。

「真理子は気高くて、我慢強くて、それから意外に気が強いよな」

病院へと向かう途中、長い沈黙の続いたあとに法顕くんは突然思いだしたみたいにそんなことを言った。

あたしの運転では危なっかしくて生きた心地がしないとのことだったので――横で見ていると百メートル進むごとに三時間ずつ寿命が縮むらしい――ハンドルは今日も彼が握っている。

「法顕くんは傲慢で傍若無人で、しかも時々慇懃無礼よね」

あたしが容赦なくやり返すと、彼は皮肉げな笑みを浮かべて、CDのスイッチを入れた。メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲がかかる。

「じゃあ兄貴は？」

「宗一郎さんは……」

あたしは暫くの間考えてから答えた。

「優しくて優しくて、どうしようもないくらい優しい人よ。法顕くんは宗一郎さんのことどう思ってるの？褒めたりけなしたり、お兄さんのことを本当は好きなのか嫌いなのか、あたしには時々わからなくなるんだけど」

彼にしては珍しく、答えるのに少しばかり間があった。

「宗一郎のことをどう思うか、か。極めて簡潔に答えるとするなら、天才と狂人は紙一重、繊細と馬鹿は紙一重ってとこかな。俺は宗一郎のことは好きでも嫌いでもないよ。ただ兄弟として以上に愛してるっていう、それだけのことだ」

「兄弟として以上に……って？」

ハンドルを片手に煙草を吸っている彼の横顔を、あたしは思わず見返していた。

「言っとくけどな、近親相姦ホモとかなんとか、そういうことじゃないからな。世間に腐るほどある普通の兄弟関係以上には愛してるって意味だよ。俺と宗一郎はお互いに特殊な環境に置かれたせいか、その分結びつきが強いし、絆が濃いんだ。孤児院に入ってから今日に至るまで、喧嘩したっていえば兄貴が知らぬ間に前の女房だった女と入籍してたっていうその時くらいだもんな。だから初めて真理子に会った時ははっきり言って発狂寸前だったんだ。どこの女狐が宗一郎をたぶらかしたのかってそう思ってさ」

「あたし、多分あの時のことがなかったとしても、法顕くんみたいなタイプの人には怖くて近づけなかったと思うわ。背は馬鹿みたいに高いし、サングラスかけてるのになんだかこっちを睨ん

でる感じだし、でかい図体に比例するみたいに見るからに態度は大きいし……なんだかすごくおっかなそうな雰囲気をする人だったんだもの。だから時々変な気がするのよね、普通だったらまず知り合うことのないタイプの人なのに、こうして今は車の中で喋ってたりすると」

——海が見えてきていた。

それからその反対側の方角には蒼い山々の峰々と稜線と尾根が、海よりも鮮やかな青さで聳えているのが遥かに見える。そしてその前方にはたなびく綿毛のような白い雲と水色をした澄んだ空。

清々しい冬の日の朝の風景が、雪の白さの到来を待ちわびているかのようだった。

「今は怖くないのか？」

窓の外の景色に溶けこんで、一体化してしまいたくなるあたしに、彼はそう聞いた。あたしは車の外にのぼしていた感覚の触手を内に戻して意識を帰らせることにする。

「怖いわよ。怖いに決まってるじゃない。こっちがたじろぐようなことを突然あっさりと聞いてくるし、思いだしたくもないけど、きのうのことにしたってそうよ。はっきり言ってあたし、あなたの前でどんな顔をしたらいいか、今もちょっとわかんないくらいなんだから。家をでる前に旧約聖書の申命記を読んだけど、べつにあれは現代に適用していいような婚姻の規定ではないでしょう？大昔だからこそあった慣習なんだから、何も法顕くんが宗一郎さんの書き送ったことを真に受ける必要はないわよ。第一、宗一郎さんはまだ生きてるんだから」

「べつに真に受けてなんかねえよ。いくら俺が宗一郎のことを愛してるからって機械人形みたいにいちいち言うこと聞かなくてわけじゃないんだから。それはそうと、あんた一度うちの病院の診察室にきてみるよ。別人みたいだぜ、俺は。何しろ看護師と患者の間では『優しい大友先生』で通ってるからな。聴診器あてがてら、ついでに乳でも揉みしだいてやるよ」

こいつが車のハンドルさえ握っていなければ遠慮なく突き飛ばしてやるのになってそう思った。

「やれるもんならやってみなさいよ。裁判にかけて医師免許剥奪してやるから」

「それは流石に無理だと思うけどな。何分俺は日頃の行いが良すぎるからね、せいぜい和解に持ってかれて終わりってとこだろ。まあ裁判にすらならないだろうとは思うけど」

彼はそうやり返すと、窓を少し開けて、そこから吸っていた煙草を投げ捨てていた。あたしは思わず「あーっ！」と叫んで、凄い目で彼を睨みつけてしまう。

「やめなさいよ、捨て煙草は。優しい医者は環境問題にも注意を払って、地球にも優しくあるべきよ」

彼は新たなる煙草に火を点けると、溜息を着くみたいに煙を吐きだしている。

「宗一郎みたいなこと言うなって。真理子は絶対宗一郎に洗脳されてるんだよ。俺がそのマインドコントロールみたいなもんを取り除けるといいんだけどな」

「それは絶対に無理よ。あたしが宗一郎さんのことを愛し続ける限りはね」

ああそうですか、と法顕くんは呆れてるのか馬鹿にしてるのかよくわからない表情で、再度溜息を洩らしていた。

その後、幾日かが経過してから、あたしは『優しい大友先生』を病棟のエレベーターの前で目撃していた。

売店でパン菓子か何かを買おうと思って階段へと向かう途中の出来事だった。彼はひとりの患者さんに捕まっていて、軽い押し問答になっている様子で――宗一郎さんと同じ階に入院している、重い痴呆症状のある小柄な白髪のおばあさんだった。

「先生にはお世話になってるからねえ、これぐらいしないとおいてもらえないんじゃないかと思って」

おばあさんは病衣の懐から茶封筒を取りだして、かの優しい大友先生の白衣のポケットへと半ば強制的に押しこんでいる。

「いいんだよ、入院費用ならきちんと他に貰ってるんだから。咲屋さんはこれで自分の好きなものを下の売店ででも買うといいよ」

彼はしわくちゃになった封筒をサキヤさんというおばあさんの胸に返すと、ちょうど階段を上ってきた看護師さんに売店へ一緒についていってくれるよう、頼んでいた。

検査室から検査用のスピッツやカルチャーボトルなどを両手一杯に持ってきていた看護師さんは、「ちょっと待っててくださいね」とナースステーションにそれを置いてからまた戻ってきて、喜んで引き受けるかのようにおばあさんの手をとっていた。

「何見てんだよ」

ふたりが階段を降りていってしまうと、彼は隠れるように見ていたあたしのほうを軽く睨めつけてきた。どうしてこうも態度をころりと変えられるのか、彼の神経を疑わずにはいられない。

「あなた、もしかして舌が二枚あるんじゃないの？別人だったわよ、さっき」

「だから言ったら、俺は本当はとっても優しい男なんだって。これから食堂に行くけど、真理子もくるか？飯まだなんだろ」

チン、とエレベーターが鳴って、その扉が開く。あたしは考える間もなく咄嗟にその中へと乗りこんでしまっていた。そして彼が五階のボタンを押すと扉が閉じられる。

「おばあさんから封筒をもらった時、てっきり受けとるのかと思ったわ。よく医療問題を扱ったドラマなんかであるでしょ？手術の前に患者さんがお金を包んでお医者さんに渡すとかっていうの」

「ああ、あれな。俺には患者やその家族がどうしてああいうことをするのか、理解に苦しむけどね。べつに金を貰おうと貰わなかりょうと医者 of やるべきことは同じなんだからさ。『この患者からはなかなか多く包んでもらったから、特別慎重かつ丁寧にまた気合いを入れて手術にのぞもう』なんて思う医者は多分いないんじゃないかと思うね。みんな同じだよ。最善を尽くして出来るだけのことをするっていうのが医者 of タテマエなんだから」

エレベーターが五階に到着すると、食堂のほうからカレーの匂いが漂ってきた。

お昼ご飯の配膳の時にも同じ匂いが廊下からしていたことをそういえば、と思います。

今日のメニューはカレーライスに福しん漬け、それから手打ち素麺ときゅうりの酢もの、フル

一ツサラダに牛乳だった。

食堂には作業療法士や検査技師の制服を着た人が四人と、それから看護師さんが三人いるきりで、みんな忙しくてお昼時にご飯を食べそびれた人たちなのかなっていう気がした。

「いつもこんな遅くにご飯食べてるの？」

窓際の席に向かい合わせに座ると、あたしはスプーンを片手にそう聞いた。

「いつもじゃないよ。今日はたまたまっていうか、外来が忙しかったからね。まあ今より遅い時間に飯食うことになる時もあるし、その日によりけりってとこかな。それで診察室をやっとぬけて一度医局に戻ってから食堂へいこうとしたところを咲屋のばあさんに捕まったというわけだ。あのばあさん、かなり毫碌してるからな、同じ階の患者やらバイタルチェックにいった看護師やらを捕まえては金ばらまいてんだよ。あんまりしつこい時には一旦受けとってから家族に返すようにはしてるんだけど、他にも徘徊だとか何やらでなかなか手の焼き甲斐のあるばあさんなんだ。まあ流石にさっきみたいな科白を聞きちまうと心の痛むものはあるけどな」

「そうよね」

あたしはそう頷いていた。

それから暫くの間、互いに無言で食事をしていて、他の席に着いていた職員の人がひとりふたりとワゴンにお膳を下げていき、とうとうふたりきりになってしまいそうな時だった。

「先生、テレビ見ますか？」

ワイドショーを見ながら職員同士で雑談していた看護師さんのひとりが、立ち去る前にテレビのリモコンを置いていってくれた。彼は受けとったりリモコンのチャンネルを何度か切り換えて、どこも同じ芸能人の離婚会見の中継であるのを見ると、スイッチを切ってしまった。

「さっきの女の人、とても可愛らしい人よね。清拭とか体位交換の時に何度か話をしたことがあるけど、すごく感じのいい話し方をする人だし……法顕くんはそういう看護師さんとか見て、心が動くってことない？ やっぱり結婚するんだったらこういう気持ちの優しくて綺麗な女の人がいいなあとか、時々仕事しながら考えたりとか……」

「何を言いたいんだよ。看護師なんてただ優しければいいってもんでもないだろう。多少性格に厳しいところもなきゃやってけないだろうし、第一俺は同業者と結婚するのだけは嫌なんだよ。だからいつも切り離して考えてるし、同じ病院内で恋愛なんて俺なら面倒くさくてやってられないって思うけどな」

そういうものなのかなってあたしは残り少ない牛乳をずずず、と飲み干しながら思った。

「それよりなんでそんなことを聞く？ 宗一郎のこと以外頭にないあんたにしてはなかなか殊勝な質問だったよな、今のは」

彼は食事を終えて、冷めた番茶を啜りながら踏ん反り返るように足を組んでいる。

「べつに深い意味なんてないけど、ただなんとなく聞いてみただけ。法顕くんはさ来年で三十歳でしょう？ そろそろ御両親に何か言われたりしない？ お見合いの縁談とかなら、しようと思えば選り取りみどりっていうイメージがあたしにはあるんだけど。もちろんこういうことを聞くのはあなたが宗一郎さんの弟だからよ。もし法顕くんが宗一郎さんの主治医か何かだっというそれだけなら聞いたりなんかしなかったと思うわ」

彼はほとほと疲れ果てたというように椅子の背に体をもたせかけて、天井を仰ぎ見ながら片手

で目のあたりを覆っていた。

「意外と無神経だよな、真理子は。今、どっと疲れが押し寄せてきたよ。あんた、俺がなんで何回もあんたを食事や何かに誘ってるかわかってるだろ？焼き肉を食いにいってから四回ばかりも誘ってるけど、あれからすっかり用心してるんだからな、真理子は。誓って言ってもいいけど、あんな真似はもう二度としないよ。アテにならないって思うだろうけど、本当に絶対にしない。神に誓ってもいいよ。だからもう一度宗一郎の家に上がらせてもらえないか？薪割りでも雑用でもなんでもやってやるからさ」

あたしはこの時「考えておく」と返事を曖昧なまま保留にしておいたけど、彼は次の週の非番の前日、あたしの答えを待たずにやってきたのだった。

彼は泊まっていったけれど、何事もなかったし、ただ薪を山のように割って薪小屋に積み上げていってくれただけだった。

法顕くんは斧を手にして薪を割りながら、

「クリスマスは空いてるか？」と聞いた。

あたしは庭でブルーベリーの樹木の冬囲いをしながら、

「クリスマスは宗一郎さんとふたりきりで過ごす」と答えた。

「病室でか？」と彼。

「ううん、病室と自宅の両方でよ」とあたし。

法顕くんはそれから汗だくになるまで薪を割り続け、「禅の瞑想でもやったような気分になった」とお風呂上がりにバスタオルで髪の毛を拭きながら笑っていた。

あたしはクリスマスイヴの夜、薪割りをしてくれたことへの感謝のしるしとして、彼を我が家の夕食に招待することにした。

キリストの生誕を祝うため、あたしはケーキやクッキーなどのお菓子を焼き、それから野菜料理の他に生まれて初めて七面鳥を調理することにも挑戦してみた。もちろんあたしは作るだけで口にしたりはしないけれど、七面鳥以外にも肉料理を何皿か作ってみたりもした。

そしてこの日、あたしは法顕くんから初めてプロポーズされたのだった。

「もちろん応えてもらえるなんていう期待は全然してないけど、これから毎年クリスマスにはプロポーズするから覚えておいてくれ。真理子が宗一郎のことを待っているように、俺も真理子のことを待ち続けるから」

それからまた、二度目のクリスマスをあたしは今日、迎えることになる。

去年のクリスマスイヴには雪が降り、ホワイトクリスマスになった。あたしは「宗一郎さんが降らせてくれてるんだ」って信じて疑っていなかった。そして今年も……。

「宗一郎さん、雪が降ってきたわ」

彼は音もなく降り積もる白い雪のように、今も静かに眠り続けている。

あたしはクリスマスらしく装飾を凝らした病室の窓から、牡丹の白い花びらのような雪を眺め、そしてその純白の綿毛のような雪よりも白い、宗一郎さんの手を握っていた。

『真理子、もういいよ。

法顕を受け入れて、ふたりで幸福になってくれ

そして僕を安心させて、楽にさせてくれ』

手浴したばかりのせいか、彼の手は生温かくて、石鹸の白い香りがした。その手指を握りしめながらあたしは幾十度言ったかしの言葉だけを独り言のように彼の耳元に囁く。

「宗一郎さん、いつまであたしを試したら気がすむの？あたしは宗一郎さんが目を覚ますまで、決してあなたを許したりなんかしないわ。ねえ、本当はわかってるんでしょう？宗一郎さんの目が覚めても、あたしの愛は決して醒めないってこと。だからもう起きて……ね、宗一郎さん？」

彼からの返事がなくても、あたしにはよくわかっていた。もしあたしが法顕くんを選んだとしたら、その瞬間にも彼が息を引きとってしまうだろうことを。もちろんあたしが頑迷なまでにそう信じこんでいるだけで、あたし以外の人は皆そんなことはありえないと失笑するだろうこともわかってはいる。けれどもその一本のか細い糸だけがあたしと宗一郎さんを結ぶ唯一の絆、命の糸だった。

宗一郎さんは先のことを何もかも見通していた。

あたしが法顕くんに対して好意を持ち、彼もあたしに惹かれるだろうということ。

そしてだからこそあたしは宗一郎さんのことを許さずにいられる。

許す、ということは忘れるということでもあったから。彼の包みこむような優しさもぬくもりも彼の存在の何もかもを時の風化の中にさらすということだったから。

だからあたしは一生分の力を費やしてでも、決して宗一郎さんのことを許したりなんかしない。

もしも法顕くんのプロポーズを受けたとしたら、それは宗一郎さんを許し、自分自身のことも許して、彼をこの浄れたところの多い世の中から解放するということになる——それだけは絶対に嫌だった。そうまでしても宗一郎さんの体と心をまだこちら側の世界に縛りつけておきたかった。

同じ魂を持つ人とは、もう二度と決して巡り逢えないだろうことがあたしにはよくわかっていたから。そしてそれでいて、あたしは法顕くんのことと宗一郎さんを想うのとはまた別のところで愛していた。

彼は去年に続いて今年も「禅の修行」と称して薪を割りにきてくれていて、一月や二月の雪の多い時など、家や庭の周りの雪かき作業までしてくれたりもした——もし、彼が一番最初に家へきてくれた時でなく、もう少しだけ待っていてくれたとしたら、あたしは今頃肉食主義者に舞い戻っていたのかもしれない。

ただひたすらに待ち望むことしか許されぬ者にできることといえば、祈ることだけ。

信じていれば愛はかなう、と。

キリストの再臨を待ち望む者のようにあたしは祈っている。戻ってきて、帰ってきて、と。

「愛してるわ、宗一郎さん」

彼の右手の指先からその思いが伝わりますようにと、強い願いをこめて何度となく思念を送る。

一度起きた奇跡よ、どうかもう一度、と……。

そしてそんなあたしの心に応じるかのように、モニターの機械音がピーと鳴り響いて虚しく消えた。

終わり

奇跡は二度起きる

<http://p.booklog.jp/book/31333>

著者：ルシア

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lmnlive/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/31333>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/31333>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.